
friends

＊来図＊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f r i e n d s

【Nコード】

N 5 3 7 9 P

【作者名】

＊来図＊

【あらすじ】

ごく平凡に暮らしている高校二年の中平賢はある秋の日、友人である神原陸斗の家に遊びに行った。そこには横たわる友人の姿とジャックという名の死神がいた。

エーススートも揃い、一先ず問題は解決した。だがそこに新たな問題が浮上する。それはハルトとロストがこの世のから消えるという事だった。消える間際にロストは賢に告げる。作りだされたも

の、ハーツ、約束。今、ロスト達の過去が明かされる。

0. プロローグ

それはある冬の日の事だった。寒い夜の道路の上で俺は座り込んでいた。近くには家族が横たわっている。血だらけの俺は呆然と見ていた。なあ寒いよ。早く家に帰ろうよ、父さん。母さんが作るシチューが食べたいよ。空斗兄ちゃん、一緒にゲームしようよ。海斗、もうすぐ一緒に小学校に入学するんだったよな。悪い夢ならさめてくれよ。そう思いながらそこに倒れ込む。遠のく意識の中、サイレンの音が聞こえた。救急車だ。これで助かる。みんな・・・みんな。

気が付くと俺は病室にいた。白い天井が見えた。そこにはいつもの愛理姉ちゃんがいた。愛理姉ちゃんは優しい声で言った。

“あなた以外はみんな・・・亡くなった”

愛理姉ちゃんの言ってる事がわからない。愛理姉ちゃんはそれを察したのか俺を車いすに乗せてある所に連れていってくれた。そこは遺体がおかれる部屋。そこに入ると俺の家族四人が横たわっていた。そして白い布が顔の上にかぶせられていた。それがどうゆう事だかはすぐというわけでもないが理解ができた。そうか。死んでしまったのか。俺を残して。

その時から俺は一人になった。

？A・運命の誘い

お前を必ず、見付け出す。だってお前はオレにとって一番と云っていい程大事な存在だから・・・。

1

「あゝあ。眠い」

俺は今、通っている高校の屋上にいる。学校の時間割りで言い表すと昼休み。時刻は12時35分。月は10月31日、金曜日だ。高校の名前は桜花高校。この町の名前でもあり、公立高校でこの辺では有名な進学校の一つで学科は特進科、普通科、国際科と充実していて科目選択も高校二年生からだが文系か理系、あるいは文系と理系双方を学べるという3パターンを選べる高校だ。俺は特進科の生徒で文系と理系双方を学べる科目を選んでいる。部活も様々で運動部、文化部合わせて30の部活があり、俺はバスケット部に所属している。一学年およそ5クラスあり、A組は国際科が集まり、B組とC組は特進科、D組とE組は普通科である。俺は2年C組である。二年と言えば大体、歳は16、17辺りの人が多い。まあ俺は留年とかはしてはいないし、しかも今日で17歳。だからごく普通の高校二年生である。

「陸斗はいつもそれだな」

彼は中平賢。俺の小学校の頃からの親友である。彼も特進科の生徒で俺と同じ科目を選択し部活もクラスも同じである。彼は一月生まれなのでまだ16歳。そして、陸斗とは俺の事。フルネームは神原陸斗である。

「いいじゃねえか、賢」

俺は昼飯であるビニール詰めされているコンビニのパンを開けた。パンの種類は焼きそばパン。まあ後、二つある。それとパックに入ったストロウインのレモンティー。

「つかまたコンビニのパンかよ。弁当、作ったら？」

焼きそばパンを頬張りながら、俺は賢の弁当を見る。肉じゃがとサラダと卵焼き。ああ。明らかに肉じゃがは昨日の夕飯の残りだな。でも・・・卵焼きはきつと母親作。ああ。羨ましい・・・。

「んな時間ねえよ」

俺は起きるのがやたら遅い。目覚ましをかけてもほぼ無意味。それより、明らかに30分遅れて起きる為、まあ時間はよろしくない。それに弁当だったただ詰めればいいものでもない。ほら、“食は目から”とか何とか言うだろ！！まあ美学って奴だ。それに一人暮らしの為、多めに作る事もしない。もったいねえし。

「じゃあもつと早く起きれば？」

「うるせえよ。てか他の奴と食えばいいじゃねえか」

「オレはお前とがいいんだよ。陸斗」

賢が“ニッ”って笑う。思わず照れ臭くなった。

「まあ・・・いいけどよ。“ズウー”」

レモンティーを飲む。やっぱり、甘いものはいい。理由、甘党だから。賢がたまに淹れてくれるコーヒ―は絶対に飲まない。いや、飲めない。だってあれは・・・クソが付く程苦いから。あれはない。うん、うん。でもそんなあいつの飲み物は・・・ブラックコーヒ―だ。

「つか次の時限、何だっけ？」

「小テスト返し。化学のな」

「化学か。オレ、あのモル計算ができなかったんだよね」

そう言いつつも、賢は“賢い”って漢字なだけあって、それなりにいい。それなり？ いやたぶん、学年のトップ10に入ってるはずだ。詳しくは知らん。

2

「テスト、何点だった？」

これは賢。今は放課後だが今日は部活がない。俺の通う高校は一週間に一度はこういった学習日を設けているのだ。

「お前は？」

「40」

「俺、50」

一応、50点満点のテストである。

「満点かよ。オレ、モル計算でミスった」

「あっそ」

「冷てえなあ。まあいつか。なあ、今日お前んち遊びに行っていない？」

「いいけど何で？」

「気分って奴だよ。気分」

「まあいいけどよ」

「よし。んじゃあ後でな」

賢と俺は別れた。まあ今日ぐらいはいいか。最後なんだから。

3

「ただいまーって誰もいねえか」

今は一人暮らしだから当然と言ったらそこまでだが。以前は姉貴や兄貴がいたが兄貴は結婚し、マンションに住み、姉貴は一年ぐらい彼氏の家に行ったつきり帰って来てはいない。まあ二人とも俺の本当の兄妹ではない。兄妹というよりもいとこだ。それはともかく、俺はスクールバッグにしたお気に入りのバッグを自分の部屋に置いた。制服から家用の服に着替えて、下のリビングに行く。そこにはソファを一人占めするかのように男が一人座っていた。いたし。返事ぐらいしろよ。

「覚悟はできたか？」

その男は立ち上がって聞いた。その男の名はジャック。きれいな青の目と黒い髪を持ち、黒いフードの服と黒のジーパンをはいている。彼は自称死神。年齢は俺より上。といっても20代の容姿ではない。まあいって・・・19歳ぐらいだろう。詳しくは知らん。

「ああ。でも待ってくれ。これからダチが来るんだ。待っててくれないか？」

「おれだって忙しいんだ。お前だけに時間を費やす訳にはいかなんだよ。悪いが待つ事はできない」

「・・・そうか」

これはもう仕方がない。向こうにも色々ある訳だ。わがままは通じないか。

「じゃあやるぞ。いいな？」

「ああ」

ジャックはソファアに立てかけてあった鎌を手に取り、俺の心臓目がけて大きく振りかざした。

4

陸斗の家に行くのは久しぶりだな。ここ最近は何活だのなんだのって行く暇がなかったからな。陸斗の家に着いてオレは玄関のドアを開けた。

「おじゃまします」

反応はない。まあいいかと思いつながらずかと入る。陸斗の家は少し歩いた所にリビングがある。オレはそこに向かった。リビングに着き、オレはリビングのドアを開けた。そこには横たわる陸斗と大きな鎌を持った男・・・ジャックがいた。

「ど・・・どういう事だ？」

ジャックは振り返る。

「おっ！友人のご登場か」

「おい！これはどういう事だ!？」

「ん？ああ。こいつ？これは神原陸斗の運命だ。奴の魂はもうここにはない。家族を失った瞬間から決まっていた」

「運命・・・？何でそんなもんがお前にわかるんだ！？」

「死神だから。まあそれはいいとして別に神原陸斗は死んだわけじゃない」

「え」

「奴の魂は旅に出たんだ。“死んだ”というわけではなく・・・な。だから探しに行かないか？」

「は？この男は何を言っているんだろう。さっきから死神だの死んだわけじゃないだの。でも・・・この男にすがらないと陸斗がどうしてこうなったという真相がわからなくなってしまふ。」

「でも・・・何処に行ったかなんてオレにはわかんねえよ」

「・・・おれなら奴の魂が何処に行ったかだけはわかる。ちよつと待ってろ」

ジャックはポケットからランプを出した。

「この中からカードを一枚・・・引け」

「一枚？」

「ああ。一枚だ」

オレは言われた通りにランプを一枚掴んだ。その時わずかながら手が震えていた。だがその震えを堪え、カードを引いた。カードを見るとそこにはシルクハットの絵が描かれていた。

「何の絵だった？」

「シルクハット」

「そうか。・・・おめでとう。お前は今日からマッドハッターだ」

「え」

ジャックが指をならす。すると服が変わった。陸斗の部屋には大きな鏡が一つある。オレはその所へ行き、自分の姿を確認した。目は赤く、特に左目にはタトゥーみたいな黒い曲線があり、髪はオレンジっぽい黄色をしていて、それに赤い帯が巻かれ右端には金のアク

セサリーと赤と青の羽が右が赤、左が青という感じにあしらわれている黒のシルクハットを斜めに被り、赤いジャケットに髪の色と同じ色のYシャツ。黒と白のいちまつ模様で編んだ毛糸のマフラー。下は黒のズボン。靴は革靴。そして目が悪い事をジャックが知っているのかどうかはわからないが眼鏡もかけていた。

「おい。これは……」

「奴の魂を探すために力を与えた。これを……」

ジャックはトランプを渡した。

「これを使えばさらにいいだろう」

「ああ。ありがとう」

オレはそれをシルクハットの中に入れた。

「じゃあこれから奴の魂が行った場所にお前を飛ばす。残念だがおれはそこに彼を飛ばしただけで詳しい場所とかはわからない」

「わかった。じゃあお願いする」

「一つ、言っとくぜ。これも一つのお前の運命だ。向こうに行ったらチェシャ猫と呼ばれている男、リヒト・アビリスに会え」

「わかった」

「あっ！ 賢って名前は向こうじゃあ使えねえ。向こう用の名前を決めろ」

「……ルーン。ルーン・ホリック」

「そうか。他に何か聞きたい事はあるか？」

「お前の名前は？」

「ジャックだ。じゃあルーン！ 行って来い」

「ああ！！」

ジャックは指をならす。するとオレはこの世界から消えた。

「さて……おれ

? 3. 闇堕ちの過去

?

神原愛理は一人、久しぶりに我が家に帰ろうとしていた。最近はずっと夫の家に泊まりっぱなしで一緒に住んでいたはずの家族、陸斗の事をかれこれ一年ぐらいはほったらかしにしていた。まあその間に彼女は結婚していた。彼女は久しぶりの我が家という事もあった、念のためインターホンを押した。だが何分経っても人が出て来る気配はなかった。彼女は陸斗と同じで地毛ではあるが栗色の髪をしていて今は長髪である。

「あれ？ 陸斗、いないの？」

陸斗に連絡はしてあって数日前に許可はとってある。しかもこの時間帯なら家にいるはず。だから出ないのはありえない。

「陸斗、入るよ！！！」

愛理は玄関のドアを開けて言った。そしてずかずかと入る。愛理も一応、この家の住人。何処にどの部屋があるのかは目を瞑^{つぶ}っててもわかる。とりあえず彼女はリビングに行った。リビングに入り、彼女は辺りを見渡した。そこにはいつも通りの・・・いやあきらかに違っていた。そこには見知らぬ男と地球外生物（すごい小さい女の子）がいた。

「おっ！ 神原陸斗の姉貴かなんか？」

「ちょっとグレイド驚いてるよ！！！」

「しゃ、喋った！？ 変なちっこいのが喋ったああああああああああああ！！！」

「変な！！ 失礼しちゃう！ 私はこれでも普通の人間よ！！！」

「いや違えだろ。この世界でお前サイズの人間はいねえよ。さて質問に答えろ。お前は神原陸斗の姉貴かなんかか？」

「・・・まあ簡単に答えたら姉貴ね。私は神原陸斗のいとこ、神原愛理よ」

「へえ。いとこか。で何のご用で？」

「久しぶりに家に帰ってみたくなっただけ。まあ話もあつただけど。それより陸斗は何処？」

「神原陸斗の体だけならあるぜ。みたいか？」

「どういう事かわからないけど、ぜひ」

「わかった。陸斗の部屋にいる。一緒に行くか？」

「まあいいわ。一緒に行く」

「わかった」

ジャックと愛理、リムは二階にある部屋に向かった。

？

入るとベッドの上で眠っている陸斗がいた。

「陸斗！？これは一体、どういう事なの！？」

「まあいろいろとあんだけど、簡単に言うとな神原陸斗の運命。それ以上は知ってても言えないし、知らなくとも言えない」

「何ですって！！」

「まあそう睨むなよ。こいつを救うために今、別世界で奴の友達、中平賢がこいつの魂を探してるよ」

「賢が？」

「ああ。んでおれからお願ひがあるんだけど……」

「何？」

「この家に住んでくんねえかな？」

「え？」

「一応言っとくけどおれ等二人はこの世界の人間じゃないし、ましてや神原陸斗と親しい仲でもない。でもお前ならいところだろ？だから……」

「まあここは私の家でもあるし。いいわ。実は陸斗にこの家で夫と一緒にくらしていいかどうか相談しようと思っていたの」

「よかった。じゃあよろしく頼む」

「ええ。じゃあ夫に電話してみるわね」

愛理は携帯を使って電話する。

「あっもしもし、純ちゃん？」

どうやら夫の名前は純という名前らしい。

『そうだけど・・・どうしたんだ？愛』

「仕事、終わりそう？」

『ああ。終わるよ』

「そっか。じゃあ私の家に洋服を持ってきてくれる？」

『急だね。陸斗には許可はとれたの？』

「まあね。じゃあ八時までに来て」

『わかった。じゃあね』

「うん。じゃあ」

愛理は電話を切った。

「ほう。お前の夫って純って名前なの？」

「違うわよ。純一。ついでに婿入りだから」

「へえ」

「それより・・・賢と連絡とれる？」

「ああ。ちよっと待ってろ」

ジャックは準備を始めた。

？

あれ？体がだるい。それに頭も重い。寝たまま、オレは辺りを見渡した。どうやらここは宿屋みたいだ。

「あっ！起きたみたい」

「その声はハルト！」

「あっ！まだ起きあがっちゃだめ。熱があるんだから。ちよっと待って。リヒト呼んでくるから」

ハルトは部屋を出た。一体どうなっているんだろう。敵だった奴が

リヒトと一緒にいたなんて。

『ガチャ』

ハルトが帰って来た。

「すぐ来ると思う」

「ありがとう」

「そういえば・・・まだあんたの名前聞いてなかったね。何て名前なの？」

「ルーン・ホリック」

「そっか。よろしくね。ルーン」

「ああ」

『ガチャ』

ドアが開いた。リヒトが入って来たのだ。

「起きたか。ルーン」

「ああ。あの戦闘からどれぐらい経った？」

「丸一日だ。それとお前に聞きたい事がある。ハルトさんが我達の旅について行く事になったが構わないか？」

と、唐突だな。でも・・・この人は強いし、野宿とかになったらリヒト以上に美味そうなメシとか作ってくれそうだし。

「オレは別にいいけど」

「じゃあ決まりだ。これからよろしく。ハルトさん」

「うん。まあそれにあたって、あんたにいろいろと説明しなきゃならない事があるんだけど・・・大丈夫？」

「ああ」

「まあここがあんたいたところは違うのはわかってるよね？」

「ああ。ありえないでかさの鎌はあるし、植物も動物も見た事がないものばかりだった」

「ここはあんたの出身があることは別の空間に存在するところなの。まあ要するに異世界ってわけね。その名を“楽園の苑”^{その}」

「“楽園の苑”^{その}」

「そう。さらにあんたがいた世界と時間のずれもあってあんたがい

た世界で半日がこの世界で一日経った事になる。だからあんたがこの世界に来て、まだ一日しか経っていないの。あんたがいた世界に換算するとね」

「そっか。で、オレがいた世界の事をこっちでは何て呼んでんだ？」

「名を“現^{うつ}の苑^{その}”」

「何で・・・現^{うつ}？」

「・・・あたしはそこまで知らない」

「リヒトは？」

「残念ながら我は知らないな。我はこの世界での知恵の宝庫だからな」

「へえ」

いやそれは理由じゃねえだろ！！

「まあそれは置いてここからはあんたや神原陸斗について重大な事を話すね」

「オレ等・・・二人が！？」

「うん。あんたがもう普通の人間じゃない事はわかってるよね？」

「ああ。信じたくはねえけど」

「それは神原陸斗にも言える事。何故ならあんたら二人が“現^{うつ}”から“楽園”に來たから。普通の人間じゃあこの世界には行く事はできなし、反対にこの世界の人間もあんたの世界に行く事はできない。あたしは元ジャックだから“現^{うつ}”にも“楽園”にも行き來できるけどね」

「そっか。もうこれ以上はいいや。理解しきれねえから」

「わかった」

「・・・ちょっと一人にさせてくんねえかな？」

「・・・いいよ。出よっか、リヒト」

「ええ」

ハルトとリヒトが部屋から出た。

「はあ」

溜息しか出ない。すべてが唐突すぎる。理解しきれないんじゃない。

したくないんだ。理解するって事は受け入れる事でもある。オレが“普通の人間”じゃない事が受け入れられない。そしてまだ何かある気がする。

「これも運命なのか……」

頭の中がぐるぐるする。まあ熱があるからなあ。もう過ぎた事だからどうしようもない。けれど受け入れられない。あの時……何でオレはああも淡々と話がきけたのだろうか。それもきつと熱の所為なのだろうか。それとも……もっと違ったものの所為なのだろうか……オレにはそれがいまいわからなかった。

突然テレビがつく音がした。

『おっ！つながった！！ルーンいるか？』

その声はジャックか。声が大きい。耳に響く。

「いるけど……何？」

『何か顔色が悪いなあ。熱でもあんのか？』

「まあ……そんなもん。つか声大きい」

『ふーん。まあいいや』

ってオレの意見は無視か。

『……一つだけおれから言うよ。この結果を選んだのはお前だ』

あっつい使って声……小さくしてくれた。いいところあるじゃん。見た目と違うけど。まあ人は見かけによらずって言うからな。

『たしかに決められていて、選べなかったかもしれない。けどお前はこの結果を選んだ。だったら後悔しねえようにやるしかねえよ』

「……」

『あっそれと……』

『賢……！』

画面に愛理さんが見えた。そっか。どうも見覚えあるなあと思った。陸斗の家か。前は仕事場だったし。

「愛理さん……！」

『あんたちゃんと私の弟、助けなさいよ！』

「わかってますよ」

『それとちゃんと無事に帰って来なさいよ!!』

「はっはい!!」

『じゃあね』

画面はぶちと切れた。

「

? 5. 太陽と月1

?

「たっく、あの人はオレに何を押しつけようってんだよ」

そう愚痴をこぼしたのは情報屋のエドワードだった。彼はある人の部屋の前にいた。彼は仕方なくドアをノックした。

「どうぞ」

その声を聞いて彼は部屋の中に入った。

「何の用？レイさん」

彼の前に座っている男性はレイ。正式名はレイ・スピード。ハルトと同期のキングだ。

「君に頼みたい事があるんだ」

「何をすつか？」

「君にマッドハッターがどういう人間なのかを僕に報告してほしいんだ。できるかな？」

「・・・・・・いいですよ。レイさんの頼みですからね」

「それならよかった。じゃあすぐに行けるかな？」

「わかりました」

エドは部屋を出た。レイはため息をついた。その後すぐにジャックが入ってきた。

「頼んだんですね、エドに」

「ああ。ジャック君」

「：あれ？ジョーカーは？」

「もう来てるよ」

「えっ。何処に？」

ジャックは辺りを見渡した。けどいない。ジョーカーは女性で身長もある。だからいたらすぐにわかるはずなのに。

「私はここだ」

女性の声ではあるがそのわりには低い声が聞こえてきた。

「なんだよ。姿を消してたのか。どうりでいなかったわけだ」
ジャックがそう言うと言姿を現した。

「まあエドワードが来ていたからな」

「さて、ここまで作戦は順調だ。後は賭けだね」

「そうですね。何処までおれ達の期待に応えてくれるかだな」

「そうなるな。私も、レイも会ってないからな、信用していいのかはかりかねるが信用していいのだろうか？ ジャック」

「ああ」

「まあ僕たちの希望の一つだ。信用しないとね」

「それもそうだな」

「これで僕たちはやっとあちら側から先手を取れたというわけだ。
後はそれが吉と出るか凶と出るか」

？

「まだ？」

ハルトは怒りながら言った。

「一応待った方がいいんじゃないのか？」

「んんん！！もうまちきれねえ。行く！！」

「おい！」

ハルトはルーンがいる部屋に入った。

入るとくの字に腰を曲げうずくまっていた。

「はあ。いつまで悩んでいるんだ？ ルーン」

「ロストか」

「お前…すごいな。まあそれはいいとしてお前は何のために力を手
に入れてた？ ダチを助けるためだろ」

「……」

「それに人なんて詮詮、誰もが意気地なしなんだよ。だがな自分以
外の誰かが側に一緒にいるから、見守ってくれる人がいるからだか
ら人は勇気を出せるんだよ」

それはすごい勇気づけられる言葉だった。

「ありがとう。ロスト。オレ：頑張る」

「そうか。ならよかった。で話は変わるけど近道したいと思わない？」

あれ？ロストと雰囲気が違う。もしかして…。

「ハルト？」

「本当にすごいね。こんなにも早く…あたしとロストを見破るなんて…」

「お前等って二重人格とかなのか？」

「まあ：そんなもんね。雰囲気で見破ってるの？」

「まあ」

「そっか。それより…」

「近道の話だろ？いいぜ。つかそっちの方がいいし」

「ならよかった。サンパレスには普通、ここからまっすぐ行けば着くけどここから北に行くとC－100に着く。そうすれば時間短縮はできるよ。サンパレスはE－100にあるから」

「C－100からはどうやって行くんだよ？」

「C－100から直通でサンパレスに繋がる汽車が通ってるからそれを使えばもっと早く着くよ」

「じゃあそれで」

「OK。じゃあすぐに行きたい？」

「ああ」

「じゃあまずはあんたの熱を下げないとね」

「そうでした」

「ちょっと待ってて。リヒト呼んで来る」

ハルトは部屋から出た。少ししてからハルトとリヒトが入ってきた。

「リヒト、治癒の精出して」

「わかった。“治癒の精よ。かの者に癒やしを与えたまえ”」

そう言うとりムぐらいの女の子が現れ、杖を振ると消えた。

「どうだ？」

「あれ？だるくない」

「これが我のできる事だ」

「へえ。便利だな」

「それじゃあ行くか」

「ああ」

オレ等は宿屋を出た。

？

「サンパレスにサンプルとなる魂が来ているようだ」

「で誰に行ってもらおう？」

「私が行きます」

それは王冠をかぶった男性だった。彼は現キングである。

「まあ：何も無いとは思うが油断するなよ」

「わかっています」

キングは部屋を出た。

？

C-100はまるで廃墟のようだった。

「すんげえ。ここはそういう町なのか？」

「まあ：100の数字がつく町は廃墟か歴史的建造物が建っているから人は住んではないんだ」

「へえ」

「確か：この町にはシェリルがいたような…」

「シェリル？」

「女でこの町を守っている人間だ。まあただの凶暴な犬だけだな」

「ふーん」

町を少し歩くと殺気立っていた。

“ウォーン”

犬の遠吠えが聞こえた。野犬でもいるのだろうか。

「遠吠えがうるさいな」

そうリヒトが言った時だった。

「そんな事言ってるためえの首、はねんど」

リヒトの首元に刀があり、リヒトが少しでも動いたら首がとぶぐらいにあった。シェリルはワインレッドのフードをかぶり、黒と白の服を着ていて、下は黄緑色のフリルのついたスカートをはいていて膝より5cmぐらい上。靴下はレッグウォーマーをしていて色は茶色。靴はヒールがちよつとあるブーツィーをはいている。髪の色は濃いめの黄色で右目には大きめの痣なのかはわからないものがある。「相変わらず速いな。バンダースナッチ」

「なんだよ。チェンヤ猫じゃねえかよ。ためえみたいな優等生がこんな廃墟に何の用だ？」

「サンパレスに繋がる汽車に乗ろうと思って来た」

「なるほどな。じゃあオレに勝負を挑みに来たって訳か」

「まあな」

「ふん。ためえらにオレが倒せる訳ねえだろ。ハルトさんがいようともな」

「そうなのか？」

「実力じゃああたしの方が上だけどあたしじゃあ勝てない」

「何でだよ？」

「シェリルのスピードはあたしでさえ目で追う事はできない!!」

「じゃあどうすんだよ!?! リヒトは人質に取られハルトじゃあ勝てないしオレは戦闘初心者。八方塞がりじゃねえか!!」

「こういう時にエドがいれば…」

「お困りみたいだな」

そう声が聞こえた。

「まさか…ためえが来てんのか!?! エクセス」

「来てちゃあいけねえのかよ」

シェリルを見ていたらいつのまにかリヒトがいなかった。

「まったく油断してるからだよ。あいつはオレに任せろ」

「何で：貴様がここに？」

「その話はまた後でだ」

エドはシェリルに挑んだ。

「大丈夫か？リヒト」

「ああ。にしてもこれは強力な助っ人が来たな」

「だね」

「あいつ：速いのか？」

「ああ。シェリルと同等のスピードを持っているからな」
二人のスピードは速すぎて目で追うことはできなかった。

「てめえ、何のつもりだ？」

「オレは頼まれたからやってるだけだぜ」

「誰に？」

「レイさんに」

「レイ！？」

ハルトが過剰に反応した。

「あいつがもう絡んでんのかよ」

あつ。ロストになった。

「てめえはどっち側につくつもりだ？」

「…」

「てめえは主を裏切るのか！？」

「…」

「答えろ！！」

「お前：後ろあきすぎ。暗殺者としてどうかと思うぜ」
エドはシェリルの首元に刀を突きつけた。

「……オレの負けだ」

シェリルは負けを認めた。するとエドはシェリルの首元から刀を離し、鞘に収めた。

「さっきの質問に答えろ」

「それはこれから決める。オレだって実験の犠牲者だ。黙って犬に
なんかならねえよ」

「…」

エドはオレ等の方に来た。

「あんた…レイに何か頼まれてんの？」

「その話は汽車に乗ってからにしようぜ。それより…」
エドはオレの方を向いた。

「お前がマッドハッターか」

「ああ」

「エドワード・ユニエルだ」

「ルーン・ホリック」

「これから…一緒に旅をする事になるからよろしくな」
「よろしく」

「汽車に乗るんだろ？オレに勝ったんだ。てめえら全員乗っていい
からな」

「マジか！！よしっ」

「オレもついて行く。マッドハッターがどういう人間なのか見定め
たいからな」

「お…おう。じゃあ名前を…」

「シェリル・スターチスだ。よろしく」

シェリルはフードをとった。すると絶世の美女の顔が現れた。目の
色は前髪で良く見えないが隙間からだがきれいな青の目が見えた。
そして髪はパーマがかかっていて、つやのある長髪だった。

「もったいねえええええ！！」

うっかり大声で言っちゃったああああ！！

「失礼な奴だ」

そうシェリルが言うときみんなが笑い、その後汽車がある駅に向かっ
た。

？

汽車に乗るとめっちゃいい感じのクッションのきいた椅子に座った。

「さてオレがレイさんに頼まれた事だけどマッドハッターがどんな人間なのかを報告しろって頼まれたんだ」

「レイらしい」

「誰だよ？そのレイって奴」

「あたしと同期のキングだよ」

「へえ」

「わけはリヒトから聞いたけど都合がよすぎじゃね？」

エドが唐突に言い出した。

「何がだよ？」

「お前がこうして、ここにいてる事がだよ」

「はあ！？何だよ？それ」

「神原陸斗の魂をサンパレスに飛ばす。そうすれば陸斗の方に目が行く。その間、秘密裏にマッドハッターを覚醒させる…こういう作戦があつたんじゃないの？」

「うわぁ。確かにレイ辺りが考えてそう。まぁ賭けの部分もあるけど」

「賭け？」

「マッドハッターの力量だよ。レイなら神原陸斗の魂を見捨てるような真似はしないから」

「オレに期待してるってわけか」

「後で聞いてみる。レイならあたしは会いにいけるしね」

「サンパレスって後どれぐらいでつく？」

「後三十分もあればつく」

「早！！」

「特急だからな」

「ああ」

「駅はないし」

「ねえんだ」

「まあ：廃墟だしね」

「D—100もそんな感じ？」

「まあ似たようなもんね」

「へえ」

他愛のない話が続く。けどこの時だけだったのかもしれない。こうして他愛もなくなただ話をするのは。

？

サンパレスはすごくきれいだった。スタンドガラスの様々な色と輝き。けどその明るさの中にも一点だけ暗くなっていた。

「有り得ない。サンパレスは一年中、光り輝いている城なのに：」
奥に入り、その暗くなっている所にたどり着く。そこには石碑みたいなものがあった。

「：これ古代文字じゃん。リヒト：読める？」

「もちろんだ。我に任せろ」

リヒトはその石碑を読み始めた。

「えーっと： “この城に一点でも暗い場所がある時、この世界に闇の騎士が誕生する。この城に闇の騎士はいない。だがここに来なければ闇の騎士は覚醒したりはしない。なぜならその者が闇に染まりきらないからだ。無垢なる魂は闇に堕ちても完全に染まる事はない。だからこの一点の闇に魂を当て徐々に侵食させる。この城はそのためだけに建てられたのだ” と書かれているらしい」

「どういう事だ？ “闇の騎士” と陸斗がどう関係しているんだよ？」

「“サンパレス”： “闇の騎士”： “神原陸斗”」

リヒトが呟く。しばらくして何かがわかったように口を開いた。

「まさか： “神原陸斗” は “闇の騎士” じゃないのか？」

「え」

「神原陸斗」という人間をエドが言った考え通りなら、何故ジャック殿はその魂をこの世界に送りこんだ？カモフラージュにしては不自然すぎる」

それは確かに言える事だった。オレを秘密裏に“マッドハッター”に覚醒させるためのおとりにしても理由が不十分な気もしていた。

「もし“神原陸斗”が“闇の騎士”ならこの世界に送りこんだ理由として十分なものになる。“闇の騎士”に覚醒させるためにな」

「そうだな。となるとここにはもう用はないだろう」

「何でだよ？シェリル」

「先程、リヒトが読んだ古代文字の文章の中に“この城に闇の騎士はいない”という言葉があった。“神原陸斗”の魂は“闇の騎士の覚醒”の第二段階に入っただんじやないのか？」

「あつ。それもそっか」

“闇の騎士”に関係している場所は：月の神殿^{ユエ}。なら魂はそこにあるんじゃないか？」

「シェリルの言う通りだな。だったらすぐにでも向かおうぜ。この先に月の神殿^{ユエ}につながる隠し通路がある。そこから行こう」

エドが先に行こうとした時だった。

「待て。誰か来る」

シェリルが皆を制止する。

「この感じ：まさか：」

それはオレ等の前に現れた。そいつは王冠をかぶっていた。

「あんたがここに現れるなんてね。キング・スピード！！」

「ハルトさんですか。あなたが本格的に我々に刃を向けるなんて思ってもいなかった」

「刃はとっくに向けたんだよ。“ハルト”という存在が作り出されたその時からな」

「そうですか。それに：何ですか？後ろにゾロゾロと：それにシェリル、あなたは我が一族“ダイヤルーツ”を裏切るのですか？」

「オレ達、バンダースナッチは少なからずてめえ等を怨んでるんだ

よ」

「まあいい。私はここに来たというサンプルを取りに来ただけですから」

「サンプル…？ああ。もしかして神原陸斗の事か。ならもうここにはないぜ」

「何だと！？」

「オレ達はその場所を知っている」

「…ただ教えてくれはくれないですよね？」

「まあな。おれ達を倒せたら教えてやるよ！！」

「おい！ロスト」

ロストはキングと対人する。

「始めちまったよ。でも反旗ののろしをあげんならこれほどの相手はいないな。ここまで計算に入れてんなら化け物だぜ。レイさん」
エド、シェリルもキングの方に走った。

？

「サンプルの回収には誰が言ったんです？」

レイは現在の職場であるラボにいた。

「現キングが行った」

「そうですか」

レイはその場から離れた。

「計算通りだ。後は彼等次第」

？

「おい。ルーン。貴様…突っ立っている気か？」

「だって…オレにはわかんねえんだよ。戦いってもんが！！」

「貴様…ハルトさんと戦った時の事を覚えていないのか！？」

「覚えてるさ!! けど途中からすっぽりと記憶がねえんだよ!!」
「何だと!? ではトランプを出して戦った事を覚えていないのか?」
「何だよ…それ?」

何…わけのわからないことをほざいているんだ? リヒトは。

「ジャック殿から貰ったトランプを出せ」

「わかった」

オレはリヒトに言われた通りに帽子の中からトランプを出した。

「これでどうしろってだよ!」

「その中からスペードの8を引け」

「わかった」

スペードの8を探し、そのトランプを引いた。それには銃の絵が書かれていた。

「何だよ…これ?」

そのトランプは光り、トランプは銃になった。

「銃になった!!」

「銃の扱い方ぐらい知ってるよな?」

「いや知らない」

「ちっ。リボルバーだから弾が入っている事を確認しろ」

「わかった」

オレは言われた通りにやった。アニメとかでたまに銃をいじっている人がいたのを思い出しながら。

「弾がある事を確認できたらトリガーを引け!!」

「トリガーって?」

「引き金の事だ。早くしろ!!」

「あっ、はい!!」

オレは二丁の銃の引き金を引いた。その弾はキングの肩にかすった程度だった。

「かすった程度か。あの時の命中度はないか」

「あの時?」

「いや。何でもない。撃てそうな時があったら撃て!!」

「わかった」

とりあえずリヒトの言われた通りにした。本当に何が何だかわからない。いきなりこんな扱った事もない武器を手にするなんて。

“いや扱った事はあるぜ”

頭の中でそう聞こえた。“…まあ覚えてはいないだろうがな。なあ
狂えよ。オレ

に任せれば大丈夫だ。だから…狂え”

その言葉が聞こえた瞬間ぷつと途切れた。

? 6. 太陽と月2

?

ルーンは銃をトランプに戻した。

「おい。ルーン!!」

リヒトの呼びかけは彼に届いてはいなかった。ルーンはトランプを引いた。それはジョーカーだった。それには鎌の絵が書かれていた。するとトランプはさっきと同じように光った。ルーンの手には鎌があった。ルーンはその鎌を握りしめキングの方に向かった。

「どけ」

ロストやシェリル、エドに言う。

「てめえには無理だ」

シェリルがルーンの肩に手をのせた。

「邪魔だ」

ルーンはその手を払いのけた。

「…あの時と同じ感じだ。あいつは本当にルーンなのか？」

「へえ。お手並み拝見しないとな」

「おい! そんな悠長な事言ってるいいのか!？」

「いいんじゃない? だってあいつがどけて言ったんだし」

エドが言うとシェリルは大人しくなった。ルーンはそれを感じたのかキングに刃を交えた。

「君は何者だ？」

「オレは…」

その言葉はロスト達には聞こえなかった。だがキングは驚いており動揺もしていた。そのすきについてルーンはキングの首を跳ねた。キングの首は転がりそこには血だまりができていた。体は少しの間立っていたがすぐ倒れ、そこにも血だまりができた。

ルーンはキングの首がある所に行き、彼の頭にある王冠を鎌で粉々にした。

「キングも堕ちたな」

ルーンは振り返り、ロスト達の方に歩いた。

「てめえは誰だ？」

「オレはマッドハッターだ」

「本当にそれなのか？」

「…」

「いや：何でもない」

シェリルはルーンに意味深に言った。それは端から聞いていればただの普通の会話にしか聞こえない。けどよく考えればそれはルーンを“ルーン・ホリック”という人格を疑っているようにも聞こえた。

「行くんだろ？」

「え」

「月の神殿に」

「ああ」

「案内しろ」

「わかった」

エドが先頭に立って隠し通路を歩いた。

月の（ユエ）神殿の隠し通路は暗かった。

「暗いなあ」

「うるせえな」

ルーンはハルトに言い放った。

「何か冷たいね。ルーン」

「そうか？オレにはそう感じないけど」

「だってルーンなら絶対にああは返さないよ」

「気のせいだろ」

「そうかな？」

「そうなんだよ。そう言えばてめえは何でこんな道を知っているんだ？」

「情報屋だから」

「違うだろ」

「まあ：オレの先祖から伝わる道なんだよ。極秘のな」
「いいのか？教えても：」
「いいんだよ。時が来たつー事で」
「まあ：確かにな」
ルーン達はさらに奥へと進んだ。

？
月の神殿は真っ暗だった。一切の光がないそんな神殿だった。

「：」

「出てこないといいなあ」

「何がです？ハルトさん」

「クイーンだよ」

「え」

暗がりの中に神々しいまでの光を放つ女性がいた。

「お久しぶりです。ハルト様」

「相変わらずだね。クイーン」

「まあそう当たらないでください。別に私があわたくしの女を殺した訳ではないでしょう」

「変わんねえよ。ブスが」

「言葉が穢らしいですよ。ハルト様」

「いやみか？てめえ」

「おい。お前等：言い合いしてんじゃねえよ。大体何でいるんだよ？」

「クイーンの神殿だからだよ。ここがな」

「へえ。そんなのがあんのか。まあいいけど」

ルーンは鎌を出した。

「おい。こいつはオレが：」

「：足ひっぱんなよ。ロスト」

「それはオレの台詞だ」^{セリフ}

二人はクイーンに向かった。

「リヒト」

「何だ？ シェリル」

「ルーンを止められるように奴を出しとけ」

「…わかった」

リヒトは以前出したことのある子守歌の精を出した。

“どうしました？ リヒト様”

「今日は我に力を貸してはくれないか？」

“かしこまりました。合言葉は？”

「“ララバイ”」

リヒトは光に包まれ、目の色が薄い水色に変わった。

ルーンとロストの攻防が続く。そこではちよつとしたやり取りがあった。

「選べ」

ルーンはランプを13枚並べた。

「オレが？」

「そうだ」

「何でまた…」

「武器がかぶったからだ」

「氣い使わなくていいのに…」

「いいから」

「わあったよ」

ロストは13枚のランプの中から一枚を選んだ。そのランプはクローバーの7だった。そこには刀の絵が描かれていた。鎌を戻しルーンは刀を手にした。

「これで大丈夫だ」

「ふん。じゃあ行くぜ」

時間は戻り、今もまだ戦いは続いている。

「再生能力があるのはめんどくさいな」

「まあクイーンの能力だからな」

「どうすればいい？」

「一番簡単なのは首をはねる事だな」

「わかった。オレが首を取る。そのために奴の動きを抑えてくれ」

「わかった。じゃあ行動開始だ」

ロストはこちらに向かってくるクイーンと向き合う。

「ハーツ」

ロストはそう呟いた。その声は優しくさで満ちていた。ロストはそれからすぐにまるで獣が獲物を捕らえる時の目になった。その目を持ち、ロストはクイーンと武器を交える。ロストは背後に周りクイーンの心臓をひとつきにした。

「私はこれぐらいでは死にませんよ」
わたくし

傷口が再生し始めていた。

「ばーか。んなもん知ってるよ」

「ロスト！下を向け」

ロストは言われた通り下を向く。ルーンはクイーンの首をはねた。すぐ近くにいたロストはその血を浴びた。きれいな白い髪が真っ赤に染まるほどだった。

「あゝあ。髪が汚れちゃったよ」

ロストはクイーンの心臓から鎌を抜いた。クイーンの死体は倒れ込んだ。

「ところで：お前はマッドハッターだよな？」

「そうだ」

「：いや違うな。ルーンなら首をはねる事を躊躇うはずだ。戦闘慣れしていない奴ならば人を殺す事なんざできるわきゃねえんだよ！！」

「：：そうか」

ルーンはクイーンの首をはねた刀をロストに向けた。

「これ以上言うのならお前の首をはねる」

「ル、ルーン」

その時だった。その間にリヒトが入ってきた。リヒトはルーンの方を向き“ララバイ”と言う。するとルーンはその場に倒れ眠ってしまった。リヒトの目の色は戻る。

「また：お前に助けられたな」

「別にいい。それより：この事が終わったらこいつに聞かないとな」

「ああ。そうだな」

「じゃあこれからどうする？」

「最上階に向かう」

「わかった。エド」

「ん？」

「ルーンを頼む」

「わかった」

ルーン達は最上階に向かった。

？

「：ここは？」

オレは誰かの背中の上で目覚めた。黒髪が見えた。この長さはエドだ。ハルトならポニーテールをしているし。

「ん？起きたか。ルーン。ここは月の神殿ユエの九階だ。あと一階で最上階に着く。歩けるか？」

「ああ」

オレはエドの背中から降りた。若干ふらつく。それでも一歩、一歩進んだ。

「ルーンの奴：起きたみたいだな」

「そうだね」

「ハルトさんはロスト殿の時の事は覚えているんだろう？」

「うん。覚えてる。しっかりとね」

「ルーンは前は覚えてないって言った。今回は：どうなんだろうな」

「…さあね」

オレには聞こえない声で話す二人。隠し事なんだろうか。それにしてもまた記憶が曖昧だ。サンパレスでキングとみんなが戦っている辺りから記憶がない。一体どうなっているんだ？

「なあエド」

「何だよ？シエリル」

「さっきまでと今では明らかに匂いが違う」

「鼻がいいからお前にはわかるのか？」

「ああ。ルーンから香る匂い…さっきまでは血の匂いしかなかったが今はコーヒーのいい匂いする」

「あっそ。この犬が」

「まあいい。自分で言うのもあれだがオレは嗅覚には自信がある。犬だからな」

「で何が言いたい？」

「さっきまでのルーンと今のルーンは別人だという事だ」

「…そうだとってもレイさんには報告しにはいかねえよ」

「そうか。それはそれでありがたい」

また話してる。オレには言えない事なんだろうか。なんか…こういう状況いやだ。

「なあ…オレには話してくれねえのかよ？」

「…いけないか？」

「いけなかねえけど」

「だって覚えてねえんだろ？」

「…ああ」

“やっぱり”と言いそうな顔をエドはした。大体、しょうがねえじゃん。覚えてないだから。覚えているのは誰だかわからない“狂え”という声だけ。そこから先は思い出そうとも出てきやしない。

「…後で話すから今は我慢して」

「後でっていつだよ!？」

「今じゃないの言える。だってあたし等も混乱してるんだから！」

！あんたが一体どういう人間なのかと言う事を」

「それって…」

「正直言っただけであたし等にはあんた以上にあんたの身に何が起こっているのかわからない」

「…」

「だからこの話はおしまい。あんたがあたし等から答えを求めるのは自分でわかってから」

ハルトの言葉が冷たく刺さる。それが痛いとかそういう訳ではない。ただ自分が情けない。情けないから余計に心に響いた。

？

最上階は暗かった。本当に真っ暗だった。けどその部屋の真ん中に光があった。離れても暖かく光っているのが感じられた。

「陸斗…」

「えっ」

「あの青白い奴。陸斗だ。陸斗に違いない！！」

オレは全力で走った。一步、一步近づく。よく見ると手が見えた。それはまるで手を差し伸べているような感じだった。

「陸斗！！」

オレは差し伸べられていた手を握った。その時、確かに陸斗の顔が見えたのだ。

そして彼はか細い声で言った。

「ありがとう」

ルーンはにっこりと笑った。陸斗はそれを見て眠ってしまう。そして陸斗の魂は球体になった。

『ゴゴゴ』

何かが崩れる音がした。

「何の音だ？」

「この音…ここが崩れようとしているんじゃないのか？」

「だとしたらヤバくないか？」

「だな。早くここを出て…」

「ちょっと待ってくれ」

リヒトがオレの方に来た。するとサンパレスと同じ感じの石碑が出てきた。

「闇の騎士は誕生した。この神殿は崩壊し始めている事だろう。この神殿は闇の騎士を誕生させるために建造した神殿だ。役目を終え、眠りにつく。ここでは闇の騎士が完全な闇として魂を第二段階の侵食をさせるための神殿。この侵食は闇が持つ感情に対抗するために必要なのだ。」

「そんな事はいいから早くここを」

その時だった。突然、空間を裂いてジャックが現れたのだ。

「終わったみたいだな」

「ああ」

「詳しい話は後で聞く。それより…ルーン」

「何だよ？」

「お前はこのゲートをくぐれ」

ジャックは今さっき自分が来たものを指さした。

「これをくぐれば“現”に着くはずだ」

「わかった」

「ハルト達はこっち」

ジャックは別のゲートを開いた。

「これをくぐればここから脱出はできる」

「…あんたに借りができちゃったなあ。作りたくなかったのに…」

「倍返し、期待してるよ。ハルト。それより早く行け」

「はいはい。じゃあね。ルーン。また後で会おうね」

「ああ。リヒトもエドもシェリルも」

「ああ」

「おう」

「ふん」

四人はゲートをくぐった。

「さて：おれ等も行くぞ」

「ああ」

二人は崩れゆく神殿から姿を消した。

一人の少年は一人の魂を救い出した。それは闇を携えた少年の魂。

闇は生まれ落ちた。闇は独りじゃ生きていけない。誰かがいないと。

闇を“闇”として存在させるもの：“光”。光が誕生するその日は

もう近い。闇が光を紡ぐ。光が闇を紡ぐ。さあ新なる決断の物語が

：友情の物語が始まる。闇が光を見つけ出す物語はもうすぐそこに。

？7. エピローグ

「なあ姉貴」

この日はごく平凡な休日だった。高校生になり、部活が忙しいが今日は部活がないため家にいた。今は午前九時である。

「何？陸斗」

「人間の手って何のためにあるんだ？」

「…………急に変な事聞くのね。あんた」

「…………悪いかよ」

「いや…………別に」

洗い物をしながら姉貴は考えていた。拭いていた皿を籠の中に入れる。そしてまた次のを拭き始めた。一皿ずつ丁寧に拭く。それが五皿目ぐらいだったろうかその動作がピタリと止まったのだ。

「ん」。私が思うに繋がるためだと思うな」

「繋がる？」

「うん。手と手を繋いでいれば繋がるじゃない。それだけで世界が繋がると思うのよ。そのために手が存在しているんじゃないかなあ」

「…………なるほど」

「だから一人になって、誰とも繋がってなかったのなら自分から手を差し出せばいいんじゃない。そうすれば必ず誰かがその手を握ってくれる。そんな人が現れるから」

「そっか。ありがとな。姉貴」

「ふふふ」

いつかその日が来たらそうしよう。そうすれば誰かがきつと…………。へへへ。その日が楽しみだ。

姉貴が言った通りに手を差し出していたら、賢が握ってくれた。何かいつもより、あったかいな。ありがとな。賢。俺を世界に繋い

でくれて。お前のおかげで俺は一人じゃない。一人じゃないんだ。

? 7. エピローグ (後書き)

はじめまして＊来図＊です。この話は友達って何なのかな? と思
い、自分でも見つめたいなあと思って書きはじめました。まあ? 章
はこれで終わりとなる訳ですがいかがだったでしょうか。感想など
がありましたら是非とも欲しいです。さてこれから二章の予告です。
二章は陸斗のこれからという章になっています。陸斗が自分にある
力を知り、どう行動するのかご期待ください。それでは^^

0. プロローグ

俺はどうなったんだ？あの事故以来・・・一体どうなったんだ？お父さんは？お母さんは？空斗兄ちゃんは？陸斗は？一体・・・何処に行ったんだ？ここは何処なんだ？こんな真っ白な空間に俺を閉じ込めてどうする気なんだろう。ここは寒い。寂しい。誰か・・・。

まだ俺はこの真っ白な空間に一人でいなきゃいけないのか。もう十年ぐらい一人寂しくここにいる。誰か早く来てくれ。誰でもいい。でも来るのなら陸斗。お前が来て欲しい。兄弟とかそういうのは関係ない。ただ闇を欲する俺には闇と一緒にいたいだけ。ああ。早く俺を見つけ出して欲しい。早く・・・。

? 8. 平凡な日

?

「賢ちゃん!!」

この呼び方はあいっしかない。金色の髪を持った茶色の目をした幼なじみの女の子。

「千代」

そう彼女の名前は千代。フルネームは愛美千代。オレの事を友達の中で唯一ちゃん付けで呼ぶ。

「賢ちゃん。おはよう」

「おはよう。千代」

「ねえ賢ちゃん、来週の小テスト…大丈夫なわけ？」

「たぶん」

「たぶんって曖昧だなあ」

「別にいいけど」

千代は女子高生が持つ一般的なスクールバックを通学用のカバンにしている。学校指定の奴もあるがそんなのをちゃんと使ってる奴は少ない。オレもエナメルをスクールバックにしている。

「ところで…神原君は？」

「ああ。オレ等とは反対の方角だから校門で会うと思う」

「そっか」

まあ無駄話をしていれば校門に着く。

「おっ。陸斗だ。おはよ。陸斗」

「はよ。賢、愛美」

「おはよう。神原君」

まあ陸斗ではなくジャックだが。まああの後大変だった。オレが向こうから帰ってきて陸斗の魂を体に戻してその後に聞かされたのが“最短でも三日はかかる”というジャックの言葉だった。まあそういうことがあってかジャックが陸斗の代わりとして学校に登校させ

たは言いが：若干心配なんだよなあ。他の奴はいいとして千代に関しては勘が鋭いからな。こいつが陸斗じゃないって事ぐらい見抜くかもしれないな。

まあ案の定、千代はまじまじと陸斗の顔を見始めていた。ああ。予想通りの事が起きちゃったな。

「何だよ？ 愛美」

「あなた、誰？」

ほーら、見抜いちまった。まあ予想してた展開だし：いいか。

「え。何言ってるんだよ？ 俺は陸斗だって」

「違うよ。だって神原君はいつもシャツのポケットに蝶のヘアピンを付けてるのに今日、つけてない」

ああ。そこね。確かにつけてねえな。っておいおい。困った顔してオレを見んなよ。千代は誤魔化し切れねえって。オレはとりあえずジャックに向かって手招きの合図をした。それにのってきたのかジャックはオレの方に来た。

「一体どういう事だ！？ 俺はこんなの聞いてねえよ」

「言ってるねえからな。千代の事は。まあここは明かすしかねえよ。

幸い、ショートホームルームが始まるまで一時間はある。今の時間なら屋上には誰もいないはずだ。屋上にとりあえず行く。いいか？」

「わかった」

「千代」

「何？ 賢ちゃん」

「とりあえず、屋上に行かねえか？」

「わかった。いいよ」

オレ等は校門に入って屋上に向かった。

？

「で、どういう事？」

「ああ…実は…」

千代に説明する。ああ。めんどくせえ。理解してくれんのかあ？こいつ。数分後。

「つまり、この人はジャックって人で神原君に化けてたって事？」

「まあそういう事」

「じゃあ…あたし、どう接すればいい？」

「普通でいいんじゃない？なあ？ジャック」

「ああ。とりあえずジャックだ。よろしくな。千代」

「よろしく」

まあ千代は普段、陸斗に話しかけないから別にいいとは思うけどな。

「何か変な感じ」

「何がだよ？」

「神原君があたしの事、千代って呼ぶの」

「だろうな。いつもは愛実だからな」

「うん」

「まあこうして三人だけにいる時は千代って呼ぶだけで、教室にいる時とかは普通に愛実って呼ぶから大丈夫だよ」

「わかったよ」

「んじゃあそろそろ教室の方に行きますか」

「だね」

オレ等、三人は屋上をあとにした。

？

教室の中にはクラスメイトがたくさんいた。たくさんと言っても30人程度である。このクラスC組は40人構成のクラスである。

「あつ。賢に千代に神原君、おはよう」

「ああ。おはようさん。フー（へーへ）v」

フーはこのクラスの委員長。名前は風間風雅。一応、女。

「おはよう。風間さん」

「おはよう。風間」

まあ千代と陸斗は名字呼びだがそれ以外はフーというあだ名で呼んでいる。フーはオレの席の隣。その後ろが千代と陸斗の席だ。ついでに言うとは窓側の後ろの席である。

さらにこれは余談だがフーは理系で千代はオレ等と同じ文理コースである。

？

授業も終わり、放課後。オレと陸斗はバスケット部へ千代はソフトテニス部に行った。

「賢、陸斗！！」

オレ等二人を呼び止めだのは土井大地。あだ名はチー坊。チャライが部活には熱心である。クラスは2-D。学科は普通科の文系である。

「チー坊！！今日は早いな」

「自習練の日だからな」

オレが通う高校は必ずこういった自習練という日を設けている。この日は部活か勉強のどちらかをする。まあ部活によって曜日は違うが男子バスケット部は火曜日がその日となっているのだ。だから必然的に人数は少ない。まあオレを入れて四人しか来ていない。

「炎真も今日は参加するのか？」

「はい！大地先輩」

炎真は一年生だ。フルネームは三谷炎真。チー坊と同じ普通科の生徒である。

「じゃあストレッチが終わったら始めるか」

「おう」

一応、言っておくがこの部の部長はチー坊ではない。ただオレも陸斗も仕切るのが好きじゃないからチー坊に任せてある。それだけに過ぎなかった。

？

部活も終わり、家の帰り道を歩いていた。オレの家は学校からそんなに離れていない。歩いて15分ぐらいで着く。近所には千代が住んでいるアパートがある。オレの家は二階建ての一軒家だ。

家に着くとまたは知らない人の靴があった。また：来てるのか。

「ただいま」

「あらゝ賢ちゃん。お帰りなさい」

「おふくろ、また来てるの？あの人」

「ええ。来てるわよ。挨拶しておきなさい」

「はいはい。親父の部屋にいるんだよな？」

「ええ。そうよ」

「わかった」

オレは二階に行って自分の部屋にカバンを置いた。オレの部屋は一人部屋でそれなりに広い。兄貴の部屋は隣にある。親父の部屋は一階にありやたら本がある。親父の趣味が読書だからだ。まあその中でも小説が大半だ。オレも親父の本をたまに借りて読んだりもしている。兄貴も借りるし、おふくろも借りる。まあ図書館みたいな感じだ。漫画はない。漫画はオレと兄貴の部屋双方にある。親父の部屋には人がいた。この人：本当に忙しい人間なんだろうか。だってこんなごく一般的な家庭に二日連続でしかも親父がいない時に来てる。忙しいなんて絶対に嘘だ。ありえない。だいたい何の用でオレの家に来たんだ？この人。

「はあ。何の用で来たんですか？レイさん」

「ん？あつ。賢君！お帰り」

？

これは昨日の事だ。陸斗の家から帰った時、知らない靴が一足あ

った。おふくろの靴ではないのはわかった。兄貴にしてはセンスが違うし、親父は親父で靴のサイズが違う。一体：誰なんだろう。兄貴は家に友達を連れてこないし、おふくろも連れてくるような人はいない。じゃあ親父の知り合いなのだろうか。とりあえず、オレは靴を脱いで家に上がった。

「ただいま」

「あら、賢ちゃん。お帰りなさい」

「誰か来てるの？」

「ええ。勝一さんのお友達の楓玲さんかえでれいが来ているのよ」

楓：？誰、それ。

「ねえ賢ちゃん」

「何だよ？」

「勝一さんの部屋に行ってくれない？」

「何で？」

「頼まれたのよ。賢ちゃんが帰ってきたら来いって言うように」
あつ。言った方がいいのか？

「じ、実は：おふくろ」

「いいの。言わなくて。早く行ってあげて」

「わかった」

オレは親父の部屋に行った。

親父の部屋に行くと親父ともう一人いた。あの向かい側に座っている人が楓玲さんかえでれいという人なのだろうか。

「ただいま。親父」

「お帰り。まあ入れ」

「ああ」

オレは部屋に入った。

「息子かい？」

「ああ」

「はじめまして。楓玲かえでれいだ。君は？」

なんか：この人、わざとっぽい。

「中平賢です」

「：そうか。君がマッドハッターだね」

「え」

何でこの人、オレの事知ってるんだ？

「混乱しているよね。悪かった。さっき言った名前は偽名なんだ。

僕の本当の名前はレイ・スピード。君の知っているハルト・クロバーとは同僚だったものだ」

同僚？じゃあ向こうの世界の人間か。つか親父の前で何：暴露してるんだよ！？

「レイさん：何で親父の友人なんですか？」

「え？何だい？ウィン。言っていないのかい？君の事」

「ああ」

ウィン？何：それ。親父の愛称？？まあ親父は勝一って名前だから勝からwinを連想する事はできるけどレイさんの言葉が引っかかるな。

「僕の方から言うよ。その方が信憑性があるからね。ウィンはこの世界の人間じゃない」

予想はできていた。ここと“楽園の苑”^{その}は接点がほとんどない。だから友人という事を踏まえれば容易にできた事だった。けどどうして・・・この世界に親父は生きているのだろう。

「君がさっきまでいた“楽園の苑”^{その}の人間だ。向こうではウィン・ハートロットという名前だった」

親父は黙っていた。ただ沈黙し、聞いているだけだった。

「おふくろは？」

「あやめさんは“現の苑”^{うつつ}つまりこの世界の人間だ。だから君はハーフなんだよ。この世で珍しい異世界の血をひく人間なんだよ」

「おふくろは知っているんスか？」

「ああ。知っている。君の事もね」

オレはレイさんに聞く気はなかった。親父が言うのを待った。

「悪かったな。今まで黙ってて」

「いや。：兄貴はこの事を知ってんのか？」

「：蓮には言っていない。蓮はこの事に関して関わってほしくないんだ。事実、お前と違って蓮はごく普通の魂だ」

「それはわかったけど…。レイさんとはどうやって知り合ったんだよ？」

「彼は俺と同じ椅子を争った：まあライバルみたいなものだ」

「ライバル？」

「キングという椅子を：ね」

「キングって：親父、そんなにすごかったのか？」

「いや。俺自体はすごくない。俺は不真面目だったし」

「キングはね、ある四つの貴族の長男から一人を選ぶんだ。ダイヤモンド、スピードリア、ハートロット、クローバリアの四つ。ウィンはさっき言った通り、ハートロットの長男。僕はクローバリアの長男だった」

貴族：って事は金持ち！？

「親父は金持ちなんか？」

「俺の親がな。まあお前にとっては祖父母にあたるが」

「でも：何で親父はこっちの世界に？」

「俺は逃げ出したんだ。自分がまっとうしなければならなかった責任から：」

「責任？」

親父の顔が変わった。さっきまでとは違う。なんか：悲しそうだ。そしてレイさんは何やら難しい顔している。

「この世界には一つの論理がある。それは進化論。この世にいきとし生きるものすべてが辿ったこの世に生き抜く為の術^{すべ}。その時の環境に適応するために変化し強靱な姿へと進化した。植物や動物：様々な生き物が進化の道を辿った。それはわかるね？」

「まあ：だいたいは」

「それでもこの世界には進化を遂げなかったものがある。それは：魂と神だ」

うわあ。どれも目には見えないもんじゃねえか。それに：魂はともかく神なんてこの世界に存在しているのか？

「神っているの？」

「うーん。何て言えばいいかな……。現^{うつ}にはいないけど楽園にはいるんだよ。だから向こうの世界を“楽園の苑”って呼ぶんだ」
へえ。そうなんだ。

「と言っても僕達みたいな一般人がそう易々と会えるようなものでもないよ。：話が脱線したね。話を戻すと今“楽園の苑”では魂の進化について研究が行われている。人という存在が生まれてからずっとね」

「そんな昔から？」

「初代キングがその研究をしていたのが起源となっているけど正確にはわかっていないんだ。魂の進化はある2つの魂を融合し今存在している魂をより強靱なものにする。：この方法で研究が進められているんだ」

「2つ？」

「ん？なんだい！ハルトから聞いてなかったのかい。じゃあ僕の方から説明するよ。この世には二種類の魂がある。一つは生魂。もう一つは死魂。どれも名前通りでね、生魂はこの世に生きるごく一般的な魂の事だ。僕やウィン、キング、クイーンも含まれる。そして死魂とは死が決まっている魂の事をさすんだ。死魂の魂を持つものはジャック、ハルトなどが含まれる」

「死魂はどうやってその魂に陥るんだ？」

「：前世で自殺をした者が死魂となるんだ。まるで罪人を罰するようにね。その魂と生魂を融合させた魂が君だ。ルーン・ホリック」
「オ、オレ？」

「他にもチェシャ猫、エクエス、バンダースナッチ、君の親友：神原陸斗君もそうだ。この世にまだいくつ存在しているかわからないが僕達が行った実験の犠牲がこうして今の時代に現れている」

「それがオレ等だっというのか？」

「そうだね。まあ長々と話したけど…わかったかな？」

まあわからなくもなかったけど長い。30分以上話してたぞ。喉とか渴かない…こいつ。

「だいたいは」

「じゃあ僕は帰るよ。またね」

レイさんは部屋を出た。遠くの方で階段を勢いよく上がる音がした。兄貴が帰って来たのだろうかまさか…この話を聞かれたんじゃないだろうか。オレは昨日、今日と兄貴を見ていない。

？9．目覚める闇の力

？

レイさんはあの後、適当に話して帰ったけど・・・本当に忙しいのかな？なんか・・・抜け出しただけにしか見えないんだよね。昨日の事を思い返しながらオレは学校に向かっている。はあ。兄貴の奴・・・。一体、どうしたんだろう。朝も見なかったなあ。おとといも昨日も。おふくろに聞いたらわからないと言っていた。まあ難しい年頃なんだろうな。たぶん。

『プルルル、プルルル』

携帯になる。誰だ？こんな朝早くに電話をかける奴は。オレはポケットから携帯を出した。画面を見ると愛理さんからだった。

「何すか？愛理さん」

『賢！！今すぐ来れる？』

今すぐって学校があるんだけど・・・。

『陸斗が目を覚ましたの！！』

マジかよ！ちょっと待てよ・・・。腕にしてあった時計を見るとまだ学校が始まるまで一時間ある。行けるな。

「わかりました。すぐに行きます！！」

オレは陸斗の家に向かった。

？

走ったから息があがるな。まあオレンちから陸斗んちはそんなに近い訳でもない。まあだからと言って2？も離れている訳でもない。オレはとりあえずインターホンを押した。

『ピンポン』

するとすぐに玄関が開いた。

「あら！賢。早かったわね」

「まあ走って来たから」

息が上がってるな。落ちつけ、オレ。

「とりあえずあがって」

「ああ」

オレは家に入った。入ってすぐ駆け足で階段を上った。陸斗が起きている。そう考えると早く会いたくってしょうがなかった。陸斗の部屋に着くとそこには確かに起きあがっている陸斗がいた。オレは思わずハグをする。

「陸斗！！元気そうでよかった」

「賢！！お前、ちょっと離れろよ！恥ずかしいだろ」

「いいじゃねえかよ！だって嬉しいんだもん」

「・・・・・・・・」

陸斗の顔は真っ赤になっていた。本当に照れ屋だなと思う。へへへ。陸斗だ。陸斗がいる。

「ふふふ。感動の再会はここまでにして・・・陸斗は今日、学校に行けるの？」

オレは陸斗から離れた。

「行けない事はないけど・・・・部活には出れないかな。悪いな。賢」

「まあいいよ。行くんなら早く用意した方がいいんじゃない？まだ一時間以上あるけど・・・・早くやんねえと遅刻すんぞ。陸斗」

「だな。姉貴！朝食、用意しといて！俺はその間にシャワー浴びて来るから」

「わかった」

陸斗と愛理さんは部屋を出た。オレもとりあえず、部屋を出た。リビングに行き、ソファアに座る。隣に誰かいるような気配を感じたのでそっちの方を向くとジャックがいた。

「いたのか・・・・」

「まあな。起きたって事はおれはもうやんなくていいんだろう？」

「ああ。そうなるな」

「あゝあ。仕事場に戻りたくないなあ」

「何で？」

「リムの奴、絶対サボってるからな。サボった分をおれに押しつけ
そうだよ。今日中に終わるか……。はあ」

「たいへんだな」

「まあ慣れたけどな」

愛理さんが温めなおしたスープと目玉焼きが並ぶ。愛理さんもそれ
なりに料理がうまいからな……。普通にうまそう……。ま
あオレのおふくろのメシの方がうまいけどな。愛理さんがこちら
に来た。何を言うんだろう？ジャックかな？オレかな？

「まずはジャックに。ありがとう。いろいろと助けてくれて」

「まあいいんだよ」

「それから……。賢」

「はい」

「本当にありがとう」

愛理さんは深深ふかふかとおじぎをする。

「オレは……。オレはただ親友として……。当たり前な事をしたま
でです」

オレも陸斗みたいに照れ臭くなってしまった。

「……。それもそうね」

陸斗が制服を着て風呂場から出てきた。髪を拭きながらである。

「姉貴、ドライヤー何処？」

「洗面所にあるんじゃない？」

「わかった」

陸斗は洗面所の方に行く。その間に愛理さんは食パンをトースター
の中に入れ焼き始めた。髪の毛のセットも終わり
、いつもの陸斗で現れた。陸斗はすごい癖っ毛で気をつけないと
ボワンっていう感じで盛り上がったりする。最悪の場合、あちら
こちらにはね、收拾がつかなくなる。プラスして寝相ねそうが悪いら
しく、それが一つの原因となっている。ようするに寝癖もひどいと

いうわけだ。陸斗は椅子に座り、ちょうど焼き上がったトーストを愛理さんが持って来た。陸斗はそれを受け取るとマーガリンを塗る始める。シンプルな味が結構好きな陸斗なのに・何で甘党なんだろう？理解しがたいなあ。オレとしては。陸斗は朝食をたいらげると急いで洗面所に行った。そこで歯磨きを始める。それが終わると陸斗はすでに持って来ていたエナメルを肩にかけた。

「ジャック」

「ん？」

「あ・・・ありがとう」

「へえ。素直に言うなんて思ってなかったぞ。おれ」

「なんだよ。それ。賢」

「何だよ？」

「お前もありがとうな」

「おう」

陸斗はもう一回鏡を見た。

「ああ！！ヤベェ！！忘れもの！！」

陸斗は急いで自分の部屋に戻る。しばらくして陸斗は部屋から戻って来た。陸斗の制服のポケットには蝶のヘアピンがついていた。

「んじゃあ姉貴、行って来るわ」

「ええ。行ってらっしゃい」

「行くぞ！賢」

「お、おう。お邪魔しました」

オレと陸斗は家を出た。

「騒々しいな。あいつら」

「本当ね」

「さて・・・おれも行こうかね」

「仕事に？」

「ああ。またな。愛理」

「ええ。また」

ジャックも陸斗の家から消えた。

？

学校に着くと千代がいた。

「おはよう。賢ちゃん、神原君」

「おはよう。千代」

「・・・はよ。愛美」

あゝあ。照れちゃって。千代は結構モテるからなく。まあそりゃあそうだ。金髪美人だもんなく。憧れる理由はわかるし、性格はいいし、容姿も最高、声もかわいいし・・・言う事はない。まさに理想の女子。まあオレはパスだけだな。まあ陸斗は密かに千代の事が好きらしいからな・・・。まあ頑張れ！陸斗。

「今日は本物の神原君だ！！」

「本物？」

「いや。こっちの話」

千代・・・。無駄な気づかいだぞ。それ。まあいいか。

『キーンコーンカーンコーン』

チャイムが鳴り響く。ショートホームルームの時間だ。こうして学校生活に戻る。あゝあ。リヒト達は今頃、どうしているんだろう。何をしているんだろう。

ハルトはレイの職場に来ていた。レイはだいたいここにいる事が多い。だから今日もいるはずそう思ってハルトはドアをノックした。

「誰だい？」

「あたしよ。ハルト」

「ああ。入っていいよ」

ハルトは部屋に入った。相変わらずきれいな部屋だ。自室として使っているからかもしれない。彼の書庫はそれはそれは素晴らしいくらい汚い。いや汚いというよりは本の山、論文の山と言ったほうがいい。歩くのがやっとならいい。

「あんたに聞きたい事があるの」

「何かな？」

「今回の事はあんたの作戦だったの？」

「……まあそうだね。危ない賭けだったけど」

「やっぱり」

「でも次のは僕の作戦じゃない」

「次って……」

「これは一つの予言だ。“闇が誕生せし時、それは光も誕生する時だ”今、ダークナイト……スピードのエースが目覚めた。闇が誕生した訳だから……光も誕生する」

「伝説として語られるライトナイト……クロバーのエースが現れる」

「そう。これは決められていた事。すべての元凶が起こってからね」
「魂の進化論。本当にあたしにとつては忌々しい限りのもんね。あれの所為でどれだけ踊らされたか」

「それは僕にも言えるよ。だから潰したいんじゃないか。あの組織を」

「うん。そうだね」

窓の外を見る二人。そこには憎しみに似た感情があった。

リヒトとエドはまた酒を飲んでいる。彼等はいくつも行きつけのバーや居酒屋がある。

「死魂側もようやく……動き出したな」

「ああ。いいのかよ？」

「何がだ？」

「お前は中立の5番目の貴族、スターダストの隷属だろ？」

「……まあたしかにそうだ。だがエド。我は中立の立場にいる存在だからこそ死魂側に行くのだ」

「死魂が使われているから？」

「ああ。その通りだ」

「そうかよ。“闇と光は鏡。対となる存在”。これはまた新たな存在が現れるな」

「ああ。我は先日、新たな精と契約した所だ」

「闇か？」

「ああ」

二人はその後、雑談をしながら飲み明かした。

シェリルはとある場所にいた。そこはC-100と同じように廃墟だった。

「レオ。いるんだろ？」

「ああ。いる。何のようだ？」

「最近、強い光を放つようになったな。砦と城が。何かあったのか？」

「まあ……そうだね。光が現れるんだよ。この世界にね」

「光が……」

「ああ。ボクの出番かな」

？

部活も終わり、オレは家に帰っていた。

「兄貴の奴……まだ帰って来ねえんかな？」

「たしかにそうね。もう夕飯の時間なのに……」

「まあ……いいか」

最近……兄貴の野郎は小難しくなっちゃったからな。

『プルルル、プルルル』

電話が鳴り響く。

「賢ちゃん！出て」

「わかった」

オレは電話をとる。

「はい。もしもし、中平ですけど」

『あ！賢。愛理だよ！！』

「なんだ。愛理さんか。何の用？」

『すぐに来てくれる？ジャックが来てて、あんたを呼んで来いって

頼まれてて』

「わかった。行くよ」

電話を切って元の場所に戻す。

「オレ、陸斗んちに行ってくるわ」

「ええ。いつてらっしゃい」

オレは家を出た。

陸斗の家に着いてあがってちょっと経つけどジャック……..
いねえじゃねえかああああ!! 代わりにいるのはレイさんだし……..

「何の用でいるんすか? レイさん」

「暇つぶし」

忙しいなんて絶対嘘だ!! 絶対にあり得ない!!

「というのは冗談でジャックが僕にも話があるって僕も呼ばれたんだ」

「あっそう」

それにしても……ジャック来ないなあ。まあ朝に仕事が山積みみたいなのを言ってたからな……..

「ジャック……来ないっすね」

「そうだね。仕事でも片付けてるんじゃないかな? 彼……仕事熱心だから」

「へえ」

ちよつと意外だな。顔からして。まあ人は見かけによらずだもんな。

「それは嬉しいな。あんたにそう言われるなんて」

突然隣から声が聞こえた。隣を見るとジャックがいた。うええええええええええええ!! いたのかよ!

「お前、いつからいたんだよ?」

「結構前からいたぞ。お前が気付かなかったただけで」

「気配消しててんなもんわかるかああああああ!! って仕事は?」

「リムに押しつけてきた」

「え？」

「おれがやる分は終わったんだよ。残ったのはあいつがサボった分だからな」

「へえ」

たしかに仕事熱心だな。言われてみれば。

「さて、ルーン」

「何？」

「また向こうの世界に行けるか？」

「まあいいけど何で？」

「探して欲しい奴がいるんだ。頼めるか？」

「お安い御用だ。すぐ？」

「いや。すぐ行かなくてもいい。それより……」

ジャックは陸斗の方を向いた。何やら驚いているようだった。“ルーン” ってことになかな？ たぶん。

「おれはお前に話があるんだ。神原陸斗……いやスペードのエース」

「はあ？ 何だよ……それ？」

「……見せた方が早いな。ルーン」

「ん？」

「協力できるか？」

「まあいいけど」

オレはあの時貰ったシルクハットのトランプを出した。すると向こうでの服装になった。

「何だ？ その姿は？ 賢」

「こっちじゃオレはルーンだ」

「お前にもルーンと同じものがある。お前が気付かないだけで」

「はあ？ どういう事だよ？」

「これはもう決められた道だ。後は選ぶだけ」

あゝあ。オレの時より質悪いな。これからどう引き込む気だ？ ジャックの奴。

? 10. 光の始まり 1

?

色々ど衝撃的な事実が……。頭の中で整理できねえ!!と
りあえず要点をまとめると、陸斗は双子で陸斗が弟ですでに亡くな
っている海斗が陸斗の双子の兄。んでそいつが向こうの世界・
“楽園の苑”で生きていたで合ってるのか?

「闇が生まれれば必ず光もある。お前の兄はこの世界で死んでから
ずっと向こうの世界で待ってたんだ。闇が生まれるのを。ずっと待
ってたんだ。だが時は来た。闇を司りし騎士が誕生し、光が明るみ
になった。光の騎士、ライトナイトが誕生する」

待てよ……。もしかして、その探して欲しい奴って……。

「そいつか? お前が探して欲しい奴って?」

「いかにも。その通りだよ」

「マジかよ。まあいいけど」

問題は……。陸斗って訳か。まあこの世界にとってはこの世界の
人間じゃなくなる訳だからちゃんと考えないといけない事だわな。

「陸斗……。時間をやるからちゃんと考えろ。これからのお前に
とってこの選択は重要なものだ。後悔しない選択をするんだな」

んでレイさんは何のために来たんだよ? まさかこの話を聞くだけの
為に来たのか? 本当に暇な人間だな。

「んじやあ僕の方も言うよ。何もこれを聞くためだけに来たわけじ
ゃないからね」

ですよね。何を言うんだろ? この人。

「僕もルーン君について行くよ」

ええええええええええええええええええええええ!!

「はあ?」

何言い出すんだよ!! この人。

「理由は簡単さ。僕の目で君の力を判断したくなったのさ」

ほう。興味を持ってくれたんかな。

「エクエス君から君の事はある程度聞いていたからね。それに・・・今ある時間を有効に活用したいしね」

あ・・・今までちゃんとした暇な理由を聞いてなかったな・・・。

「レイさんって今は何をしているんすか？」

「今は僕の方は研究も何もしてないよ。お願いされてるからね」
「誰に？」

「議会から頼まれているんだ。キングを決めるため議会からね」
「・・・もしかして・・・オレ等が現キングと現クイーンを殺したからかな？」

「ほら、君たちは現キングと現クイーンを殺しただろ？」

「まあ・・・簡単に言うんですけど・・・」

「その所為でね。早急にキングとクイーンを決めなきゃいけないってね。その為の会議が行われているんだ。今までになかった事だし、急な事だからね。新しい世代から選別するにもまだ早すぎるからね。だから経験者から選別する事になって、その選別リストに僕の名があがったんだ。それによって今やっている研究とか仕事をする事を止められてしまい、結果だけ言うと僕は暇になったんだ」

「・・・オレ等の所為じゃん。明らかに。そういえば・・・
・オレ等が殺したんだよな・・・。オレ等・・・指名手配とかになっちまったのかな？」

「オレ等・・・お尋ね者にでもなったのか？」

「ん？ああ。その事なら汚いって思うかもしれないけど・・・他の者に罪をかぶってもらったんだ」

「・・・え？それは・・・人間として・・・いや道徳的におかしいだろ！！」

「どういう事だ？それ」

「真相を知ってる身、やった者からすればそういう事になってしまっただけさ。魂の進化論の研究に反対する者はたくさんいる。レジス

タンスを組織する者も多い。あるレジスタンスの者が宮殿と神殿から現キングと現クイーンの首を持って帰ったんだよ」

「そういえば……オレ等、放置にしたんだもんな。」

「まあその者達が首を取ったと自ら言っちゃったんだよね。だからその者達がお尋ね者になっちゃったんだよ」

「……なんて言えはいんだろう。いまいちわかんねえぞ。」

「まあ簡単に言うと自分の手柄にしちゃったという訳。レジスタンスにとっては名を知らしめるにはいい機会だったんじゃないかと思うよ」

「さらっと言った!! しかも軽い。ああー!! もういい。めんどくさくなってきた。」

「それに真実を明るみに出すためには必要な事だったしね」
「ほえ? 真実……?」

「実験は来世に行く前の魂を使っていたんだ。死魂も生魂もね。でも最近は生きたままの魂、まあ肉体にまだ宿った魂を実験に使っているんだ。それはまだ公になっていない事なんだ。それが僕が言った真実の意味だよ」

「もう……理解の範疇はんちゆうを超えてるし。」

「も、もういいです。あんたがついて来る事はわかったから」

「後、ジョーカーもついて来るそうだ」

「ジョーカー? 何それ??」

「ジョーカー?」

「ん? それも聞いてなかったの? うーん。君はキング、クイーンをどんな職業だと思ってるだい?」

「何処かの国を統治している人」

「……まさにこの世界の住人だからこそ出て来る発想だね。答えを言っちゃうと違っていてね、ジャックは死神。これは君の想像通りの職だ。魂を運んだり、道を示したりとね。クイーンは魂を生み出す者。キングとジョーカーは魂の来世を決める裁判官みたいなものかな。キングが善人をジョーカーが罪人を裁いているんだ」

へえ。

「ジョーカーも今、仕事が止まっていてね。キングとクイーンが決まるまでは暇になっているんだ。ジャック以外はね」

「ジャックは何で暇に……あついっす。言わなくて」

人はどの世界でも一日にたくさんの人が旅立っている。魂を運ぶ仕事をしている訳だから暇にはならないか。

「そういえば……ジョーカーの魂は死魂と生魂どっちなんすか？」

「死魂だよ。まあ彼女は近々来ると思うよ。それまで各々の準備期間としよう。彼女も仕事を止められているけど今、色々としている事があるようだしね」

「わかりました」

「じゃあ僕は行くよ。またね」

「んじゃあおれも。リムの分手伝いをしに」

ジャックとレイさんは陸斗んちを出た。残されたのはオレと陸斗。あゝあ。気まずいな。話しかけにくいし。はあ。どうしたもんか。

「賢」

突然、陸斗に呼ばれオレはビクツとした。

「な、何？ 陸斗」

「ちよつといいか？」

「まあいいけど」

オレは陸斗の方に行く。何を話すつもり何だろう。

「オレは姉貴達に引き取られる前、オレを入れて五人でこの家に住んでいたんだ。父親と母親、空斗っていう二歳上の兄貴と海斗と俺。そんなごく普通の家族だった。賢も知ってるだろ？ あの事故の事」それは知っていた。けどニュースでちらっと聞いたぐらいだ。その上、その時のオレも幼く事故について色濃く覚えているわけでもない。 “ただそんな事故が昔あった” その程度でしか覚えてないのだ。

「ああ」

「……あの日、俺等家族五人は遊園地に遊びに行ってたんだ」そうあれはそんな楽しかった日の最悪の結末だった。

？

今から十年ぐらい前の冬の事だった。その頃の陸斗と海斗はまだ六歳。あと数カ月で小学校へ入学する。先に小学校へ入学した空斗はもう二年生。父親と母親は共に30代前半だった。遊園地に行く事になったきっかけは陸斗と海斗の強いアタックにより行く事になったのだ。この日の彼等はおそろいの服を着て遊園地に行った。日曜日の所為か遊びに来ている人はたくさんいた。カップル、家族づれ、友人達とさまざまなグループで来ていた。陸斗達はコーヒーカーに乗ったり、お化け屋敷みたいな建物に入ったり、汽車に乗ったり、カーレースをしたり、ヒーローショーを見たり、観覧車に乗ったりと最高に楽しい時間を過ごしていた。だがそれもつかの間の事だった。遊園地から家に向かう途中の事だった。辺りは真っ暗だった。それもそのはずだった。時間は夜の八時。真っ暗でもおかしくはなかった。父親はいたって普通の運転をしていた。最善且つ安全な運転だった。猛スピードで走って来る車と陸斗達の車が正面衝突をしてしまったのだ。陸斗はそのショックで一度、意識を失ったが奇跡的に意識を取り戻した。その近くには海斗がいた。陸斗は海斗の所へ必死の思いで行く。その時、陸斗の右足は折れていた。

「海斗、大丈夫？」

海斗はその質問にすぐ答えなかった。彼の意識は朦朧もうろうとしていた。

「ごめん。陸斗。学校、一緒に……行けそうにないや」

そう言い残し、海斗は息を引き取った。陸斗にはそれがわからなかった。ただ眠ってしまったただけなんだとそういうふうには見えなかった。近くにいる空斗達は即死のようだった。その後、この事故は飲酒運転による事故である事が判明した。しかし、事故を起こしたもう一人の運転手の男性も死亡との事だった。

「俺は……その前の事は覚えてないんだ。何も……家族と過ごした日の事を」

「それだけ・・・お前にとっていろんな事があったからじゃねえの？愛理さん達と一緒に生活やオレや千代・・・いろんな人との出会いと別れ。楽しかった事とか辛かった事・・・それがお前を埋めていったんじゃないのか？」

「そうなのか？」

「そういうもんだよ。人はいろんな事を忘れる。その代わりにたくさんのお事を覚える。そうやって進むのが人の道。人生なんだよ」

「・・・まあ・・・それもそうだな。俺はこの家族に育てられた事でたくさんのお難を浴びた。そんな目で見られた。それは・・・お前も知ってるよな？」

「ああ。一回だけそのとばかりがオレにも来たな」

「そういえばそうだったな。小学校の頃さ、その事でよく姉貴にあっつたんだよな。何で俺を引き取ったのかってさ。そしたら姉貴の奴、あんたが大事だからって言った。他人が何をほざこうと関係ない。あんたが思ったように生きればそれでいいって」

「すげえよな。あの人」

「ああ。俺は一生、あの人を超える事はできないだろうな」

「そうかもな」

「な、なんだよ。何で納得してんだよ!？」

「ん？秘密だ」

「ったく。・・・賢」

「ん？」

「今まで話さなかった事、謝るよ。ごめん」

「・・・って言われてもな。聞かなかったのも悪いわけだし。それに・・・聞く気はなかったし。」

「いいんだよ。それに聞いたからって何かが変わるわけじゃない。オレはお前のダチって事は変わらねえよ。そう思ったから今まで聞かなかったんだし」

「そっか」

「んでどうすんだ？」

「姉貴にも話してみる。そろそろ帰って来る頃だし」

「そっか」

それから少しして愛理さんが帰って来た。

「ただいま」

「お帰り。姉貴」

愛理さんは靴を脱いで玄関にあがった。

「ありがとう。陸斗」

陸斗は愛理さんの荷物を持った。

「ん？賢！！いたのね」

「まあ」

「ジャック達は？」

「帰っちゃった」

「あら。ご馳走しようと思ったのに……。賢、食べてく？」

「えっ？いいんすか？」

「いいわよ」

「やったー！！んじゃあ楽しみにしてますよ」

「ふふ」

陸斗は荷物を置きに行った。そして玄関に帰って来る。

「姉貴」

「何？」

「話があるんだ」

「いいわよ」

陸斗と愛理さんは二階に行く。オレはその近くで話を聞くことにした。

「それで……。話って何？」

「実は……」

陸斗はジャックに話された事をありのままに話す。

「……。そう。海斗が」

「ああ」

「それで……。姉貴はどう思うんだ？」

シスコンと言えないけど……まあ陸斗と愛理さんの関係を知らない人にはそう見えるよな……。傍^{はた}から見ると。

「そうね。陸斗が会いたいと思ってるのなら行きなさい」

「姉貴」

「私からはそれ以上の事は言えない」

「だよな。今度は俺が手を取る番ってことかな？」

「そうなるわね」

「姉貴、俺……行くよ。海斗に会うために」

「そう」

簡単に言うけど……どうする気なんだ？あいつ。自分の中にある力の事は。認めて受け入れないと先には進めないだろ。自分がこの世界の人間じゃなくなる。オレはもう選んじまった後だから何を言ってもくだらない後悔でしかない。それに好きでこの道を選び、オレは陸斗を助けた。誇らしい事でもあるからオレはこの力を受け入れる事ができたけど……。会いたいってだけで受け入れらる事じゃないだろ。これから先、一生に関わる問題でもある。どうか慎重に決めてくれよ。

「俺の中にある力を受け入れようと思う。その力が俺と海斗を繋ぐ一つ道になると思うんだ」

「……。光と闇。まあ言われてみれば繋ぐという事では陸斗が持っている力を受け入れた方がいいってのは間違いないな。」

「いいんだな？陸斗……。それで」

「ああ」

「後悔はしないな？」

「ああ」

「……。じゃあ決まりだな。んでいつ行く？」

「明後日に行こう。ちょうど休みの日がその日だから」

「わかった。んじゃあその日に」

「ああ」

「んじゃあ……。オレは帰る。……。陸斗、最後に聞いていい

か？」

「ん？」

「その蝶のヘアピン・・・お前のか？」

「いや。母親の形見だ」

「そっか。じゃあな、陸斗」

「ああ」

着ていた服を変え、オレは陸斗の家を出た。

? J. 闇と光 1

?

今日は土曜日。あれからオレは陸斗にオレがこの世界と向こうの世界のハーフである事や自分の魂の事、様々な事を話した。驚いていたようだったが理解してくれたようでそれはよかったと思った。向こうの世界に行く待ち合わせ場所は学校の屋上という事になった。何で屋上なんだ？みんなにばれちまったらどうする気だよ？・・・何を考えているのやら・・・ジャックの奴は。

「とりあえず・・・来たのはいいけど」

「まだ来てないみたいだ」

「オレ、ちょっと楽しみだな」

「何が？」

「お前のお兄ちゃんに会えんのが」

「それかよ」

「どんな顔してんのかな。むふふ」

学校では今、いろんな運動部が部活をしている。オレ等が入っているバスケ部はすでに部活が終わったあとだ。他にもテニス部や陸上部、野球部と校庭に見える部活はそれぐらいだ。あとは体育館や道場、コートとかで練習をしているため、この屋上から見れない。

「ジャックの奴、遅いな」

「だな。三時にここに来るって言ってたのに・・・三十分以上も来ないなんてな」

仕事か？・・・いや違うな。今頃、リムと喧嘩でもしてんだな。きっと。そして今、お約束のくしゃみをしてるな。うん、うん。

屋上につながる階段からこちらに向かう足音が聞える。誰か来んのか？

「賢ちゃん、神原君」

うわあ。千代が来た。タイミング悪いな。まあ・・・いいか。

「何しに来たんだよ？」

「いいじゃん。別に」

「いいじゃんって……はあ」

「悪い。遅れた」

そう言っでやっでジャックが来た。

「……誰？」

「千代じゃん。何でこんなとこに……」

「何であたしの名前を……」

「ほら、千代。あれがジャックだよ」

「えええええ！！そうなの！？ふーん」

「んじゃあゲート開くぞってその前にほれ」

ジャックは陸斗に一枚のランプを差し出した。

「これがお前のランプだ」

そこにはスピードのエースが描かれていた。陸斗はそれを受け取る。

「ありがとう」

ジャックは指を鳴らした。するとオレの時と同じように服が変わった。髪の色も紫に近い黒になる。服の説明をすると騎士みたいな服装だ。黒と紫の色でスピードのマークが所々にある。陸斗の右腕にはスピードマークの盾があり右のわき腹には剣が付けられていた。

「向こうの世界では“神原陸斗”って名前は通用しない。だから新しい名前を決めろ」

「急だな」

「早くしろ」

「わかったよ。……リゼル・ダークで」

「リゼルだな。んじゃあゲート開くぞ」

オレはその間にランプを出し、ルーンになる。千代はそれを見るなり、驚いた顔になる。まあしょうがないか。

「これは……どういう事？」

「ほら……ジャックと初めて会った時に話しただろ？それに繋がる門とオレの格好だよ」

「で・・・賢ちゃんと神原君はその・・・異世界とかに行っちゃうの？」

「ああ」

「あたしも・・・」

「ダメだ。お前までこの事に巻き込む気はない。行こう、陸斗」

「ああ」

オレと陸斗はゲートを通った。ゲートはその時に閉まる。

「賢ちゃん!!」

千代は悲しそうな顔をして空を見る。

「ルーン。お前が望まなくてもいづれこの子も巻き込まれる事になる」

ジャックは呟くように言った。

？

“楽園の苑”に着くとリヒトとレイさんと一人のスレンダーなハルトとは違うタイプの女性がいた。

「リヒト!! 久しぶりじゃねえか!!」

「ってそんなに言うほど久しぶりでもないだろ」

「あっ。それもそっか」

「んであの人がジョーカー？」

「そうだ。お前がルーンか？」

「まあ」

「はじめまして、現ジョーカーのジョーカー・ダイヤだ。ジョーカーって呼んでくれ」

「わかった。よろしく」

にしても・・・大人の女性って感じだよな。きれいなバイオレットの瞳に灰色の髪。それをハルトとは違う位置でポニーテールをしている。露出度は高くないがその顔やスタイルからにじみ出ている気品や優雅さにこりゃメロメロだな。

「そちらの者」

リゼルの事だな。

「俺？」

「そうだ。お前の名は？」

「リゼル・ダークです」

「そうか。よろしく」

「はい」

「へえ。そういう名前にしたんだ。改めてよろしくね。リゼル君」

「はい。レイさん」

「我はリヒトだ。よろしく」

「よろしく」

これで挨拶は終わったのかな。

「で・・・ここはどこだよ？」

「ここはX-100だ」

リヒトが答えた。

「今回は何処に行くんだよ？」

「W-100にある月の砦に向かう。そこに今回の探している者の魂がある」

ジョーカーが答える。そういえば・・・リヒトとジョーカー一人称は違うけど口調はなんか・・・似てるな。

「リゼル君の時とは違って魂だけじゃないからね。リヒト君の意見で月の砦が一番怪しいからそこから当たろうと言う事になったのさ」
へえ。で今度はシェリルみたいな門番はいない・・・よな。

「ここには百獣の王・・・リオンがいるはずなんだけどね・・・」
ちよっと待てえええええい！！いんのかよ！？シェリルみたいのが！！

「リオンってシェリルと同じ・・・」

「うん。ここで月の砦に行く為の適正をしているのさ」

「どんな奴なんだよ？」

「温厚な子だよ。だけど強い。それは本能のままに獲物を狩る・・・」

百獣の王のようにね」

ライオンみたいな奴って事か。うわあ。あんまり相手したくないな。個人的に。

「君達かな？ シェリルの言っていた・・・マッドハッター御一行は」そこには一人の男がいた。彼は褐色の肌に黄色の髪。目の色はオレンジ。左のほほには王冠のタトゥーみたいなものがあつた。

「そうだ」

「そうか。ボクはレオ・ジパンク。それにしても驚きだ。まさか現ジョーカーと先代キングレイ・スピード・・・そしてリヒト。君達までも関わっている。これは相当の事だ。これだけすばらしい者達がいるわけだ。ボクは一切手を抜かない。それでもかまわない？」

「いいよ。それで。でも君一人でこの人数を相手できるのかな？」

「なめないでくれ。マッドハッターとスピードのエースは戦闘初心者部類だ。違う？」

「間違いではないな」

「おいおい！！ ジョーカー！！ オレ等の事を知りもしないでよくもそんな事が言えるな！！ なんか無性に腹が立って来た。」

「おい！！ ふざけんなよ！ オレはそれでも戦えるぞ」

「そうか。それは頼もしいな。リゼル」

「何だ？」

「お前は完全な初心者だろ？」

「ああ」

「お前は無理に参加しなくていい。私達でなんとかする。お前はそれを見て戦い方を学べ！ いいな？」

「わかった」

「じゃあ準備はいいな？」

「ああ」

「・・・これより適正をはかる」

レオは呪文を唱えると手にグローブらしきものがはめられた。

「ルーン君」

「何すか？」

「君は何を使って戦う？」

「オレはトランプですけど・・・」

オレはそのトランプをレイさんに見せた。

「なるほど・・・。この絵に描かれた武器を召喚して戦うのか・・・。エドワード君から・・・君は戦っている最中にまるでハルトがロストになるように別の人格になる時があると聞いたけどそれって本当の事かな？」

ん？そんな事、初耳だぞ。別の人格？わけがわからん。思い当たる事なんか一つもない。まあ・・・最近、途中で記憶が曖昧になる事が数回はあった。それと関係しているのだろうか。わかんねえ。

「オレ・・・そんな事知らないっす」

「そうか。もしかして初耳だったりするのかな？」

「はい」

「そっか。・・・知らないって事は記憶がないって事かな？」

「はい」

「・・・記憶が途切れる前に何があったとか覚えてる？」

「・・・何があったんだ？・・・そうだ！！たしか・・・“狂え”って誰かが頭の中で言ったんだ。そうだ。誰かが頭の中で話しかけたんだ。オレに・・・でも一体、誰が・・・」

「頭の中で誰かはわからないけど・・・“狂え”って言ったのは覚えてるよ」

「“狂え”。そう言ったんだね？」

「ああ。間違いない」

「そこから戦闘初心者とは思えない戦い方をしていると聞いたよ。君はハルトとまったく同じような人間なのかもしれない」

「え」

「君の中にもう一人の人格がいる。僕はそう仮定する。それを前提で君にお願いしたい事がある」

「何すか？」

「そのもう一人の人格に話しかけてみてはくれないかな？」

「え！でもどの時も向こうから話しかけてきた上に……どうやって話しかけてきたのかわからない」

「うーん。これはハルトがよく使うやり方らしいんだけど……心の中で誰かいると話しかければいいらしいよ。やってみてごらん」
「わかりました」

オレは言われた通りに心の中で“誰かいる？”と問い掛けた。すると何処からか声が聞こえた気がした。オレはもっと大きな声で言うてくれと頼んだ。その後すぐに大きな声が聞こえてきた。

“いるよ”

顔がはつきりと見える。オレに結構……そっくりだ。

“お前が“狂え”って言った奴か？”

“そうだ。オレが言った”

“お前は誰だ？”

“オレか？オレは……お前だよ”

そいつはオレを指差して言った。

“オ……オレ？”

レイさんの言う通りだ。オレにはもう一人の人格がいる。

“それにしても驚いた。お前の方から話しかけて来るとは”

“何だよ？”

“お前にそんな力がないと思ったからだ。……外にいるレイとかいう奴のおかげか？”

“そうなるかな”

“……んで何がお望みだ？”

“力を貸して欲しい”

“そういう事か。トランプに向かって“狂え”って唱えろ。そうすればオレが力を貸してやる”

“わかった”

“だがお前如きの力で扱える代物じゃない。せいぜい頑張る事だな”
もう一人のオレは姿を消した。

「どう？何かわかった？」

「はい。レイさんトランプを」

「わかった」

レイさんは先程まで持っていたトランプをオレに渡す。そしてさっき教えてもらった通りにオレはトランプに向かって“狂え”と唱えた。すると赤と青の光が交互に光った。きれいだった。それ以外にも力がみなぎって来るそんな感じがした。

「レイさん」

「ん？」

「レイさんは何を使って戦うんすか？」

「僕はこれさ」

そう言っってレイさん棍棒を出した。

「じゃあ前衛なんですか？」

「いや、前衛より後衛派かな。僕の場合」

「ジョーカーは？」

「私は短剣を使って戦う」

「前衛って事か。じゃあオレは・・・」

オレは二丁拳銃のトランプを引く。すると手には二丁の拳銃が装備される。

「オレは真ん中で援護するよ」

「それは頼もしいな。リヒトも準備はいいか？」

「ああ。任せてくれ」

「じゃあやんぞ！！」

「来い！！」

ジョーカーとレオの激しい攻防戦。レイさんという何やら唱えている。リヒトもリヒトで何やら唱えている。二人の戦闘タイプは似ているのかなとオレは思った。オレは銃を撃つ。頭の中でも一枚別のトランプを引けという声が聞こえた。オレはトランプの山を出し、一枚引いた。するとそこには水の絵が描かれていた。その声はそれを左の銃に装備しろと言った。オレは言われた通りにその行

動をする。すると左の銃の色が青に変わった。右も同じようにする。それで銃を撃つと水の玉が出てきた。

「魔法弾!!」

レイさんが驚く。

「リヒト君、彼は・・・魔法弾を扱えるのかい？」

「そうらしいんだ。レイ殿。我もはじめてみた時は驚いた」

「これは僕等以外にも属性でダメージを与える事ができると言う事か。ルーン君!!」

「何すか？」

「君はその水の属性の魔法弾を撃ち続けてくれ。こっちは闇属性の術をするから」

「わかりました」

オレはそのまま撃ち続けた。

「リヒト君」

「ん？」

「闇の精は出せるね？」

「もちろんだ。じゃあそれをお願いするよ。しかも憑依で」

「了解!」闇の力を持ちし精よ。我に力を与えたまえ」
すると黒と紫の精が現れた。

“何のご用でしょうか？リヒト様”

「我と一つに」

“かしこまりました。合言葉は？”

「“ダーク”」

それを言うとしヒトの髪はリゼルと同じような髪色になり、目の色は赤く、肌は青ざめた感じの色をしていた。リヒトはそのままレオの方に向かった。

「あれは・・・リヒトなのか？」

「間違いなくあれもしヒト君だよ。彼はああやって精を自分に憑依させて戦う言わば“シャーマン”という者さ」

「へえ」

オレ、リヒトはずっと後衛かと思ったら違うんだな。今、奴はジョーカーと連携を取りながら戦っている。つか結構息ぴったりだな。あの二人。

「さて僕等も負けてられないよ!!」

「そうっすね」

オレはまた銃を撃ち始めた。レイさんも闇の術を唱えまくる。だが一向に倒れようとしない。

「レイ!!」

「何だい？ジョーカー」

「お前も前に来い。一発でかいのを入れた方がいい」

「わかった。いいよ」

レイさんはまた呪文を唱えた。すると今度はレイさんの武器である棍棒に力が宿る。

「じゃあ援護は任せたよ。ルーン君」

「はい!!」

レイさんはレオに向かって走る。レオの所に着くとレイさんは華麗な棍棒術を披露した。そしてその最後にとんでもない技を見せてくれた。それは炎と闇の見事と言わんばかりのものだった。その技でレオは倒れた。

? Q 闇と光 2

?

レオは少しの間、意識を失っていた。だが少し経ってから意識が戻った。その時にはリヒトはいつものリヒトに戻っていたし、ジョーカーやレイさん、オレは武器を納めていた。リゼルもその場に来る。

「レオ君。で僕達は合格かな？」

「ああ。合格だよ。申し分ないほどに」

「そうか。それはよかった」

「じゃあここから道案内としてボクもついて行く。“月の砦”へ」

「よろしく頼むよ」

「んでどうやって行くんだよ？」

「“サンパレス”の時は汽車だったけど・・・ちよっとついて来い」
オレ等はレオの後に続いた。

?

レオが立ち止まる。オレ等もその場に立ち止まった。

「“目覚めよ、光の通路!!”」

するとその場が光り出した。

「ワープゾーン!？」

レイさんがレオに聞く。

「そうだ。この中に入れば“月の砦”に向かう事ができる」

それを聞いた瞬間リゼルが真っ先に入った。続いてオレも中に入った。リヒト、レイさん、ジョーカー、レオも入る。するとオレ等は
その場から消えた。

オレ等が現れたのはまるでそこは軍隊でもいそうな要塞みたいな
所だった。

「ここが“月の砦”」

「そうだ。リゼル。ここにお前の兄神原海斗の魂がある」
それを聞くとリゼルは走りだした。

「おい！！リゼル！そんなに焦る事ねえだろ！何が起こるかわかんねえんだから」

オレが言った言葉は聞えていないようだった。

「リヒト」

「何だ？ルーン」

「“サンパレス”みたいな事はないよな？」

「キングが来る事はないだろう。だが何が起きるかはわからないな」
『ポチッ』

スイッチが押したような音が聞こえた。

「・・・何か押したようだな。リゼルが」

「冷静に言うなよ！！ジョーカー！リゼル！止まれ！！」

その言葉は届いたらしくリゼルは止まった。

『砦の防御隊、出動』

何処からかそんな声が聞こえた。するとオレ等の周りに結界みたいなものが張ってあった。

「そういう事か」

「どういう事なんすか？レイさん」

「これは罠だよ。ああやって一人にして団体で来る気なんだ。向こうはね。リゼル君！気をつけて！！君の剣に宿る力を信じるんだ！！」

「わかった」

リゼルは剣を抜いた。そして砦の中からぞろぞろと人ならざる者達が出てきた。

「おい。何だあれ？」

「ここを守る者達だ。属性の弱点をつかない限り、倒す事はできない」

「それってリゼルには不利じゃねえか！！」

あいつは戦闘初心者。一回も戦闘をしてないんだぞ。いくらレオとの戦いを見たからって勝てる訳ないし、戦えるわけねえだろ。

「それはどうかな。スピードのエース・・・またの名を闇の騎士。闇を操る者だ。あの得体のしれない物体は僕が見た所、光の属性。闇の力をちゃんと使えばリゼル君だって勝てるはずだ。違うかな？レオ君」

「ああ。その通りだ」

「頑張れ！！リゼル」

リゼルは剣を持ってない手で親指を上にあげた。リゼルは敵に向かって剣を振るう。その剣はきれいな黒をしていた。

「あの剣自体が闇の力を持っているのか」

ジョーカーが呟くように言った。

「死魂の力を感じる。あの剣は死魂術によって作られたもののようなだ」

「死魂術？」

「死魂の者なら素質さえあれば誰でも扱う事ができる魔術の事だ。属性もあり闇、炎、土、雷が含まれている」

「へえ。他にもあんの？」

「他にはね。生魂術というものがあってね。死魂術と同じような魔術だ。生魂の者が扱えるね。属性は光、水、風、氷が含まれているんだよ」

「へえ。ジョーカーは死魂術を使えんのか？」

「ああ。リヒトも使えるし、エドワードも使える。あとシェリルも使えてレオも少しなら使えるよな？」

「まあ」

「レイさんは使えんの？」

「使えるよ。ジョーカーより力は弱いけどね。僕の場合は必死で取得したから」

「たいへんなのか？」

「生魂の者が死魂術を覚えるのはたいへんだよ。反属性だからね。」

君みたいな者は容易に使えと思うよ。両方ともね」

「そっか」

あんま覚える気はないけど。それにしても・・・リゼルの奴、すごいな。なんの躊躇ためらいもなく攻撃をしている。勇敢だ。剣道とかを剣術に関わるものを習った訳ではないはずなのに・・・まるで習ったような華麗な剣術だった。最後の敵を倒すとオレ等を包んでいた結界がなくなった。

「ふう。やっと解放されたぜ」

「それでは行こうか。また敵が来て貰っては困るからな」

「ああ」

オレ等は砦の中に入った。砦に入るとやはり要塞のようだった。あちらこちらにまだ警備兵がいる。それを倒しながらオレ等は進んでいた。

「きりがないね。あとどれぐらいで着くんだい？レオ君」

「あと一階で着く」

「そっか。誰か魂を入れる事ができるものを持ってないかい？」

「私が持っている。それを使えばいいだろう」

ジョーカーは何処からかはわからないがビンを出してきた。

「リゼル、お前が持っている。いいな？」

「ああ。わかった」

リゼルはそれを受け取った。

「階段はあれか？」

リヒトが指差した。

「ああ。そうだ。あれが屋上に繋がる階段だ」

オレ等はそれをのぼった。屋上に着くとそこにはヒトが一人いた。

「あれは・・・」

『待っていた』

彼はそう言った。リゼルの方を向き、諭すような顔付きで。

「お前は・・・？」

『私はここで貴殿が来るのをずっと待っていた。私は神原海斗の一

部だ』

「一部？」

『そうだ。この先にある魂は神原海斗のもの。さあ貴殿の闇を見せてみる！！』

「戦えて事か？」

『そういう事になる。私はその為だけに存在している』

「一人か？」

『そうだ。貴殿と一対一でやり合いたい』

「いいだろう」

「リゼル」

心配そうにみんながオレがリゼルを見る。

「大丈夫だ。ルーン。俺は海斗に会う為に戦うんだからな」

リゼルの背中が逞しく見えた。

「行くぞ」

『来い』

二人の戦いが始まった。さっきリゼルが戦った敵とは格段に違っていた。

「そう簡単には倒せないな」

レオが言う。何か根拠とかがあるのだろうか。

「たとえば、一部であろうと光の騎士だ。それなりに強い」

「お前は光なんだよな？」

「そうだ。ボクは光と炎だ。だからわかる。あれは・・・ボクよりも強い。ボクよりも強い光を持っている」

「さすがは・・・光の騎士、クローバーのエースと言ったところか」
ジョーカーは本当に冷静だな。

「ジョーカーは何でそんなにも冷静なんだ？」

「簡単な事だ。私が取り乱せば、公平かつ正当な裁きができなくなってしまう。人を裁くと言うのはこういう事だ。特に、罪人^{つみびと}を裁くのならな。それが性格として出ているだけにすぎない。それだけの事だ」

「そっか」

心がない訳ではないよな。同じ・・・人間なのだから。

「リゼル君、闇の使い方がさっきよりもできるようになってきたね。いい傾向だよ。彼は急激に成長している」

オレ等はその力に見とれていた。

？

そこには一人の男がいた。彼は鎌を持ちまるでジャックのようだった。

「世界が変わる。変革の時か。私も・・・こんな辺境の地でいつまでも世界を眺めるだけにはいけないか」

「グレイヴさん」

ハルトが現れた。この男はグレイヴと呼ばれているらしい。

「この世界に・・・現れたのか。闇と光が」

「うん」

「そうか。・・・古き時代が終わろうとしている。天空神が去ってからもうあまたの時代が訪れたが、ここまで世界が動く事はなかった」

「グレイヴさんはこれからどうするんですか？」

「私も一応、軍の人間だ。行動できる範囲は限られているが手を貸せない訳じゃない。それに・・・近いのだろう？お前に残された時が終わるのが」

「まあ・・・」

「今の世がお前のような存在を産み落とした。最近、現れた者達もそうだ。そしてそれは・・・これからもまた起こりえる事だ」

諭すようにグレイヴは言った。彼は何処か切ないような憂いでいるような顔をしていた。

？

あれから少し経った。リゼルの戦いも終盤に突入していた。二人とも疲労が見える。

「これで終わりだ！！」

リゼルがと止めを刺す。すると敵は跡形もなく消えた。するとその先に丸く光るきれいな物体があった。

「あれは・・・？」

「あれが神原海斗の魂だ。リゼル」

「ああ」

リゼルはビンを出した。その中に魂が入る。

「これでいいのか？」

「第一段階はな。第二段階がまだある」

「第二段階？？」

「肉体がないとこの世界に存在しているという事にならないからな」
そっか。海斗は死んでんだもんな。当然と言ったらそこまでか。

「じゃあ肉体がある場所に向かった方がいいって事か。で何処に向かえばいい？」

「“太陽の城”だ」

「どうやって行くんだよ？」

レオは静かに指差した。そこは海斗の魂があった場所。そこはさっきと同じようなワープゾーンとなった。

「その中に入れば行ける」

「よし。それじゃあ行くか」

「海斗に会いに！！」

リゼルが意気込むように言う。

「おう」

オレがまず最初に言った。

「「ああ」」

リヒトとジョーカーも言う。

「そうだね」

レイさんも言った。レオは何も言わなかった。

「レオも何か言えよ」

「言う必要はない。ボクは終わった後に言う」

「うわあ。気取っちゃって・・・かつこよくもねえよ」

「うるさい」

オレ等はワープゾーンの中に入った。

？

太陽の城は想像通りの所だった。中世を思わせるような作りだった。

「で、ここは何処にいるんだよ？」

「玉座にいる。入ってすぐの場所だ」

レオの案内の下、オレ等の中に入った。

王の間には確かに、玉座に座る男がいた。

「海斗？」

リゼルがそう言うとその男がこちらに顔をあげた。似ている。いや瓜二つだ。双子でも二卵性と一卵性があるが間違いなく一卵性双生児の双子なんだな。唯一違うと言ったら左目の下に泣き黒子があるぐらいだ。

「・・・会えるだけ羨ましいよ」

レイさんが意味深に言った。

「何でなんすか？」

「僕は会いたいと心から願っても会う事はできない。人を一人でも永遠に失うというのはどれだけの年を重ねようとも悲しいものだ。それを超えて二人はこうしてこの場で会えた。それが羨ましくてしようがないんだ」

レイさんの顔が切ない。あれ？これに似た表情をハルト・・・いやロストもしていたな。

「レイさん」

「レイ」

オレとジョーカーが呟く。彼に何があったのだろう。ロストとハルトにも。

リゼルは海斗の体に近づく。そしてビンのふたを開けた。中に入っていた魂は海斗の体の中に入って行った。海斗はゆっくりと目を開ける。

「海斗!!」

リゼルは海斗の手を取る。

「……陸斗」

海斗はリゼルの手を握って来た。

「……海斗？」

リゼルはその手を見る。リゼルは驚いた顔をして海斗を見た。

「ずっと……お前が来るのを待っていた。この光り輝くこの場で」

「海斗……お帰り」

「ただいま」

オレ等は二人の再会を見守った。

？

「グレイヴさん」

「ん？」

「あの子は……ハーツは生きていますでしょうか？」

「何を聞くと思えばそれか……。お前もレイもいい加減、彼女の事を思い続けるのをやめたらどうだ？ 彼女はもう何十年も前にこの世界から去った過去の人だ。いつまでもそこに執着した所でしょうがないだろう」

「たえそうだとしても……。オレにはあいつが何処かで生きているようにしか思えない!! この世の何処かで!!」

「……ロスト。お前に残された遺言はそうかもしれないが……。いやこれ以上は私にもわからないな。彼女は私の前でもまるで

今もここに生きているかのような言葉を残したのだから
それは忘れもしない確かな言葉。彼女が生きた証。“私は待ってる。
またあなたに会える・・・その瞬間を”

？

「さて・・・帰ろうか。僕とジョーカーは着いて行くよ」

「じゃありヒトとレオとはここでお別れか」

「そうなるな。また力を貸す。我で良ければな」

「そうかよ」

「ボクもだ」

「ゲートはジャックが今回の件が終わったら自動的に開かれると言っていた」

ジョーカーの言う通りゲートは開いた。

「じゃあな」

オレ等はそのゲートの中に入った。

着いた場所は陸斗の家だった。誰もいない。

「姉貴の奴・・・買物かな？」

陸斗は辺りを見渡した。海斗は戸惑いながらオレ等と一緒にいた。遠くの方で声が聞こえた。

「ただいま」

愛理さんだった。陸斗はその声を聞いて玄関の方に行った。

「姉貴」

「陸斗・・・。帰ってたの？」

「今、ここに来たばかりだ。それより早くリビングに来いよ!!」
「わかったわ」

愛理さんと陸斗がオレ等がいたりリビングに来た。

「海斗!!」

「愛理姉ちゃん!!」

海斗は愛理さんの方へ行った。それは一種の奇跡だった。

「こんなに大きくなった海斗に会えるなんて・・・。今日は最高の一日ね」

オレは陸斗の顔を見た。初めてだ。あんな嬉しそうな顔をしたあいつを見るのは。

？K・エピソード／光の始まり2／

？

あれからジャックが陸斗の家に来て話し合いが開始されている。

「海斗・・・。お前、おれが言わんとする事、わかるよな？」

「ああ」

「まあお前の場合、選択する権利はないけどな。ほらこれがお前のトランプだ」

ジャックは海斗にクロバーのエースが書かれたトランプを渡した。

「名前は確か・・・もうあるんだよな？」

「ああ。シゼル・ライトだ」

「ん？何でもう名前があるんだ？」

「海斗はいくらこっちの世界の記憶を持っても、向こうの世界で生きた時間の方が長い。その上、おれとリムが一番最初に向こうで会った時にリムがそうつけたからな」

「へえ」

「それより・・・明日からどうするんだ？学校・・・あるし」

「あつ。どうしょっか」

「ジャック。その辺の事、どうにかできないのかよ？」

「できなくはないが・・・名字だけは変えろ」

そっか。海斗はこの世界では死んでんだもんな。

「神木でよくね？」

うわあ。たまに出る陸斗の適当な考え。

「いいだろ？海斗」

「まあ」

「んじゃあそれでいじつとくよ。それより・・・レイさん」

「何だい？」

「決まったよ。緊急のキングとクイーンが」

「誰になったんだい？」

「あんたとリラさんだ」

「あの人が・・・！！じゃあ僕等はもう行くよ。ジョーカーもいいかい？」

「構わない」

「じゃあまたね。ワインによろしく」

「はいはい」

レイさん達は帰って行った。

「さて・・・オレも帰るかな」

「待って」

海斗が言った。

「ん？」

「俺は・・・陸斗の兄の神原海斗だ。よろしく」

「・・・へへ。よろしく」

やっぱ陸斗と似てるな。オレは陸斗の家を去った。

？

次の日、陸斗は夢を見たと言った。それは幼いころの海斗との思い出。普通の保育園生だった事を知った。一つだけ鮮明にオレが覚えていた話があった。それは陸斗と海斗が四歳の頃だった。彼等は母親の迎えが遅かったため保育園の中で待っていた。待っていた時、ある約束をした。それは“何があってもお互いが来るのを待つ”という約束。海斗はちゃんと守ったのに・・・陸斗の奴は覚えてない上に破ったんだから最低な男だ。ついでに言う和海斗はオレ等と同じ高校、同じクラスになった。すごいよな。ジャックの奴。

海斗は神木海斗としてこの世界に生きる事になった。

さあ一日が終わる。闇と光という一日が。そしてまた始まる新たな一日。栄光の明日。絶望の明日。どんな明日が来ようとそれはあ

あなたの人生の中の一日にすぎない。一日はただのあなたを作るページの一つでしかない。あなたという本のページでしかない。いつまでも過ぎ去った日々に取り付いてもしょうがない。そんな子がいたら、あなたは何て言って手を差し伸べる？

それじゃあ新たな一日の始まりを共に祝おうじゃないか。新たな始まりとして・・・。

? K・ エピローグ 光の始まり2 (後書き)

こんにちわ^^*来図*です。今回の二章はちよつと急ぎ足になってしまいました。これにて神原兄弟編はおしまいです。いやゝ雑になっちゃいましたね。付けたししてほしいとかあったらください。『説明書』とかの方で書きますので……。それでは三章の予告。三章では度々出てきた女の子、千代を中心とした物語です。彼女にはどんな過去があり、彼女は一体、何に縛られているのか……。それを書こうと思っているのでお楽しみ。それでは^^

0. プロローグ

それはある秋の日の事だった。木々は様々な色になり、きれいに散る。そんな季節だった。あたしの住むアパートにあった紅葉がまさしくそれだった。あたしの部屋はそんなに広くはない。ベッドに机、ちょっとした本棚。それだけがほとんどのスペースを奪っていた。そんな部屋に夥しいほどの血が流れていた。ああ。あたしの所為だ。あたしのせいで・・・早代はこの道を選んでしまった。あたしが殺したも同然だ。ああ。あたしは罪深い女だ。だから今のあたしには何も残っていない。家族も何もかも。あたしがそうさせた。あたしが持っていた幸せはあの子の幸せを犠牲にした上で成り立っていた。あたしはなんて贅沢だったんだろう。その所為で・・・結局、あたしはお父さんを失くした。妹を失くした。今のあたしには何も残ってなんかない。そう何も・・・。

? A. 学校

?

今は11月の第二週目。桜花高校では文化祭に向けて着々と準備が進められていた。オレ等のクラスでは喫茶店をする事になった。今はロングホームルームでそのメニューを決めている。

「メニューはどういたしますか？何か案のある人、挙手をお願いします」

フーが元気よく言う。つか・・・いっその事、陸斗んちの拓人さんに頼めば作ってくれそうだけどな。拓人さんは喫茶店を経営している訳だし。すんげえおいしいし。そんな事を考えていると珍しく陸斗が手を上げた。

「はい。神原君」

「俺の兄貴が喫茶店をやってるんで頼めばケーキとか作って貰えるのでどうですか？」

うわぁお。オレと同じ事、思ってた。

「それは本当ですか？」

「はい」

「じゃあそれで行きましょう。神原君、よろしくお願いします」

「はい」

陸斗は座った。

「じゃあ次に神原君にお願いする上でお兄さんに作って貰いたいケーキなどがあったらお願いします」

その議題に対して、様々な意見が出た。ショートケーキ、チョコレートケーキ、チーズケーキ、ミルフィーユ、タルト、パイ、バームクーフェン、クッキー、パフェなどが出てきた。

「うわぁ。拓人さんだけで足りるか？人手」

「姉貴と美麗姉にも頼むわ」

「総出だな」

「大丈夫そうですね？ 神原君」

「大丈夫だと思います」

「わかりました。では次に飲み物ですが何かありますか」

その議題にも様々な意見が出た。コーヒー、ホットミルク、ココア、オレンジジュース、レモンスカッシュ、炭酸飲料水、カルピスなどが出た。

「コーヒーの方はいくつかバリエーションがあった方がいいでしょう。何か意見はありますか」

「はい」

「中平君」

「ブラック」

「ブラックと。他には？」

「はい」

「神原君」

「カフェラテ」

「カフェラテと。他は？」

「はい」

「神木君」

「カフェモカ」

「カフェモカ。他？」

手を上げる者はいなかった。

「では以上でいいですね？」

拍手で答える。

「では決まりです。それと衣装の方ですが被服部の協力で一着目が完成しました。モデルとなっている愛美さんが今、試着中なのでちよっと待っててください」

千代は立候補でモデルになった訳ではなく、推薦で選ばれた。推薦したのはオレじゃないけど。千代が照れながら入って来た。クラス男子共がうるさく茶化す。口笛を吹く者、雄叫びみたいな奇声を上げる者。まったく千代の人気ぶりはすごいな。陸斗は・・・あ

あ。見惚れちゃってら。制服はごく一般的なメイド服。黒と白がたくさん使われている。

「女子はこんな感じです。男子はまだ作成中との事です。女子はあとで、スリーサイズなどを書いて被服部の桜木さんに渡してください。それでは先生、最後にお願ひします」

後ろの方で見守っていた担任が立つ。担任は北村正志。科目は国語の古典。かなりの放任主義の上、やる気がない。だがやる時はやる先生だ。

「えーと・・・とりあえず愛美がかわいって事だな」
ついでにスケベだ。

「じゃあみんな・・・頑張れよ」

これで子供がいる。奥さんもいる。しかも二人共、結構若い。まあ三十代だけだな。

「じゃあ本日はこれにて終了です。みなさん、頑張りましたよ」

そして放課後。文化祭への用意が近い所為か今日はどの部活も休みとなっている。まあ今月末にある訳だから時間もないよな。

「あゝあ。本当に最近までの事が信じらんねえよな」

「だな。あれ以降・・・何もないからな」

「つか、本当に大丈夫かよ？」

「なんなら今日、一緒に頼みに行くか？」

「まあいいけど」

オレ等、三人は陸斗の家に向かった。

家に着くと珍しく、拓人さんがいた。

「兄貴」

「ん？」

「文化祭の事で頼みたい事があるんだけど・・・」

陸斗が話す。海斗も一緒になって話した。

「いいぞ。愛理と美麗にも手伝ってもらおう。あと数人ぐらい人手が欲しいからそっちで頼んでくれ」

「わかった。ありがとう。兄貴」

？

「まだ目覚めないのか。スピードとクローバーは揃ったのに」
ジャックがリムに話しかける。

「しょうがないよ。当の本人はまだ気がついていないんだから」

「じゃあ・・・どうやって気がつかせるか？」

「あたしが手伝おうか？」

その場にいたハルトが言った。

「いいのか？」

「忙しいんでしょ？」

「まあ」

「あたし、暇だからやるよ」

「わかった。んじゃあ頼む」

「うん」

ハルトは現^{うつ}の苑に向かった。

？

次の日。今はちょうど昼休みの時間だ。オレ等、三人は屋上にいた。

「いただきます」

おふくろの作ってくれたお弁当。かぁー！やっぱうめー。にして・・・

・海斗と陸斗もお弁当。ここ最近ずっと弁当だよな。しかも色違いの弁当箱って。さすが双子。

「あゝあ。平和だ」

「何回目だよ？その台詞^{せりふ}」

「だってよく、こんなふうにメシを食えんだもん。なんか・・・よくね？」

「まあたしかにな」

陸斗が納得したかのように言う。

「けどわからないよ。もしかしたら・・・ジャックとかが急に来たりして」

海斗が意味深に言った。オレと陸斗は口を揃えて言う。

「「ないない」」

そんな事があつたらそれはそれでいやだな。また何か押しつけるに決まってる。

「ふーん。おいしそうじゃん」

耳元で誰かが囁いた。

「うわあああああああ!!」

囁かれた耳の方を見るとハルトがいた。うわあ。海斗の予想当たっちゃったよ。

「な、何しに来たんだよ!? ハルト」

「暇つぶしってのは冗談で・・・あんたら、最近・・・何もないの?」

「あ? ねえよ」

「そっか」

「で何しに来たわけ?」

「スピードとクロバーが揃ったじゃない?」

「ああ。確かにな」

「トランプのスートにはあと何と何がある?」

「ハートとダイヤ」

「そう。その二つについて調べに来たの」

「じゃあエースはあと二人いんのか?」

「そういう事」

「一体誰が・・・」

「だからあたしも・・・この学校に通う事にしましたー!!」

ん? はあああああああああああああああああ!!? ハルトが学校に通う??? おい。待てよ。いいのか? こんな露出度の高い女が女に飢えてるこの学校に通って。まあ女子は普通にいるから男子校までとはいかないが・・・ハルトは違うからな。男なら誰だ

って目が行くそのナイスバディ。あゝあ。この学校の全男子生徒。
お疲れ様でしただな。オレ等三人以外。

「おいおい。ちゃんと制服は着るんだろうな？」

「もちろんだよ。陸斗。着ないと思ったの？」

「いやゝ。サイズがあるのかなあと・・・」

「失礼ね。もう用意してあるし」

「あっそう。んでどのクラスに入る訳？」

「あんた等の隣のクラス」

「へえ」

BかDのクラスの男子・・・ご愁傷様です。未来だけどな。

次の日。ハルトはBクラスに入った。Bクラスの男子共・・・
ドンマイ。昼休みに屋上でって言われたけど・・・今日はパスした
いなあ。だって一緒に食べようって千代に誘われた。オレは断りた
かったけど・・・陸斗の熱い視線の所為で断れなかった。あいつ・・・
・最近変な技を覚えたよな。言ってくれるのならまだしも無口に
ただ見つめて来る。怖い上に妙に訴えかけて来る。海斗が来てから
だな。まあ・・・あん頃よりはいい感じになったな。お昼になり嬉
しそうな二人。オレは全然・・・嬉しくねえよ。

「俺・・・気持ち、わかるよ。賢」

「海斗!!」

うるうるした顔で海斗を見た。少し困った顔を海斗はした。

屋上に着くとハルトがいた。ハルトはこっちでは平理波留と名乗
っている。

「遅かったじゃん」

「ああ」

「ん？もしかして・・・Bクラスに来た転校生？」

「そうだけど・・・」

「あたし愛美・・・千代って言います」

「そう。あたしは平理・・・」

「嘘を言わないで欲しいな」

それにあの子……何か……見えない何かに縛られているような気がする」

初対面のはずなのにそこまで見抜いてるのか。……あいつもまだ引きずってんだな。あの日の事を。あれからもうすぐ三年も経つていうんに。

「んでどうするんだよ？」

「待つしかないでしょ」

「まあ……そうだけど」

「こればかりは……あたし等じゃどうする事もできないし」
だよね。あいつの心の問題だしな。

「ハートのエースって何だ？」

「スピードが闇、クロバーが光。ダイヤが水、ハートは炎。そう向こうでは言われてる。だからハートのエースは炎の騎士とも呼ばれてる」

「へえ。じゃあダイヤのエースは水の騎士？」

「そういう事。あたしも元ジャックだからこういう魂を見分ける力は持ってるし」

「じゃあ千代も……オレ等と同じ魂？」

「そういう事」

「はあ。結局……巻き込んだままだったな」

「詳しく……話してないにしろ話した事は話したんでしょ？」

「ああ。あいつだけは……巻き込ませなくなかったんだけどな」

「ねえ……千代とあんたってただの幼馴染なんだよね？」

「ああ」

「何もないの？恋愛感情とか……」

「ねえよ。悪いけど……少なくともオレだけはこれっぽっちもな」

「冷たいんだねえ。あんた」

「……ふん」

「まあ……いいけど……。あの子って日本人だよな？」

「ああ。日本人だよ」

まああの髪色を見たら初対面の奴なら大体は疑うからな。外国人いや欧米人みたいなきれいな金髪だもんな。

「地毛？」

「ああ。地毛だよ」

「ハーフなの？」

「ああ。父親が日本人で母親はアメリカ人だよ」

まあ気になるよな。地毛があの色じゃ生粋の日本人の血を引く奴等からは絶対に現れないもんな。

「家族はいるの？」

「海斗が来る前の陸斗と同じで同じ血を引く家族は誰もいねえよ。あいつ、今はアパートで独り暮らしだし」

「いないってどういう事？」

「四年前ぐらいに・・・千代の親父さんは病気で死んだ。母親も病死だ」

「へえ。会った事は？」

「・・・ない。オレがあいつと知り合った時にはすでに親父さん・・・竜次さんと二人暮らしだったから」

「ふーん」

「つか元ジャックならそれぐらい知ってると思ったんだけどな」

「知ってる訳ないじゃん。だってあたしが現役だった頃に運んだ訳じゃないし」

「ん？って事は・・・お前、現役を離れて何年ぐらい経つんだよ？」

「60年近くは経つかない・・・」

半世紀も経ってんのかよ。

「・・・あいつが死んで半世紀経つのか」

あつ。ロストになった。

「あいつ？」

「ん？何でもない」

戻った・・・？いや戻ってないな。

「ロスト？」

「!!何だ。気がついてたのかよ。お前だけは誤魔化せないな」

「・・・何か辛い事があったら相談しろよ。聞くだけ聞くから」

「・・・ありがとな。けどそれはお前もだぜ。賢」

「え？」

「・・・オレなら大丈夫だよ。だから心配すんなって」

苦笑うロスト。ああ。黒髪でしかも位置は違えどポニーテールをしている所為かやっぱり似てるな。あいつに。あいつがする笑顔と同じだ。まあオレはそいつの事が好きだった訳でもなかったけど・・・すんげえ覚えてる。オレも陸斗も千代も忘れる事ができないあいつの顔。

「悪いな。こんな暗い話ばっかさせて」

「いや別にいいけど」

「んじゃあまた」

ロストはオレの部屋を出た。

「はあ」

溜息を吐いてからオレは立ち上がった。

『グラ』

あつ。また立ちくらみだ。最近・・・多くなったな。何か頭も重いし。体も・・・重い。大丈夫だよと言いついて聞かせてオレは風呂に入りに行った。

? 2. 炎の傷跡 1

?

「賢ちゃん!! ごはんよ!! 賢ちゃん!!」

今は朝の七時。

「おかしいわね。いつもならもう起きてるのに。ハルトちゃん」

「何ですか? おばさん」

「もう。あやめでいいって言ったんでしょ」

「はい。あやめさん」

「よろしい。賢ちゃんを起こしてきてくれる?」

「わかりました」

ハルトは言われた通りに部屋に言った。

「本当・・・どうしたのかしらね?」

「ああ」

あやめと勝一は心配しながら朝食をとる。

「賢」

蓮はただそれだけ呟いた。

ハルトがオレの部屋に着く。この頃、オレはまだベッドの中だった。

「賢? 朝だよ! ごはんの時間だよ」

ハルトが呼びかけて起きない。ハルトはオレの体を揺すり始めた。

「賢!! 朝だよ。起きて!!」

それでも起きない。ハルトはおでこに一応、手を当てた。そしてオレのおでこにも手を当てた。

「すごい熱!! あやめさん!!」

ハルトは急いでおふくろの所に行った。

「どうしたの? ハルトちゃん」

「体温計ありますか?」

「あるけど・・・賢ちゃんに何かあったの?」

「賢、すごい熱を出しちゃって」

「え!?!」

あやめは冷えピタシートと体温計を持ってオレの部屋に急いで行く。
ハルトもそれに続いた。

「賢ちゃん!!」

ハルトは今よく顔色を見れば真っ青である事に気がついた。

おふくろの声が聞こえる。今・・・何時なんだろう。オレはうつすらと目を開けた。

「あっ!賢ちゃん!!起きあがれそう?」

「うん」

重い体をゆっくりと持ち上げた。渡された体温計を脇に差しこんだ。
目の前がボーっと滲んでる。おふくろやハルトの顔が見えない。

『ピピピッ。ピピピッ』

体温計が鳴り響く。オレはおふくろに体温計を渡した。

「39℃!!こんなに熱があるんじゃないわね」

「でも・・・今は・・・」

「文化祭の準備とかあるだろうけどダメなものはダメ!!今日はおとなしく寝てなさい」

「わかった」

「十時くらいになったら一応、病院行きましょう」

「え?おふくろの運転で?」

「もちろん」

笑顔で言う。それだけは勘弁してくれ。おふくろは何で免許を取れたんだろうって疑問を持つほど運転が下手なのだ。

「オレが連れてくよ」

兄貴が部屋に来た。

「今日は授業ないし」

よかった。兄貴なら運転は上手いから。

「そう。あっ。賢ちゃん、お腹空いてる?」

「・・・今は食欲ない」

「そっか。一応、お粥作るわね」

「ありがとう」

「さあ寝てなさい。学校の方には私が連絡しとくから」

「わかった」

冷えピタシートをおでこに張られ、オレはベッドに横になった。

「じゃああたしは学校に行くね」

「ああ。行って・・・」

オレは寝てしまう。ハルトは学校に行った。

？

学校はいつも通りだった。

「あっ！おはよう。神原君、神木君」

「はよ。愛美」

「おはよう。千代」

「ねえ、賢ちゃん、朝練に来た？」

「いや。来てねえよ」

「そっか」

「ん？学校にまだ来てねえのか？あいつ」

「うん。教室じゃあ見てないよ」

「どうしたんだろ。いつもなら・・・もういる時間なんに」

不安げな顔をする三人。そこに担任の北村先生が入って来た。

「今日は・・・中平が欠席だ」

クラスがざわつく。

「理由は？」

「発熱だ。中平以外はみんないるな。くれぐれも風邪には注意しろよ」

クラスのみんなが心配そうにあいた席を見守る。

「じゃあ1時限目の用意をしろ。じゃあショートホームルーム終わり」

北村先生が外を出る。

「賢ちゃん」

「あ、愛美」

「何？神原君」

「放課後、俺等と一緒に・・・お見舞いにいかないか？」

「うん」

嬉しそうに答えた。

病院に行き、風邪だと診断された。とりあえず、おふくろが作ったお粥を食べて薬を飲んだ。今はベッドの中だ。兄貴が近くにいて。最近、兄貴と話してないから気が重いなあ。まあ今、話す気力もないけどな。

「賢」

うわあ。話しかけてきやがった。

「何？」

「寒くないか？」

「大丈夫だよ」

「そっか」

沈黙。あゝあ。重い。最近の兄貴、わかんねえんだよな。話しかけても無視するし。

「なあ。賢」

「ん？」

「オレに・・・話し難い事でもあんのか？」

「・・・そんなもん別に・・・」

「いや。絶対にある」

やっぱ兄貴はすげえや。オレの事・・・わかるんだもんな。

「・・・兄貴」

「何だ？」

「聞いてたんだろ？親父との話」

「ああ。聞いてた」

「オレもあの時、知ったから」

「いや、お前が言わなかったのはいいさ。ただ・・・一人で辛い事、抱え込むなよ。お前はいつもそうなんだから」

「んな事ねえって」

「そうかよ。それにしても・・・ずっと言いたかったんだけどよ」
「何？」

「ハルトってすごい体してね？」

「・・・このエロ兄貴。まあしょうがないよな。」

「それかよ」

「だってよく。あの豊満な胸にキュッて引き締まったウエスト。きれいな腕と足。あんな体つきした美女に惚れない男はいないだろう！」

うん。兄貴の言いたい事すんげえわかる。主観的な意味じゃなくな。オレ、ハルトみたいな女の体はタイプじゃねえし。だからってぽっちゃりが好きな訳でもないけど。

「兄貴らしい・・・よ」

「賢」

眠ってしまったオレを見る兄貴。

「氷枕・・・換えて来るか」

兄貴は優しくオレの頭を持ち上げ、氷枕を抜き、頭を置く。兄貴は部屋を出た。

「おふくろ」

「何？蓮ちゃん」

「氷枕って何処にあるんだよ？」

「冷凍庫の中にあると思うわ」

「わかった」

兄貴は氷枕を冷凍庫の中から見つけ、賢の所に置きに行った。ついでに体温計も持っていく。

「賢」

「ん？何？」

「体温測るから起きろ」

「わかった」

オレは起き上がり、兄貴から体温計を受け取る。オレが朝と同じように体温計を脇に入れてる間に氷枕を置く。

『ピピピッ。ピピピッ』

体温計になる。オレはそれを兄貴に渡した。

「変わんねえか。とりあえず寝とけ」

「うん」

オレはまたベッドに横になった。

『ピンポーン』

インターホンになる。誰か来たのだろうか。

「オレが見に行くよ」

兄貴は急いで玄関の方に行った。それから少し経つと騒がしい声が聞こえた。この声・・・陸斗達だ。来てくれたんだ。そうか。もう放課後の時間か。陸斗達が部屋に入って来た。陸斗に千代、海斗だった。

「賢、大丈夫か？」

「ああ」

「大丈夫じゃあねえだろ。なあ愛美？」

「うん。あたしにもそう見える」

「そうかよ」

「・・・無理してたのか？最近」

「そんな事はねえけど・・・」

「ならいいけど・・・。あつ。これ」

陸斗がノートを差し出してきた。

「今日の授業の奴」

「ありがとう」

オレはそれを受け取った。

「賢ちゃん、明日・・・学校、来れそう？」

「明日になんないとわかんないなあ」

「そっか」

陸斗が切なそうに見る。

「ねえ・・・賢ちゃん」

「ん？」

「元気になったら・・・」

「オレはいかない」

「何で!？」

「前にも言っただろ? その思いを持ったままのお前となんか行きたくない」

「でも!! もうすぐ・・・あの日なんだよ!？」

「あの日、あの日ってお前はいつまで過去の思いにしがみついている気だ? いい加減、前を見ろよ!! そんなんだからあの頃から何一つ変わらないんだよ。過去ばっかみてないで先を見ろよ!!」

息が切れる。ダメだ。視界が・・・。

「おい!! 賢」

オレは倒れ込んだ。

「賢ちゃん!!」

千代はオレを少し見てから部屋を飛び出した。

「愛美!!」

陸斗がオレを見た。

「どうしてあんな事を言ったんだよ!! おい! 賢」

「陸斗!! 病人をそんな乱暴に扱ったら・・・」

「・・・ん？」

間の悪い時に目を覚ました。

「な、何だよ? 陸斗」

「愛美に何て事言うんだ!? あいつ・・・あいつ、泣いてたぞ」

「泣いてたって・・・あいつ。オレじゃあ・・・あいつの思いには答えてやれないんだよ」

「だからって八つ当たりみたいにな・・・」

「こうでもしないと・・・あいつは立ち直れないさ!! オレはずっとこれまで言い続けてきた。それでも・・・はあ、はあ、はあ」

「賢! 陸斗! いくらなんでも・・・」

「ただいま」

ハルトが帰って来た。オレの部屋に来た。

「賢、さっき千代を見かけたけど・・・」

「何!？」

陸斗は立ちあがった。

「お前はいいのかよ!？」

「ああ」

「・・・くそ!!」

陸斗が急いでオレの部屋を出た。

「何かあったの？」

「・・・何でもねえよ」

「ん? 賢、ちよつと体温計」

「さっきも測ったよ」

「いいから」

オレは言われた通りにする。そしてまた体温計の音が鳴り響いた。

オレはそれをハルトに渡した。

「39℃4分!! あがってる。賢!! もう、あんたは寝てなさい」

「わかった」

言われた通りにした。ああ。頭が沸騰する。くらくらする。さっきよりも寒気がする。

「にしても・・・何処行っただ? 千代」

「たぶん・・・はあ、はあ。霊園に行っただと思う」

「何で・・・わかるの？」

「・・・あいつの命日が近いんだ。千代にとってもオレにとっても忘れられないあいつの・・・」

オレはまた眠ってしまう。

「陸斗もそこに向かったのかな？」

「たぶん。海斗」

「ん?」

「賢の代わりに陸斗を追いかけてくれる？」

「わかった」

海斗は陸斗を追いかけて行った。

「……」

？

雨が降って来た。傘がないから雨が当たる。冷たい。愛美が行った場所。たぶんあそこに違いない。目的に着くと確かにそこには愛美がいた。

「やっぱりここにいたか。愛美」

「神原君」

愛美はこの雨の所為かびしょびしょに濡れていた。

「……結局、賢ちゃんの言う通りなんだよね。あたしはあの頃から何も変わってない上にこうしてしがみついても……」

「愛美……」

「あたしは……あの頃から……」

あの日もこんな感じの雨の日だった。

？

千代は一度も母親に会った事がなかった。たぶん、会いに行こうとしたら会いに行けただろう。だが父親である竜次もいる場所は知らないって言っていた。千代はハーフだ。日本人とアメリカ人のだ。髪の色は母から目の色は父から貰った色だった。そんな彼女と賢が出会ったのは保育園生の時だった。同じ日に入園した。その日は父親の竜次と一緒にいた。

「どうも」

「あっ！確かあなたは向かいのアパートに住んでる……」

「愛美です。中平さん」

「あやめでいいわ。竜次さん」

「あやめさん、これからよろしく願います」

「ええ。こちらこそ。娘さんの名前は？」

「千代です」

「かわいい名前ね。息子は賢っていうんです」

「賢だ。よろしくね」

「千代です」

千代はもじもじしていた。

「ほら、照れないで」

賢は手を差し出した。照れながら千代はその手を握った。それから彼等は仲良くなった。千代は“賢ちゃん”と呼ぶそんな仲になった。それから月日は経ち、中学校一年生の春だった。その時、賢と千代は同じクラスだった。一年三組。入学式の時だった。その日、竜次は仕事で来てはいなかった。その時、噂が流れていた。帰国子女がこの学校に来る。オレ等はわくわくした。どんな子が海外から来るのだろう。かわいい子かな？それともカッコいい子かな？そんな期待がみんなの中にあった。入学式の最中に発表された。ちよつと太った校長先生から。

「この日、みんなの仲間になる海外からのお友達を紹介しよう。さあ壇上へ」

「はい」

声が高かった。女の子かな？

「アメリカからやって来た、愛美早代さんだ」

「愛美早代です。これからみなさんと一緒に勉学に励みたいと思っていますのでよろしく願います」

「愛美さんは一年三組に入る。この学校の仲間としてあたたかく迎えて欲しい」

校長先生の話をぼんやり聞いていた賢は千代と同じ名字なんだとそういうふうにはか思っていなかった。

教室に帰った賢達はもう一度、担任から転校生である愛美早代を

紹介した。きれいな黒髪に青い瞳だった。ポニーテールをしてる。それなりに長い髪の毛だった。壇上が遠かったからあまり顔が見えていなかったがここで見るとはつきりとわかる。似てる。いや瓜二つと言っても過言じゃないくらい千代と早代は似ていた。髪の色や目の色が違うから見分けがつくが同じ色だったらどっちが千代なのか早代なのか判別できないくらい似ていた。

「愛美早代です。よろしくお願いします」

早代は礼をする。

「愛美は・・・いや愛美は二人いるから下の名前で呼ぶが構わないか？」

「はい。二人・・・いるんですか？」

「ああ。お前と千代だ」

「千代？」

早代は千代と視線が合う。この時、賢も千代も思っただろう。この子には何かがあると。

「席は・・・千代の近くだ。千代」

「は、はい」

千代はあわてて立つ。早代はその方向へ向かった。そしてあいている席に座った。

「千代、もう座っていいぞ」

「は、はい」

千代は座った。

「あなたが・・・愛美千代？」

「うん。そうだけど・・・」

「会わせてくれない？あなたのお父さんと」
「え」

? 3. 炎の傷跡2

?

放課後、千代は早代をアパートに連れて行った。賢と陸斗も一緒に行った。竜次はまだ帰って来ていなかった。早代は写真立てを見つけた。

「これが・・・千代のお父さんの顔？」

「そうだよ」

早代はその写真を食い入るように見ていた。

「目が青いんだね。ハーフ？」

「そうだよ。あなたも？」

「何で？」

「だって日本人じゃあその髪色は染めない限りいないでしょ？」

「そうだよね。うん。あたしもハーフだよ」

遠くからドアが開く音がした。竜次が帰って来た。

「ただいま」

千代が走って竜次の方に行く。

「お帰り」

「誰か・・・来ているのかい？」

「うん。賢ちゃん達が」

「お邪魔しています」

賢が自分の分と陸斗の分を言った。

「ゆっくりしてね」

竜次は早代がいるリビングに行った。そこで竜次と早代が対面する。

竜次はあまりの衝撃にかばんを落としてしまう。

「さ、早代」

竜次はまだ出会ったばかりの早代の名前を知っていたのだ。

「はい」

早代は竜次の方へと向き直す。

「あなたに会いに来ました。お父さん」

千代も賢も陸斗も衝撃的な事実を知った。竜次の子供が千代以外にもう一人いたという事実。

「お父さんって」

竜次は千代の方を向いた。

「千代にはまだ話してなかったね。まさか、僕もこんな形で再会できるなんて思っていなかった」

竜次は早代の方に行く。

「早代はお前の双子の妹だ」

「双子？」

「生き別れのね。僕はある一人のアメリカ人の女性と交際していたんだ」

それは千代が生まれる5年前の事だった。千代と早代の母親であるメアリー・ロウは竜次が通う大学の留学生としてやってきた。竜次はそんな彼女を見て一目惚れをした。最初のうちは相手にもしてくれなかった。だが月日を重ねていくうちにメアリーも竜次が好きになっていった。交際4年目の事だった。竜次はアメリカに渡り、メアリーの両親に結婚の許可を貰いに行った。メアリーの方は承諾を得る事ができた。しかし竜次の方はというと竜次は両親にアメリカ人の女性と付き合っていた事を今まで黙っていた。その上、竜次は家の跡取り息子つまり長男だった。両親にはいろいろときつく言われてた事がたたあつた。日本人の女性で才色兼備、それなりのお金持ちで、竜次の両親とも住む覚悟がある者となら結婚を許すと。だからアメリカ人など言語道断だった。それでも竜次は頼みに行つた。結果は見えていた。負け戦になるそれを承知の上で行つた。答えはノー。それを聞いて竜次は決心した。駆け落ち。それしか道はない。竜次はメアリーと共にアメリカに渡つた。それからは幸せな日々だった。子供も二人授かり、二人は仲良く暮らしていた。だがそれも一年しかもたなかった。一年後、竜次の両親がアメリカに渡り、二人の仲を引き裂いた。その時、竜次は必死の思いで両親に両

親に懇願した。子供を一人だけ引き取らせてくれと。そうすればおとなしく日本に帰ると。両親はそれを承諾し、子供を一人、引き取った。

「それが千代・・・お前だ」

「あた・・・し？」

「そうだ。早代はメアリーが引き取った」

会いに行けなかったんじゃない。行く事ができなかったという事を千代は知った。

「その後、僕は家を出た。家にいるのが嫌になってね。それから十二年間・・・お前を育ててきた。メアリーの事、早代の事を今まで黙っていてごめん」

「お父さん」

「それで・・・早代はどうして・・・ここに？」

「あなたに・・・お母さんから遺言を預かって来ました」

「遺言？まさか・・・！！」

「“最後に会う事ができなくてごめんなさい。愛しているわ”と」

「そうか・・・。それで早代は遙々来たんだね？」

「うん」

「メアリーはいつ亡くなったのかな？」

「2ヶ月前、病気で・・・」

「それで・・・誰から聞いたんだい？」

「おばあちゃん達から聞いたの。お父さんに会いたって言うたら日本にいるってだから来たの。これ・・・おばあちゃんから」

竜次はその手紙を受け取った。そこには英語でこう綴られていた。

“ 竜次へ。

娘の事は誠に申し訳ありません。あなたを苦しめる事となってしまつて。孫の早代の事です。あなたがあなたさえよければ一緒に住んであげる事はできないでしょうか。娘は病と闘っている間、ずっと早代にあなたに会わせてあげたいと切に願っていました。そしてできれば家族四人で一緒に住みたいと。ですからどうかお願いします。早代と一

緒に住んでやってください。お願いします。

キャサリン・ロウより。”

「キャサリンさん」

竜次は涙をこぼす。

「お父さん」

千代は竜次に駆け寄った。

「千代・・・構わないかい？」

「あたしはいいよ」

「ありがとう。千代。一緒に住もう。早代」

「ありがとう。お父さん。早代」

三人は抱き合った。涙をこぼしながら奇跡と言ってもいいぐらいの再会を。だがこれははじまりにすぎなかった。これから起こる。不幸な話のたった一つの幸せな序章にすぎなかった。

？

月日は流れ中学校二年生。賢と千代、早代はまた同じクラスになった。陸斗も同じクラスにだった。早代は帰国子女という事もあつてか英語がずば抜けて得意だった。だからその代わり国語の古典が苦手だった。だからいつも賢か千代に教わっていた。部活はテニス部。二人はとても仲のいい姉妹だった。そんな二人にも悩みがあった。それは竜次の体調が悪い事だった。竜次は元々、体が弱かった。だがここ数年は大きな病気になる事もなかった。竜次は最近仕事漬けの日々が続いていた。千代達と生活をするためだった。千代達は竜次の給料と国から貰える少しばかりのお金で生活していた。早代が来る前から裕福な生活ではなかった。どちらかというと貧乏な部類だった。早代が来て前よりも生活が困難になった。だから仕事時間を増やし、休みを返上して働いていた。千代と早代はそんな日々を送っている竜次の事を心配していた。そんな日々の夏の事だった。

その時は夏休みで千代と早代、陸斗は賢達の家族と一緒に海に遊びに行った。千代と早代の水着はかわいかった。千代と早代はこの日のためにお金を貯めて、おそろいのビキニを買ったのだ。二人の顔は嬉しそうだった。賢達はいろんな遊びをした。ビーチバレーに泳ぎの競争、そのまま水のかけ合い。四人は楽しそうだった。その時だった。あやめの携帯に電話が入った。あやめはその電話に出る。要件を聞いた後、電話を急いで切る。携帯を勝一に預け、あやめは賢達の所に来た。

「千代ちゃん、早代ちゃん」

「何？あやめさん」

「竜次さんが仕事場で倒れて病院に運ばれたってさっき連絡が入ったわ」

「え」

「だから今すぐに向かいましょう。勝一さんが送ってくれるわ」

「あやめさん達は？」

「一緒に行くわ」

賢達は急いで桜花市に向かった。

病院に着き竜次の病室に入る。

「「お父さん!!」」

千代と早代が静かに眠る竜次の所へ行く。担当医が来た。

「御家族ですか？」とあやめに話しかけた。あやめは毅然と答えた。

「いいえ。私達は違います。でも・・・娘が二人」

あやめは手で千代達を指した。

「そうですか。ご両親と連絡はとれますか？」

「・・・わかりませんが・・・やってみます」

「お願いします」

あやめは病院にある公衆電話を探しに行った。

「俺も行く」

勝一もあやめのあとを追った。それを見送って担当医は病室に入った。

「ちょっといいかな？」

「何ですか？」

「大事な話があるからこっちに來てもらえるかな？」

「わかりました」

千代と早代は担当医について行つた。担当医は蓮を見た。

「ここをお願いしてもいいかな？」

「わかりました」

賢達は竜次の病室に入つた。

別室に着くと「どうぞ」と担当医は千代達に席に座るように促す。それを受けて千代達は席に座つた。

「お父さんの事ですすが非常に危険な状態です。一週間もつかもたないか・・・それぐらい危険な状態なんです」

「そんな！！助けてください！！！」

早代が担当医にすぎる。けど担当医は何も言わなかつた。

「助けてください！！あたし達のたつた一人のお父さんなんです。やっと会えたんです。助けてください！！やっと一緒に生活できたんです。助けてよ！助けてよ！！先生！！！」

早代は担当医に涙をこぼしながら訴えた。それでも担当医は何も言わなかつた。その時、千代はただ黙つていた。千代はこの時少なからずわかつていたのかもしれない。もう・・・一緒にいられないという事が。

その時、あやめは電話をかけていた。電話番号は勝一が探してくれた。幸いにも竜次の両親はこの町に住んでいた。

『プルルル、プルルル』

『はい。愛美です』

『愛美さんですか？はじめまして。中平です。息子さんとは良いご近所付き合ひをさせていただいています』

『あら・・・それはそれは・・・で何のご要件で？』

『息子さんが仕事場で倒れて今、病院にいます。今すぐ來ていただけますか？』

『えー!! わかりました。すぐ向かいます』

電話が切れた。

「あやめ・・・。行こう」

「ええ」

あやめと勝一は外に出た。

「あなた」

「わしはいかん」

「でも・・・」

「行きたいのならお前一人で行け」

「わかりました」

母は家を出た。あの時から嫌いになっていた。父も竜次も互いの事を。

母が病院に着くとあやめと勝一が竜次のいる病室へと案内した。

病室に着くと千代達もそこにいた。母は病室に入る。賢達はあやめ達が来たのを見て、あやめ達の方へと行く。

「では私達はこれで」

あやめ達は帰って行った。

「竜次」

母は竜次の姿を見て涙をこぼす。

「あなた達が・・・竜次の子供ね」

「はい。愛美千代です。それで・・・こっちは・・・」

「あたしは言わない!! だってあんたは・・・あんた達はお父さんとお母さんをバラバラにした。あたしと千代も。あんた達の所為であたし達の人生は滅茶苦茶にした!! そんな事をした奴等にあたしの名前なんか呼んで欲しくない!!」

早代は母をその青い目で睨みつけた。その目には憎しみの思いであふれていた。千代は短く「ごめんなさい」と言った。千代も早代と同じ思いだった。だがあたしまで取り乱すわけにはいかないそう思っ
て、千代は憎き相手でありながら気丈に振る舞った。

「いいのよ。・・・謝って許される事ではないけど・・・ごめんな

さい。そしてあなた達に会えて嬉しいわ」

笑顔で母は言った。

「・・・ん。ん？」

「竜次！！」

竜次が目を覚ましたのだ。

「母さん・・・父さんは？」

「来てないわ」

「そうか。千代、早代」

「「何？」」

「お前達に会えてよかった」

「そんな死ぬみたいな事言わないでよ！これからたくさん思い出を作ろうよ。海に、ハイキングに、遊園地に、卒業式、入学式、成人式、結婚式。見せたいものだってたくさんある！卒業書に成人式の晴れ姿、結婚式のウェディングドレス、あたし達の子供を。だからそんな事言わないで！！お父さん！！」

早代は涙をこぼしながら言う。

「早代・・・」

抱きしめてあげたかっただろう。だが竜次にそんな力はなかった。ただ伝えられるこの事だけを話す。それぐらいの力しか残っていなかった。

「千代。ごめんな。今まで苦しい思いをさせて」

「そんな事ない。あたし・・・楽しかったよ。お父さんと入れられた日々が。三人暮らせたこの日々が」

千代も涙をこぼしていた。千代にはわかっていた。これが最後の言葉。これがお父さんといられる最後の日なんだという事を。

「母さん・・・」

「何？」

「父さんには反対されるだろうけど・・・千代達を・・・」

竜次は静かに眠りについた。

「お父さん！！」

早代の泣き声がこの狭い病室に響き渡った。

それから三日後の事だった。竜次は息を引き取った。享年38歳だった。その若すぎる死の要因は過労であった。その日を境に一つの問題が彼女達を悩ませた。それは彼女達を引き取るという問題だった。竜次の母は父に話したが答えはノーだった。それ以前に早代がそれを過剰にそれを拒んだのだ。理由はある程度、千代にもわかっていて。憎かったのだろう。そこまで早代の竜次の両親に対する憎しみがあったのだ。千代は早代のその気持ちを理解し、断った。だがせめてお金だけとは母が懇願した。けれど早代はそれまでも拒んだ。千代も確かに憎んでもいたし、恨んでもいた。けど何より、千代達はまだ未成年の上に労働基準の年齢を満たしていない。いくら竜次が残したお金があろうとそれだけではこの先、暮らしていくのは前以上に困難になる。千代はそれを理解していた。だが「早代が拒むのなら」と言って断ったのだ。それからだった。千代と早代の仲が悪くなったのは。そして・・・あの日に繋がるのだ。

? 4. 炎の傷跡3

?

それは秋の事だった。木々は様々な色になり、きれいに散る。そんな季節だった。あたしの住むアパートにあった紅葉もみじがまさしくそれだった。竜次が亡くなってから喧嘩ばかりの毎日だった。だがこの日は千代にとって最もやり直したいそんな日だった。

「早代」

「何？」

「おばあちゃんの事だけど・・・」

「何回も言わないでよ！！あたしはいやよ！！だってあの人達は・・・！！」

「早代の言いたい事はわかる。でもね生活する上でお金が足りないの。これから受験生になる。再来年は高校生になるのよ。あたし達。高校の授業料もある。制服代だってある。それを考えたらとてもじゃないけど足りない」

「高校生になったらあたし達、働けるじゃない！！働けばいいのよ！バイトをして・・・。そうすれば生活できるし、高校にかかるお金だって」

「それがすぐ貰える訳じゃないでしょ！！簡単に言うけど働くって事はたいへんな事なの！！お父さんがいつも言ってた。“お金を稼ぐのはそう簡単にできる事じゃない”って。あたし達が稼げるお金なんてたかが知れてる。それに二人分は二人合わせても無理でしょ！！」

「ち・・・千代。そんなふうに思ってたんだ。あたしの事・・・！！」

「違う！！そんな事は！！」

「何が違うの！？千代はあたしが消えて欲しいんでしょ？死んで欲しいんでしょ？違うの！！？」

「バカな事・・・言わないでよ!!」

千代は早代のほほをたたく。その手は赤くなっていた。早代のほほも赤くなっていた。

「千代なんて大っ嫌い」

早代はそのまま自分の部屋に行ってしまう。千代は一人、リビングに残された。

「ごめんね。早代」

千代は涙を流していた。

次の日だった。あれから千代は早代と一言も話す事はなかった。

千代は早代と一緒にの部屋として使っていた自分の部屋にはいかず、竜次の部屋で寝たのだ。千代は朝ごはんを作り終え、早代の部屋に行った。

『コンコン』とノックをする。だが反応がない。

「早代、入るよ」

おびただ

千代は部屋のドアを開けた。開けると夥しいほどの血が流れていた。早代は包丁で自殺をしてしまったのだ。ああ。あたしの所為だ。あたしのせいで・・・早代はこの道を選んでしまった。千代は悲鳴を上げた。それは賢の家にも聞えるほどだった。賢はその悲鳴を聞いて来た。それは酷かった。そのあと大家さんやアパートに住む人みんなが来た。

「千代!!」

そういえば・・・包丁が一つなくなっていた。

「警察を呼んでくる」

大家さんは警察に電話しに行った。

「千代、これは一体・・・」

千代はゆっくりと部屋の中に入った。早代の遺体がある。千代はそれを見る事はできなかった。早代の使っていた机に白い紙があった。それは小さな遺書だった。そこにはこう書かれていた。

“千代に会えてよかった。ありがとう”

千代は泣いた。大声をあげて泣いた。賢はただそれを見届ける事し

かできなかった。

それ以来、千代は賢以外を名前で呼ばなくなった。必ず名字でよそよしく呼ぶようになった。賢にはその理由がわかっていた。自分の所為で早代を殺させてしまった。あたしは誰か傷つける。そう思っているから名字で呼ぶようになったのだ。明るかった性格は変わってしまった、笑顔を見せる事はなくなった。

？

それから月日は経ち、中学校三年生の三月。卒業式の日だった。千代は賢と同じ学校を受けた。結果は明日、発表される。それでも千代は賢に大切な事を伝えに行った。それは賢が好きだと言う事。小さい頃からずっと一緒にいつから好きになったんだろう。わからないけど・・・この思いを今日、伝えないでいつ伝える事ができるだろう。そう思って卒業式が終わった後、誰にも見られないであろう屋上に賢を呼びだした。

「で・・・何？」

風がふく。冷たく。賢の表情もどこか冷たそうに見えた。

「ずっと賢ちゃんの事が・・・好きでした。付き合ってください！！」

「・・・そっか」

賢はしばらく何も言わなかった。また風がふく。今度強かった。

「ごめん。オレはお前をそんなふうに見れない。そんな・・・暗い気持ちを持ったお前を好きはなれない」

賢はそれだけを言い残しその場から去る。

「じゃあどうしたら好きになってくれるの？教えてよ！！賢ちゃん！！」

賢は一切、振り返る事はなかった。

？

愛美の正面にあったのは墓だった。そこには“愛美竜次、早代。ここに眠る”と刻まれていた。

「あたしはここから離れられない。お父さんがあたしを襲ってくる。早代があたしを襲ってくる」

「愛美」

愛美はただ過去に怯えているだけだ。だから・・・何もかもが怖くなって賢以外が見えなくなってしまったんだ。ん？賢以外が？あいつ・・・俺の気持ちも千代の事もわかってて・・・やられた。

「ねえ。賢」

「何？」

「よかったの？」

「よかったって何が？」

「あんた・・・傍から見たらただの最低な男にしか見えないって」

「いいんだよ。それで・・・それで千代が前を向けて、オレ以外の手を握れるようになれば。それで陸斗があいつに思いを伝えられれば」

「はあ。何・・・かつこつけてんだよ」

「お前なら・・・わかるかもって思ったんだけどな。ロスト」

「わかるかよ。いくら・・・男の人格であっても女の体でいる方が長いんだ。もうわかる訳ないだろ」

「そうかよ」

「怖いんだ。信じられないんだ。賢ちゃん以外の人を・・・あたしには宛てがないの。何処にも」

「どう言えればいいんだろう。せっかく、賢が与えてくれた機会だ。言わなきゃ。でも・・・何を。あつ。」

「人間の手って何のためにあるんだ？」

「・・・急に変な事聞くのね。あんた」

「・・・悪いかよ」

「いや・・・別に。ん。私が思うに繋がるためだと思うな」

“繋がる？”

“うん。手と手を繋いでいれば繋がるじゃない。それだけで世界が繋がると思うのよ。そのために手が存在しているんじゃないかなあ”

“・・・なるほど”

“だから一人になって、誰とも繋がってなかったのなら自分から手を差し出せばいいんじゃない。そうすれば必ず誰かがその手を握ってくれる。そんな人が現れるから”

そうだ。姉貴から教えて貰った・・・あの事を言えればいいんだ。

「なあ？愛美」

「何？」

「人間の手って何のためにあると思う？」

「え。そんな事急に聞かれてもわからないよ」

「人間の手は繋がるためにあるんだ。お前の周りには賢以外にもたくさんの奴がお前に手を差し伸べてる」

「けど・・・あたしは・・・その手を握れない」

「人が傷付くとかそんな事は考えるな！！人間は傷付きながら生きていくんだよ。相手の痛みを知って成長する事だってある。それが悪い方向に行く時もあれば良い方向に行く事だってある。確かなものなんて何もないんだ。自分で作り上げるしかないんだ」

「それでも・・・あたしは・・・」

「少しずついいんだよ。お前のペースで歩けばいい。賢以外の手も少しずついいから握ってやれよ。みんな・・・お前と繋がりたいって思ってたんだよ。お前を守りたいって、お前を救ってやりたいって。みんな・・・お前の所為で傷付いたなんて思いはしないよ。そんな一面を持ってもそれが愛美・・・いや千代が持つ大切な部分だから。良い所も悪い所もお前が持つ大事なものだ」

陸斗は千代に手を差し出した。

「え」

「まずは俺からだ」

千代が少し躊躇う。だが千代はその手を握った。陸斗はその手を握

り返す。

「これでいいのかな？ 神原・・・」

「陸斗でいい。千代」

千代の顔が赤くなった。

「これでいいのかな？・・・り、陸斗」

「ああ。前・・・向けそうか？」

「うん」

「もう何もしがらみとかはないよな？」

「・・・うん！！」

千代は嬉しそうに言った。あとで・・・賢にお礼言わないとな。二人は賢の家に手をつないだまま向かった。

「よかったな。陸斗、千代」

海斗もあとを追った。

？

賢の家に着くとあやめさんがいた。しかもかなりご機嫌斜めで。

「もう二人とも！！こんな雨の中傘もささずに何処行ってたの！！？」

「すいません」

「私、すごく心配したんだから！！」

「ごめんなさい」

「とりあえず、これで体拭きなさい」

あやめさんは俺と千代にタオルを渡した。

「陸斗君の方は私が連絡して迎えに来るように言ったから」

「ありがとうございます。それで・・・賢は・・・？」

「あの子、熱があがっちゃって」

「すいません。俺達が押し掛けたばかりに」

「いいのよ。明日も学校、休ませるわ。熱・・・下がりそうもないし」

「そうですか」

「おい。陸斗」

「何ですか？蓮さん」

「迎え来たぞ」

「わかりました」

「荷物」

海斗が俺と千代の荷物を持って来た。

「海斗」

「何？」

「先に車に乗っててくれないか？俺・・・千代を送ってくよ」

「わかったよ。それじゃあ傘」

傘を受け取る。

「ありがとう」

「ありがとう。陸斗。神木・・・」

千代は顔を横に振る。それから「海斗君」と言った。

「ああ。じゃあな。千代」

俺は千代を送り、海斗は車に乗った。

「今日は本当にありがとう。陸斗。明日・・・また学校でね」

「ああ。またな」

千代は部屋の中に入って行った。俺もそのまま車に乗り、家に帰った。

その日の夜、あたしは夢を見た。早代が夢の中に現れたのだ。早代はこう言った。

“ やつと気がついてくれたんだね。千代。あたしは待ってるから。あなたに会える日を・・・。あなたがあたしを迎えに来る。その日を・・・。” その日からあたしの運命が変わった。そんな気がした。だってあたしは・・・賢ちゃんや海斗君そして・・・陸斗と同じ道を・・・同じ魂を受け入れる事ができたのだから。そんな未来の前にその未来に行く為のあたしの道をここから綴ります。あたしの悲しかった過去じゃない。栄光に満ちた光の未来を・・・。

？

次の日もその次の日もオレの熱は下がらなかった。これは・・・長期戦か？オレは病院送りを覚悟した。

「んー。でも・・・この症状って」

ハルトが不思議そうに言った。何か心あたりでもあるのかな。

「ちよつとウインと話して来る」

ハルトは部屋を出た。

「ウイン」

「ん？」

「賢ってこの世界と向こうの世界のハーフなんだよね？」

「ああ」

「もしかしたら・・・その事が原因かも」

「何？」

「賢は向こうでもこんなふうに熱を出した。あたしにはそれ以上の事はわからないけど・・・レイなら」

「でもあいつは今・・・」

「無理言っても来させる。これは重要な事なんだから」

ハルトは急いでレイの所へ向かった。

レイの部屋に入るとレイは本を読んでいた。ハルトはとりあえず話した。

「うーん。そんな不確定な事じゃないと思うよ」

「どうして？」

「たしかに・・・それも原因の一つかもしれない。けど僕はそれよりももっと確かな原因があると思う」

「それは？」

「力の暴走だよ。向こうでも同じことがあったんだろう？」

「うん」

「その時の暴走の余波が出ているのかもしれない。力を使ったからね。治まる前にそんな事をしたんだ。ありえなくはないよ。さらに

ハーフという事もあり、暴走はさらにひどくなり、魂と体がそれに耐えられなくなった。そんなところだろう」

「で対策は？」

「スートを集める事。それ以外方法はないと思う」

「けど・・・残りのスートは・・・」

「ジャックにもお願いするよ。君だけじゃぁ手に負えないだろう？」

「ありがとう。レイ」

ハルトはまた賢達の所に行った。

ハルトは賢に陸斗達が行きそうな場所を聞いた。すると賢は「部活に行ってると思うから学校じゃないかな」と言った。今日は土曜日って事もあったからそう言った。だからハルトは今、学校にいた。ハルトは学校中を探す。体育館も教室も。だけど見付からなかった。最後に屋上に行った。そこに陸斗達はいたのだ。

「どうしたんだよ？ハルト」

「はぁ、はぁ、はぁ。あんた等に話があって来たの」

「話？それってまさか・・・賢に！？」

「うん」

ハルトは訳を話した。

「くそ！俺等でできる事はないのか」

「賢ちゃん・・・熱、いくつあるの？」

「9℃5分。非常に危険だよ」

「スートを揃えろつたて・・・何処の誰なんだよ！！？」

「いるよ。あんた等の目の前に」

ハルトは千代を指差した。

「あ、あたし？」

「そう。あんたがエーススートの一人。ハートのエースだ」

「ええええええええええええええええ！！」

「間違いはないのか？ハルト」

「うん。間違いはない。今までは千代が気がついてなかったからわからなかったけど今ならはつきりわかる」

「それはいいけど・・・お前じゃあ力はやれないだろ？」

「大丈夫。ね？ ジャック」

「おう」

ジャックがタイミングよく現れた。

「んじゃあ選べ。お前には選択権がある。この世界から異端となるか。それともならないか。どちらか好きな方を選べ」

「選ばなかったら？」

「その時は賢が危険な状態になるだけだ」

それは究極の選択だった。

? 5. 決意

?

「おい！そんなふうに言ったら選ぶ以外の道はねえだろ！？」

「まあそうかもしれないな。けど選択する自由はある」

「選べばどうなるの？」

「んー。簡単に言えば・・・この世界の人間じゃなくなる。まあ賢達はどうそうなっちまったけどな」

「賢ちゃん達が・・・」

「まあ考える時間も必要だろうよ。三日、時間をやる。その間に決める。いいか。賢の体の事もある。これ以上、時間を延ばす事はできない。それだけはわかってくれ」

「わかった」

「じゃあな」

ジャックは仕事に戻った。

「あたしも・・・賢の家に戻るね。賢が心配だし」

「ハルト」

千代が呼びとめる。

「何？」

「選ばなくても・・・」

「誰もあんたを攻めはしない。じゃあちゃんとした選択を。この選択があんたの人生を大きく左右する」

ハルトもこの場から去った。

「陸斗も・・・海斗も・・・？」

「ああ。海斗の場合もこの世界じゃあ死んでるしな」
「え？」

「・・・俺の名前は神原海斗が本名だからな」

「・・・そうだったんだ。あたしにはまだわからない。何を選べばいいのか。どうすれば・・・賢ちゃんの助けになるのか・・・」

「言っただろ？少しずつでいいって。急ぐ必要はないさ。三日もある。その中で後悔しない選択をすればいいさ」

「うん。ありがとう。陸斗」

「お・・・おう」

彼等はまた各部活の練習に戻った。

？

「ただいま」

ハルトが帰るとあやめが来る。

「ハルトちゃん。私、買い物に行ってくるから賢ちゃんをお願いね」

「はい。わかりました」

ハルトはオレの部屋に行った。

「賢」

「ハ、ハルト？帰って来たのか。ゴホ、ゴホ」

オレは咳き込んだ。あくあ。やっぱり悪化してやがる。

「苦しいの？大丈夫？」

ハルトが背中をさすってくれた。すこしだけ苦しいのが和らいだ気がした。

「もう少し・・・頑張ってね」

「ああ。つか意外」

「何が？」

「お前がそうやって心配する事が」

「何で？」

「・・・いや、ちゃんと女らしいところもあるんだなって思っ

「はあ？あたしだってそれぐらい・・・」

「ハルトのふりなんかなくていいよ。ロスト」

「・・・なんだ。気がついてたのか？いつから・・・？」

「さいしょっからだ」

「そうかよ」

「最近、ロストの方でいる方が多いな」

「そうか？オレはそうは思わないけど・・・」

「いや。ここにお前が居候するようになってからだ。悩み事とかあったら・・・オレで良ければ・・・乗るよ？」

「いや。大丈夫だ。心配してくれてありがとう」

ロストは部屋を出た。

「・・・もう・・・時間がないのか。オレ等が消えるまで・・・
どうしたらいいんだろう。あたしは・・・自分が人間じゃなくなる？考えた事もなかった。あたしは人間でいたい。でも・・・それを選んだら賢ちゃんが・・・あたしはどうしたらいいんだろう。どうしたら・・・」

「千代？どうかしたの？」

「美春・・・いや・・・瑠璃」

瑠璃はあたしの友達の一人だ。フルネームは美春瑠璃。あたしの隣のクラスで2-Bだ。

「へえ。私の事、名字じゃなくて名前で呼べるようになったんだ」

「え。いやこれは・・・もうよそよそしくするのはやめようと思って・・・だから・・・その・・・」

「からかったんじゃないよ。ただ嬉しいんだ。千代にそう呼ばれるのが。初めてだったから」

「そっか」

瑠璃は優しいのかそうじゃないのかわからない。けど瑠璃はすごいなと思う。いつも・・・悩んでるあたしに対して的確な事を言ってくれるから。

「そんな事より・・・何か悩み事でもあるの？」

「実は・・・あたしの大切な人を救うためにはあたしのこれからの人生を犠牲にしなきゃいけないてさ。・・・瑠璃ならどうする？」

「・・・難しい質問だね。でも私なら・・・その人を本当に大切だっと思うのなら迷わず、人生を犠牲にする道を選ぶ。だって失いたくないから救うんでしょ？大切だから救うんでしょ？私ならそう

する」

「それで・・・瑠璃は後悔しないの？」

「しない。だって私にとって失いたくない大切な人を救えるんだから」

やっぱり瑠璃はすごい。あたしとは全然、違う。あたしは一時期、瑠璃が羨ましかった。優しくって強くって。あたしはただ甘いだけだ。人から優しいとは言われるけどあたしにとってはただ甘いだけにしか思えない。それにくらべて瑠璃はよく厳しい人だと言われる。けど彼女は人を気づかったり、思いやりたりする。あたしの中で優しいとは時には厳しく人に言える所がある人だと思う。甘いのと優しいは違う。あたしが言われる優しいは甘い方。瑠璃が言われる厳しいは優しい方。そんな瑠璃が女性として、人として羨ましかった。ねえ・・・瑠璃」

「何？」

「あたし・・・まだあなたに言っていない事がある」

「何？」

「あたしの過去とか・・・素性とか・・・」

「聞きたくないなあ」

「何で？」

「聞いたって何も変わらない。それだけであんたとの関係が変わっちゃうのならそれは友達でもなんでもない。ただの仲良しさん。友達と仲良しは違うしね」

「瑠璃・・・」

「何？」

「何でもない」

「もう何、それ？」

あたしが彼女と出会ったのは高校1年の時だった。賢ちゃんと陸斗ともクラスは一緒だった。それは嬉しかった。でもあたしはこの中でやっていく事ができるのだろうか？それが心配だった。そんな時だった。彼女があたしに話しかけてきた。

「不安そうな顔をしてる。どうしたの？」

瑠璃の最初の印象は髪が長く、パーマをかけたのか天然パーマなのかはわからないけどウェーブがかかっていた。色はきれいな栗色。目は何かを見透かすような感じが漂う目だった。ほほは白く、背もそれなりにある。間違いなくモテるタイプの人。あたしにはそう見えた。

「・・・そ、そんな事・・・ない」

「このクラスでやっていけない。そう思ってるでしょ？違う？」

「それは・・・」

当たってる。この子・・・超能力とか持ってるのかな。

「・・・私は美春瑠璃。あんたの名前は？」

「あたしは愛美・・・千代」

「へえ。千代。覚えておくわ。またあんたがそんな顔してたら話しかけるから。じゃあ」

あたしをからかっているのだろうか。そう思った。けどあたしに話かける人はいなかった。いなかったというのは賢ちゃんや陸斗以外だ。そう高校で新しく知った人。その人たちはあたしに話しかける事はなかった。たった一人を除いて。それが瑠璃だった。彼女はあたしがいつも暗い顔をしてると話しかけてきた。彼女は不思議だった。不思議で・・・何処か秘密がある。そんな人に見えた。彼女に一度だけ聞いた事があった。

「何であたしなんか話かけるの？」

そしたら“あんたの笑顔がみたいから”と言われた。またからかっているのだろうか。そう思った。

「だってずるくない？賢達にはあんなかわいい笑顔を見せといて私達には見せないなんて不公平じゃない？」

子供みたいな理由だった。あたしはおかしくって笑った。その顔を見て瑠璃は“笑った”と小声で言った。その後、瑠璃はみんなの前で立って言った。

「みなさーん！！愛美千代がかわいい笑顔をしましたー！！ちよっ

とやそつとじゃあ見れないぞー!!」

恥ずかしかった。なんて事を言うんだろう。あたしは瑠璃に反抗した。

「ちょっと!! 美春さん!! 恥ずかしいからよしてください!!」

「おっ! 怒った顔もかわいい。ほらみなさん!! 今、見ないと損だよ、損!!」

まるで商売をする人だった。みんながあたしの方を向き、集まって来た。あたしはさらに恥ずかしくなり、賢ちゃん達の方を向いた。

「……いいぞ!! 瑠璃!! もつとやれ!!」

ええええええええええええ!! 賢ちゃん、それはないって!! なんてあたしを見捨てるの? ちよつと信じらんない。賢ちゃんはその光景をほほえましく見ている。あゝあ。あの賢ちゃんじゃあダメだ。何言っても……楽しんでるんだもん。あたしはぜんぜん楽しくないから。

「そ、そんなにじろじろ見ないで下さい!!」

あたしは大声でみんなを制止した。けどやめなかった。みんな何? そんなに不細工なあたしを見て楽しいの? いじめたいの? そんなふうに思ってしまう。あたしは瑠璃を恨もうとした。

「どう? これでみんなの輪に入れたでしょ?」

瑠璃が唐突に聞いて来た。どういう意味? つか輪になんか入れてないじゃん!! 何が言いたいのか? この人。

「だってあんたは今、みんなに向かって言ったじゃん。自分が思ってる事。それが大事。みんなあんたと話したいって思ってるのよ!!」

ああ。そういう事か。この人は手荒なやり方だけどあたしをこの輪の中にいる事を教えてくれたのか。でもあたしはこの人達を傷つける。だから……一線を置いて接しよう。そうすればきつと傷付かない。こんないい人達を傷付けさせたくはない。そう思った。

今でも……思いだすな……。あれ。あの時、もし過去を引きずってなかったら……今以上に友達がいたのだろうか。今以上に

誰かと手をつなぐ感覚が気持ちよくっていいものだという事を知る事ができただろうか。今・・・思うとあの事であたしは気がつけばよかったんだとも思う。だから賢ちゃんもあんなふうに言ったのだろうと思える。

「・・・ねえ。千代」

「何？」

「たとえあんたが何者になろうと私はあんたの友達でいるから」

「うん。ありがとう。瑠璃」

あたしは屋上を去った。

「・・・時が近付いている。世界が変わるその時が・・・」

翌日。三日という日は長い。そうだ。陸斗に聞いてみよう。後悔をしているのとかを。あたしは陸斗の家に向かった。陸斗の家は一度だけ賢ちゃんに道を教えてもらった事があった。気まぐれで賢ちゃんがその道を教えてくれた。“いつか役に立つから”と言って。何にも役に立たないじゃんとか思ってたけど・・・役に立ったよ、賢ちゃん。陸斗の家に着き、インターホンを押す。するとバタバタと足音が聞えた。

「はーい」

そう言って開けたのが陸斗のお姉さんだろうか。きれいな女性が出てきた。

「はじめまして。愛美千代って言います。陸斗君はいますか？」

「いるわよ。ちよっと待っててね」

「はい」

その人は急いで中に入った。

「ねえ。陸斗」

「何？姉貴」

「ガールフレンド？」

『ブー』

飲んでいたオレンジジュースを海斗にひっかけてしまう。

「ちよっ・・・汚えな！！」

「あっ・・・わ、悪い。誰？」

「愛美千代って子」

「千代が!!」

陸斗はすつとんで行った。

「ねえ。海斗」

「何？」

「千代って陸斗の何？」

「これ」

小指をつきたてた。

「マジ？」

「ああ。マジ」

「へえ。あとで遊んでやろうと」

「愛理姉ちゃん・・・」

待つな。ってまだ五分くらいしか経ってないか。・・・ここ数日、陸斗を見ると何か・・・変な気持ちになるな。よくわからないけど。陸斗が来たら何て言えばいいんだろう。思い付かないな。何て・・・。

「千代!!」

陸斗が来た!!。どうしよう。今、あたし・・・ドキドキしてる。どうしよう。

「ど・・・どうしたんだよ?こんな休日・・・お、俺に何か・・・よ、用でもあんのか?」

「う、うん。ちよつと相談ごとがあつて来たんだ」

「そ、そうかよ。・・・あ、あがれよ」

「う、うん」

あたしは部屋に上がった。

「ほう。二人して・・・ムフフフフ」

「・・・愛理姉ちゃん」

「何？」

「姉ちゃんって・・・こういう性格？」

「ん？ひ・み・つ」

「・・・おいおい」

あたしは陸斗の部屋に案内された。結構・・・きれいな部屋。

「・・・で？」

「え？」

「相談したい事があるんだろ？・・・な、何だよ？」

「陸斗は・・・後悔してないの？」

「俺か？・・・俺は・・・してないかな」

「何で？」

「その道を選ばなかったら・・・俺は海斗とこうして生活する事はなかったと思う。海斗と会う為に、思い出を作る為に俺は・・・この世界の人間をやめたんだ。だから後悔はしてない」

「そっか。ありがとう。陸斗」

あたしは笑った。そしたら陸斗はほほを赤くしそっぽを向き始めた。

「どうしたの？陸斗」

「な、何でもない。何でもないんだからな」

「????？」

「デレてますな。ムフフフフフ」

「なあ。姉ちゃん」

「何？」

「こんな事、やめようぜ？」

「何だよ？」

「だってこんな陸斗の部屋のドアをちよつと開けて覗き見なんて。ばれたらどうするんだよ？」

「大丈夫。その時はあんたを盾にするから」

「はあ？ふざけんなよ!!」

なんか・・・外が騒がしい。

「うるさいなあ」

陸斗がドアの方に行く。開けるとそこにはさっきの人と海斗君がいた。

「……お前等!!」

「……な……何でしょうか？」

「消えろ!!」

「はっはい!!」

海斗君達はその場を去る。

「にぎやかだね」

「そうか？うるさいだけだよ」

「あたしにはそうは見えなかったけどなあ。じゃあね。陸斗。今日は本当にありがとう。あたし……決めたから。明日……言うよ」
「わかった」

あたしは陸斗の家を去った。最後はやっぱり……あの人に……聞きに行こう。あたしはその足で賢ちゃんの家に向かった。

? 6. その先の答え1

?

賢ちゃんの家に着く。賢ちゃんはやっぱりまだ寝たままだ。あんまり長くいられない。そう思った。あたしはそつと賢ちゃんが眠るベッドの所に行った。かわいいとは思うけど・・・何だろ？前まで愛おしいと思っていたのに何も感じない。あたし・・・一体、どうしたんだろう。あたしはそんな思いを振り払い賢ちゃんに問い掛けた。

「賢ちゃんは・・・後悔してないの？」

答えは返ってこない。そんなのはわかっていた。けど賢ちゃんの事だ。後悔はしていないだろう。どんな理由があろうとも。

「あたしも後悔はしないよ。もう決めたから」

ああ。あたしは大切な人を救えるだろうか。守れるだろうか。不安ばかりが残る。でも・・・今のあたしならその不安と向きあえる気がする。

「あたし・・・必ず・・・あたなを救ってみせる。それと・・・ありがとうございます。賢ちゃん・・・あたし、あきらめがつけたよ。あなたに」

そうこれは言いたかった事。あたしはもうこの人に何の未練もない。「ありがとうございます。賢ちゃん」

あたしは賢ちゃんの部屋を出た。何かすがすがしい。終わらせたくなかったはずなのに・・・それでも今は・・・終わらせたい思いでいっぱいだった。これでいいんだよね？これで・・・あたしは賢ちゃんの家を出て自分の家へ帰った。

次の日、あたしは霊園に行った。何の縁だろう。今日は早代の命日だ。あたしは買った花を手向けた。

「あたし・・・あなた達にさようならを言いに来たの。今までありがとう。あたしを育ててくれて。ありがとうございます。あなた達と出会えた

事は・・・あたしの人生で最高の財産の一つだよ。本当にありがとう」

あたしは霊園を去る。もしかしたら・・・ここにはもう来ないかもしれない。でも・・・それでもいいと思った。あの日々は・・・お父さんと早代は・・・あたしの中の記憶にちゃんというから。

？

賢の部屋は静かだった。賢は寝っぱなしだ。熱はあがったりさがあったり。それでも一番高かった頃よりは下がってみんな安心していたけどまだ完全に下がった訳じゃないからなんとも言えない。ハルトがまた・・・オレになってる。最近・・・本当に多くなった。しかも無意識が多い。時間がない。それはわかっていた。それでも・・・オレは必ず・・・戻るか。ハルトに。ああ。戻った。あたし・・・最近、どうしたんだろう。・・・わからないな。

「ここにいたのか？ハルト」

急に近くで声がした。この声はあの人だ。

「グレイヴさん」

グレイヴさんはあたしの先代。つまりこの人も元ジャックだ。

「最近・・・どうだ？」

「どうだって変わらないですよ」

「だったら職についたらどうだ？」

まただ。この人はいつもあたしにそう言う。あたしが職につけるわけがない。こんな不安定な魂で。こんな消えそうな存在で。

「また・・・その話ですか？」

「悪いか？」

「決まってるじゃないですか！？あたしはいつ消えるかわからない存在ですよ？そんな存在が職なんかにつける訳がない」

「まあどれも長期的なものだからな」

「あんたはいつもそう。あたしを試すかのように・・・！！あんた

に何がわかる？作りだされた存在の気持ちが！！」

「ああ。わからないな。私はこの世界に元々存在していた魂だ。お前とは違う」

「じゃあ何であんたはロストを・・・あたしを選んだ！？」

「まだ・・・わからないか。まあ無理もないか」

「何が言いたい？」

「その答えならロストが持つてる。お前以上にわかってるよ。お前がさっき言った事のすべてがな」

「・・・」

「だんまりか。まあ・・・ん？」

グレイヴさんが賢を見た。

「どうかしたんですか？」

「あつ。いや。何でもない。じゃあな。予定があるんだろう？」

「まあね。じゃあ・・・」

あたしは行った。

「・・・監視も楽じゃねえな」

グレイヴは携帯らしきものを出した。

「はい。こちら・・・グレイヴ。そろそろですよ。ハルトが消えるのが」

『そうか。じゃあ・・・そろそろ匣を作らなければな。絶望と希望の匣・・・パンドラ』

「今度は・・・いつ会いに行けば？」

『彼女が消える時だ』

「わかりました」

グレイヴは携帯を切った。

「さて・・・ショーの時間だ」

グレイヴは再度、賢を見た。

「また・・・会い見えましょう。我が主」

グレイヴはそう言って消えた。

？

学校の屋上に集合する。今は放課後だ。いるメンバーはジャック、陸斗、海斗、ハルト、そして千代であるあたしがいる。

「さて・・・答えを聞こうか。さあどちらを選ぶ？」

「・・・人間である事を・・・捨てる」

「いいんだな？それで」

「はい！！」

迷いはない。これがあたしの選択。

「・・・じゃあ、これ」

ジャックはあたしにハートのエースのトランプを渡す。

「これは・・・トランプ？」

「そうだ。これでお前はハートのエースになったという訳だ」

『パチン』

ジャックが指をならす。するとあたしの服が変わった。

「・・・一体・・・これは・・・？」

「これがお前の新しい力だ。・・・向こうに行くわけじゃないけど・・・名前を今、決めてくれ。向こうでは千代って名前は使えないから」

「わかった」

なんて・・・名前にしようかな。赤・・・情熱。薔薇。

「ローズ・フレア」

「ローズだな。さて・・・これで残るスートは一つだ。ダイヤ」

「向こうにまたいるのか？」

「いや。それはない。向こうにそれらしき魂も感じられない。・・・ローズ」

「何？」

「お前には双子の妹がいたな」

「うん。早代。でも・・・三年前に・・・自殺した」

「そこなんだよな」。確かに・・・あの日のリストに名前があった

「ああ」

「あたし・・・夢の中で早代に会った」

「夢の中！！それは本当か？」

「うん」

「・・・結局、夢の支配人達の力を借りなきゃなんねえのか」

「何で？」

「おれは夢を管理している場へ行けるゲートを開く事ができても詳しい所までは案内できない。今までがそうだっただろ？」

「確かに。お前・・・飛ばしたただけだもんな」

「ああ。だから夢の中まで案内する事はできない。それができるのは夢の支配人達だ。夢の支配人って名前だけあって夢の世界の管理もしている。だからそいつ等に頼んでローズの夢の中に案内してもらうのさ」

「で・・・どうするんだよ？」

「今夜、ローズが眠ったら行く。このメンバーで行くからな。もちろん、タイムリミットもある」

「・・・千代が夢から覚めるまで？」

「その通りだ。集合場所は陸斗の家でいいや。それとローズは来なくていいからな」

「何で？」

「お前の夢の中に行くんだ。お前は自分の夢だからお前はいるけど・・・こいつ等は部外者だからな。お前の夢の中に入る事はできないからな。だからおれがゲートを開く。それに・・・夜の女の子の部屋に男子共が来るんだぜ？ちょっとやだらう？」

「うん。やだ」

「だからそうするんだ。行くまでに頼んでくるよ。誰かにな。じゃあおれは行くぜ」

ジャックは行ってしまふ。

「死魂になったんじゃないのか？ハルト」

「まあ普通の魂ならなってるけど・・・例外かな。あんた等と同じ

魂だし。それに自殺した瞬間に死魂になるわけじゃないんだよ。ジャックが魂を運んだらその魂は死魂になるんだ」

「へえ。そうだよな。まだ運ばれてないんだもん」

「じゃあまたあとで」

ハルトも帰る。

「じゃあ俺等もまたな」

「うん!!」

陸斗も海斗も去った。

「さて・・・あたしも帰るかな」

待っててね。早代。必ず・・・会いに行くから。

？

「頼みたい仕事だあ？」

「まあ」

「何だって言うんだよ」

「夢の案内だ。・・・ブレイドさん」

「・・・まあいいけど。誰の？」

「愛美千代」

「了解。んじゃあお前めえが開いたゲートの近くで待ってるからよ」

「わかった」

千代が寝た頃、俺の家ではジャックが呪文を唱えていた。唱え終わり、ゲートが開く。

「んじゃあお前等、気を付けろよ。タイムリミットもある。素早く且つ正確に終わらせるんだ。いいな？」

「おう」

俺等、三人はゲートの中に入った。夢の世界と不思議な所だ。いくつもの扉があるだけの寂しい世界だった。

「お前等・・・かあ？ジャックが言ってたのは」
ジャックが開いたゲートのすぐ近くで声がした。

「まあ・・・そうですね・・・」

「って・・・ハルト!! お前^{めえ}までいんのかよ!？」

「いちゃあ悪いの? つかジャックが頼んだ奴^{めえ}ってあんたっだのね!
!」

「悪いのか?」

「別にかまわないけど・・・」

「知り合い?」

「まあ・・・」

「知り合いつていうより元同僚だな」

「同僚?」

「こいつは先代ジョーカー、ブレイド・ダイヤ。今は夢の支配人に
所属しているバカ」

「バカとは何だ? てめえ!!」

「バカじゃん。いっつもあたしやレイがしかける罠にバカみたいに
毎度毎度ひっかってるんだから!!」

「う、うぐ」

バカって言うかドジだな。

「今回はそういうヘマをしないでよね!？」

「うるせえよ。だいたいお前^{めえ}とレイはいたずらがすぎんだよ。いっ
つもおれの仕事用の机におれの^{でえされ}大嫌いな蛞蝓をそこら狭しと乗せと
いたり、靴の中に画鋏をしこませたり、部屋ん中に入ってすぐにパ
イをなげてきたたり!!」

さんざんだな。つか画鋏って酷いな。しかもレイさんと一緒になっ
てやってる。うわあ・・・。レイさんのイメージが変わるな。こり
や。

「そんな初歩的な罠にひっかかるあんたが悪いんじゃない?」

「何だとおおおおお!!」

「はいはい。そこまで。俺等はこんな事をするために来たんじゃない。
い。なあ陸斗」

「ああ」

「そ、そうだったね」

「ああ。そ、そうだったな」

「早く案内をしてください」

「わかった。んじゃあついて来い」

俺等はブレイドについて行った。

「ここが愛美千代の夢の中だ」

「何か・・・かわいい扉だな」

ハートがたくさん彫られてる。女の子らしい。

「ほう。お前はセンスがあるなあ。どっかの誰かさんとは違って」

「どっかの誰かって誰!？」

「はあ!？ お前以外だーれがいるんだよ？ ああん？」

「んだところ!！ あたしだってセンスの一つや二つあるわ!！」

「見た事ないね。お前の方じゃあ。へんな不細工なぬいぐるみ買ったり、ダサい柄の服買ったり」

え!！ 今、着ている服はロストが選んだのか？

「つか・・・また喧嘩してる。お前等・・・仲いいのか？」

海斗・・・どうみても違うだろ。

「「違うわあああああ!！」」

ハルトの意外な一面。料理はうまい。掃除もできる。女として良い感じなのに・・・センスが壊滅的。本当に意外だな。

「なあ？ ブレイド」

「何だ？ リゼル」

「ハルトとロストはどっちの方が女っぽいんだ？」

「ロストだな。あいつ家庭料理はそこそただけデザートとかになるとかなりうまいし、掃除もよくするし、洗濯もする。髪の手入れや化粧だってあいつの方がうまいし、センスもいい。ぬいぐるみ集めとかもしてるし、裁縫もそれなりだし、編み物もできる。それに比べてハルトは女っぽくないぞ。掃除はしてもまた汚くするし、風呂もカラスの行水みたいだし」

・・・。あんな美人を保てるのはロストのおかげだな。髪がサ

ラサラなのはロストがいつも洗ってるからかな。つかさすがは同僚。ハルトの事をよく知ってるんだな。

「じゃあ・・・入るぞ」

あっ。いつのまにか殴られてる。俺が見てない間に。ここにレイさんが入るのか。想像できないな。

ブレイドが千代の夢の中に入る。俺等もそれに続いた。

? 7. その先の答え2

?

夢の中は一面の花畑だった。空はきれいな夕暮れだった。雲は良い感じのオレンジだった。賢にも見せてやりたい。素直に思える風景だった。俺等は千代を探した。歩いてても歩いても見付からない。いったい何処めえにいるんだろう。

「千代おとおおお!! 何処だああああ??」

「千代??」

ハルトとブレイドは前に進む。何かを感じているのだろうか。急に黙ったよな。二人ともどうしてなんだろう。

「・・・お前めえ、ロストだろ?」

ブレイドは小声で言った。俺等には聞えてはいない。

「ああ。何で・・・わかった?」

「適当だ。まあそれは冗談でジャックから聞いた。最近、多いんだってな。そっちでいる方が」

「あいつ。余計な事を・・・」

「って事は・・・もう近いんだな」

「ああ」

「見つかったのか? もし・・・見つかってないのなら・・・おれも・・・」

「いや・・・いい。あいつはオレが一人で見つける。オレとあいつがした二人だけの約束だから・・・」

「わかった。だが・・・少しは頼ってくれよ。お前めえまでいなくなったら・・・おれは・・・」

「寂しいんか? 女々しい奴だ」

「め、女々しいとはなんだ!?!?」

「まあ・・・まだ時間はある。そう心配するな」

「・・・・・・・・お前めえはいつも・・・そうやって・・・」

「何か言ったか？」

「な、何でもねえよ!!」

結局、喧嘩かよ。少しだけ・・・聞えた。女にしては低い声。賢は声で違いを見抜いているんだろうか。

「ん？あの金髪・・・千代じゃないか？」

海斗が指差した。

「あっ!! そうだ!! おうい! 千代!!」

千代が振り返る。やば!! 直視できない。

「みんな!! ん? どうしたの? 陸斗」

「な、何でもねえよ」

「??」

千代が覗きこんでくる。あゝあ。ダメだ。顔が沸騰しそう。

「み、見んなよ! 頼むから見るな!!」

「・・・なあ海斗」

「何? ブレイド」

「あの子は陸斗のこれか?」

姉貴と同じように小指を立てた。

「ああ。見ればわかるだろう?」

「まあな。おい。その二人!!」

「「はい」」

「そんな事してないで早代を探すんだろ?」

「あつ。そうだったね」

「・・・ウブだな。なあロスト」

「ああ。ウブだ」

「ってロスト! お前・・・恋した事あんのかよ!!?」

「失礼な奴だな。オレだって恋はした事ある。まあ・・・お前等みたいな無神経な奴等には教えないがな」

「ケチ」

「それより・・・あなたは?」

「おれはブレイド・ダイヤ。夢の支配人の一人だ。まあよろしく!

！」

「ひっ！！ねえ陸斗」

「何だよ？」

「あの人ってヤンキーか何かなの？」

「それは本人の前で絶対に言うな」

「わ、わかった」

「でいつもはどう現れるんだ？」

「いつもは・・・あたしが突然、ここに来て、その後すぐくらいに早代も現れる感じかな」

「じゃあそろそろだな」

ブレイドが言うのと早代が現れた。あの頃と変わらない。きれいなあの黒髪に青い目。千代と似た顔付き。あの頃のままだな。

“ やつと気がついてくれたんだね。千代。あたしは待ってるから。あなたに会える日を・・・。あなたがあたしを迎えに来る。その日を・・・ ”

「迎えに来たよ！！早代！」

“ そう。あたしはここにはいない。あたしはあなたの夢の最果てにいる。あたしはそこで待ってるから ”

早代は消えた。

「思念だけだったんだな。夢の最果てか。面倒だな」

「何で？」

「夢の最果てなんてもんは存在しない場合が多い。だがここであえてそれを言うって事は・・・この夢にそれがあるって事か」

「ない理由は？」

「夢なんてものは最果てを見る前にその夢を忘れる事が多い。そして新たな夢を見る。それが繰り返されるから最果てを見たものはいない。 “ 存在しない ” と言うよりも “ 存在を確認されてない ” って言った方が正しい」

「なるほどな。で何か・・・ヒントとかないわけ？」

「だいたいは・・・過去のしがらみとか・・・思い出とか・・・」

だな。あとは・・・トラウマ、明日とかだな」

「明日??」

「まあ明日っていうのは正夢の場合の最果てだな。だがこの場合、明日はないだろう。早代は死んでるしな」

「じゃあ・・・思い出とかか」

「どっか思い当たるか？」

「そんな事言われたって・・・急には思い付かないよ。それに・・・思い出って言ったってあたしと早代の間には一年半ぐらいの思い出しかない」

「そうか。その短い間でお前が逃げた事とかないのか？」

「逃げた事？でもあたしは・・・過去と向きあえて今は前を向いてるよ」

「口で言うのは簡単だ。あと思うのみな。心の奥底ではあるかもしれないねえぜ？だって人は・・・心の奥をおろそかにしがちだからな」

「・・・もしかして・・・あそこかな」

「一つだけ思い当たるんだな？」

「うん。墓って事はないから・・・たぶんあそこ」

「じゃあその場所を頭ん中に思い浮かべろ。そうすればその場所に行ける。何ってたって、ここはお前の夢の中だ。お前の考える事次第で夢も変わる。さあやってみろ」

「うん」

千代は目を閉じる。千代の言うあそこは何処だろうか。親父さんが死んだシーンだろうか。それとも俺と出会った時だろうか。賢と出会った時だろうか。数分後、俺等はその場から姿を消した。

？

着いた場所は千代の家だった。

「・・・ボロいな」

「失礼だな！！ブレイド」

「いいよ。海斗君。本当の事だから」

たしかに千代の家はボロアパートだ。築何年なんだろう？まあ・・・三十年は行ってるだろうな。きつと。台所で開けっぱなしの包丁を入れる棚の扉があった。

「千代」

「何？」

「お前んちって包丁・・・何本ある？」

「二本だよ」

「一本ない」

「うん。・・・それは・・・」

千代は台所から自分の部屋に向かった。そしてその扉を開ける。そこには死んでいる早代がいた。そうか。千代が言ったあそこはここのことだったんだ。早代が自殺した・・・あの日だったんだ。

「あたしは・・・早代のこの時の顔をよく見てない」

机の上には白い紙があった。

「あれは？」

それを指差した。

「あれは・・・遺書」

千代は部屋の中に入る。あの時は目をそらしてしまった早代の遺体。千代は静かに頭の近くに座った。早代は眠る様だった。首の辺りから血が流れていた。頸動脈を斬ったんだ。千代は早代の手の下に行き、手を握る。手が握れる事が意外だった。ここは過去の映像じゃなく、過去そのものだったのか。

「早代。早代、本当にごめんなさい。あたし・・・あなたの最後の姿から・・・逃げてた。ずっと思い出さないようにしてた。あなたが自殺した日が来ると出てこようとする。あたしはそれから逃げた。本当にごめんね。早代」

涙を流す千代。きつと握っているその手は冷たい。それが寂しい。その時だった。早代の手を握る千代の手の上から手を乗せる手があった。それは早代だった。

「……早代」

“……ここはあなたの夢の最果てじゃない”

「えー!!」

俺等も驚く。ここが最果てじゃない？じゃあ一体何処に最果てがあるんだ？

“ここは最果てに行く為の通過点にすぎない”

「早代」

“あなたはあたしの最後の姿と向き合う事ができた。そんなあなたならきつと……この夢の本当の最果てを見つけられる。だってここは……あなたの中の一つだもん”
そう言って早代は消えた。

「ここが最果てじゃない。エーススート。スピード。クロバー。ハート。ダイヤ。過去。自殺。最果て」

ブレイドがぶつぶつと何かを言い始めた。何を考えてるんだ？

「明日。……明日？明日。未来。……夢。明日につながる場所。扉。……そうか!! わかったぞ!!」

「えー!!」

「たぶん、早代はあそこにいる！間違いはない!! 千代」

「ひっ！何？」

あゝあ。ありゃあ……あからさまに怖がってるな。

「一番最初に来た場所を思い浮かべろ!!」

あっ！気にしないんだ。

「わかった」

千代はまた眼を閉じる。するとそこから俺等は消えた。夜明けまであと一時間だった。

そこは扉だった。俺等が千代の夢の中に入った扉だった。

「夢の中に出口という扉はない。この入って来た扉が明日に繋がる扉になる。入口と出口は一緒なのさ。この夢の中ではな。さあ。千代、名前を呼んでみる」

「うん。早代!!」

名前を呼ぶ。するとそこに早代が現れた。

“よく・・・ここにいてわかったね”

「早代！！」

千代と早代は抱き合った。

「あたし・・・あなたに言いたい事がたくさんある」

“あたしもいっぱいある。聞いてくれるよね？”

「うん。聞くよ」

千代は涙でいっぱいだった。

あたしは日本でいう小学校6年生までアメリカで過ごした。あたしはいつも一人だった。お母さんは仕事ばかりしていて、お父さんはいない。妹も弟もお兄ちゃんもお姉ちゃんもいなかった。寂しかった。友達にはいるのにあたしにはいない。それがむしろ嫌だった。それでもお母さんがいつもしてくれるお父さんの話を聞いている時はそんな気持ちにはならなかった。あたしが中学生になる二ヶ月前だった。お母さんが病気で亡くなった。亡くなる前の日に千代の話を聞いた。あたしにはお姉ちゃんがいる。嬉しかった。それを聞いた瞬間、あたしは会った事も見た事もないのに好きになってしまった。ただ話を聞いたただけなのにあたしは愛してしまった。あたしはお父さんと千代がいる所に行きたくなった。会いたくなった。だからあたしはおばちゃんに聞いた。すると日本の桜花市にいる事がわかった。あたしはお母さんから日本語を教えてもらっていたからある程度は話せる。あとはお金だけだった。パスポートも作った。お金は親せきや叔母さんや伯父さんから出してもらった。あたしは“もうアメリカには戻らないかもしれない”。それを言ったらみんなは“それでもかまわないから会っておいで”と言ってくれた。その優しさが嬉しかった。嬉しくってたまらなかった。あたしはアメリカを飛んだ。そして日本で千代達に会った。嬉しかった。あの人があたしのお父さん。あの子があたしのお姉ちゃん。それが嬉しかった。千代達と過ごす生活は楽ではなかった。それでもあたしにとっては毎日が楽しくって嬉しくって仕方なかった。けど・・・千

代と喧嘩にたあの日、あたしは千代の事を本気で嫌いになりそうだった。あたしはそんな自分が嫌だった。あたしは・・・千代に迷惑をかけている。そう思うと余計に自分が嫌になった。だからあたしは・・・自殺という道を選んでしまった。そんな自分でいたくないという一心であたしは頸動脈を斬った。遺書はその前に書いた。せめてこれだけは伝えたいそう思って書いた。斬ったあと、あたしは倒れる。最後にあたしは決して聞えるはずはないだろう。そんな事はわかっていてもあたしは呟くように“ごめんね”と言ってあたしは目を閉じた。そのあとからずっとあたしは千代の夢の中にいた。千代が来るのをずっと待った。そして今日・・・。

“あなたは来てくれた”

「あたしの言いたい事も聞いてくれる？」

“何？”

「ごめんね。ありがとう。大好き」

“あたしも・・・あたしもだよ。千代”

ああ。いいな。

「なありゼル」

「何だよ？」

「この感動の再会をぶち壊してもいいかな？」

「おい！！野暮だからするなよ！そんな事！！つかお前、無神経だな」

「無神経って言われてもな・・・。あと残り時間二十分だぞ」

「二十分ってええええええええええええええええええええええええ！！」

「じゃあ言うぞ。いいな？」

「ああ」

二十分じゃ仕方ない。

「千代！早代！」

「「ひっ！！何？？」」

二人して驚いてるよ。

「二十分しかないから感動の再会はここまでな」

「はーい」

二人は顔を見合わせる。笑った。二人ともいい笑顔だった。

「早代の体の事があるからもう一度あの自殺の過去に行ってくれるか？」

「わかった」

着くとさっきと同じだった。

「早代」

「何？」

「傷とかは残るけどいいか？」

「うん」

「じゃあ肉体に入れ」

早代は遺体に入る。まあ言葉は悪いけど・・・ゾンビだな。

「リゼル」

「何だよ？ロスト」

「お前・・・ゾンビだと思っただろ」

「んな事思っちゃいねえよ」

「隠さなくてもいい。まああれをゾンビだって言いたくなるのはわかるさ。だがそれはお前の兄も・・・ゾンビと変わらないという事でもあるからな」

「ああ。そうなんだよな」

「それを忘れるなよ。お前達は奇跡としか言えない事の中今・・・生きてるのだから。それを嫌だと思ったその気持ちも忘れるな」

「わかった」

早代は起き上がり、目を開く。目はあのきれいな青のままだった。

「んじゃあもう戻らないとな」

ブレイドが言った後、俺等は扉に行き、千代以外はその扉を通る。夢が終わったのだ。

? 8. その先の答え3

?

夢から戻り、俺の家に着く。

「さて・・・早代の事だけど・・・さすがに、海斗みたいになここには住めないな。死んだのが最近すぎるし。ジャックも誤魔化せないだろうしな」

「・・・だよな」

「だから・・・“楽園の苑”に住んで軍とかに所属した方がいいだろうな。おれはそれを進める」

「オレもだ」

ジャックとロストが言った。ブレイドは仕事に戻った。

「それしかないのなら・・・」

海斗と俺は同じ気持ちだった。

「・・・うん。それでいいよ。千代に会えただけで嬉しかったから」

「千代にはおれからあとで伝えておく。じゃあ・・・早代」

「はい」

「このランプを渡す」

「ありがとう」

早代はそのランプを受け取った。

「これでエーススートはすべて揃った。さあ名前を決めろ」

「千代がローズならあたしはローザ。ローザ・アクア」

「んじゃあローザだな」

ジャックは指を鳴らす。すると衣装が変わった。

「じゃあ・・・おれと一緒にいこう。それと・・・賢の事なら大丈夫だ。力の暴走は治まった。今日、行く前に行ってやれ」

「わかった」

「じゃあな」

「またね。みんな」

ジャックと早代はゲートの中に入った。

「じゃあ賢の家に行きますか」

「だな」

俺等は仕度をして賢の家に向かった。

賢の家に行くと言が起きていた。

「賢！お前・・・本当に大丈夫なのか？」

「おう。大丈夫だ。みんなありがとな」

「よかった」

「・・・ロストか」

「ああ」

「あとで・・・話があるからいい？」

「ああ」

「ありがとう」

「それより、賢！！」

「何だよ？陸斗」

「今日、学校行く？」

「ああ。行くよ」

「そっか。もう少しだな」

「だな。文化祭か」

「ああ」

俺等は学校に行った

？

今は昼休み。オレは屋上にロストを呼びだした。陸斗達にははずしてもらった。だからオレとロストの二人しかない。

「んで・・・何だよ？話って」

「お前・・・いつからロストなんだ？」

「・・・千代の事は聞いたか？」

「ああ」

「その頃からだ」

「戻れないのか？」

「戻ろうと思ったんだけどな・・・ハルトが呼んでも反応しないんだ。まるで・・・意識を失ったかのように」

「・・・お前は大丈夫なのか？」

「ああ。今のところはな」

「何かあったら言えよ。頼むから」

「わかったよ。じゃあな」

オレは屋上をあとにした。

「いい奴だな」

ブレイドが現れた。奴の前では煙管がふけない。あゝあ。吸いたい。そんな気分だったのに。

「・・・ブレイドか」

「ああ。あれが・・・例のマッドハッターか」

「そうだ」

「・・・あいつ等にはお前の事は言ったのか？」

「言っていない」

「おい。何も言わないで消える気か？」

「そのつもりだ」

「何だよ？」

「言って何になる？変わらないさ」

「別れの言葉とかそういうもんはいいのか？」

「お前は暑苦しいな。いいんだ。そんなもんは残したくない」

「・・・おれはお前に深く干渉はしないが・・・マッドハッターには残してやれ。あんない奴そうそういないからな」

「まあ・・・そうだな」

？

文化祭まであと一週間。オレのクラスは大方、準備はできた。男子の制服も完成した。モデルは陸斗。やっぱ様になるよなあとその衣装を見ていた。他のクラスは1-Aはダンス、1-Bは出店でやきそば、1-Cは看板、アーチ、1-Dはお化け屋敷、1-Eは日本にある伝統的な踊り、2-Aは学校のミスターミスコンテストの司会進行と舞台の設定、2-Bは劇で白雪姫、2-Dはわなげなどの遊び場、2-Eは出店でたこ焼き、3-Aはファッションショーの司会進行と舞台の設定、3-Bは出店で飲み物売る、3-Cは軽音部と吹奏楽部の演奏会の司会進行と舞台の設定、3-Dは休憩所と案内、3-Eは出店で綿菓子となっている。部活の方でもいくつかあり、チア部、新体操部、ダンス部はダンスの発表。バレー部は出店でチョコバナナ、野球部は出店で好み焼き、卓球部は出店でホットドック、バトミントンはクレープ、剣道部と弓道部は合同でポップコーン、柔道部はアイスクリーム、ハンドボール部はハニーチュロ、ドッチボール部はワッフル、サッカー部は落書きせんべい、陸上部と水泳部は共同で豚汁、千代がいるテニス部はドーナツ、でオレ等バスケットボール部はたい焼き、文化部のほとんどは展覧会と体験で被服部はファッションショーのお手伝い演劇部は劇となっている。生徒会は受付をやるらしい。今はビラ作り。ケーキとかが売りなのはいいが・・・ビラの中に何で千代や陸斗の写真を入れた!? 狙ってるのか? まあ・・・千代と陸斗はミスターミスコンテストにもファッションショーにもエントリーされている。わからんでもないが・・・。オレも何か知らないけど両方ともエントリーされてるし。わけかかんねえ。まあオレ等はその都合もあってか今は体育館にいる。体育館で発表関係はやる事になってるからだ。いるメンバーは学校でモテると噂される男女ばっか。はあ。何でこれにオレが入ってるんだろう。オレよりいい男はいっぱいいるじゃん。本当、この人選・・・わけがわからん。隣のクラスは瑠璃やサッカー部の男子、ロストもいる。まあこの辺の人選はわかるけどな。ファッションショーではほとんど同じ人ばっか出る。まあフ

アッションショーにはチー坊やフーも出る。海斗もしかりだ。ファッションショーはペアだけど・・・オレ・・・瑠璃となんだよな。何をさせたいのかいまいわからない。まあ・・・陸斗は千代となんだよな。オレが押したんだけどな。この二人の方が絶対に見栄えはするしいカップルになるし。まあ・・・当分先の話だろうけどな。二人して恥ずかしがってんだから。オレ等はその集まりのあと、Bクラスの劇を見た。まだ、演劇部はどうまくはないが二、三ヶ月の稽古にしてはいい感じになっていると思う。これで瑠璃が白雪姫だもんな。間違えではないけど・・・。ロストは何の役になったんだろう。そういえば聞いてないな。何だろうな？一体。

早代の事もジャックからだが千代に伝わった。千代は残念そうだったけど「会えただけで嬉しかった」と言っていた。まあ一件落着いて奴かな。

？

「ローザ」

「はい。何ででしょうか？グレイブさん」

「本当にここでよかったのか？軍はまだいろいろある」

「いいんです。これがあたしの運命ですから」

「そうか・・・お前に休暇を言い渡す」

「何ですか！？」

「行きたいのではないか？姉の文化祭に」

「それは・・・」

「文化祭ならいいと思う。変装でもして行ってきなさい」

「はい！！ありがとうございます！！」

文化祭当日。オレ等の喫茶店は大繁盛だった。まあいろんな目当てがいたが。千代や陸斗狙い、美麗さん狙いなどだ。チー坊もその一人だった。チー坊は美麗さんのアドレスをゲットしていた。チー坊の好みは結構広い。上は25から下は14までとまあ・・・す

ごい。だからミスターミスコンテストにエントリーされなかったんだよ。ファッションショーはルックスがメインだけどミスターミスコンテストはそれだけじゃないもんな。それに・・・チー坊はチャラいで有名だし。チア部、新体操部、ダンス部の発表に軽音部、吹奏楽部の演奏、1-Aと1-Eの発表、演劇部の劇、ファッションショー、ミスターミスコンテスト、2-Bの劇という順番で今はファッションショー。オレは・・・眼鏡をかけさせられ、瑠璃もかけさせられ眼鏡コンビのデートスタイルみたいなお題だった。千代と陸斗は結婚式の姿。これはガチで受けた。舞台裏で海斗とオレは二人して爆笑していた。いやゝあの時の陸斗の顔ときたら・・・やべえ。思い出すだけで腹が痛くなる。まあその豪華さもあってか千代と陸斗のペアが一番だった。オレと瑠璃は四番だった。まあ・・・それなりだったからいいし。ミスターミスコンテストはファッションショーの結果も入る。うわぁ。陸斗と千代強！！とか思ったけど、ミスターは三年生の先輩、ミスはロストという結果だった。そしてラストの白雪姫。王子役が急遽変わったというのは聞いていたが誰になったんだろうなあと思ってみていたら・・・ロストがやっていたのでびっくりした。おいおい。まあ・・・キスはフリだったけど。とてもいいものだった。そしてこれはオレと千代、陸斗がちょうど喫茶店で仕事をしていた時だ。一人の女の子が入って来た。その子のオーダーを取ったのは千代だった。

「ショートケーキとカフェラテください」

「かしこまりました」

千代はそのままカウンターに行った。そこでショートケーキとカフェラテをトレイの上に乗せてやって来る。そしてその女の子の机の上に乗せた。

「お待たせしました。ショートケーキとカフェラテになります」

「ありがとうございます」

その女の子はでかいキャスケットをかぶっていたためか顔は見えない

かった。千代はその顔が少しだけ気になったように顔をのぞく。するとその顔は早代だった。千代は思わず叫びそうになった。しかしそれを早代が止める。

「あとで……話そう。いい？」

「うん」

小声で答える。オレ等もそれを見ていた。

文化祭が終わったあと、オレ等は屋上に行った。早代もそこにいた。

「何で……来てくれたの？」

「あたしの上司が行って来ていいって言ってくれて……見たかったんだ。千代が頑張ってる姿。見れてよかった。楽しいそうな顔とかが」

「早代……」

「賢も久しぶりだね」

「ああ。元気にやってるか？」

「うん」

「今度はあたしから会いに行っていかな？」

「いいよ。楽しみにしてるから」

「うん」

千代と早代は抱き合った。いい笑顔を二人はしていた。

『後夜祭を開催するので出場者は体育館に集合してください』

校内放送が流れる。後夜祭はだいたい三年生がドンチャン騒ぐのが恒例となっているが今年はオレ等二年生も参加する者も多い。オレ等も参加する。オレ、陸斗、チー坊、瑠璃、千代でバンドを組んで歌う事になっている。チー坊はドラム、陸斗はベース、オレはギター、瑠璃と千代はボーカルだ。まあ二曲やる訳だが一曲目は瑠璃と千代、二曲目はオレと瑠璃でボーカルをする事になっている。その時は千代もギターをやる事になっている。

「千代、オレ等……いかないと」

「うん。早代」

「何？」

「今日は来てくれてありがとう」

「うん」

「じゃあ」

オレ等は急いで体育館に向かった。

「さて・・・あたしも行くか」

早代はゲートを開き、“楽園の苑”へと帰って行った。

後夜祭もかなり楽しかった。あゝあ。この後の片付けがたいへんなんだよな。まあ・・・オレ等のクラスはそうでもないけど・・・部活の方はテントの片付けとかがあるんだよなあ。まあ明日と明後日は文化祭の振り替え休日となっている。文化祭は二日間やった。まあ来年は最上級生だもんな。今年以上になるよう頑張らないとな。そうして長かった文化祭という行事は幕を閉じた。その後はお決まりの期末である。まだ二週間はあるが・・・まあ頑張ればどうになる。実際、そうするしかない。だからオレは振り替えは勉強で費やした。そして片付け。まあ授業が潰れたからラッキーだった。その代わりの肉体労働。まあ授業するよりは楽しかったけど。

また普通の生活に戻る。それは本当にごくわずかなものかもしれない。それでも構わないなど最近、思えてきた。仲間が増えたからかもしれない。千代もいる陸斗と海斗もいる。けどまだ問題は山積みだ。オレ等はどうしてこの力を持っているのか、どうしてオレ等なのか、魂の進化論とは何か・・・本当に謎が多い。オレ等にはまだ明かされていない部分が多すぎる。まあ一気に明かされるよりはいいけど・・・わからないよりはましだと思う。それは・・・あいつに対して同じだ。ロストはほとんどんハルトの時間を失っていた。まだその事はわかっていない。どうしてそうなってしまったのか、ハルトとロストは何者なのか。それが今は知りたくてしょうがない。あいつは何も話してはくれなかった。ジャックの方も忙しいらしく、最近は会っていない。本当に・・・前に戻った感じだった。ただ違う事もいくつかある。それは海斗がいる事、陸斗と千代が前より

も笑うようになった事。そして・・・陸斗と千代が名字ではなく名前
前で人を呼ぶようになった事だ。本当にいい感じに変わって来た。
オレ等の間にさらにいい絆や友情ができた。陸斗はまだ千代に思
いを打ち明けてはいないけどその日がいつになる事と思いつながらオ
レと海斗達は楽しみにしている。

？9．エピソードとその先の答え4

過去はきつと悪い物だと思っていた。でもそれは違った。過去のすべてが悪い物ではない事を知った。それを教えてくれたのは陸斗。あたしを強くしてくれたのは賢ちゃん。そして・・・あたしにそのすべてを教えてくれたのは早代だった。ありがとう。みんな。あたし・・・みんなのおかげでこれからが楽しくなりそう。どんな困難だってきつと乗り越えられると思う。あたしはまだ弱い存在かもしれない。それでもあたしにはみんなという力がある。振り払っていた手を今なら手を差し伸べる事も取る事もできる。今までは自分は強いのだと感じていた。けどそれは違った。誰もが強いわけじゃない。そうじゃないから手を取り合う。だから助け合う。分かち合う。これからのあたしもそれができるだろうか。賢ちゃんがしてくれたように、陸斗がしてくれたように、瑠璃が海斗くんが・・・そして早代がしてくれたように。お父さん、顔も知らないお母さん、これからのあたしを見守って欲しい。あたしは頑張っってやっっていくから。陸斗達と頑張っってやっっていくから。もう後ろは向かない。過去にしがみついたしはもういない。あたしは・・・前を向いて歩いていきます。それでは・・・明日へ行ってきます。

さあ序章の部が終わろうとしている。まだこの物語は始まったばかりにすぎない。まだ一日半しか経っていない。さあ二日目の最後は何が起こるか。一体誰が・・・起こすのだろうか。それはまだこれ

からの話。ではあと半日その扉を開けようではないか。夢ではなく
現実という名の扉を。

？9．エピソードとその先の答え4（後書き）

みなさん、こんにちわ^^＊来図＊です。今回の章は長いものが多い章になりましたがいかがだったでしょうか。四章の予告はこれまで張ってきた伏線を利用し、ロストの過去の話になります。ロストとは一体、どういう風に生まれたのか、レイやブレイド達、そしてハーツという女性。関係やこれからの章のための話となっています。それでは^^

0. プロローグ

「君は彼女の事を忘れてしまったのかい？」

それはあいつが死んで十年経った時だった。レイにそう言われた。何も・・・あいつの気持ちをわかつちやいない。そんな男に言われた。オレには屈辱だった。レイは・・・あいつが残した物の何もかもを持っているのにあいつが残した言葉を理解していない。どうしてわからない？十年。十年も経ったのに・・・。

「・・・あんたがそう思うのなら・・・そうかもしれない」

ハルトはレイの部屋を出た。イライラしていた所為かもしれない。彼女はすぐに煙管を吹かし始めた。近くにあった壁を思いっきりグウで殴る。

「・・・オレは一度もあいつの事を忘れた事なんかねえよ。ハーツ」

もう二度とは会えない。遠い所にいるあいつ。声が届きそうなのに、手を伸ばせばきつと届くの、どんなにそれをやっても届かない。顔が見えない。ぼやけてしまう。あいつとの思い出はこんなにも鮮明に覚えてるのに・・・それなのに届かない。どんなに叫んだって走ったって・・・届く事はない。ハーツ。お前が恋しい。恋しくてたまらない。だって・・・そこらじゅうに匂いが声が笑顔があるんだ。なのにお前はどこにもいない。だったら・・・何であんな言葉を残したんだ！！人は廻る。前世があるように来世だってある。たとえ・・・それに会えたところでお前じゃない。お前じゃないんだ。だから余計に苦しい。それでも見つけるよ。だって約束したから。たった一人の・・・オレが愛した恋人。

？10. 作りだされたもの1

？

「テストの点、何点だった？」

期末テストも終わり、そのテスト返しが続く。今回はかなり勉強したけどまあいつもと変わらない結果だった。今は数学のテスト返し中だ。

「俺は100点」

うぜえ。陸斗の点数がうぜえ。嫌いだとか言っときながら満点。ああ。それに比べてオレは・・・82点。海斗も100点。この双子・・・本当に嫌だ。千代は85点。オレが一番下かよ。はあ。これがラストなんだよな。一番良かったのが日本史で100点だった。一番悪かったのが生物で65点。陸斗はほとんどが100点だが公民だけが90点。海斗も同じ。千代は国語の中の古典で98点で一番悪いのは英語で50点という結果だった。無論陸斗と海斗は学年トップだ。2番は隣のクラスの瑠璃だった。

という感じでテスト週間は幕を閉じた。あと1週間ぐらいで冬休みになる。クリスマスも近い。寂しい男の一人だ。陸斗は誘わないのかな？千代を。

「なあ、陸斗」

「何だよ？」

「クリスマスはどうすんの？」

「どうするってえ？」

「千代を誘ってどっか行かないの？」

「はあ？・・・何でそんな事を聞くんだよ！？」

「ん？なんとなく」

「・・・そうかよ。別に・・・そんな事」

「お前、奥手すぎ。クリスマスにはアツクしないとダメだろ！！。だって千代は今頃、お誘いをたくさん受けてるだろうよ」

「そんなもんかな？」

「そんなもんさ。あっ。千代が来た」

千代はさっき呼び出しをされ、廊下にいたのだ。

「はぁ」

「どうしたんだよ？溜息なんかついて」

「ん？いやさあさっきもさあ先輩に誘われたんだよね。クリスマス
の日、暇かって」

「・・・ほら見ろ。さっそく誘われてんじゃあねえか。」

「何人目？」

「十人目」

十人も！？すげえな。これが文化祭効果か。

「ほら・・・陸斗！！お前も！！」

「・・・わかった」

陸斗は千代を見た。

「ち、千代」

「何？」

「ク、クリスマスの日・・・暇か？」

「・・・陸斗ならいいよ」

「よかったな。陸斗」

反応がない。固まってらあ。こりゃ。

「それで・・・何処・・・行く？」

「え、え、え、映画館とかは？」

「いいよ。最近公開したやつでいいよね？」

「お、おう」

オレ等の声は聞こえてなかったんだな。

「けーん！！」

外の方でオレの事を呼ぶ。オレは廊下の方に行った。

「何だよ？」

「隣のクラスの・・・確か・・・名前は瑠璃ちゃんだっけ？その子が
呼んでたよ」

「わかった」

オレは廊下に出た。廊下に出ると瑠璃がいた。

「何だよ？瑠璃」

「ねえ。波留を見なかった？」

「いや」

「そっか。今日・・・体育の授業以来・・・見てないから」

「マジかよ。探してんのか？」

「うん」

「わかった。オレも一緒に探すよ」

「ありがとう。じゃあ私、校庭の方を探す」

「んじゃあオレは屋上の方を探すよ」

「うん。じゃあね」

オレは屋上の方に行った。たぶん、屋上にいる。そうとしか思えないんだ。

屋上に行くとしたしかにロストがいた。だがそのロストは透けていた。透明とは違う。もっとわかりやすく言うのであれば消え始めているのだ。淡い光を帯びながら。

「ロスト!!」

オレはロストに駆け寄る。

「どうしたんだよ!？これ・・・」

「・・・時が来たんだ。オレが・・・この世から消滅する時が・・・賢、お前に頼みたい事があるんだ。オレの代わりに・・・約束を果たして欲しいんだ」

それは遠い日に結んだ忘れもしないあいつとの最後の約束。

？

ハルトとロストは造り出された魂だ。すべてはそこから始まったのだ。ある実験の過程で生まれたのだ。それは人工的に死魂を生み出すという実験だった。生魂にある液体を入れると死魂が誕生する

というものだった。その実験には二つの魂が使われた。それが後にハルトとロストであった。それからこの魂はまた新たな実験の実験台にされた。それが魂の融合であった。この実験は何年も前から行われていた。生魂が死魂を取り込む。そのような形で行われていたのだ。だが死魂と死魂が融合されたようになるのだろうか。それについては実験されてはいなかった。誰も見向きはしなかった。魂の進化論では両属性を持つ魂こそが次世代の魂だと推測されていたからだ。それには確かに間違いはない。だが一人の若い者が両属性を持つだけが次世代の魂ではないと言ったのだ。二つの魂が一つの魂として共に生きる。これも一つの次世代の魂だと言ったのだ。そこからこの実験がスタートしたのだ。だがすぐには成功しなかった。何回もの融合拒否それを繰り返していた。そこから一つの提案が生まれた。少しずつ融合させればいい。そうすれば融合を拒否する事はなくなるのではないかと。だからその二つの魂にプログラムしたのだ。片方が母体にもう片方は取り込まれる方へと。そしてその魂に名前が付けられた。母体がハルト。取り込まれる方がロスト。彼等は二人に肉体を上げた。プログラムされた事はもう一つあった。それは母体が逆になる。だがそれは第一段階であるハルトが母体でロストが取り込まれるというプログラムが終わってから話。

私はいつもお父さんから勉強を教えてもらっていた。クイーンになるための勉強だ。だけど・・・どうしてなんだろう。お父さんはいつも死魂の事ばかり話す。私には知らない知識。知っても知らなくともどうでもいい事。そういう風に他の先生から教えられていた。どうしてそう言うんだろう。死魂も同じ魂なのに・・・。だから私は聞いた。

「ねえ、お父さん」

「ん？何だ？ハーツ」

「死魂って何で・・・嫌われてるの？」

「・・・他の先生が・・・そういう風に言ったのかい？」

「うん」

「……じゃあ……死魂に会ってみよう。会えば……何かわかるかもしれないよ」

「うん!!」

お父さんは死魂達にも勉強を教える。だからその時に私を連れてってくれるのだろう。楽しみだな。どんな人がいるんだろう。そんな期待が私にはあった。

ハルトとロストが最初に会ったのは後にジョーカーとなるブレイドだった。彼はハルトとロストとはクラスは違えどルームメイトだった。彼はそれは怖かったのは最初だけだったが、ハルトがいたずらで机の上に蛞蝓を置いた。するとそれを見てブレイドは悲鳴を上げたのだ。それが楽しかったのかそれ以来、ブレイドは怖くない事がわかった。やたらとビビりだし。ブレイドはジョーカーになる為のクラスにいる。授業の内容は生魂の事と死魂の事、双方を学ぶ。ハルトとロストはジャックの為の勉強をしていた。魂の事を教えてくれるのはハートロットという先生だった。生魂の者でありながら死魂を虐げない。そんな先生だった。死魂は生魂に虐げられていた。それは主に実験台として使われるから。そして死魂の方が特殊の力を持っているからだ。死魂の者達にはただの嫉妬心にしか思えない。それが膨らんで差別に変わった。そうとは思えなかった。なんと醜い存在なんだろう。そういう風にしか見る事ができない。だから最近では生魂術という対死魂術まで生まれた。そんなものを作ってどうするんだろうねと彼等に質問してみたり、ディベートをさせたり、・・それなりに面白い先生でもあった。彼が虐げない理由は一つだけだと言った。それは同じ魂だからという理由だった。死魂と生魂。そういった違いはあれど魂には変わらない。だから差別をしない。彼はそうはつきりと言ったのだ。だからみんなにも好かれる先生でもあるのだろうとハルトもロストも思っていたのだ。

これはある日の事だった。先生が一日体験入学をさせたい子がいると言って自分の子供を連れてきたのだ。その子はきれいな赤い髪に青い目。肌は白くてとてもかわいい女の子だった。

「娘のハーツだ」

「ハーツ・ハートロットです。今日は一日、よろしくお願いします」
それがハーツとの出会いだった。ハーツは誰にれも優しくかった。ハーツは知ろうとしていた。死魂とは何か、どういう存在なのかという事を。ハーツはその日はハルトとロストの近くに座っていた。ハルトは社交的な女子だったからすぐに仲良くなった。だがロストとはすぐに仲良くはなれなかった。ロストは誰とも話そうとはしなかった。ハルトには友達がたくさんいた。ロストにはいなかった。彼にはわかっていた。自分は消える存在だという事がわかっていた。だから友達は必要ない。そう思っていた。特にハーツは生魂という事もあってか話さなかった。だがその日の最後にハーツから話しかけられたのだ。

「何であなたはそんなにも・・・誰とも話さないの？」

「・・・いいだろ。別に。お前には関係ない」

「関係なくない！！私はあなたと仲良くなりたいの」

ロストにとってははじめて言われた事だった。嬉しかった。

「・・・ロストだ」

彼はそう言った。自分の名を名乗るなんて事はブレイドと暮らすようになってからだ。

「ロスト。わかった。じゃあ覚えて置くね」

かわいかった。ロストはハルト以外の女性の笑顔を見るのは初めてだった。今まで閉じてた自分。馬鹿みたいだった。この子について知りたかった。男としてそう思ったのだ。

？

それから何回かハーツは来るようになった。ロストにはその日が楽しみでしかたなかった。そんなある日だった。もう一人生魂の者が来たのだ。それがレイだった。レイはいかにも真面目そうな男だった。レイ・クローバリア。それがレイのフルネームだった。彼は

すぐにハルト達と仲良くなった。ハーツと仲が良かったせいかもしれない。ブレイドがハルトとレイ、双方にいじられるのはこの頃からだった。ロストとハーツはただ眺めていた。止めようとも思っただ事もあった。だが三人とも楽しそうな顔をしていた。だから止める気になんかならなかった。ハルトとは仲がよかったレイ。だけどロストはぜんぜん仲良くなかった。いつも喧嘩が絶えなかった。さすがにその喧嘩はブレイドも、ハルトもハーツも止めていた。何故なら最悪の場合殴り合いの喧嘩にまで発展するからだ。それほどまで仲が悪かったのだ。その後も知り合ったものは多かった。ハーツのいところでウィンというレイと同じ年の男だった。キング候補だと言う事を聞かされた時はハルト達はそれはそれで驚いた。みんなにはまださきがある。それがロストには羨ましかった。自分はいつ“ハルト”になってしまうのだろう。そんな不安が心を支配した。消える事が怖い。自分のこの肉体が消えて自分はどうなるのであろう。それを考えると不安でしょうがなかった。ロストはその事をハルトにしか知られてない事だと思っていた。だがこの学校の生徒である死魂の者全員が知っていたのだ。ハーツやレイは知らなかった。その事を知った時は驚きはしたもののそれでもいいと納得もしてしまっていた。

「なあ？ あんたは決まったんか？ 誰をジャックにするか」

「・・・そういうお前はどうかんだ？ キング」

「ウチか？ ウチはもう決まったで。だから聞いとんねん。誰にしたか」

「私も決まった。私はそいつに会ってみようと思う。どういう子なのか実際に見てみたい」

「ほお。そんならウチもついて行くわ」

「何でだ？」

「ええやろ。別に。これから未来を作る子の一人や。ウチも見たいねん」

「・・・わかったよ」

「うっしやあ!! そんなら早う行こうやないの」

「今すぐか？」

「当たり前やんか!!」

「お前は気が早いな」

「ええやんか。 思い立ったが吉、 ゆう言葉もあるやろ」

「・・・確かにな」

「他にもクイーンとか誘わへん？」

「いいかもな。 じゃあ私はジョーカーを誘っておく」

「お! じゃあウチはクイーンを誘うわ。 ほんなら・・・ 一時間後にここに集合や」

「ああ」

彼等はお互いの所へ行った。

一時間後。 学校に訪問者が来る事になった。 急だったためか集会とかは行われなかった。 その訪問者とはこの時代のキング達だった。 キング・スピードである旧名グレイ・ハートロット、クイーン・ハートである旧名リラ・クローバリア、ジョーカー・ダイヤが旧名であるこの学校の卒業生チェリッシュ、そしてジャック・クローバである旧名グレイヴだった。 その人達に群がる学生。 ハルト、ロスト、ブレイドは遠くからそれを眺めていた。 ふと彼等がハルト達を見た。 そして近付いた。

「私は現ジャックだ。 お前達は何て言う名だ？」

「あたしはハルト。 んでこいつがロスト」

ロストは黙ったままだった。

「おれはブレイド」

「そうか。 学校は楽しいか？」

「うん。 決まってんじゃん。 いろんな人に出会えるし」

「そうか」

グレイヴはほほ笑んだ。 だがその隣にいたグレイは気まずい表情だった。 彼等は用が済んだ後すぐ帰った。

「なあ。 ジャック」

「何だ？」

「あんたがジャックにしようとしている子ってあの子なんか？」

「ああ」

「残酷な事させるな。あの子・・・人工死魂やろう？」

「ああ。だからあの子にするのだ。この世を知って貰う為に」

? J. 作りだされたもの 2

?

それから数ヶ月が経った。そろそろキング達の発表日が近い。貴族はみんな我が子を我が子をと現役の者に押しに行く。私の家であるハートロットはしなかった。すでに決まっている。お父さんがそう言ったのだ。私もその通りだと思った。だって発表日は明日。今さら何をしたって遅い。賄賂をやろうが意味がない。最終的な決をするのはスターダスト家だ。現役の者達ではない。それでも現役が推薦した者になる事が多い。それにスターダスト家に賄賂をやれば罰せられる。刑は死刑になる事が多い。

「私、選ばれるかな？」

「ああ。きつと選ばれるさ」

「だいたいな」

今日も私は学校に行った。学校に行くときみんなピリピリしていた。ロストを除いて。ロストだけは何故かいつも通りだった。違う所があるとするば授業中に寝ていたぐらいだ。ロストはいつも授業中は起きていた。それなのに全授業を寝っぱなしだった。珍しいなあと思っただけを見ていた。その日ははじめてハルト達の部屋に泊まった。ロストは起こしても起きなかったからブレイドに頼んで運んで貰った。本当にどうしたというんだろう。ロストは。

次の日。私は授業に出た。発表されるその時を待つ。ロストが起きたのは朝だった。ロストはふらふらだった。私は授業に出ない方が進めた。それでもロストは授業に出た。完全に上の空みたいだった。発表する時がやってきた。みんなは校庭に出る。だがロストは行く途中で倒れてしまった。ブレイドが保健室まで運んだ。私はロストを見た。その時のロストは消えかかっていた。比喻ではなく実際に消えかかっていたのだ。私はロストのそばに寄り添った。校庭では開会式みたいなものがやっていた。それよりも私はロストの

方が大事だった。それから数分後の事だった。

「ん？」

ロストが目を覚ましたのだ。

「ロスト!!」

「ハーツか。・・・お前だけには見られなくなかったな」

「え」

「こんな姿だよ」

「どういう事？」

まったくわけがわからなかった。何を言ってるんだろう。そうし
か思えなかった。

「オレは・・・オレという肉体を持って存在できるのが今日まで
なんだ」

それってロストが・・・。

「消えるって事？」

「ああ。お前・・・知らなかったのか？生魂のくせに」

「え？」

「いや。知らないのならそれでいい。だってオレはもう消えるんだ。
お前には関係ない事だ」

「だから・・・友達を作らなかったの？」

「ああ」

「自分が消えるから・・・そうなんでしょ!？」

「ああ」

「酷いよ。何にも言わないで。ずるいよ」

「何でずるいんだよ？」

「そういう所がだよ!わかってるくせに。ロストは誰も傷つけたく
ないから友達を作らなかつたんでしょ?自分が消える事で悲しんで
欲しくないから。ロストは優しすぎるよ。自分はどうなってもいい
からその代わり相手の幸せを望むなんて。だから私・・・私、ロ
ストの事、好きになっちゃったじゃん」

泣きながら言っていた。今、言わなければいつ言う事ができるだろ

う。そう思ったから勢いで言ってしまった。

「ハーツ」

「私、バツカみたい！！もういなくなっちゃうのに何でこんな事を言っただろう。何でかな。ロストを困らせる気なんかなかったのに……うわああああああああん！！あああああああ！！ひつく。ひつく。うわああああああああん！！」

大声を上げて泣き崩れる私にロストはただ一言言った。

「ごめん」と。

「それでは発表します」

校庭の方でスターダスト家の者が言う。

「まずはキングから。今日よりキングの職を任命されるのは……クローバリア家の長男、レイ・クローバリアだ。続いてはクイーン。クイーンは……ハートロット家の長女、ハーツ・ハートロット」私の名が呼ばれた。夢だと思った。私みたいな女がまさかクイーンになるなんて……。

「それではジョーカーとジャックに行きます。ジョーカーは……ブレイド。そしてジャックは……ロストという事になった」

「う、うそだろ」

ロストは驚いていた。ジャックに選ばれた死魂は寿命が延びると聞いた事がある。これで……ロストも。そう思った。だが保健室にはハルトが来た。おかしい。ジャックとジョーカーに選ばれなかった死魂は消える。そのはずだった。なのにハルトは消えてない。それどころかロストが消えている。校庭にいた死魂はみんな消えていた。寿命を迎えたのだ。死魂はジャックとジョーカーに選ばれなかったら消えるという事になっている。これは生魂が死魂に堕ちた時にはすでに決まっている事なのだ。ブレイドもレイも保健室に来了。そこにはたった今、現役を下りたキング達もいた。

「あんたら……こないなどにおったんかいな。探したいへんやっただんやで」

「す、すいません。キ……」

「グレイでええよ。ウチはもう職を下りたんやし。ほんならここでもやろうやないの。引き続きを」

「いいんじゃない」

「異論はない」

「ないよ」

「じゃあやろか。レイ。こっち」

「は、はい」

レイがグレイの所に行く。グレイの手にはキングの証である王冠があった。

「これは・・・あんたのもんや。たいせつにしいや。キング・スピード」

「はい。謹んでこのお役目務めさせていただきます」

「じゃあ次はクイーンね」

「はい」

私はクイーンの下に行った。

「あの・・・名前は？」

「リラ・ハート。新しいクイーン。あなたは一体、どんな未来を私に見せてくれるのかしら。楽しみだわ」

「は、はい」

不気味な感じがした。ただものではない。そう感じた。私はその人からクイーンの称号であるティアラを貰った。

「じゃあ次、ジョーカー」

「ああ」

「まあ何も渡すものはないけど精いっぱいがんばんな」

「はい」

「では最後はジャックだ」

ジャックだった男がロストに近付く。

「何でオレを選んだ？」

「何でかって？それは一つだけだ。お前に生まれた意味を知って欲しいからだ。お前はたぶん、今まで悪い意味でしかとらえていなかった」

っただろう。そうではなくいい意味の方を見つけて欲しいんだ。ジャックという職を通してな」

「……わかりました。オレを選んだのであれば……全うするまで」

「……いい心意気だ。これを」

ジャックだった男は鎌を渡した。

「あんたの名前は？」

「グレイヴだ」

「そうか。ありがとう。グレイヴさん」

そう言うとロストはハルトの方へと吸収されていた。

「ジャックの仕事をやってくれるな？ ハルト」

「はい。ロストはあたしですから」

ハルトが言った言葉がわからなかった。ロストがあたし？ じゃあロストはハルトになったというの？ 私はその疑問を抱きながらさいしよの一カ月を過ごした。

？

私がクイーンになった理由を聞いたのは最近だった。リラさんはただ“おもしろそうだから”と言っていた。本当に何を考えているんだろう。クローバリア家はファルコンと名高い。敵を喰らうためだけに存在する。それはまるで・空を飛ぶ獣。スート貴族にはそれぞれ獣の力を持っている。クローバリアはファルコン、ダイヤルーツはチーター、スピードリアはスネーク、そしてハートロットはウルフだ。私も一応、ウルフの力を持っているが……ウインほど力を持っている訳ではない。レイもクローバリアって事もあってかファルコンの力を持っている。……レイもたまにわからないからやっぱり性格は似てるんだな。そういえばグレイさんは私の同じ家なんだよな……。何処が似てるんだろう。よくわからないや。レイが選ばれた理由も最近知った。レイが選ばれた理由は“これか

らの死魂のため”という理由だった。レイが死魂側だという事を知っていたのだろうか。グレイさんもよくわからない性格をしているよな。あれから私たちはロストに会っていない。ハルトは何も言ってくれない。言うのはただ“あたしの中にロストを感じる”それだけだった。私はロストに会いたくってしかたがなかった。あのきれいな白い髪を見たい。そう思っでは私はハルトの所に行った。行くとハルトの様子がいつもと違った。この感じは・・・ロストだ。

「ロスト・・・？」

少しばかり不安だった。それでも私は確信をしていたのかもしれない。

「・・・ハーツか。気がいたら・・・ハルトの体だった」

体を見たらたしかにそうだった。ロストは男だ。それなのに胸がある。女性らしい体をしていた。どういう事なんだろう。

「どうして・・・？」

「・・・オレが消えなかったんだ。教えてやるよ。オレとハルトは生魂の者が行った実験の実験台だった。人工死魂と言えはわかるか？」

聞いたことある。たしか・・・アン・スペードとかいう人が発案し、実験内容には魂の融合というものがあつた。二つの魂が一つの魂として生きる。その実験は最近成功したという話を聞いたけど・・・。まさかそれが・・・。

「ロストとハルトなの？」

「ああ。別に発案者は恨んじやいない。発案しただけで実験に参加はしていないからな。オレが恨んでいるのはその実験をした奴等だ。発案者は実験をするのを拒んだ。何故だがわかるか？」

そんなものが私にわかる訳がない。そっちは無学と言ってもいいくらいだ。

「悪魔になるからだ」

この世で悪魔になると言う事は魂が暴走し魂が持つ自我を失う事を指す。“魂の進化論”の実験で失敗する事は悪魔になる事。悪魔と

いうのは“魂の進化論”が研究されるようになってから現れた現象でもある。

「発案者であるアン・スペードは失敗する事を恐れた。だからそのチームから外れた。その後も実験は続き、人工死魂は成功した。次の実験の実験台もオレ等だった。ハルトを母体としロストであるオレを取り込む。オレが消える事は決まっていた」

「だから・・・生魂が嫌いなのか？」

「ああ。生魂はオレという一人の存在を消した奴等だからな」

「だから・・・あの時、私に答えなかったのか？」

「ああ。けど・・・何でかな？お前やレイにはそういう風に思えないんだよな」

「え」

「わかんねえよ。けど・・・ただそう思ったんだ」

「ロスト」

私は部屋の中に入った。そしてロストを抱きしめる。

「ありがとう」

「お前の気持ちにはまだ答えられそうにもない」

「いいよ。別に。それに・・・ロストは男じゃないんでしょう？」

「ああ。体はな」

「私が思うようにはいかない事は・・・もうわかったから」

詳しい事は言わなかった。言ったところでロストを困らせるだけだ。私はこの気持ちをどうしたらいいんだろう。好きになった人は気がついていたら女の体になっていた。もう前みたいにはいかない。どんなに好きであろうとも届いたとしてもそれが成就するわけではない。私は泣きそうになった。でも押さえた。今ここで泣いたら私はただの弱い女だ。ロストを苦しめる最低の女だ。そんな女にはなりたくない。プライドと言われればそうかもしれない。けど私にはそんな思いはみじんもなかった。

レイやブレイドがあとからやってきた。ブレイド達に訳を言った。

ブレイドは知っていたみたいだった。ロストは“マジかよ”と言い、笑っていた。レイは何も言いはしなかった。

？

「何だよ？話って」

レイはハーツを仕事に戻させた。

「ロストに・・・言わないといけない事があるんだ」

「オレが母体になったらの話か？」

「！！知ってたのかい？」

「ああ。魂と体は一心同体。オレが母体になる時は・・・オレは消えるだろうな。オレが母体として存在する肉体がないからな」

「肉体なら用意しようと思えば・・・」

「それはできねえよ。オレの肉体は死んだんだ。オレが宿れる所なんざあもう何処にもないんだよ」

「特例でもかい？」

「ああ。それにオレは予言に関係ない。予言の人間はまだ生まれてもないからな」

「予言。それは世を革命へと導く使者。その一人が狂った革命家マツドハッターともう一人の革命家アリス。その二人がこの世に生まれ堕ちた時、世は大きく変わる。それを守護する八つの者。エーススートとデューズスートもこの世界に生まれ堕ちる。たとえその者の誰かが死のうとも革命家である二人が生きている限り何度でも甦る。・・・だったかな？」

「ああ。ジャックであるオレならそういう魂がいれば感じ取れるはずだ。自分であつてもな。だがそれを感じ取れない。だからオレは予言には関係ない」

「そうか」

「・・・オレがいつ消えるなんざあまだわかんねえし、先の事だから安心しな。レイ」

「わかつているさ。ただハーツの悲しむ顔だけは見たくないと思っただけだよ」

「そうかよ。なら二人とも。この事は・・・ハーツには言うなよ。オレからのお願いだ」

「わかったよ」

「ああ」

「ありがとな」

男と男の約束を交わす。頼んだ本人はすでに女だけれどそこが重要じゃない。重要なのは魂。

? Q 作りだされたもの3

?

ジャックになって十年が経った。一番印象に残っているのは小さい男の子だ。その子は九歳でこの世界に別れを告げた。死因は病気によるものだった。その子は言っていた。

「僕はたった九年しかいらなかったけどそれでもよかったと思う。だってこんなにもたくさんの思いと出会う事ができた。だから僕は後悔なんてしてないよ。この世界にいられた事を」

その言葉が強く響いた。こんな小さな子がこの世界にいる事のすばらしさを知っていた。オレも・・・こんな風に思えるようになるだろうか。こんな風に思えたらきつと世界が今よりもっと楽しくなるのではないか。じゃあオレはこれから思いに出会おう。オレがこの世界に生まれた意味を・・・知りたい。このジャックという仕事を通してそれを知っていけばきつと見つかる。自分が納得する最良な答えが。

それからの日々は楽しかった。ハーツの気持ちやレイの気持ち、ブレイドの気持ちができるようになった。ハルトがレイと共謀してやるいたずらがそれまでは楽しそうに見えなかったがすごく楽しそうに見えた。だってブレイドもあれで笑っている。ハルトの中からだけどそれが見えた。レイもかなり笑ってる。ハーツはそれを見守ってる。変わらない。あの頃と。

ウインはというと研究院の一人となった。配属されたのはアン・スピードがいるチームだった。

「はじめまして。ウイン・ハートロットです」

「ほう。ハートロット家のもんか。へえ」

煙草を吸いながらアンはウインに近付く。

「け、煙たいです」

「あっ。煙草、嫌い？」

「いや・・・そういうわけでは・・・」

「じゃあ文句は言うなよ」

煙草をくわえる。

「アン教授」

「何？」

「今日は・・・どうするのです？」

「今日は・・・いいや」

「昨日もそうじゃなかったですか？」

「俺、真面目じゃないし。真面目にやりたいんなら勝手にお前等であつてれば。責任は俺が取るから」

アンさんは部屋を出た。

「・・・いつもあんな感じなのか？」

「ああ。頭はいいがこの研究に協力的じゃない。何を考えているんだかまったく読めない人だ」

アンは一人で煙草を吸っていた。

「いずれ・・・この世界に肉体を持った生魂が犠牲になる」それは遠くない未来の話。

？

私がクイーンについてもう百年になった。次代のクイーンを決める。そんな時期だった。

「どうしようかな」

「何が？」

「決まってるじゃん。キング。次のクイーンだよ」

「ああ。それか。キングの方もどうしようかな。いい子、いないんだよな」

「私も同感」

「俗っぽいのがそろそろ来そうだね。どう誤魔化そうかな」
「私もそれ考えないとなく」

「キング」

秘書がレイを呼びに来た。

「何だい？」

「キングに御面会したい方が・・・」

「すぐこれだ。じゃあね」

レイは部屋を出た。

「キングもたいへんだな」

人の事は言ってられない。そう私もいずれ・・・この嵐だ。きっと。

「で何ですか？話というのは？」

「ぜひ我が子を次期キングに推薦して欲しいのです」

「・・・ハートロット家も堕ちたなあ。まあウィンがなれなかったから必死なのかな。」

「いくらお願いされもあなたの家の子を推薦しません。僕の目からして彼はキングにはふさわしくくないと思いますよ」

「そこを何とか・・・」

「ダメなものはダメです。諦めてください」
ハートロットの当主が帰った。

「はあ」

「キング。次も御面会が・・・」

「わかった。通してくれるかい？」

「はい」

さて、次は・・・どう来るか。入って来たのはアン・スペードだった。

「ア、アンさん」

「よ」

何の用で来たんだろう。この人は。

「何の用で来たんですか？」

「ん？忠告」

「忠告」

「ああ。へたに反対ばつかすんな」

「何ですか？」

「・・・今なある実験が行われようとしてる」

「実験？」

「ああ。この世界に生きた肉体を持った生魂を使った生魂と死魂の融合実験だ。その実験台を探している」

「な、何ですか！？それ」

「それでな・・・ある貴族にその実験に使われる薬を渡したそう
だ」

「渡したって・・・」

「何に使うかはわからないがたぶん脅しの道具か何かに使うんだろ
うな」

「まさか・・・！！」

「確証はないけど充分にあり得る話だ。まあ俺ならお前の所には万
が一あってもいかないけないけどな」

「な、何ですか？」

「ん？お前、知らないのか？自分が何て呼ばれてるのかを」

「いや」

「まあ・・・どうでもいい事だけだよ。歴代キングの中で一番の
策略家、そんな頭脳を持ってるって思われてるよ。あんたはな」

「そんな僕は・・・」

「まあ・・・そんな事はいい。こうやって実験台探す所を見ると・
・反乱分子に対する見せしめとでも考えてるんだろうな」

「反乱分子って・・・」

「魂の進化論に反対する奴等が最近動きを見せてるみたいだ。だか
ら何か反乱運動でも起こしてみろ。お前等と同じ意志を持った奴が
実験の餌食にされる。そういうメッセージでも配信したいんじゃない
のか。人一人を犠牲にしてまでもな」

「！！」

「まあハートロットとクローバリアは白だと俺は見てる」

「クローバリアはわかりますが何でハートロットも？」

「ハートロットはグレイがいた所。そいつがお前を選んだ時点でそんな事はしないのはわかっていたからな」

「グレイさんは僕が死魂側だという事を知っていたんですかね？」

「だろうな。そうじゃなきゃ自分の家のもんを選ぶだろうよ」

アンさんは煙草の煙を吐く。

「クローバリアは魂の進化論には初代当主の頃から反対してしましたからね」

「ああ。だからあり得るのはスペードリアとダイヤルーツだ」

アンさん。自分の家の名が出たのにあり得ないとも言わない。それどころか逆に疑っている。この人も読めないな。

「で・・・その実験は確か・・・今回で二回目じゃなかったですか？」

「ああ。一回目は死魂を持った肉体に生魂を融合する実験だ。うまくは行ったらしいけどな」

「誰だかわからないんですか？」

「ああ。上層部しか知らない。残念ながら俺は上層部じゃないんだ」

生きた肉体を持つ生魂の者。押し掛け。脅しの道具。ん？脅し？僕なら・・・自分の子をキングにするためには脅しになんか使わないでターゲットを襲って問題を起こし、僕達に次期キングを決める権限を取り上げる方を考える。わざわざ脅すよりもそっちの方が実験台も得られるし、運が良ければ自分の子もキングにする事ができる。もしアンさんが言っていた事が本当なら・・・！！

「アンさん！！ちょっと僕と一緒に来てもらえませんか？」

「いいけど何だ？」

「ハーツが危ない！！」

「何！？」

間に合ってくれ。頼むから。僕等はハーツの所へ向かった。

僕がハーツに思いを告げたのは最近の事だった。キングの仕事を

している時は会いには行けても恋に現を抜かす事はできなかった。仕事ができなくなるそう考えたからだった。けど今年でキングの職も終わる。だから僕はハーツに告白をした。“好きだ”と。ハーツはその時驚いていた。そして泣きながら言っていた。“気持ちは嬉しい。でもこれだけは知っておいて。私は諦められない人がいる。でもそれはもう叶わない恋”と。僕はそれを聞いてすぐにロストの事だと思った。だから僕は“もしかして・・・”と言ったら彼女は涙を浮かべながら言った。“うん。私って馬鹿よね。諦めれば楽になるのに・・・でもあの笑顔を見ると諦めきれなくなる。わかっていてもまた好きになっちゃう”と。彼女は堪えていた涙を流していた。僕はあえて何も言わなかった。言ったところで彼女が泣くだけだ。だからただ彼女を見つめていたんだ。

「クイーンのところまではどれぐらいかかるんだ？」

「ここから・・・一時間はかかります」

「・・・何かあったら・・・ちゃんと考えてあるんだろうな？」

「まあ。一応は考えてあります。その時は・・・協力をしてくださいね」

「あいよ」

僕等は走った。

？

ハーツの自室についた。そこでは使用人がすでに殺されていた。

「・・・短剣で心臓を一突きにされてるな。どの死体も即死だ」

「ハーツ！！」

僕はハーツの部屋のドアを思い切り開けた。そこにはハーツがいなかった。

「・・・遅かったか」

「ハーツ！！」

泣きそうになった。けどアンさんがそんな暇はないと言う。

「何か考えはあるか!？」

「……アンさんはアンさんが思い当たる所に行ってくれませんか？」

「それでいいんだな？」

「はい。僕はハルトとブレイドに連絡します」

「わかった」

アンさんは部屋を出た。

『プルルルル、プルルルル、プルルルル』

「電話？」

ハルトは電話を取る。

「はい。ハルトですけど……」

『ハルトかい?』

「どうしたの? 息なんか切らせて」

『ハーツが何者かにさらわれた』

「な、何だと!？」

『今すぐハーツの自室に来てくれるかい?』

「わかった」

ロストはハーツの自室に行った。

僕はその後ブレイドの所にも電話した。そして二人が来た。

「でハーツは何処にいるんだ？」

「たぶん……研究院だ」

「待て。行くのはいいが……その前に誰がやったかつきとめた方がいいんじゃないか?」

「そんな時間ねえだろ。ブレイド!」

「僕もロストと同じだ。早く!!」

「まあ待て」

ブレイドは目を閉じた。しばらくすると目を開けた。

「わかったぜ。犯人。じゃあ行くぜ!」

僕等は研究院に向かった。

「やっと……やっと手に入った!! 私たちの光を!」

「・・・やっぱり、お前だったか。オセ」

「なんだ、アン。君か」

「・・・スピードリアはこの実験に参加していない。そうなるダイヤルーツしかない。お前ならやりかねないと思っていた」

「君には・・・ないのか？出世欲というものが!!」

「あんたほどはないな」

「・・・そうか。君は名誉はいらないのか。私は欲しいよ。そして歴史に名を残すんだ!!」

「・・・あっそ」

「・・・それで君はどうする気だ？」

「・・・お前が絡んでるのなら俺は手を引く。お前じゃあ・・・俺の立場も危うい」

「手を引くのか？君もこの子の命より自分の方が大事か」

「てめえに俺の腹ん中明かすわけねえだろ」

「それもそうだなあ」

「それに・・・助からないんだろ？その子」

「アンは後ろを向いた。そこにはキング達であるレイ達がいた。

「助からないってどういう事だ!？」

「君らに解毒剤はつくれない。この薬は魂にプログラムするためのものだ。プログラムを書き換える事ができるのは私達にしかできない!!」

「くそ!!」

「待て!ロスト」

ブレイドがロストを止めた。

「あなたは・・・オセ・ダイヤルーツですね？」

「私の名を知っているとは・・・博識なジョーカーだ」

「あなたは・・・何を条件にしたら彼女をこちらに渡してくれますか？」

「ほう。取り引きをしようというのか!!この私と」

「はい」

「フフフ。アハハハハハハハハハハ！いいだろう。だが簡単に取引は応じないがな」

「そうでしょうね」

ブレイドは小声でロストに話しかけた。

「とりあえずお前等二人は落ちつけ」

「けど!!」

「ぶん殴りたい気持ちはわかる。だが・・・確実にハーツをこっちに引き渡してもらうためにはこうするしかない。・・・この役目は俺よりレイの方が適任だろうがお前もお前で混乱しているからな」

「・・・まあね!! 僕もあいつを・・・!!」

「だから俺がやる」

「で・・・何か案はあるのか？」

「まあ。それより・・・アンさんでしたっけ？」

「ああ」

「あんたも何かいい案考えてくれ。ハーツを救える方法か何かを・・・」

「信用していいのか？俺なんかを」

「この場で魂の進化論に詳しい者はあんたしかいない。だから頼んでいるんだ」

「わかったよ。だが取り引きはお前でやれ！オセがいる手前、俺はお前等に手は貸せない」

「わかりました」

「考えはまとまったかな？」

「はい。次期キングとクイーンを推薦できる権限を取り引きの条件として提示します!!」

レイにはそれが理解できなかった。

「な、何を言うんだ！？そんな事したら奴等の思う壺じゃないか!?」

「じゃあハーツを見殺しにしろっていうのか！？これ以外、奴は取り引きには応じない。ならこんな権限はとっとと捨てて自分の大切に

な人を助けようとしろ!!」

「わ、わかった」

「キングも了承した。さあこれほどいい条件はないでしょう!!」

「ああ。それで手は打とう。だが死魂である君らの権限までは手を出さないよ」

「・・・・では取り引きは成立ですね」

「ああ。さあハーツ嬢を連れていくがいい!!」

レイはハーツを抱き上げるとロスト達と共にレイの自室に帰った。

? K. 作りだされたもの 4

?

レイの自室に今はいる。

「で何か思い付きましたか？ アンさん」

「・・・かなり危ない賭けだがあれをするしかない」

「あれ？」

「予言を決行するしかない」

「予言ってあの革命家の？」

「ああ。予言書ならチェシャ猫から借りてある」

「でもそれって・・・」

「そのままの可能性は二分の一だ」

「アンさん！！それじゃあハーツは・・・！！」

「だとしてもこれしか方法はない。黙ってみていろ！レイ」

レイは黙り始めた。

「ロスト。アリスのランプはあるか？」

「あるけど・・・」

「貸せ」

ロストはそのランプをアンに渡した。そのランプには少女の絵が描かれていた。アンは予言書を開き、アリスのページにランプをはめる事ができる溝にはめた。そこにハーツ・ハートロットという名前を書いた。

「これでいいだろう。まあハーツのままか来世か・・・もうそこに賭けるしかない」

予言書は光り出し、その光はきれいな赤で、その光はハーツの中へと入って行った。

?

「ねえ。新聞見た？」

「いや。見ておらんよ」

「なら見なさいよ。一面」

そう言われてグレイは見せてもらった。そこには実験の事が記されていた。

「な、何や？これ！！」

「・・・注目するのは最後よ。ほら」

「ん？ “ハーツを搜索する事はしない”。どういう事や！？これ！！」

「あいつ等がそう易々と実験台を渡すような事はしない。何か・・・レイ達がしたんじゃない？」

「そうかもしれへんな。ほなウチはレイ達の所に行くで。グレイヴは？」

「私も行こう」

「チェリツシュは？」

「行くに決まってるだろう」

「リラはどないすんの？」

「私はいいわ。あとで聞かせてもらおうから」

「・・・行くで」

グレイはレイの所に行った。

ハーツはあれ以来起きない。一晚経ったおかげでレイもロストも落ちつきを取り戻した。アンさんは一度研究院に戻った。戻らないとヤバいらしい。おれ等はただハーツが起きるのを待った。そこにノック音がした。おれはドアを開けた。するとそこにはグレイさん、グレイヴさん、チェリツシュさんが来た。

「何しに来たんですか？」

「あんたらに訳を聞こう思てな^{おも}」

そうか。新聞を見たんだ。この人達。そりやあ・・・ニュースになるわな。

「それは・・・」

おれが説明した。おれがした方が単純にいいと思ったからだ。

「そういう事やったんか」

「はい」

「・・・奴等、とうとう生魂まで手を出した。これはヤバいんじゃないのかい？」

「チェリツシュさん」

「あんたの判断は間違えじゃないよ。だから気にする必要はないよ」
「はい」

「でアン？あんたはどう思う」

「・・・どうってウチはそんなええ案あらへんよ。ウチは研究院に所属しておらんし。まったくわからへんし」

『コンコン』

またノック音がした。開けたらアンさんと女性が入って来た。

「誰ですか？その人」

「なんだジョーカー知らないのか？こいつはジェシカ・ハート。俺と同期のクイーンだ」

「ジェシカ・ハートよ。よろしくね」

胸のポケットに煙草が入っていた。この人喫煙者なんだな。

「何でこの人を連れて来たんですか？」

「こいつは上層部の一人だ。まあ魂の進化論なら俺以上に知識がある。だから連れて来た。それにこいつならお前等の敵になる事はない。信用はできる」

「アンさんが連れて来た人なら一応信用しますよ」

「ありがとな」

「さて・・・早速私から提案があるのだけどいいかしら？」

「何ですか？」

「ここにいるメンバーでレジスタンスを組織するというのはどうかしら？ハーツが生まれ変わったあと、その方が動き易いと思うのだけど・・・」

「それええ案やな。せやったら、隠れにせーへんか？」

「・・・それがいいわね。ここには訳ありますが私を含め5人いるわけだし。名前はそうね・・・エスPOWER・ルーチェ。意味は“希望の光”」

「ええな。それ」

「・・・まあいいだろう」

「いいんじゃないのかい」

「いいですよ」

「アンは？」

「いいんじゃないね」

「そっちの二人は？」

「いいですよ。別に」

「・・・いいよ。それで」

「じゃあ決まりね。この事は口外にしちゃダメよ。隠れの意味がなくなっちゃうわ」

「了解」

その後、レイはおれとロストを連れて別の部屋に行った。

「話って何だ？レイ」

「ロスト。君は・・・ハーツの事をどう思ってるんだい？」

「・・・好きだと思ってる。けど・・・叶わない事もわかってる」

「そっか」

「・・・なあレイ。お前、言ったんだろう？ハーツに」

「うん」

「じゃあ頼むよ。あいつと付き合ってくれ」

「ロスト」

「たぶんあいつは・・・普通の恋がしたいと思うんだ。だから頼む」
「・・・わかった。ハーツがどうかかわからないけど」

「ありがとう」

レイはハーツの所に戻った。おれとロストの二人つきり。ロストの苦しみは正直わからない。だって彼は男だったのに気付いたら女に

なっついて気付いたら女であるハーツを好きになっていた。おれは特殊じゃねえしごく普通な男。ロストの気持ちをわかりたいけどわかってあげられない。自分が情けない。でも本音を聞くだけはできる。

「お前、本当はどう思ってるんだ？」

「本当はって……」

「聞きてえんだ。お前の本音を」

「聞いてどうするんだよ！！お前に何ができる！？何がわかる！？」

「何もできねえし、何もわかんねえよ！！けどお前、悲しくないのか！？悔しくはないのか！？お前の大好きな女が他の男に盗られたんだぞ！！」

「……悔しいに決まってるんだろ！！」

ロストは泣いていた。

「本当はオレ……あいつと付き合いたい。けど……この体でそんな事ができるか！？この女の体で！！」

ああ。こいつは誰よりもハーツの事を考えてる。ハーツは普通の女の子だ。いくら自分の事が好きだという事を知っていてもそれができない事をわかってるんだ。

「諦めたくねえよ。他の男のもんなかにしたかあねえよ。でもあいつ、遠まわしに言ったんだ。普通の恋がしたいって。それがあいつの願いならせめてオレは叶えてあげたかったんだよ！！」

優しい。素直にそう思った。神がこの世界にはいるのに……何んという試練をこいつに与えるんだろう。こんないい奴に。運命は理不尽だ。神は気まぐれだ。

「……なあロスト。お前、今……ハーツに何もしてやれないと思ってるだろ？」

「……」

「……そんな事はないぜ。一緒にいる事なら女にでもできる。笑顔をやる事だってできる。何も彼氏だけがハーツの元気の源になるわけじゃねえんだぜ？」

「ブレイド」

「・・・お前はお前のやり方であいつを幸せにしたらいい。お前にしかできないお前だけのやり方で」

おれは・・・これぐらいしか言う事はできない。本当はちゃんとわかってあげたい。わかって最良の答えを教えたい。でもおれにはこれが限界だから。許してくれなくていい。せめて・・・おれの思いがこいつに届けばいい。

「・・・それでいいのか？」

「ああ」

「あいつは・・・笑ってくれるかな？」

「笑ってくれるさ」

「・・・ありがとう。ブレイド」

たぶん、ロストは満たされない事をわかってる。でも・・・ハーツの願いが叶うのならきつと満たされるだろう。おれはそう信じてる。

「いいさ。別に」

おれはそれを・・・見守る事にするか。こいつ等の仲間として。友として。

？

アンとジェシカは職場に戻っていた。

「ん？」

アンが自分の研究室に入るとそこにはウインがいた。

「これは一体、どういう事ですか!？」

新聞を差し出す。アンは煙草に火をつけた。

「見てわかんねえか？お前のいとこが実験台になったんだ」

「そんな事はわかっています!!」

「・・・言っとくがハーツはたまたまそうなったただけだ」

「しかし、生きた肉体も持つ者にどうして実験なんかを!？」

「さあ。そこは俺も知らんな。俺はこの研究にはまったくというほ

ど関わっていないからな」

「……………。退職させてください」

「…………。別にそれはかまわねえがその後、どうするんだ？この世界にいるうちはどこにいても安らげる場所なんてねえがな」

「……………」

「…………。逃げたいんなら、お前に頼みたい事がある」
次の日。

「なあ、ハルト、レイ」

「何だい？ブレイド」

「新聞見ろ。三面」

「どれどれ」

二人は新聞を見た。そこにはハートロット家のウイン研究員が研究院を退職し、失踪と書かれていた。

「こ、これは…………」

「たぶん、あいつ」

「うん。ハーツの件で研究院にいたくないって思ったんだね」

「探すか？」

「…………。探すのはハーツが起きてからがいいんじゃないのかな？」

「あたしもレイの意見に賛成。いくら捜索しないと報道されても万が一の事がある。それに今はウインよりハーツの方が重要だと思う。こういう言い方はよくないけどね」

「わかったよ。じゃあそれで」

それから一時間後ぐらいだろうかハーツが目を覚ましたのだ。

「ハーツ」

「みんな…………。ずっと待ってたの？」

「そうだよ。ハーツ」

「ありがとう。みんな…………。レイ」

「何だい？」

「前に言ってくれた事…………。私でいいのなら…………。お願いします」
…………。ハーツから言うとはおれもロストも思っていないだろう。

だけどハーツは察していたし、ハルトの前では言えない事でもあった。

「いいのかい？」

「うん。たぶん、その方が・・・きつと喜んでくれるから」

ハーツが笑っていた。無理してるのがおれにはわかった。ロストがこの光景を間近で見えていたらきつとおれと同じように見えていた事だろう。そうだとってもあいつは一体、何を思うのだろう。このハーツを見て。

「ねえアン」

「何だ？ジェシカ」

二人は煙草を吸っていた。

「あなた・・・あのハーツって子に何をしたの？」

「何をつて・・・マッドハッターの時と同じ事をしただけだ」

「あなた・・・わかってるの？あれは二分の一もない。完全に別人なのよ。なのに・・・あの子たちに賭けようって言ったんでしょう？」

「ああ」

「残酷な事をする人ね」

「ああ言う以外なかったただけだ。それに・・・結局は探すんだ。あん時のあいつ等の精神状態上、あれでよかったと思う。希望も持てるしな」

「マッドハッター、アリス。これで予言に出て来る革命家は準備オ―ケーね」

「ああ。時期が来たら・・・動き出さないと」

「ええ。この世界に存在する魂を救う為に」

「さあグレイ。聞かせて」

リラはグレイから話を聞けるのをずっと待っていた。

「あんたに言う事は何もないで。リラ」

「何だよ？」

「あんたはどっち側だかはっきりせーへんからや。で、どっちなん

？」

「・・・どっちでもないわ。私はあくまで中立。そして負けた方を私はついばみたいのよ」

「まずいと思わへんのか？」

「・・・確実に私は獲物にありつきたいだけ。だって・・・危険を選んで命を落とすより、待ちわびていた方がいいじゃない」

「・・・あんたはウチがもし負けた側におったら・・・ウチもあんたの餌食。そうやろ？」

「・・・さあ。あなたは食べないかもね。一応、同僚だもの」

「それはおおきに。せやったら邪魔せーへんでくれ」

「わかっているわ」

「研究院における理由も金のためやろ？」

「まあ・・・ね」

「ほんま、欲望に忠実な女やなあ」

「・・・そう。褒め言葉として受け取っておくわ」

「予言が実行されました」

グレイヴは自分の仕事場にいた。

「ほう。これで・・・二人は揃ったな」

「いかがなさるのですか？」

「あとはすべてこちらで決める。その時までお前は待っているがいい」

「はい。我が主の仰せのままに」

次の日。おれとハルトでおれ等の母校に行った。次期ジャックとジョーカーを発表する日が今日なのだ。

「誰にしたんだよ？」

「この子」

ハルトは持っていたプロフィールを見せた。そこにはグレイドという名が書かれており、性別は男であった。

「こいつか・・・男か。おれは・・・まあこいつ」

おれも同じように見せる。名はアリアという女だ。

「へえ。きれいな人を選んだじゃん。見た目？」

「ちげえよ。性格だ。おれは一度、候補者全員と一対一で話したからな」

「何、話したの？あんた」

「まあ・・・テストみたいなおもんでよお、おれがまあ相手を脅して、その反応を見るって事をやったんだ。それでそいつが一番、冷静に反応したからそいつにしたんだ」

「ふーん。馬鹿なあんたにしては考えたね」

「馬鹿は余分だよ！馬鹿は！！」

「はあ？だってあんたは馬鹿でしょ！？いつも馬鹿やってんだから」

「はあ？やらされてるの間違いだろ！？」

「はあ？違うし。あんたが馬鹿をやってるだけ」

「何だと！！！！」

「何！！！！！！」

沈黙した。言いあってもしょうがない。

「それより・・・キングとクイーンはどうなったんだろうな」

「だね。何も聞いてないもんね」

おれ等はキングとクイーンが誰になるのか・・・気になっていた。

? A. 作りだされたもの5

?

発表の時、おれ等の所には監視役としてアンさんが来た。

「暴れんなよ。誰になっても」

「わかってますよ」

アンさんはロストが暴れないように見張る為に自分からかって出た
そうだ。

「それにしても・・・どっちがキングを選んだんだろうな」

「アンさんも知らないんですか？」

「予想はできてるがな。オセ・ダイヤルーツがハーツに葉をもった
んだ。当然、ダイヤルーツがキングを選ぶ事はな。あとは消去法だ
な。ハートロットは被害にあった家だから除外。クローバリアは論
外。そうなるとスペードリアが残るってわけだ」

「アンさんってスペードリアですよね？」

「ああ」

「クイーン候補の子ってどんな子なんですか？」

「ライラの事か。・・・まああの子はスペードリアの蛇をちゃ
んと受けつい出る所為か性格はくそ気持ち悪いがな」

「スペードリアって・・・なんかいやな性格の集まりなんですか？」

「・・・まあ間違いじゃないわな」

「つか・・・あんたに気持ち悪いって言われたら終わりじゃん」

「・・・言うな、ハルト」

ハルトの言う事は間違いないな。この人の性格は飄々としている上、
見えるような性格はしてないからな。

こんにち

「それでは・・・発表します。今日より、キングを受け継ぐ者は・・・

・フレディ・ダイヤルーツ」

やっぱりそうなるか。キングの方が貴族としてのメンツもあがる上、
この一世紀の間、楽園の苑では英雄だと思われるからな。

「続いてはクイーン。クイーンを受け継ぐ者はライラ・スペードリア」

「ハルト」

「何？」

「押さえられてるか？」

「まあ・・・ギリギリだけどね」

「それではジョーカーとジャックに移ります。ジョーカーはアリア。ジャックはグレイドに決まりました。それではこのまま、引き継ぎ式を始めます」

フレディとライラに証である王冠とティアラを渡す。ジャックにはハルトから鎌を渡す。すると小さい妖精のようなものが現れた。

「何？こいつ」

「あたしはリム。あなたの力から生まれた・・・この鎌の精です」
「・・・・・・・・まあいいか」

「これで引き継ぎ式を終わります」

「・・・・・・・・無事に終わったな。引き継いだアリアとグレイドが来た。

「何で私を選んだ？」

「理由は一つだ。お前が一番、おれが欲しかった答えに近かったからだ」

「あれで近かったのか？」

「ああ。驚いたぜ。まさか・・・脅してるのはおれなのに逆に脅されたからな。あれにはおれも困った」

「あの時のお前はかなり動揺してたからな」

「・・・・・・・・あんな姿は絶対に誰にも語らないでおこう。」

「・・・・・・・・選んでくれた事には感謝する」

「ああ」

グレイドがハルトの方に行く。

「お前は何でおれにしたんだ？」

「ん？理由はあたしより強そうだからかな」

「・・・・・・・・それだけ？」

「うん」

ハルトらしいな。

「それじゃあ頼んだぜ。二人とも」

「はい」

おれ等はこうしてこの日を終えた。

？

あれから月日は経った。ブレイドは夢の支配人に所属し、レイは研究院に所属する事になった。一方のオレ・・・ハルトは何も所属はしない事にした。もう十年経った。その中で一番のニュースだったのがチェリツシュさんが暗殺された事だった。犯人はまだわかっていない。十年の間、オレとレイは様々な形でハーツの為に思い出作りをした。レイと一緒に食事に行ったり、海に行ったり・・・

デートをしていた。レイはネックレスをあげたりもしていた。手を繋いだり、ハグをしたり、キスもした。オレが知っているのはここまでだがたぶん、それ以上の事もきつとしていただろう。ときどき、それが無償に羨ましかった。レイの事を恨んだ事もある。けど二人には言わなかった。ハーツもプレゼントを贈っていた。オレはというと、これはある雪の日の事だった。オレはハーツを外に連れてった。そこには赤のペンキや黒のペンキ、青や黄色、ピンク、オレンジ、緑、紫、水色のペンキ、スプレーの奴や刷毛もあった。オレはまずスプレーで文字を書いた。飾りつけでペンキを使った。雪がいろんな色に染まる。オレはこれをするのが結構好きだと言ったら笑われた。子供みたいだと。オレはその時は拗ねたけどハーツの笑顔は最高だった。ハーツが帰ったあとオレはピンクのスプレーを使ってメッセージを書いた。“お前を忘れない。オレの天使”と。写真も何枚か撮った。本当に楽しかった。でもここ最近でハーツはかなり衰弱していた。起きあがる事もできなくなった。もう近いんだという事を察知した。ハーツが死ぬ。オレの方が早いと思っていたの

に裏切られた感じた。神様とかいう奴に。

ある日、オレはブレイドとグレイヴさんと一緒にお見舞いに行った。三人で行ったのは理由があった。アンさんからある事を言われたからだ。それはハーツが今日で死ぬという事だった。アンさんは予想していたのだ。だからオレ等は向かった。レイにはこの事を言っていない。今のレイはハーツがすべてだ。この事を言ったらきつとあいつは壊れる。そう思ったから連れて来なかった。アンさんやジェシカさん、グレイさんは仕事があるらしく来れないと言っていた。ハーツがいる部屋に入る。もうこの顔を見る事ができないのか。たくさんの笑顔をもう思い出として思いだす事しかできない。一緒にいる事も叶わない。オレは・・・オレとハルトの方が早くこの世から消えると思っていた。それなのにハーツの方が早いなんて・・・。想像もしていなかった。これが現実だという事を痛感する。残酷だ。だがそれが運命という名の現実なんだ。ハーツが薄らと目を開けた。

「ロスト、ブレイド、グレイヴさん。来てくれたんだ」

「ああ」

「・・・・・・・・私、今日で死ぬのね」

沈黙していた。グレイヴさんが何かを言いたそうだったけど黙っていた。

「・・・・・・・・レイにありがとうって言ってくれる？」

「ああ」

「・・・・・・・・たぶん、私はもうこの先、私という人格が肉体を持つ事はない」

アンさんが言わなかった事を勘づいていた。オレとブレイドはアンさんが信じられなくて聞きに行った。そしたら来世ではハーツが肉体を持つ事はないという事だった。それを聞いた時はショックだったけど冷静に考えれば辿り着く真相でもあった。

「だから私は待ってる。またあなたに会える・・・その瞬間を」

「・・・・・・・・必ずお前を探し出す。どんなに時間がかかろうと・・・」

・約束だ」

「本当？」

「ああ」

「・・・嬉しいな。ありがとう・・・ロスト。ブレイドもありがとう」

「・・・ああ」

「グレイヴさんもありがとうございました」

「いいさ」

「・・・さようなら」

ハーツは目を閉じた。左目から涙がこぼれる。それから少ししてハーツは息をひきとった。

オレは一週間ぐらい立ち直れなかった。葬儀もやったし、それに一応、出席した。レイは泣き崩れていた。ブレイドがハーツの遺言を伝えてくれた。だがそれが届いたのかどうかはオレにはわからなかった。

？

それから半世紀経った頃だった。ジェシカさんから言われた。そろそろ先手を撃たないとこのままでは負けてしまうと。レイ、あたし、ブレイド、アンさん、グレイヴさん、グレイさん、ジャックとジョーカーで話していた。レイがある提案をした。それはエースストをお取りとして使いその間にマッドハッターを目覚めさせるというものだった。予言はすでに実行されている。それなら利用しない手はないという事だった。魂の管理を行っているジャックにマッドハッターの魂をウインの子供に与えて欲しいとレイが言った。ウインはこの時、あやめという向こうの世界の女性と結婚していて子供が一人、生まれていた。あやめさんは二人目が欲しいと言っていた事をウインから聞いていたのだ。エースストの魂も誰かに与える。ジェシカさんもそれで行こうと言った。レイは付け加えるようにで

できればエーススートもすべてこちらの仲間にできればそれがベストだと。レイはその後部屋を出た。それを待っていたかのようになシカさんが話し始めた。これに便乗してアリスの方もやって欲しいと頼んだ。デューズスートの魂もその時に誰かに与えればいいと。マッドハッターとアリスはなるべく近くにするようにとも言おう。ジヤックは了解したと言い、早速仕事に取り掛かった。そして・・・それは今という現実に関わる。

「・・・お前にこんな事を頼むのは本当は嫌なんだ。でも・・・もう時間がない」

「そう思うんだったら自分でやれよ!! オレは引き受けないからな」
「・・・そうかよ。お前に頼んだのが間違いだったな」

もう半分以上が消えている。

「・・・時が来たようだな」

突然、男が一人現れた。一体、誰だろう。きれいな青い目を持った黒髪の男だった。

「お前は誰だ？」

「・・・私はロストの先輩にあたる者だ。名前はグレイヴ・クローバーだ」

「何の用で来た？」

「ちよつとな。お前は・・・こいつの事をどう思う？」

「どう思うって・・・そりゃいい奴だっと思ってるけど」

「・・・そうか。じゃあお前にこれを渡す」

グレイヴさんが渡したのは匣だった。

「これを・・・どうするんだよ？」

「気になるのなら開けてみる」

オレはその匣を開けてみた。するとそこにはたくさんの何かが噴き出した。それはすべてロストの方に行き、溶け込む。オレはあわてて、その匣を閉めた。

「・・・この世界に存在する神話の中にあるだろ？ パンドラの匣とかいう奴が」

「・・・たしか、神がパンドラという女性に箱を持たせた。彼女は箱の中身が気になり、開けてしまった。そこにはありとあらゆる災厄が詰まっていた。その災厄は地上に飛んで行った。彼女は怖くなり、急いで箱を閉めた。その中には希望というものが残った・・・とかいう話だろ？うろ覚えだけどな」

「そうだ。・・・似てるだろう？」

「え」

「さっきのお前の状況に。私が神なら、お前はパンドラ。そして箱を開けた。まあその中には災厄なんていうものは入っていないがな」

「じゃあ一体、何が入ってたんだよ!？」

「・・・ロストがこの世界に生き残る為の術みたいなものだ。そしてお前が閉めた中は・・・」

グレイヴがそう言うと言が光り出した。その匣ごとロストの中に吸収される。消えていたロストがどんどん物質として存在していた。

オレはグレイヴさんの方を向いた。だが彼はそこにはいなかった。

「何だったんだ？あの男」

オレはロストを担いで保健室に向かった。

保健室でとりあえずベッドを借りた。そこにロストを寝かした。

それにしても・・・どうしてロストは救われたんだろう。あの人・・・

・絶対裏がある。あつ。瑠璃に知らせないと・・・。オレは携帯を使って電話をした。

『プルルル、プルルル。ガチャ』

『賢、どうしたの？電話なんかしてきて』

「波留を見つけたから、今すぐ保健室に来てくれるか？」

『わかった。じゃあまた後でね』

携帯を切る。それから少しして瑠璃が来た。

「波留、どこにいたの？」

「屋上。そこでぶっ倒れてたんだ。だからここに運んだ」

「ふーん」

瑠璃がオレの隣に座った。

「そういえば・・・賢とこうやって話すのは初めてだね」

「言われてみればそうだな。陸斗とか千代とかがいつもいたもんな」
「うん。ねえ・・・賢は前世って信じてる？」

「前世か。・・・どうだろうな。オレにはわかんねえけど・・・あるとは思うよ。魂は廻るって言うし」

「そっか。私ねえなんか・・・波留に初めて会った気がしないんだよね。どっかで前に会った事がある気がするんだ。何でかな」

「・・・」

「ごめんね。変な事聞いちゃって」

「いや」

オレ等はロストを見つめた。あれ？ロストの髪ってきれいな白髪だったよな。半分だけハルトの髪色のようにきれいな黒髪になってる。どういう事だ？

「ん？」

ロストが気がついた。

「波留！！」

「ロスト！！」

あっ！ヤバ！！瑠璃の前でロストって言っちゃまった！！！！

「え？何言ってるの？賢」

ヤバい！！どうしたらいいんだよ、この状況！！

「騒がしいな」

ロストは起きあがった。ロストの目を見るときれいな赤い瞳だったのに黄色の瞳に変わっていた。

「何だ？じろじろ見るなよ。恥ずかしいだろ」

そりゃ見たくもなる。さっきまでのロストと外見が変わりまくってるわけだし。しかも右目の方にタトゥーみたいなものがある。ロストにはそんなものはなかった。どうなってるんだ？

「波留・・・何か声が低いね」

・・・そりゃ低いな。ロストは男だし。男？よく見れば・・・体型は変わってないな。胸はあるし。

「おい。こいつは・・・」

ヤバ！！これはどうにかしないと！！

「オレちよっと用事を思いだしたから、波留ちよっと一緒に来い！！」

オレはロストを連れていき、全力疾走で屋上に行った。

？2. エピローグ（作りだされたもの6）

？

屋上に来た。一応、これまで起きた話を話した。ロストは驚いていた。運よく、オレは手鏡を持っていたのでロストに貸した。

「何だ！？これ」

髪の毛を触ったりしていてロストはパニックになった。とそこにグレイヴさんが現れた。

「元気そうだな。ロスト」

「グレイヴさん！！これはどういう事だ？」

「神がお前に生きろっと言っただけだ。生き残る為に匣をそいつに……名前……何て言うんだ？」

「オレは中平賢。もう一つの名をルーン・ホリックです」

「賢に匣を渡して開けて閉めたらそうなったただけだ」

「……それはいいけどハルトをまったく感じない」

「……そうか。ハルトは消滅してしまったか。まあ強く生き残りたいと思った方を生き残らせるとしか聞いてなかったからな。ロストの方が強かったからロストを選んだだろうな。一つ言っておくが……お前はもうロストでもなければハルトでもない。お前は新しく生まれ変わったんだ」

「じゃあオレは……元ジャックでもなくなったのか？」

「力は関係ないにしろ死魂ではない事は確かだ。ジャックのマークもきつと消えているだろうな。魂に刻まれたクローバーのマークが。だから新しく名前を決めろ」

「オレの？」

「そうだ。お前の事は後で調べてやるから」

「……パンドラ・ラストナイト」

「パンドラだな。お前は这个世界の人間でもある。まあそっちの名前は前と同じでいいだろう」

「ああ」

「さてとじゃあ改めて頼み事があるんだ。お前等二人にな」

「頼み事？」

「そうだ。アリスとデューズスートを探して欲しい」

さっきのロストの過去話で出てきた奴か。けど探せって言われても宛てなんか・・・。

「たぶん、お前の近くにいる」

「えー!!」

「誰とまではわからないがな」

「探すのいいが・・・」

「ん？何だ？パンドラ」

「オレ等二人じゃあ時間がかかり過ぎないか？」

「そうだと思い、強力な助っ人を呼んだ。こっちにきてくれ」
すると見慣れた奴ともう一人知らない奴が来た。

「エド!!」

「久しぶりだな!! ルーン」

「もう!! 話を聞いたなかつたんですの？あなたは。彼はこちらの世界では中平賢。ルーンと呼ぶのはおやめなさい!!」

「はいはい」

お嬢様みたいな喋りをする女は青の瞳にレモン色の髪をしていた。

「はじめまして。中平賢さん。私、^{わたくし}ナージャ・ブラッティと申しますの。以後お見知りおきを」

「さんはつけないでいいから」

「あら。それでは呼び捨てで構わないですわね？」

「ああ」

「わかりましたわ。私は向^{むか}こうの世界ではハンプティダンプティとして名が知れていますのよ」

「へえ」

「あなたの事はもう知ってますわ。マッドハッターなのでしょう？」
「ああ」

「私わたくしで良ければお力添えしますわ」

「ああ。ありがとう」

「あいさつはそれぐらいでいいだろう。今回、この二人に頼んだのはこの世界で人間の姿を保っていられる、私の知り合いだからだ」

「何で？」

「力による影響だ。キングとかは関係ないが・・・例えばリヒトは知っているな？」

「ああ」

「彼がこの世界に来ると猫になってしまう。なぜならチェシャ猫だからだ」

「???。チェシャ猫・・・猫!! あっ!! そういう事か!!」

「猫だからか!!」

「そうだ。同様にバンダースナッチであるシェリルは犬。ライオンであるレオはライオン。どれもこの世界に存在する生物だ。だからこの世界に来るとそのように体が変化してしまうのだ」

リヒトとシェリルはいいかもしれないけどレオはまずいな。ライオンだし。

「それとは違ってエクエスは一角獣。この世界ではユニコーンとも呼ばれているな。ユニコーンは架空の生き物。だから人間のままでいられる。ハンプティダンプティも架空の生き物。だからこの二人なのだ」

なるほど。理解した。で・・・人を増やしてもあんまり意味がないんじゃない・・・。

「ハンプティダンプティにお願いしたのはもう一つ理由があったな。彼女はジャックの持つ力と同様に魂を見る事ができる」

ああ。それを使って探すのか。

「ええ。私わたくしに任せてください!!」

「同じ学校に固まってもしょうがないから・・・賢、この学校以外でお前の知り合いはどこにいるのだ？」

「百合並高校に何人かいるよ。隣町となりまちだけどそんなに遠くない」

「では二人ともその学校に行ってくれ。手続きとかは私の方でやっておく」

出た。ジャック特有の偽造。いつも思うけどどうやって、やっているんだ。戸籍とかもあるだろうに。

「生活の方はどういたしますの？」

「賢、お前の家は？」

「これ以上は無理だな」

「……ではそこも私が何とかしよう」

頑張るな。グレイヴさん。

「わかりましたわ」

「では解散だな。詳しい話はまた今度だ」

「はい」

「あつ。パンドラ」

「何ですか？」

「忘れてないよな？」

「もちろんです。オレはたくさんの思いと出会うために存在している」

「ならよし。ハルトの分もちゃんと背負って行けよ」

「わかってますよ」

「お前にして本当によかった。では私たちは一度、向こうに帰る」
そう言っただけで、ナージャ、グレイヴさんは帰って行った。

彼は来てくれるだろうか。私の下に。私を探し当ててくれるだろうか。早く会いたい。会いたくてしょうがない。でも私は何もできない。だからロストに頼るしかない。

「早く私を見つけて。私はここにいますから」

これは新たな始まり。めぐり合う為にまたここから始まる。そ

してすべては何処かで交わる。ここからはある少女の話でもある。

?2. エピローグ（作りだされたもの6）（後書き）

こんにちわ^^*来図*です。今回はすべての話が過去という章になりました。エピローグでもっと良い終わり方もあったかもしれないが、せんがあえてあの形にしたのには理由があります。これからその約束を果たす訳です。ですからその時にこの章の本当のエンドを書くべきだと思ったからこそここでは「え！これで終わり？」みたいな終わり方にしました。その辺はご了承いただけると助かります。ですが近々書くかもしれません。一応これで賢を中心とした章は一先ず終わりです。賢だけが中心ではないので。最後にロストを持って来たのは次の中心となる子のため、その前に起きた前提を書いておこうと思います、ロストの章を入れました。賢の過去が語られてないと思う方もきつという事でしょう。ですが賢を中心とした過去はたぶん、これからも書かないと思います。賢の過去は陸斗、千代を通して書いたつもりですし、賢がマッドハッターの理由もロストを通して書きました。ですから賢の視点からでは書かないと思います。それではここで予告に行きます。中心となる子ですが度々出ている瑠璃を中心に行きたいと思っています。それではまた次回^^

0. プロローグ

未だに昔の傷が痛む時がある。どうしてなんだろう。もうあんなに昔の事なのに……。鮮明に頭の中に刻まれている。果物ナイフを持った母親の姿。泣きじゃくる自分。あの頃はどんなに悲鳴を叫んでも届かなかった。妹はこの事を知らない。父さんはこの事を知っている。今は父さんが頼りになっている。でも相談できない事がある。最近だが、自分はこの世界の人間が持っていない何かがあるんじゃないかと感じるようになって来た。どうしてだかはわからない。一体、自分には何が起きているんだろう？ 何かがこれから変わろうとしているのだろうか。妹との関係が戻るのだろうか？ それならそれで嬉しい気もする。全然話してなかったし、仲は最悪だった。本当にそうなのであればいいと思う。でもそうじゃなかったら……。やめよう。想像してもわからない事だしそれに……。気のせいかもしれない。どうせ何も起こりはしないのだから。

? 3. 始まりの鐘

?

屋上にて雑談中のオレとパンドラ。今は昼休みである。冬休みまであと三日。クリスマスのは日はフリーだ。オレも誰かにアタックしようかな。陸斗みたいに……。ダメだ。今のオレにそんな女はいねえ。でもこのまま行くと……。パンドラと仕事をするクリスマスになるな。それだけは避けねえと!!

「探すつてもどうする?」

「どうって……。まあお前の知り合いを当たるのがベストなんじゃないのか?」

「知り合いねえ……。親友とか?」

「ああ。これまでがそうだったんだ。価値はあると思う」

「わかったよ」

オレは携帯を取り出した。チー坊でいいよな。チー坊を電話帳から見つけ、電話をかける。

『何だよ? 賢』

「今、暇?」

『まあ暇だな』

「屋上に来てくんねえか?」

『わかった。じゃあな』

「ああ」

携帯を切る。

「たぶん、すぐ来ると思うぜ」

「そうか」

そう言ったあと屋上に繋がる階段の方から走って来るような足音が聞こえてきた。次の瞬間ドアが開いた。やっぱりチー坊だった。

「で何?」

「いやーこれと言って何もねえんだけどな」

「何だよ!! ねえのかよって……」

チー坊はパンドラの方を向いた。こいつは無類の女（美女）好きで有名。どの子にも褒め称える。だから女子からこう呼ばれている。チャラ坊と。まあハズレではねえわな。

「2-Bの平理波留ちゃん!!? もしかしてこの子をおれに紹介してくれんの?」

「そうだよ」

「マージで!! おれ土井大地って言うんだ。よろしく!!」

「……チャレー。」

「携帯持ってる?」

「持っていないけど……」

「そっか。じゃあまた会おうね。波留ちゃん」

チー坊は屋上から出た。

「んでどうだった?」

「間違いないな。あいつはデューズスートの力を持っている。しかも自覚しているようだ」

「ビンゴってわけかよ」

「……賢」

「何?」

「調べておいてくれねえか? 今日、自主練日だろ?」

「ああ。お前はチア部があるもんな」

「ああ」

パンドラは昨日、瑠璃からの誘いもあつてかチア部に入部した。

「つか……そろそろ終わるな。昼休み」

「ああ」

「戻るか」

オレ等も教室に戻った。

放課後、オレは部室に行った。いつもはチー坊が先なのだが調査という訳で先に来た。チー坊なんか知らないけど自分より先に来る

など言う。そんなのどうでもいいじゃんとか言ったが“おれが困るんだよ”と言われた。まあそれ以上詮索する気はなかったからその時はそれで終わらせたが、今回はそういう訳にもいかない。とことん調べないとこっちが怒られる。それだけは何としても避けたい。怒られるのは構わないがパンドラには怒られたくない。チー坊ならいい。怖くないし。パンドラは一応、女。ほらよく言うじゃん。女は怒らせたら怖いとか。だから嫌だなあ。まあオレは今週、音楽室の掃除当番で今日は抜けて来た。適当な理由を言って。まあうまくいったからよし！だな。部室のドアを開けると誰もいない。それが一番いいんだけど。とりあえず……どこに隠れるか。たしか……オレのロッカーとチー坊のロッカーか向かいあってんだよな。じゃあオレのロッカーにでも隠れるか。オレは自分のロッカーの中に入った。せ、狭い。そして暗い。まあ上の方に隙間があるからそこから覗けば見えるな。部室の中が。

『ガラ』

ドアが開いた。部室は引き戸である。チー坊が入って来た。チー坊は部室に誰もいない事を確認する。いるよ。オレがいるよ。チー坊はロッカーを開け、そこにバッグを放り込む。ら、乱暴だな。まあこの辺は予想通りだな。チー坊はバッグを開け、そこから体操着を取り出した。チー坊はブレザーとカーディガン、Yシャツをハンガーに別々にかける。この辺は予想外だな。几帳面なんだなあ。そしてチー坊はYシャツの下に着ていた半袖を脱いだ。つか……黄色かよ。まあらしいか。チー坊は上半身裸になっていた。まあ脱ぎゃあそうなるわな。チー坊の左肩には大きな傷があった。だからあいつ左だけドリブルができねえかな。つか背中とかすんげえ痣だらけじゃねえか。あいつ……これを隠すために……。

『ガタン』

「誰かいるんか？」

やべえ！！音出しちゃった！！オレの足がロッカーのドアに当たっちゃまった！！このオレの馬鹿！！何で動いちまったんだよ！！チ

「坊は音がした方つまりオレのロッカーを開けた。」

「よ、よう」

まあ当然、見つかってしまった。

「賢」

数分後。き、気まずい。ど、どうしよう。ごめんって謝るべきだよな。けど・・・この空気じゃあ言いにくい！！本当にどうしよう。チー坊と二人でこんな深刻なムードになるなんて思いもしなかった！！

「あのさ・・・チー坊。わ、悪気はなかったんだ。だからその・・・」

「・・・いいよ。謝んなくても。言わなかったおれも悪いし。・・・見たんだろう？」

「ああ。ばつちりと」

「そうか」

聞く気にならない。オレなんか知っていい事なんだろうか。なんかチー坊の影を垣間見た気がした。笑顔の後ろにある痛々しい傷。チー坊はそれと一緒に生きてきたのか。

「・・・チー坊、オレ今日・・・自主練休むわ」

「え。おい、賢！！」

オレは全力疾走で部屋を出た。

「賢」

『ガラ』

入って来たのは陸斗と海斗だった。

「よ。土井」

「陸斗と海斗か」

「賢は？」

「今日、休むってよ」

「へえ。珍しいな」

「そうだな」

？

今は夜の7時。おれは家に帰っていた。おれの家はマンションの4階にある。

「ただいま」

返事がない。まだ父さんは帰って来ていないのだろうか。

「ん？」

テーブルの上に置手紙があった。

“今日は残業があるから遅くなる。夕飯は作って食べておいてくれ。作るのがめんどくさかったら昨日の夕飯の残りが少しあるからそれを温めて食べてくれ。いつも悪いな。父さんより”

おれはその手紙をテーブルの上に置き、冷蔵庫を覗いた。・・・
・・・カルボナーラでも作るか。ちゅうど材料揃ってるし。一応、父さんの分も作っておくか。とりあえず、おれは作り始めた。

玄関を開ける音が遠くから響いた。

「ただいま」

父さんの声だ。案外早かったな。10時くらいになるかと思っていたのに。

「大地く？」

あっ。おれの事、探してる。まあおれの部屋にはいないし、リビングにもいないからな。

「父さん！！おれ、今風呂入ってるんだく！！」

父さんに聞えるぐらいの声で言う。

「そうか」

「父さんは夕飯食べたのか？」

「いや」

「一応、父さんの分も作ったからそれ食べてくれ」

「わかった。おっ！カルボナーラじゃん。お前、また料理の腕上げたな」

「そりゃあ料理当番を代わりばんこにやってたら上がるわな」

「まあそれもそうだな。うん。うまい。昨日の夕飯の残りも食べたのか？」

「ああ。ちょっとしか残ってなかったからな」

「・・・どうした？大地。今日はやけに暗いな」

トーンとかで見抜かれた。

「・・・バレちまったんだ」

「何が？」

「傷」

「そうか。学校の奴にか？」

「ああ」

「話したのか？」

「いや」

「話した方がいいんじゃないのか？」

「・・・話そうと思ったら気い使ったのかわかんねえけど帰っちまったんだ」

「・・・なるほどな。話すつもりでいるか？」

「まあ。隠しきれないだろうしな」

「ならいいんだ」

それは幼い頃に刻まれた記憶の拷問。

時間は少しだけさかのぼる。オレは家に帰っていた。パンドラはまだ帰って来ていない。

「今日は帰るの早いね。賢ちゃん」

「ああ。自主練の日だし。今日は気分じゃなかったから行かなかったんだよ」

「珍しい事をするのねえ。いつもなら出るのに。明日は雪でも降るのかしら」

「それを言うのなら雨だろ。おふくろ」

「あら。今は冬よ。雪が降ってもおかしくはないと思うのだけれど・・・」

「まあたしかにそうだろうけどよ」

明日は雪なんか降りませんように。オレは自分の部屋に向かった。

自分の部屋に入り、バッグを机の上に放り投げ、ベッドに仰向けにダイブする。つかこれから・・・どう調べればいいんだよ!? オレ・・・チー坊と話し難くなっただけじゃねえか。収穫はほぼ0。つか損失したような気が・・・。そういえば・・・あいつの家族とかオレ知らないな。あいつ、そういう事まったく話さないし。つかあいつ何処の中学校だったんだろう。オレ・・・チー坊の事知らない事だらけだ。あいつの家に遊びに行った事もねえし。まああいつと遊んだ事自体ねえな。あいつ、誘うといつも適当な理由をつけて来ないんだよね。女とはよく遊ぶくせにオレ等とは遊ばない。あいつ・・・男嫌いなんかな。その辺もよくわかんねえや。

「ただいま」

パンドラの声だ。

「あら。パンドラちゃん。お帰りなさい」

「あやめさん。賢は？」

「賢ちゃんなら自分の部屋にいるわよ」

「ありがとう」

階段を上る音が聞こえる。パンドラはオレの部屋のドアを開けた。

「入るぞ」

「つか入ってんじゃない」

「まあそれもそうだな。でどうだった？」

「・・・まずいもん、見ちゃった」

「ん？」

「あいつが隠してるもんだよ」

オレはパンドラに一応、話した。

「・・・なるほどな。ロッカーの中にいたらそれを見ちゃったと」

「ああ」

「まあしょうがないわな。見ちゃったのなら。それを兼ねて外から調べるしかねえな」

「外からか・・・」

「どうした？」

「いや・・・オレ、あいつが何処の中学校に通っていたのか知らねえんだよな」

「調べようがねえじゃねえか。どうするんだよ？」

「オレの知り合いに聞きまわるしかねえだろ」

「まあ・・・それが得策だな」

「・・・陸斗や千代に聞いても無意味だな。あいつらはオレと同じ中学校だし」

「他は？」

「・・・瑠璃ならなんか知ってるかな？あいつはオレとかとは同じ中学校じゃねえし。つかパンドラ、お前おふくろか親父に頼んで携帯、買ってもらったら？」

「いいのか？」

「たぶん、喜んで買ってくれると思うぜ。とくにおふくろが。おふくろの奴、ずっと娘が欲しいって言ってたし」

「わかった。言ってみる。それより、今聞くのか？」

「ああ。あいつの番号知ってるし。それにお前が帰って来たって事は部活、終わってんだろうし」

「まあそうだな」

オレは瑠璃に電話をかけた。

『どうしたの？賢』

「瑠璃に聞きたい事があってよ」

『何？』

「チー坊が何処の中学校か知ってるか？」

『知ってるよ。つか私と同じ中学校だし』

「マジか！チー坊って中学校の時はどんな奴だった？」

『そうだな。今と変わらないかな』

「そうか。他に知ってる事は？」

「うーん。あっ！これは噂なんだけど・・・大地ってシングルファザーらしいよ」

習しない自分が嫌になる。トラウマとは本当に怖いものだ。別れてからもう何年も経つのに未だに鮮明に残っている。たぶん、賢にこの傷を見られたからいつも以上にうなされたのかもしれない。本当の事は自分でもわからない。あの事だってそうだ。最近、自分がまるでこの世界の人間じゃないみたいだなんて思ってしまう時がある。そんな事はある訳ないし、信じちゃいけないけど・・・まるで真実みたいに思えてしまう。自分は一体、何なんだろう。何処におれを救ってくれる女神はいるのだろうか。

? 4. 届かない鐘の音

?

昼休み、オレはチー坊を屋上に呼んだ。パンドラも一緒にいる。瑠璃から聞いた事を確かめる事とチー坊の悩みを聞こうと思ったからだ。あの事は聞かない。あいつが話し出すまでこっちから聞かない事にした。パンドラとも話した結果そういう事にしたのだ。

「・・・チー坊、お前って桜花西だったのか？」

「ああ」

「シングルファザーってのは？」

「本当の話だ。つか誰から聞いたんだ？」

「瑠璃から」

「・・・そっか」

「・・・今、何か悩み事とかあるか？」

「いきなり何聞くんだよ。賢」

「気になるから聞いたんだよ」

「・・・お前になら話せそうだな。おれ、最近おかしいんだ。

何か・・・自分は他人とは違うような気がして・・・」

「・・・たぶん、オレと同類だと思うぜ」

「え？」

「見せた方が早いよな」

オレは常備しているランプを出した。オレは中平賢からルーン・ホリックの姿に変わった。まあ中平賢からルーン・ホリックの変化は一目瞭然だからな。それを見てチー坊は啞然としている。まあそうなるわな。オレはパンドラにも目をやり、自分と同じ事をするように促す。パンドラの場合は匣だ。あの時の匣を出す。そしてそれを開けた。パンドラも平理波留からパンドラ・ラストナイトに変わる。それにも啞然として見ていた。

「賢、それに波留ちゃんも何だ？その変なコスプレみたいな格好」

「この姿で賢なんて呼ぶんじゃねえよ。オレはルーン・ホリック。こいつはパンドラ・ラストナイトだ」

「じゃあルーン。これは一体・・・？」

「お前の中に眠る力だ。オレと同じじゃねえだろうがな」

「賢」

「もし・・・一人になるのが怖いのなら大丈夫だ。オレ等がいる。

陸斗も海斗も千代もそうだ」

「・・・あいつらもなのか？」

「ああ。陸斗はリゼル・ダーク、海斗はシゼル・ライト、千代はローズ・フレアって名前を持ってる」

「・・・そっか。おれ、若干期待してたんだよな。この力を手に入れる事ができたら・・・あいつと仲直りができるんじゃないかって」

「・・・そんな事がこの力で手に入れる事ができるようなもんなら世話ねえな」

パンドラが言う。こいつ。

「この力は自分の望みを叶えてくれるようなそんないいもんじゃない。そんないいもんなら誰もが手に入れたがるだろうよ。少しは自分でやったらどうだ？他人との仲直りなんざあそれこそ自分の力のみでしかできねえ事じゃねえか。それを自分が持っていない力に頼ろうなんざあ虫がよすぎるんだよ」

パンドラの言葉はロスト時代もそうだが辛辣だ。

「・・・パンドラちゃんの言う通りだ。おれは頼ってばっかで自分でしようなんざあ思わなかった」

「・・・でもお前は恵まれてる方だな。まだそいつ、生きてるんだろ？」

「まあ・・・」

「じゃあいいじゃあねえか。まだどうにでもなる。死んだわけじゃねえんだから」

「・・・そうだな」

「さて・・・話がそれたから戻すけどな、オレ等にはお前のその力が必要なんだ。自覚があるのなら・・・そんなに時間を与えなくても答えは出せるな？」

「ああ」

「じゃあ放課後にもう一回ここに来い。オレ等はここで待ってるからよ」

「わかった」

チー坊は屋上から去った。

「ずいぶん、急にしたな」

「まああいつだけにかまけてる時間はねえんだよ。こっちにはな。最高であと四人はいる訳なんだ。自覚があるんなら話は早い。あとはジャックを呼ぶだけだしな」

「・・・まあそうだな」

オレ等も教室に戻った。

放課後、オレはジャックに電話をした。ジャックの方は来れないと言っていたが代わりにリムが来る事になった。来たついでにこれまでの事の次第を言った。ロストがパンドラになった事、グレイヴさんからデュースとアリスを探し出して欲しいと頼まれた事、エドとナージャがこちらに來ている事を言った。

「ふーん。結構な事までやらせてんのね」

「やらせてる？」

「グレイヴさんが頼みに行った訳じゃないって言いたい」

「でも来たのはグレイヴさんだぜ？」

「来たのはね。あたしはあんまり面識はないけど・・・ロスト・・・あっ違う。パンドラはどう思ってるの？」

「二人に代わって伝えにきたんじゃないのか？二人ともそう簡単に抜け出せるような位置にいなえしな」

「二人？」

「前に話をしただろ？その話の中に出てきたアンさんとジェシカさんの事だ」

「ああ」

「エスポワール・ルーチェの総司令官みたいなものはジェシカさんが担っている。たぶんこれは・・・一つの作戦の準備。リムはその辺の事、聞いてるか？」

「いや。聞いてないなあ。つかあんたが聞いてない時点であたしの耳に入る訳ないでしょ」

「まあそれもそうだな」

「エスポワール・ルーチェってどうやってたら入れるんだ？」

「ジェシカさんとアンさんが直々に会いに来て・・・こつてり尋問・・・あれ拷問だったけ。まあどっちかをされて疑いなしとジェシカさんからもアンさんからお墨付きを頂かない限り入れない事になっている。一応な。初期メンバーと二期メンバーは違ったが三期からはそうするって確か言ってたな」

「へえ・・・」

恐ろしい。

「つか遅いな。無駄話をする破目になってしまった」

「だね。つか陸斗達は？」

「言っていないから来ないと思う」

「何で言っていないの？」

「言うなとも言ってもいいとも言われてないから言っていないだけだ」

「ふーん」

階段の方から足音が聞えた。来たかな。チー坊の奴。

「そういえば・・・賢」

「何？」

「掃除は？」

「掃除は今日もサボって来た。明日はワックスがけまで一人でやってねだだよ」

「・・・誰が言ったんだ？それ」

「フーだよ。ってお前は知らねえか。今、オレと同じクラスで席がオレの隣なんだ」

「へえ」

『ガチャ』

入って来たのはチー坊だった。

「遅い」

「わ、悪い（わり）」

「さて・・・答えを・・・」

「イエス」

「な」

「手に入るってんだよ。だからイエス」

「・・・いいのか？」

「ああ。この力を手に入れてどんな事が起ころうとも後悔しない自信がおれにはある！！」

「根拠もねえ言葉だが・・・まあいいか。リム」

「はーい。パンドラ」

リムがチー坊の方に行く。まあ当然、リムの姿には驚く。もう慣れたな。この情景にも。

「リ、リムちゃんは小さくてか、かわいいね」

「何でしどろもどろ？まあいいや。あたしの姿に驚いてんだろーし。はい。これがあんたのトランプ」

チー坊はそれを受け取った。そこにはハートの2と書かれていた。

リムが指を鳴らすとチー坊の外見がガラリと代わった。

「へえ。そうなるのか」

チー坊は自分の格好を見て呆然としている。

「・・・名前を言ってくれるか？そうじゃないとこっちが困るんだよ」

「急にそんな事言わないでよー。パンドラちゃん。おれだって驚いてんだから」

「まあそんなもんは誰だって驚くだろうがこっちは見慣れてるからどうでもいいんだよ。それよりも名前！！」

「つか何で名前変えなきゃいけないんだよ？パンドラちゃん」

「年は同じだな。双子だし」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ここにきてまた双子かよ。
はいはい似てんだろ」

「いや。二卵性双生児だから似てねえよ」

「・・・・へえ。陸斗達は一卵性だもんなあ」

「でその子とは一緒に住んでんのか？」

「いや。住んでない。妹は母親の方にいるんだよ」

「・・・・何か声のトーンだか感じなのかはわかんねえけど・・・・変わったな。さっきと比べて。チー坊は母親が嫌いなのかな。」

「それに・・・・何処に住んでいるのかとかおれは知らないんだよなあ。高校も何処に行ったのかも知らねえし」

「そうか。じゃあ手こずりそうだな。リム」

「何？パンドラ」

「可能なら暇でも見付けて調べておいてくれないか？」

「うーん。構わないけど・・・・あたしが伝えに来るとは限らないからね」

「ああ。わかった。ルーン」

「ん？」

「エドに電話してくれないか？あいつの携帯の番号、最近知ったんだろう？」

「ああ。一昨日あたりメールが来て、それに書いてあったからわかる。じゃあかけるな」

オレは携帯でエドに電話をかけた。

『エドだけど、何？』

「デューズスーツだけどな、一人見付かった」

『お！本当か？』

「ああ。スーツはハートの2だ。で名前はメラナイト・アースだ」

『メラナイトだな。その事、ナージャにも伝えとく』

「ああ。頼んだ。そっちはどうだ？」

『まだ見つかっていない。今、ナージャのクラスを当たってる』

「へえ。ナージャのクラスかお前のクラスに寺井戸宏って奴はいるか？」

『オレのクラスにいたけどそいつはデュースストじゃなかったな』
「そっか。・・・じゃあまたなんかあったら連絡する」

『ああ』

「じゃあな」

電話をきる。

「見つかってないのか・・・」

「今回、オレの知り合いって可能性あんまねえかもな。幸い、メラナイトは知り合いだったけどエド達が行った百合並には宏ぐらいしか知り合いねえし」

「確かにそうだな。お前がそう言うのならそれもあり得るな」

「だから・・・オレの知り合いを当たるよりもメラナイトとかの知り合いを当たるのも手だと思うけど・・・」

「うーん。まあそれはおいおいだな。今回はアリスが中心となっている。アリスが現状、誰なのかわかってない以上手当たり次第に当たって行くしかないだろうな」

「だな・・・。はあ。前途多難だな」

「つかルーン」

「何？」

「そろそろ部活、始まるんじゃないの？」

「え？」

携帯の時計を見た。そこには確かに部活が始まる時刻が刻まれていた。

「ま、まず！！今日、顧問来るよな？」

「ああ。来る」

「ヤベェ！！早く行かねえと体育館の外周を15周させられる破目に遭う！！」

「ああ。行こうぜ！！ってこれってどう解くの？パンドラちゃん」

「説くのはトランプをしまって指をならせば解けるはずだ」

「わかった」

メラナイトは指をならすともとの土井大地の姿に戻っていた。

「よし！じゃあ行こう賢」

「ああ。パンドラも部活に行くだろう？」

「ああ。リム。今日はありがとうな」

「いやいや。どういたしまして」

オレ等は屋上を去った。

？

あの人はまだ・・・アタシを許す気はないのだろう。あるのならもうアタシを探し当てているはずだ。あの時以来、まったく会っていない。アタシはあの人に酷い事しか言っていない。お父さんに対して。 “お母さんをいじめないで。いじめないで！！お母さんをいじめるあんた等は悪い奴等だ。最低！！” そう言った事を鮮明に覚えている。アタシもあの人とお父さんを許す気はない。アタシは会いたくもないと思っている。会ったらきつとアタシは逃げ出さるろう。顔すらも見たくない。何でこんな事を思うようになったんだ。 中学校の時はみじんも思わなかったのに。高校に通ってからだ。どうしてなんだろう。忘れてた方がずっと楽なのにそうさせてくれない自分がいる。最近は特にそうだ。あの人がこんなにも近くにいると感じてしまう。確かにどう変わったとかは気になる。でも会いたくはない。だからあんたんの事を忘れるように努力する。ね。最低なアタシのお兄ちゃん。

? 5. 悲劇の鐘 1

?

次の日。今日は終業式である。授業がある訳でもないがかつたる。理由は集会があり、校長先生の話が長いから。そんなに長く喋ったところで誰も聞いてねえよと心の中で思う。オレ自身、もう眠かったし。そして終業式に欠かせない大イベント大掃除もある。特別教室なのはいいがワックスがけを一人でやらなきゃいけないくなつた。まあ昨日、一昨日とオレが掃除をサボったからだろう。あくあ。こっちはいろいろと忙しいというのに。掃除が終わり次第、屋上に集合って事にしたけど・・・サボろうかな。見張りはいないわけだし。サボっちゃえ。ってわけでオレは屋上に行った。

屋上に着くとパンドラとチー坊がいた。

「あれ? お前、掃除は??」

「サボって来た」

「見張りとかいなかったわけ?」

「ああ」

「まあおれもサボって来たからな」

「・・・」

「どうしたんだよ? 波留ちゃん。黙っちゃって」

「いや・・・何でもない。さっきからこっちに向かって来てる足音がするんだが気の所為か」

「え? 気の所為??」

耳を澄ますと確かに足音が聞えて来る。ま、まさか・・・。

『ガチャ』

屋上のドアが開いた。そこにはいたのは風間風雅。まあフーだ。そういうえば・・・あいつ、オレと同じとこだっけ。

「ちよっと賢!!」

「な、何?」

「掃除をサボるとはいい度胸してんじゃない!! 先生がこつてり絞りたいって言ってたけど」

「……つかワックスがけをオレ一人に任せる方がいい度胸じゃね? お前等、さっきまでそれで怒られてただろ?」

「な、何でそれを知ってんの?」

「だいたい予想つくし。それに……オレ、一度担当の先生に会って話したし」

「……………けくん!! 何、ちゃっかり根回ししてんのよ!!?」

「いいじゃねえかよ。だいたい、大掃除を一人でやらせて部活に行きたがるあんた等が悪い」

「サボるあんたも悪いのよ!!」

「何だと!!」

「何よ!?!」

「まあそれぐらいにしろよ! 二人とも」

チー坊は仲裁に入った。つか会話を聞いていればあきらかにオレの方がおかしい感じである。まあそこは気にしちゃいけない。フーは止めに入ったチー坊の顔を見た。そういえばこの二人……初対面なんだっけ。でもフーの反応はそういうものではなかった。どちらかというと驚いている感じだった。

「だ、大地」

「ふ、風雅か?」

フーは屋上から逃げ出した。それも全力疾走で。

「お、おい!! フー!!」

オレはフーを追いかけてようとした。でもチー坊がそれを止める。

「いいんだ。賢」

扉を見つめる。

「し、知り合いだったのか?」

「いや。知り合いとかじゃない。あいつが……おれの双子の妹なんだ」

けだったが次第にエスカレートしていき、二年生の後半からはビンタからグーで殴るようになった。蹴りもそこに入る。大地はあらゆる場所に痣が見られるようになった。大地はその事を先生に隠していた。周りの友達にも隠していた。父親にもそして風雅にも。誰にも言わずただ耐えてきた。だが日に日にエスカレートしていく暴力。暴力のほかにもご飯を与えない日があったし、外に閉め出されたこともあった。父親がその状況を目撃したことはない。この時の父親は残業ばかりであり家に帰って来なかった。帰って来た時は母親は大地に暴力をふるう事も食事を与えない事も閉め出す事もなかった。だから父親が帰ってくるその日だけが大地にとっての救いだった。

風雅は寝るのが早かった。母親にもそうするように言われていた。風雅はきちんとした子だ。夜更かしはしない。宿題だってちゃんとやる。宿題以外の勉強はもちろんやるし、友達だってたくさんいる。それに風雅は成績優秀で運動神経も抜群だ。母親、自慢の子供でもあった。大地はというと友達も多い方だったし、元気で明るい男の子だ。ただ成績の方はあまりよくなかった。大地は母親の暴力の要因はそれだと思っていた。風雅はあんなにも成績優秀なのに大地はそうじゃない。自分の思い通りに成長してくれない。それどころか自分の思惑とは正反対の方へと成長していく大地。母親は大地が自分に反抗するのを恐れた。だから母親は暴力という形で大地を従わせた。自分に逆らえないように。だが母親の暴力はそれをとうに通り越していた。母親は大地に暴力をふるう事を楽しんでた。風雅が寝た後に大地を呼び、殴る、蹴る。母親の気がすむまでやる事が多かった。そんな日々が続くある日の事だった。学校が疑い出%9小学校にあがるとさらにそれが目立った。一年生の時はそうでもなかったしこれまで通りだった。けど二年生にあがったときから母親から暴力を受けるようになった。最初のうちはビンタだけだったが次第にエスカレートしていき、二年生の後半からはビンタからグーで殴るようになった。蹴りもそこに入る。大地はあらゆる場所に痣

が見られるようになった。大地はその事を先生に隠していた。周りの友達にも隠していた。父親にもそして風雅にも。誰にも言わずただ耐えてきた。だが日に日にエスカレートしていく暴力。暴力のほかにのご飯を与えない日があったし、外に閉め出されたこともあった。父親がその状況を目撃したことはない。この時の父親は残業ばかりであり家に帰って来なかった。帰って来た時は母親は大地に暴力をふるう事も食事を与えない事も閉め出す事もしなかった。だから父親が帰ってくるその日だけが大地にとっての救いだった。

風雅は寝るのが早かった。母親にもそうするように言われていた。風雅はきちんとした子だ。夜更かしはしない。宿題だってちゃんとやる。宿題以外の勉強はもちろんやるし、友達だってたくさんいる。それに風雅は成績優秀で運動神経も抜群だ。母親、自慢の子供でもあった。大地はというと友達も多い方だったし、元気で明るい男の子だ。ただ成績の方はあまりよくなかった。大地は母親の暴力の要因はそれだと思っていた。風雅はあんなにも成績優秀なのに大地はそうじゃない。自分の思い通りに成長してくれない。それどころか自分の思惑とは正反対の方へと成長していく大地。母親は大地が自分に反抗するのを恐れた。だから母親は暴力という形で大地を従わせた。自分に逆らえないように。だが母親の暴力はそれをとうに通り越していた。母親は大地に暴力をふるう事を楽しんでいた。風雅が寝た後に大地を呼び、殴る、蹴る。母親の気がすむまでやる事が多かった。そんな日々が続くある日の事だった。学校が疑い出した事があった。その事で大地の家に担任の先生が来た事もある。だが母親がよく転ぶだのなんだの言い訳をして自分が暴力をふるっている事を隠したのだ。だが大地が小学校四年生の時、事件は起きた。

？6. 悲劇の鐘2

その日は父親の帰りが早かった。母親はそれを予期していなかった。父親が部屋に入った時見つかつてしまったのだ。大地に暴力を与えてるその瞬間を。その日から夫婦関係は悪くなり、暴力にもついに刃物が使われるようになった。左肩にある傷はその時のものだ。そしてついに離婚話が持ち上がった。大地にとっては嬉しい事だった。大地の親権は父親が持つ事に話し合いでなった。だが風雅の親権で争う毎日だった。風雅にその事を言ったのは1ヶ月後の事だった。

「風雅」

「何？」

「父さんの話をちゃんと聞いて欲しい」

「うん。聞くよ」

「父さんと母さんはもう一緒に住むことはできないんだ。だから父さんか母さんかを選んでくれ」

「はあ？何それ？急にそんな事、言われても決められるわけない。

それに理由は？」

「…父さんは母さんに愛想が尽きたんだ。もう母さんの事は愛せないし、好きにはなれない」

「何それ？じゃあお父さんはお母さんを捨てるの！？」

「ああ。そうだ」

「大地もそうなの？」

「うん」

「…お母さんをいじめないで。いじめないで！！お母さんをいじめるあんた等は悪い奴等だ。最低！！」

風雅は泣きながらその場を去る。風雅は母親が大好きだった。だから余計にそうなったんだろう。その後、大地は父親から風雅が母親の方を選んだ事を聞いた。そして父親と母親の離婚は成立した。大地は転校する事になった。桜花市立西桜小学校。友達もたくさんで

きた。バスケットボールクラブにも入った。以前の小学校でもバスケットボールクラブに入っていた。でもできなくなった事があった。左でのドリブルだ。できない事はなかった。だが十回以上続ける事はできなかったのだ。

それから三年後。大地は桜花市立西中学校に入学した。この学校は三校の小学校が通う中学校。西桜小学校、浜桜小学校、枝垂れ小学校である。どの小学校もそんなに生徒がいる訳ではない。一学年二クラス程度の小さい学校である。中学校は4クラスあり大地は1年2組。そこで大地はある女の子と出会った。

「あんた…影あるでしょ？」

その子は大地を見てそう言った。

「は？」

何、言ってるんだろう。こいつ。無視。無視がいいな。

「だって隠してるでしょ？例えば…壮絶な過去がある…とか？」

その言葉にピンと来た。何で一目見ただけでそんな事がわかるんだ。ちよっただけ興味が湧いて来た。

「名前は？」

「私？」

「そうだよ」

「私は美春瑠璃。枝垂れ小学校出身なんだ。あんたは？」

「おれは土井大地。西桜小学校出身だよ」

「そっか。大地でいいよね？」

「う、うん」

「よろしくね」

「よろしく」

それが瑠璃との出会いだった。

瑠璃は不思議な子だ。明るい時もあればミステリアスな部分を出す時もある。優しいけど厳しい。瑠璃の性格を一言で表すのなら飴と鞭がぴったりだろう。瑠璃と話していると彼女が出す魅力に惚れそうになった。きれいな栗色の天然パーマの髪。透き通ったきれいなブラウンの瞳。白い肌。きれいな声。たぶん彼女を狙っていた男子は多かった事だろう。大地もそんな男子の一人だった。

瑠璃と大地は三年間クラスが一緒だった。それなりに仲が良かった。修学旅行の時は同じグループ、運動会の団だって同じだった。それでも大地は自分の事を話せなかった。言ったところでおれにどんな利益があるのだろう。無益ならまだしも不利益しかない。軽蔑される事だろう。きつと失うものが多いに決まってる。だから言わない事にした。もう何も失いたくないから。あんなかたちで別れたくない。

「大地は高校、決まった？」

中学三年の秋だった。確かに進路の事を考える時期。いや決める時期でもある。進学なのか就職なのか。大地の家は父親が一人で家計を賄っている。そんな父親を助けたいと思っていたから就職でいいと安易に考えていた。

「おれは…高校に行かない」

「何で？」

「それは…」

言えない。言えるわけがない。

「私に言えない事？」

「そうだよ」

「…じゃあいいや」

「な！？いいの？」

「だってあんたが言いたくない事を言わせてどうすんの？今のあんたじゃ言わせたところで友達なくすとかそんな勝手な被害妄想して逃げそうだもん」 あたってる。

「逃げて楽なの？ 楽なら逃げれば。でもあんたはそのぶんの幸せを掴めなくなる」

こいつに何がわかるんだろう。受けた傷の痛み。母親のヒステリックな泣き声。妹の涙。父親のあったかい手。

「うるさいな！ あんたみたいな幸せなガキと一緒にすんなよ！！」

「うるさいのはあんただ！ 男がかい声でギャーギャー騒ぐな！ 幸せなガキってあんたは不幸なガキなの？ 私にはそうは見えないけどね」

「何、言っただよ！？」

「死んだの？」

え。

「あんたの大事にしてたものは死んだのかって聞いてんの！！」

「死んで…あ」

そうか。彼女は…。

「じゃあまだどうにでもなるじゃん。生きてるんでしょ？ 会いにいけるし、やり直す事だってまだできる」

彼女はこれをおれにわからせる為に…。

「ねえ。今なら聞いてくれるか？」

「うん。聞くよ」

おれは瑠璃に話した。

「そっか。そんな事があったんだ。であんたはその妹の事、今はどう思ってるの？」

「もし…会えるなら会って誤解をときたい。それで仲直りしたい」

「じゃあすれば？ 例えば高校行くとか」

「何で？」

「もしかしたら同じ高校に行くかもしれないよお。それで会えたら最高じゃん！！」

「それもそうだな」

「それにあんたのお父さんもそれを望んでると思うよ」

「何で？」

「私の勘だけど親ってさ、子供のしたい事とかわかってるもんじゃないかなあ。たぶんあんたが思ってる事はお父さんも思ってる事だと思う」

「…ありがとね。瑠璃ちゃん」

「ん？」

「キミのおかげでもう一度風雅に…妹に会いたって思えた」

「ふーん。でも瑠璃ちゃんはよしてよ」

「何で？」

「キモいから」

「アハハハハ！！じゃあ瑠璃は会いたい人とかいるの？」

「いるよ。でも会えないかもしれない」

「何で？」

「秘密」「教えてよ」

「教えない。あんたが選ばれた人なら教えてあげる」「また、そんな事言うて…」

彼女の瞳を見た。その瞳の中には寂しさが見えた気がした。

その日の夜、大地は父親に進路について話した。

「そうか。大地がそう思っているのならそうすればいい。俺にそれを止める権利はない」

「父さん」

「父さんの事は考えなくていい。お前の人生だ。好きにやればいい」

「ああ。ありがとう」

「でどこにするんだ？」

「桜花高校の普通科」

「そうか」

そして大地は桜花高校に進学した。

風間は母の旧姓だった。風雅は母親に引き取られたから風間が

名字になった。風雅は近くに住んでいた母方の祖父母の家に母親と共に移り住んだ。だがそれから二週間後の事だった。風雅の家に警察が来たのだ。大地がいた小学校が一連の事件を知り虐待を疑い、児童相談所に連絡し近所だった家や大地の父親、そして大地に聞いたのだ。そこから虐待が濃厚になり警察に通報したのだ。風雅は連れて行かれる母を必死で止めようとした。泣きながら声を枯らして叫んだ。風雅は母親と離れ離れになった。その後、風雅には何も伝えられなかった。風雅は信じなかった。自分の母親が大地に暴力を与えていた事を。自分には優しくかった母。あったかい母のぬくもり。それを確かなものだと感じていた。だから余計に信じられなかった。自分の頭の中で否定してきた。でもそれに耐えられなくなって彼女は忘れようとした。必死で考えないように勉強や趣味で気をまぎらわせようとした。それでも忘れることができない自分に嫌気がさし、彼女は美容院に言っただけで腰ぐらいまである長い髪の毛をバツサリと切った。顎のラインからちよつと下ぐらいまで。そのお蔭で彼女は忘れることができた。母方の祖父母のところで暮らす毎日。それなりに楽しかった。友達もいっぱいと言うわけでもないがそれなりにいた。

彼女は自分の好きな番組を見る以外でテレビをつける事はない。暇で何か面白い番組があるかなと思ってつける事はない。だが彼女は毎週、そんなに好きでもないのを見ている番組があった。それはアニメでもなければドラマでもない。ドキュメンタリーでもないバラエティーでもニュースでもない。彼女は毎週、幼稚園生や小学校の低学年が見るようなヒーローや戦隊ものが出る番組を見ていた。別にこの人が好きとかはなかった。ただまだ幼かった頃の記憶を忘れたくなかった。だからそういうものを見てつなぎ止めようとした。意識はしてないにしろ大地の笑顔を忘れないために。

風雅は桜花高校の特進科に入学した。風雅は大学に進学したいと思っていた桜花高校はこの辺では有名な進学校。進学したいと思っている風雅にはうってつけだった。入学して彼女はバスケットボ

ール部に入った。別に大地に会いたくって入ったわけじゃない。彼女は純粹にバスケットボールが好きだから入った。桜花高校では男子と女子が合同で練習する事はない。だから今まで会う事もなかった。科が違うからクラスが一緒になる事もなかった。ただ噂だけはあった。それは女子が口に使っていた。

「ねえ。うちなんかの学年で誰がかっこいいかな？」

「男子バスケ部の神原君じゃない？」

「あゝあ。確かにカッコいいよね。でも近寄りがたいって感じじゃない？」

「それは言ってるかも」

「神原君の友達なのかなあ？あのチャラそうな男子」

「あゝあ。あの癖っ毛の男子？」

「そうそう。確かチー坊って呼ばれてたよね」

「あの男子、めっちゃ女の子で遊んでるって噂だよ」

「うわゝ。それマジで？」

「マジらしいよ」

「あたし、捕まりたくない！！」

「わたしも！！」

「だよね」風雅はそれをバカバカしいと思いながら聞いていた。あんた等はそいつに捕まるほどかわいくないだろうと。風雅に言わせればあんた等は中の下。狙うわけがない。それにしてもチー坊とは誰の事だろう。まさか大地ではないよな。まあ大地には確かに“ち”の字がある。でも坊って何？大地は坊主頭ではないだろう。それに大地は癖っ毛ではないはず。風雅自身もそんなに鮮明に大地の事を覚えているわけではない。ヒーローや戦隊ものが好きとかバスケットが好きとか笑顔がかわいかったとかそういう事しか覚えていない。瞳の色とか髪の色とか癖っ毛とかそういう事は覚えていない。ただ自分より小さいお兄ちゃん。それしか覚えていない。

「何を：期待してたんだろ。あたし」

バカだと思う。自分の兄があんなにも変わっていた。自分よりも背

が高くなっていた。じゃあ文化祭の時に喫茶店で見た男子は大地の事だったんだ。確かにあの髪は癖っ毛に見える。あたしは彼がもっと暗い性格になっていっていると思っていた。でも一目見て思った。性格は変わってない。逆にあたしが知っている頃の明るさより数段も明るくなっていたに違いない。そう思った。それに比べてあたしはどうかだろう。兄の事を必死で忘れようとして髪まで切って恨んで……。あたしは何も変わっていないんじゃないか。ただ嫌いになろうと必死でただ必死で……。そんな自分がバカだと。最低はどっちだろう。今更、どの顔で会えばもう一度……あの頃に戻るのだろう。仲良かったあの頃に。

前も見ずに歩いていたら誰かにぶつかった。

「いた」

「つてえな」

「ご、ごめんなさい」

「おい」

腕を思いっきり掴まれた。

「ちよっと何!？」

「こっち来い!!」

「はあ!？あたし、今忙しいんだけど」

「そんなの関係ねえよ。人にぶつかっておいてごめんなさいで済むと思っただけか!？」

「はあ!？済むに決まってるじゃない!! あんた、バカ?」

「オレに向かってバカだと!! 女あ、ただじゃ済まさねえぞ」

「ちょっと放して、放してよ!!」風雅はそのままチンピラみたいな男子生徒に強引に連れて行かれた。その場を偶然、瑠璃が目撃していた。

「あれって……賢と同じクラスの子だね」

瑠璃は携帯を出し、賢に電話をかけた。

「ん? 電話だ」

賢が携帯をとる。

「瑠璃か。何？瑠璃」

『賢のクラスの女の子が何かチンピラにからまれてどっかに連れて行かれたのを見たけど…』

「どんな子だよ？」

『確か顎のラインぐらいのショートヘアで黄色のカチューシャをしてたなあ』

オレのクラスで女子で顎のラインぐらいのショートヘアで黄色のカチューシャをしてる奴って…。

「風雅！！」

「賢、携帯貸せ」

「ああ」

オレはチー坊に携帯を渡した。

「瑠璃」

『その声は大地！？近くにいたんだ』

「まあな。そんな事よりそのチンピラ野郎、金髪で髪の毛長くてサングラスかけてて耳にピアスしてただろ？」

『うん。そんな感じだった』

「わかった。ありがとう」チー坊は電話をきった。

「知り合いか？」

「ん？お前、知らねえのかよ！？E組の金井竜也だよ」

「知ってるわけねえだろ。E組の奴なんざあ」

「そっか。お前、特進科だもんな。普通科の間じゃあ知らねえ奴はいねえよ。かつあげとかよくするし…喧嘩もするとか聞いたな」

「おい。それってヤバくねえか！？」

「ああ。たぶん体育館の裏だな」

「何でわかるんだよ？」

「そこが奴のテリトリーなんだよ」

「おい。お前等」

「何だよ？波留ちゃん」

「無駄話してないで早く行かないのか？手なら貸すぞ」

「いいの？」

「ああ。なあ賢？」

「ああ」

「ありがとう」

オレ等は風雅のところに向かった。

？ 7. 再生の鐘

何でこんな必死なんだろう。今までいろんな女と付き合った。

最短で五日、最長で三ヶ月。手をつなごうがキスをしようがハグをしようが満たされる事はなく、そんな自分に苛立って“飽きた”とかそんな適当な理由をつけて別れた。こんなに必死になって向き合おうと思った事はない。何が今までと違うのだろう。気持ちなんだろうか。確かに感じたことのない思いが今頭ん中にあって胸ん中まで来てる。助けに行かねえと守りに行かねえと。それができるのはおれしかない。

「なあ波留」

「何だ？」

「兄貴ってやっぱ妹とか弟を守りたいとか思ってたのかな？」

「オレがそんな事知るわけないだろ」

「だよな」

「ただ：ハルトを妹だと考えればそういう時もあったな」

「ロストの時か」

「ああ。お前はないのか？」

「ねえってか考えた事もなかったな」

「あゝあ。お前、弟だもんな」

「う、うるせえな」

「でもいずれわかるもんさ。弟でもな」

「そんなもんなんか？」

「そんなもんだよ。所詮な」

「所詮ってその程度のもんなのか？」

「まあ：人によって違うだろうがな」

「へえ」

兄貴って難しい。

「ちよつとこんなところに連れて来てどうする気!？」

「どうする気って教えてやるのさ。この学校のルールを!!」

「はっ! あんた等の方が知らなそうな気がするけど」「てんめえ、殺す!!」

そこに見えたのは刃物だった。逃げようとするも腰が抜けているのかあしがすくんでるのか立つ事ができない。金井がその刃物を風雅に刺そうとする。風雅はとっさに腕で顔を隠した。それから少し経ってそつと腕を下ろす。風雅の目の前には大地がいた。

「だ、大地!!」

「へへ。まるで昔みたいだな」

大地の手を見る。血がポタポタと堕ちていた。

「女の子相手に刃物はないんじゃない? 金井」

「D組の土井か」

「それとも何? 脅しといてからのあれに持っていきたかったわけ?」

「悪いかな?」

「別に。だっておれの女じゃないし。でも妹なんだよね。手を出さないでほしいな。ださ男」

「ださ男だと!!」 「だってサングラスに長髪で金髪。そんなに盛ったところで誰も見ないし。それにピアスつけすぎなんだよ」

「てめえ!!」

金井が大地を殴る。

「大地!!」

「へへ。何ともねえや。あん時と比べたら」

笑ってる。どうしてそんな風にできるんだろう。よくまわりを見たら賢ともう一人知らない女の子がいた。

「誰?」

「ん? それはオレに言っているのか?」

声、低!!

「そう!!」

「平理波留だ」

「もしかして最近、チア部に入った…めっちゃ美人だと噂の…」

「そこまでかは知らんがな」

「波留、フーを頼む」

「いいが足が震えてるぞ」

「だって…こっちで喧嘩とかしたことがねえんだよ」「あゝあ。あつちじゃあいろいろ上がるからな。身体能力とか。オレもこっちじやあただの女だからな」

「だろ？でも行くさ。引き受けちまったからな」

「カッコつけたってしょうがないぞ」

「わかってるよ」

賢が大地の助太刀に行く。

「何の話をしていたの？」

「気になるのか？」

「まあ」

「やはりお前も気づいているんだな」

「え」

「自分の中にある力にだ」何でわかったんだろう。最近感じる自分の中にある違和感。彼女が言っているのはその事なんだろうか。

「まあ今、そんな事はどうでもいい。お前の兄貴が言ってたぞ。お前と仲直りしたいってな」

「え」あたしから大地に向かって最低と言ったのに。まるで自分が責任を背負っているかのようにだ。

「お前は真実を知らないただのガキのようだ」

「はあ！？それどういう意味？」

「何故、お前はそうなったか考えなかったのか？想像しなかったのか？真相を知ろうとしなかったのか？」

何を言っているのだろうか。もしかして不思議ちゃん？？

「お前は今、逃げようとしている。オレが投げかけた問からも大地からも父親からも真実からも。違う事を考えて気を紛らわしてる。違うか？」

当たってる。

「お前は物分かりがよさそうだから言うが、お前が望む未来は何だ？」

「あたしが望む未来？」

「そうだ」

「あるわよ。でもあんたには教えない」

どうせ笑われるに決まってる。今更、大地と仲直りしたいだなんて。「なら今、この場にある現実から目をそらさない事だ。自分が望む未来のために自分が知り得た現実の中でどうすれば自分の望む未来となり得るか。それを考えることだ」

それは心の中に響くものだった。あたしは向き合う事から逃げて来ただけだった。

「そして何があっても後悔しないことだ。例えどんな犠牲が出たとしても自分の望む未来のためならばその犠牲を背負って行かなければならない。お前にその覚悟があるのか？」

「それは…」

あたしにそんな覚悟はない。

「ないのなら望まない事だな」

見透かされてる。

「じゃあどうすればいいの!？」

「意気地のねえ野郎でも知恵を出すことはできるだろ。嘆いてるだけじゃ所詮、世界なんて変わりやしねえんだからよ」

かっこいいとあたしは純粹に思った。

大地は一体何のために戦っているんだろう。目的はなんだろう。

「二人がかりでも倒れねえのかよ」

「つか賢」

「お前、パンチ下手くそだな」

「うるせえな。オレがいなかったら刃物掴んだままだったぜ」

「へへ。違うないね」

チー坊は左手を使ってない。だからオレはチー坊の左手だな。でも

そろそろ決めないとチー坊の傷が悪化しそうだな。

「二人とも弱いな」

らちがあかないオレ等を見かねたのか波留はフーを見た。

「自己防衛ぐらいはできるな？」 「まあね」

「じゃあな」

波留がオレ等の所に来る。

「加勢する」

「おい。いくら力に自信があるからってこっちじゃあ無理だろ」

「嘗めるなよ。賢。一応、男だった時もある。それにオレには二人分の力がある」

まあそれはそうだろうけど。

波留が金井を殴る。すると金井はすっ飛んだ。

「おい。これはねえだろ」

「うん。ないない」

「オレ等：格好悪くね？」

「格好悪いな」

体力消耗してたんだと思いたいけど：波留の余裕そうな顔見ると奴の実力だったとあのドヤ顔を見て思った。

「すご」

フーは波留に言う。まあそう思うわな。

「オレの手にかかればこんなもんだ。それでお前の兄貴は格好良かったか？」

「ま、まあ。あん時みたいだったよ」

「風雅」

「大地：昔は左利きだったよね？今は右利きなの？」

「ああ。小三か小四ぐらいからかな」

「何でそうなったの？」

フーが聞くとチー坊は服を脱ぎ始めた。一着、一着。上半身が裸になり傷が露わになる。フーは驚いていた。

「本当だったんだ」

「警察が来たのか？」

「うん。大地達が出て行ってから」

「そっか」

チー坊は服を着る。

「ごめんね。あの時あんな…酷い事言っ」

フーは泣いていた。

「…覚えてない」

「え」

「そんな昔の事、おれは忘れたね」

フーはちよつとしてから笑った。

「バーカ」

「うるせえ」

「今日、大地の家に行っている？」 「いいよ。そのかわり、これか

らは兄ちゃんって呼ぶ事」

「えええ。…お兄ちゃん」

「お、おう」

二人は笑っていた。

「一件落着って奴？」

「だろうな」

オレと波留はちよつと離れたところから見ていた。

部活が終わった後、チー坊とフーにオレと波留もついて行く事にした。チー坊の家は普通のマンションだった。

「家賃いくらだよ？」

「十三万って聞いたな」

「…高いな」

「この辺にしたら高いね」オレ等はそのマンションに入った。チー坊の部屋は10階にあった。ただいまと言ってチー坊は入る。オレ、波留、フーはお邪魔しますと言って入った。きれいに片付けられた

部屋。男二人で住んでいるとは思えない感じだった。

「先におれの部屋に行ってくれ。飲み物持ってくるから」

「ああ」

チー坊はキッチンの方に行く。チー坊の部屋はリビングの隣にあった。

「広いな」

辺りを見渡す。漫画の本がきれいに本棚に入っていた。ちゃんと順番通りに。机にはパソコンが置いてあった。勉強道具はどこにも見えない。

「押し入れの中にあるのかな」

「いや：ねえだろ。あるとしたらエロ本だな」

「オレもその意見に賛成だな」

「何でそう思うの？」

「こんなにきれいな部屋だと人が来ても絶対に目に付かないあるいは隠せるところにあるって考えるのが筋だな」

「ありそうだな」

「ちよつと二人とも」

押し入れのドアを開けた。そこには結構な量のエロ本、エロ漫画があった。

「想像通りだな」

「ああ」

「お兄ちゃん」

ちようどよくチー坊がジュースを持って入ってきた。

「よう」

「お前等、それはないって」

チー坊はテーブルの上にジュースを置いてからエロ本を押し入れに戻した。

「お前、結構な量持ってるな」

「いいじゃん。これが健全って奴だろ」

「まあ：そうかもしれないけど：オレは持ってないからな」

「持っていないってどういう事だよ!? 持ってるもんだろ? 普通」

「賢の場合は兄の蓮が持つてるものを借りて読むって感じだな」

「へえ。賢って兄貴がいたんだ」

「まあスケベな兄貴だけど」

フーはそんな話を聞きながらチー坊が持ってきたオレンジジュースを飲む。まあ波留は男だった時があったわけだしこういう話題にもついていけるみたいだけどフーは純粋な女の子だからな。

「あのさ、話題変えない?」

「あつわりい」

変えるのはいいけど：ムズ!! 沈黙になるなあ。

「風雅はおれと同じなの? 波留ちゃん」

「同じだな」

ですよね。

「まあ決めるのは自分だからよく考える事だな」

「わかった」

これであと二人か。もういないような感じもするなあ。

「ただいま」

遠くの方で声がした。

「あっ。父さんが帰ってきた」

チー坊は玄関の方に向かった。

「お帰り。父さん」

「ああ。誰か来ているのか?」

「うん。友達二人と風雅が来てる」

「風雅が来てるのか?」

「うん」

チー坊の親父さんはカバンをチー坊に預け、オレ等がいる部屋に走って来た。チー坊の親父さんを始めて見た。似てる。チー坊がそのまま大人になった感じだった。

「風雅」

そんなに長い距離を走った訳でもないのに息を切らしていた。

「お父さん」

フーは親父さんの胸に飛び込んだ。親父さんは優しく抱いた。

「大きくなったな」

「うん」

泣きながら頷く。

「髪の毛、切ったのか」

「うん」

「そっか」

「ごめんね、お父さん。あたし」

「何で謝るんだ？」

「だって…」

「お前はちっとも悪くない。ちゃんと言わなかった父さんが悪いんだ。だからもう泣くな。な？」

「うん」

「父さんはお前が成長した姿が見れただけで嬉しいよ」

「うん」

フーは笑っていた。

「そうだ。風雅。今日は父さんが料理当番だから食べていけないか？」

「え。お父さんが作るの？」

「ああ」

「うん。食べる！！」

「君達もどうか？」

「あっオレ等はいっすよ。家族水入らずでやってください」

「オレ等が入る隙はたしかにないな。ジュースを飲んだら帰りますのでお気遣いなく」

「ありがとう」

オレ等はその後ジュースを飲んで帰った。

「家族っていいな」

「まあな」

「オレにはいなかったからな」

「…いるじゃん。オレとか兄貴とか親父とかおふくろ」

「…オレ、買って貰うように言おうかな」

「何を？」

「携帯」

「…いいんじゃないね。あつ。オレと波留はどっちが上になるんだ？」

「まあオレだろうな。と言うかオレが一番上だろ。年齢的に」

「あつそれもそっか。じゃあオレ、結局一番下かよ！！」

「そうなるな」

「ちえ。妹ができたと思ったのに！！」

「どんまいだな」

「どうだ？父さんが作ったシチューは？」

「おいしい」

「そうか」

「ねえまた食べに来てもいいかな？」

「ああ。いつでもおいで」

「へへ」

久しぶりに風雅と食べたご飯はおいしかった。

その夜、風雅は祖父母に今日の事を話した。

「そうか。大地に会えたか」

「うん。ねえ、おじいちゃん」

「ん？」

「お母さんが今住んでる場所を教えて」

「いいが何で…」

「はじめをつけたいの。だってあたしただけだもん。ちゃんとさよならしてないの。だから行きたいの」

「わかった」

次の日。午前中に行こうと決めておじいちゃんから教えてもらったアパートに向かった。

「ボロ」

アパートの階段を上り、お母さんが住んでる部屋のインターホンを押す。すると懐かしい声が聞こえた。ドアが開きお母さんが出てきた。

「風雅、会いに来てくれたの？」

「違うよ。さよならを言いに来たの」

「風雅」

「あの時、警察が言っていた事は本当だったんだ。お母さん。今までありがとう。さよなら」

そう言ってあたしはお母さんにさよならをした。もう二度と会う事もないだろ。お母さんの泣く声が聞こえる。でもあたしは振り向かない。これがあたしのけじめ。新しく踏み出すために。

？ 8. エピローグ（これが終わりの鐘ではない）

「父さん、おはよう」

「ああ。おはよう」

久しぶりに少しだけ寝坊した。きっといい夢を見たからだな。でも内容をまるで覚えちゃいない。

「昨日の残りとパンか」

「悪いかな？」

「別に」

食べながら言う。おいしいから文句は言えないな。

「今日、風雅来るかな？」

「二日連続じゃあ来ないだろ。：お前、もしかして妹に自分の料理の腕前を自慢したいのか？」

「何でわかったんだよ？」

「おれの息子だからだな」

「あゝあ。何かわかる気がする」

昨日の事を思い返した。部活は午後からだった。その前に屋上に波留から来いと召集を受けた。だから今、屋上にオレ、チー坊、波留、ジャックそしてフーがいる。

「ふーん。こいつ等がデューズスートねえ」

「まだ二人だけだな」

「あたしはまだなっていないし」

「まあそうだな。お前の奴は確かにここにあるしな」
ジャックが見せたのはクローバーの2だった。

「さて話は聞いているな？」

「うん」

「じゃあ選べ」

「なるよ。だっておもしろそうだし」

「：まあいつか。ほらよ」 ジャックはクローバーの2を渡す。する

と忍者みたいな服装をしていた。

「名前の事も聞いているな？」

「うん。シルフィー・ウィンド」

「これであと二人か」

「ダイヤとスペードだな」

部活が終わり、帰り道にいる。

「ねえお兄ちゃん」

「何？」

「今日も行っているかな？」

「…い、いいよ」

「何でそんな恥ずかしそうな顔するの？」

「だって今日は…」

朝はあんなに期待してこの答えを待っていたのにいざ言われるところなんにも恥ずかしい事なのかと思う。妄想と実際は違うな。

「今日は何を作ってくれるのかなあ」

あゝ期待しているような顔しないでほしい。父さんが帰って来るまで黙っておくのが一番だな。

「ただいま」

「お邪魔します」

「お帰り」

父さん、帰って来てた。あゝあ。恥ずかしい。

「今日も来ちゃった」

「そうか」

「今日も当番はお父さん？」

「いや今日は大地が当番なんだ」

「ええええ！！お兄ちゃん、料理できるの？」

「できるよ」

「大地は料理がうまいんだ。今日は何を作るんだ？」

「今日はオムライスを作る」

おれはキッチンに行って作り始めた。

4、50分後三つのオムライスを風雅と父さんがいるテーブルのところに置き、サラダを真ん中に置いた。スプーンと箸を置いた。「いただきます」

父さんはすぐさま食べ始めた。

「おいしい」

それを聞いた風雅は恐る恐る食べた。

「お、おいしい!!」

嬉しかったけど同時に恥ずかしくなった。

「ありがとう。そう言ってくれて」

風雅が帰った後、おれは賢に電話した。

「ありがとな」

『何がだよ?』

「お前と波留ちゃんのおかげで風雅と仲直りできた」『オレ等は何もしてないぜ。仲直りできたのはお前とフーがお互いにそう思ってお互いにそうなるように頑張ったからだ』

「…そうかもな」

『怪我はいくら波留がちょっとだけ治したつっても完全には治ってねえんだから無理すんなよ』

「わかってるって」

『じゃあな』

「ああ。おやすみ」

電話を切って携帯を閉じる。

「ありがとう」

そう言って携帯をベッドに投げた。

？8. エピローグ（これが終わりの鐘ではない）（後書き）

こんにちは＊来図＊です。土井大地編はいかがだったでしょうか。今回は家族がちよっとメインになっています。陸斗の時も千代の時もメインが家族になった話もありましたが大地と違うのは親がいなという事。だから？7に再生という題名をつけました。エピローグではこれからまた始まるという思いを込めてサブタイトルをこうつけました。またどこかで大地と風雅は書きたいと思います。それでは次の章の予告をしたいと思います。次はエドワードとナー ज्याがいる百合並高校を舞台にして話を進めたいと思います。それではまた。

0. プロローグ

忘れられない事がある。おれがまだエクエスとして認めてもらう前、厳格な父が教えてくれた事、優しい母が教えてくれた事、かっこいい兄が教えてくれた事。そして炎に包まれた家。もう帰る場所はない。信じられる者も一人だけになった。たとえ敵が増えようとおれは兄さんだけは信じる事にしようと決めた。

「大丈夫か？エドワード」

「兄ちゃん!!」

あの時の兄さんに応えるために。おれはそれだけのために生きたつもりだ。あまり兄に会えていないけれど。おれの周りには敵ばかりで疲れる。さあ今日も情報屋としてこの手を汚しに行く。

？9．ナージャの一日

時間はさかのぼり、エドワード達が転入してきた日。百合並高校の制服は男子が学ラン、女子がセーラー服だ。

「お前、似合わねえな」

「あなたに言われたくありませんわ」

一応、エドワードの目の色は茶色になっているしナージャは髪の毛の色は茶色になっているが目の色までは変わってない。

「…この世界はいいな」

屋上のフェンスまで行き校庭を見るエドワード。

「平和しかこの場所にはない」

「私達の世界とこの世界は平和の価値観が違うのだと私は思いますわ」
わたくし

ナージャはエドワードの隣に来て言う。

「だって私にはこの世界が平和に見えませんか」
わたくし

「…本質を知らぬ者が果たして誰もが望む平和を手に入れる事ができるだろうか」

「誰の言葉ですか？」

「…秘密だ」

秘密。それは彼の口癖だった。彼はお喋りだと人から言われる。確かにそうだろうとナージャも思う。ただ同様にナージャは彼の事をこうも思っていた。分別ができる男。彼は情報屋として情報を相手に売る。その相手の反応を見て更に情報を付け加えたり、相手の事を知る為に脅したりもする事だってあるし、騙したりする事だってある。だから彼を使える奴と思っている者もいるが近寄りたくない、怖いなどと思われてもいる。

「…そうやってあなたはまた真実を隠そうとしますのね」

「…いんやおれはお喋りだからまた言いふらしちゃうかもよ」

そう言ってエドワードは屋上から去る。彼に合う言葉は孤独だ。い

つ見たってそう思う。リヒトが隣にしようが、シェリルが隣にしようが、ナージャが隣にしようがその顔つきに、仕草に、背中に染みきっている。

「すべての真実を知っているのはリヒトではなくエドワードなのでしょう」

この学校は4クラスでエドワードは2組、ナージャは4組だ。エドワードのこっちでの名前は黒沢英一でナージャは白石菜奈という名前となっている。

「白石さん」

「はい」

「これ、お願いしていい？」

ナージャのクラスの日直の子が話しかけてきた。ナージャは魂を見る。違う。彼女はデュースコートではない。

彼女が渡してきた黒板消しを受け取った。

「いいよ」

「ありがとう」

上品な口調にならないようにするのは難しい。こっちの世界は本当に勝手が違う。

一人一人ではないと見れないのは厄介だとナージャは思う。ジャック様達とそこが違う。ジャック様達は一度に十人見る事ができる。ナージャは一度に一人しか見れない。授業中に見ることもできるがたかが知れてる。席は一番後ろの真ん中の列だ。

「白石さんは誰か彼氏はあるの？」

隣の男子に話しかけられた。彼も違う。

「いないよ」

「そっか。部活とか入る？」

「そうね…でも今、入っても遅いと思うけどどうかな？」

「俺は入ってもいいと思うよ。遅いなんて事はないと思う」

「そうだよね」

「それに友達とかできやすいと思うし」

確かにそれは言えてるかもしれない。賢から聞いた限り他のクラス、学年とも交流できる事をナージャは聞いていた。与えられた任務を遂行するには利用する価値は充分ある。

「西野君は何部にはいつているの？」

「俺は陸上部に入ってるよ」

「へえ。今度、見学しに行くね」

「わかった」

西野君は席を立った。次の授業はクラスが変わるものだった。科目は数学。数学は少人数制でやってる学校なのでそうなっている。西野君は普通クラス。ナージャは優秀クラスにいる。転入した時に学力テストをさせられた結果、このクラスになったのだ。

ナージャの隣に座ったのが青井君だった。この人も違う。

「今日は青井君が隣か」

「よろしくね」

これで五人目である。新井君、秋野君、香川君、遠藤君。どの子も違った。座る席は自由なため毎回、違う子が座る。

授業が終わると西野君が帰ってきた。

「次は古典か」

そう言ってカバンから古典の教科書を出す。ナージャは古典の授業をちよつと難しいと思いつながら受けていた。

放課後、ナージャはテニス部を見学しに行った。でも違う。誰も該当しない。明日は何処の部活に行こうかなと考える。今度、行くと言った陸上部にしよう。そう思いつながら家に帰った。

家に帰るとエドワードがいた。

「今日はどうだった？」

「収獲なしですわ」

「へえ。おれさあ陸上部に入らないかって誘われた」

「わかる気がしますわ。あなた、足が速いですものね」

「ああ。お前は入るのか？」

「考え中ですわ。テニス部には入りませんが」

「今日、見に行ったのか？」

「ええ」

「ふーん」

そう言ってエドワードは風呂に行くと言って入りに行った。

「…はあ」

疲れると思うナージャ。人とうやうやって付き合った事がない。ここの世界は本当にたいへんだ。これが学校というものだと思感した。向こうには学校というものはない。あるのはジャックやジョーカーになる為の学校しかないし、死魂だけが行く事ができるので死魂ではな一般的死魂は学校に通う事はないのだ。それなりに学問をしてきたから数学やら古典やらが結構いい点を取れたわけだ。

「明日も頑張らないといけませんわね」

エドワードにはナージャと同じ力はない。いや実際のところはわからない。付き合いは長いが彼の家族の事とかは全く知らない。ただナージャはエドワードから聞いた事は確かにあった。それは自分の魂について。明かしてくれた事はあったけどそれは知ってはならない事でもあった。

「…エドワードは何のために私わたくしについて来たのでしょうか」

決して聞きはしないがナージャの中にある謎だった。

朝、起きるとまた探し続ける時間が始まる。一人で頑張らないといけない。そう思いながら教室に入る。

「おはよう。白石さん」

「おはよう。西野君」

きつと今日も見つからない。

放課後は陸上部に行った。一言で言えば今日もはずれだった。女子も男子もだ。ナージャのクラスは全員はずれ。明日はエドワールのクラスを中心にあたろう。

こっちに来て結構経つのにと思う。きっとこれが続く。そう簡単に見つかるものではない事はわかっていた。たった四人しかない。もしかしたらこの学校には一人もいないのかもしれない。でも探すしかない。いつの日か心から解放される事を夢見て。

？10. エドワードの一日1

前回の話と同日。

「ねむ」

そう思いながら授業を受けていた。先生の喋る声を左から右へといれる。だりい。こんなのを聞いて果たして社会でどれだけ役にたつのか考えないのかと思う。でもそれは言うてはいけない事だしこの世界のルールみたいなもんだと思う事にした。考えてもらちがあかないし。

「黒沢」

先生に呼ばれる。さされた。とりあえず出された問題をとく。

「正解だ」

席に戻る。

「黒沢」

今度は話しかけられた。

「お前みたいな真面目に授業受けてない奴が何でああも簡単に解けるんだ？」

うぜ。確か寺井土宏って名前だったな。

「じゃあこの授業を真面目に受ける事から始めたら？」

「もっともな事を言うな。黒沢」

先生が来た。

「寺井土。お前、前回のテストは何点だった？」

「29点です」

「わかってるのなら無駄話はするな」

寺井土宏の事はある程度調べた。落ちこぼれという奴らしい。推薦とかで入ったというのは聞いたがそれで入れた理由がバスケのみ。まあそうなるなと思う。性格は興味がある奴はやるが興味が無いものは手をつけない。まあ悪い性格ではない。興味のベクトルの問題だろうけど。

本当にこの世界はいつ見たって平和だと思う。あの時と今で違う事があるとしたら時代と雰囲気だと思う。ナージャの目にはそうは見えないらしい。まあ理由はわからなくもない。ナージャの中には政治の争い、戦争。その中にいる虐げられている人を彼女は感じる事ができるらしい。まあ魂を見る能力のオプシオンみたいなものだ。だからナージャの言う事は正しいと思うし、否定する気もない。ただ一つだけ言える事がある。ナージャには人間の持つ本質を理解していない。いや知らないんだ。いくら劣化しているとは言え、ジャックと同じ能力を持っている。知らない理由は魂を見届ける事をした事がないからだろう。

「あゝあ」

「黒沢君」

また話しかけられた。確か陸上部のマネージャーだったな。

「何？」

「体育の時見たよ。足早いんだね」

「まあな」

「ねえ陸上部に入らない？そのスピードがあればすぐ選手になれると思う」

「じゃあ今日行くよ」

「本当？じゃあ放課後ね」

「ああ」

陸上部のマネージャー、笹山優子は行った。

自分が足が速いということを自慢できるような事だと思った事はなかった。それが当たり前だし、足が遅い事は恥だと思っていた。そういう教育を受けていたし、そのためにいろいろしてきた。

「黒沢君」

また笹山に呼ばれた。

「行こう」

「ああ」

荷物をまとめて校庭に行った。

一応、体操着に着替え軽くウォーミングアップをする。それでも口をあんぐり開いてる奴が何人もいた。

「確か隣に転入した黒沢だったよな？」

「ああ」

「俺、Cクラスの谷口真人。よろしく」

「よろしく」

「早速、50メートル計っていい？」

「ああ」

スタートラインに立つ。

「位置についてよーいどん」

全力で走る。50メートルはあっという間だ。

「はい」

少し息を切らしながらタイムを見る。5秒ジャスト。まあこっちの世界じゃあこんなもんか。

タイムを計ってくれた谷口がストップウォッチを見る。

「すごいな。次1000メートルな」

長距離か。まあこのトラック5周すればいいんだもんな。スタートラインに立つ。

「位置についてよーいどん」

走り出す。まあ体力テストをさせられてるみたいだななんか。

「早いな」

「すごい選手になるかもよ」

「だな」

数分後。

「疲れたあ」

「3分ジャスト。次幅跳びやっていい？」

「いいけど」

こりゃ体力テスト全部やる羽目になるな。走り幅跳びはあんま得意じゃないんだよな。

「よーいどん」

走って跳ぶ。そして着地。

「193。次、高跳び」

マジか。こりゃ種目全部の方だろうな。

何回かやって今、165。

「行きます」

走って跳ぶ。

『カラン』

「落ちたな。160か。じゃあ次は砲丸投げ」

こりゃやるしかないな。しばらくして全部計り終わった。

「やっぱり短距離と長距離だな」

「マジ疲れたんだけど」

「まあ陸上部に入るには必要な事だからさ」

「…だよな。でも走るのは好きだからさ。リレーもやんの？」

「ああ。やるか？」

「やる」

「よし。じゃあちょっと待ってるよ」

谷口は他の部員のところに行く。少し経って陸上部のリレー選手が来た。

「これがうちのメンバー。じゃあリレーの練習もするから来れる奴は来て！！」

そう大声で言うとう陸上部のだいたいのメンバーが集まった。

「じゃあチームわけする」谷口が適当にチームわけをする。Aチーム、Bチーム、CチームにわけられたがおれはAチームだ。

「じゃあ走る順番を決めてくれ」

一応、話し合いをする。50メートルと1000メートルのタイムを言う。アンカーでと言われてしまった。了解してバトンパスの練習をし始めた。初めてだから難しい。後ろを見ないで取るというのが落としそうで怖い。まあギリギリだったけど取れた。

「じゃあ始めるから第一走者はスタートラインに立て」

それで言われてA、B、Cの選手は行く。アンカーは第一走者とは

反対側に行くらしい。だからその集団と一緒に行く。

「お前、すごいな」

「何が？」

「だってリレーやったことなくでそれでアンカー任される。すごくない？」

「小さい頃からそういう風に教えられたんだ」

「へえ。オリンピックの選手か何かにする気だったのか？ お前の父ちゃんは」

「いや。そういうのは聞いてないな。聞いてたのは生きる為だっていうのは聞いていたかな」

「生きる為って何か：すげえな。でもこの先、選手になる以外の進路でいらなくね？」

「それは…」

この世界ではきつとそうだろう。でもおれはこの世界の人間じゃない。それ以前に足が速い事が“エクエス”である自分の証明だった。足が遅ければそれだけで父に罵られた事だってある。それがいやで必死に頑張った。何回も走り込んだし、きつい筋トレメニューもやった。それに後悔はないし、逆におれの中では誇りでもあった。“エクエス”の証明。小さい頃のおれはそれだけが生きる意味だった。それが変わった頃があったのは覚えてる。でもその時は目の前にいろいろな事が起こりすぎた。その時の事をそれほど鮮明に覚えているわけでもない。だってその時は闇雲に剣を振り回していただけだったのだから。

「位置についてよーいどん！！」

ピストルの音が鳴り響く。第一走者がスタートした。バトンを持って走る。

もう何年経つだろう。つなぎ止める為に走るのは…。

?J・エドワードの一日2

エドワードには厳格な父がいた。いつもエドワードの事を怒鳴りつけていただけで優しくはしてくれなかった。

「そのスピードでは一族の恥だ。エドワード」

「はい」

自分がエクエスである事を知ったのは5歳の時だった。ただ父からそうであると言われただけでそれ以上の事は言わなかった。何がエクエスだと思う。何処が他の子供と違うというんだろう。兄と自分の違いだってわからない。

「今日もこつてりしぼられたのか？」

エドワードの兄、リチャード・ユニエルが話しかけた。

「まあね。いいよな、兄さんは」

「：でも俺はお前が羨ましいよ」

「何で？」

「親父は俺に見向きもしないだろう？」

言われてみればそうだ。普通の家なら跡取りは長男になるわけだし父親は長男の教育に忙しく次男や長女とかには見向きもしないものだがエドワードの家では逆な事が起きている。

「跡取りは兄さんの筈なのにな」

「確かに跡取りは俺だ。けどこの家の称号であるエクエスはお前が持つてる」

それは結構な回数、聞いたけど実際それが何なのかは教えてくれない。

「エクエスって何？」

「：一角獣である事しか俺は知らないな」

一角獣。それは母親からも父親からも聞いた。父親は嘘をついてそうだけど母親とリチャードは本当に知らないだろう。

「じゃあおれもメタモルフォーゼができるのかなあ？」

「そこまでは知らないな。ただお前が生まれた時角があった」
「何、それ？」

「いや、本当だぞ。確か写真があったような……」
リチャードは部屋にあるアルバムを探す。つか初耳だと思うエドワード。父親からも母親からもそんな話は聞いた事がない。

「あつた！ 確か……このページのこの写真だ」
リチャードがアルバムを持ってやって来た。その開いているページを見る。確かにその写真には黒い角が頭のとっぺんからはえていた。
「マジかよ。こんなんがあつたのか。いつ頃からなくなったんだろう？」

「確か……髪の毛が全体的にはえた頃だったな」

「へえ。だからおれはエクエスなんだな」

「そうだな」

「頬のタトゥーも生まれた時からあつた？」

「この写真じゃあ見えにくいけど……」

リチャードが違う写真を指さす。

「これだと見えるだろう？」

「うん。あるのがわかる。これもエクエスの証だね」

「ああ。俺とお前の違いだ」

そっか。ちゃんと違いがあつたのか。ちょっとだけそれが嬉しかった。自分だけ特別扱いをされる。それがいやでしょうがなかった。
リチャードと同じ扱いを受けたい。そう思っていた。でもちゃんとした違いがある。だからかって納得する事ができた。

「父さん」

「何だ？」

「兄さんから聞いたよ。おれ、生まれたときに角があつたんだ」

「ああ。だがそれ以上、自分がエクエスである証を調べようとするな」

「何で？」

「私も詳しくは知らない。だがユニエル一族ができてから言い伝え

られている事だ」

「じゃあ父さんもそんなに知らないの？」

「ああ」

「じゃあ父さんとの修行を始めよう」

「そうだな。じゃあ今日も厳しくいくから覚悟しなさい」

「はい」

エドワードとリチャードは7つ年が離れている。リチャードはこの時、17歳。エドワードは10歳だった。だからリチャードがかっこよく見えた。身長は大きいし、声は低いし、性格だって落ち着いているし、頭だっている。運動もそれなりにできる。まさに自慢の兄だ。

「エドワード」

「はい」

「今日はリチャードと剣で勝負をしなさい」

剣は6歳の頃に始めた。リチャードも同じ6歳で始めた。リチャードの方が11年も剣の道を極めている。それに比べて自分はまだ4年しか極めていない。かなうはずがないと思った。

「父さん、無理だ。だって兄さんの方がおれよりも剣の道を極めている。勝てっこないよ」

「別に剣だけが戦法という訳じゃない。お前にはそれを知ってもらう為にリチャードと戦うのだ」

「わかった」

エドワードはリチャードと向き合った。どうすればいいか考える。でもうかんではこない。

「お願いします」

「こちらこそお願いします」

二人が持っているのは竹刀だ。

「では始め!!」

勝負が始まった。やっぱりリチャードと自分は違う。リチャードはどんどん攻めて来る。それを防ぐのが精一杯な自分。それだって無

理だとも思う。力だってリチャードの方が上。エドワードはまだ足にも及ばない。でもそんな自分でも何かしらリチャードに勝っている部分があるはずだ。それは何だ？エドワードは父の言葉を思い返す。

“別に剣だけが戦法という訳じゃない。”

：そうか。剣や力ではリチャードにはかなわない。でも足、スピードなら勝てるかもしれない。自分の戦法にはスピードを取り入れ、相手にかなわない部分を補えば勝てるかもしれない。

「エドワードの目つきが変わったな」

「そうね」

父親が話し掛けたのはお茶を持って来た母親だった。

「気がついたのかしら？」

「かもしれないな」

リチャードが攻めている隙に背後にまわる。そして首を狙う。そうすれば動きは止まる。リチャードが攻めて来た。よし。やるぞ。自分にならできる。そう念じて走り出す。

「速くなりましたね。あなた」

「一番最初の頃と比べたらな」

「厳しいのね」

「そうでないとこれからエドワードは生きていけないだろう。エドワードは我々とは違う」

「：そうね。確かに違うわ。同じ一族であろうと、家族であろうと」
「ああ」

一応、この勝負に剣道のルールはない。先にギブアップした方が負けという事になっている。

隙について背後にまわる。そして首もとに竹刀を突きつける。

「これでどう？兄さん」

「：参ったよ。背後にまわる事は予測できていたがまさか飛びついて来るとは思わなかった」

リチャードと自分には身長差がある。だから背後にまわって背中に

飛びついて足で掴まり、左手で肩を掴めば首もとに届く。

「へへ」

「そこまで」

父親の声が響く。

「エドワード、わかったか？」

「はい」

「じゃあこれからも修行に励むようにいいな」

「「はい！！」」

エドワードとリチャードは返事をした。その時、父親が少しだけ笑っていた。エドワードはそれを見て嬉しくなった。それからエドワードは父親の笑顔を見る為に必死で修行した。

それから2年後の事だった。エドワード12歳。リチャード19歳。

? Q エドワードの一日3

相変わらず修行の日々が続く。ただこの時からエドワードには一つの疑問があった。2年前に父親が言っていた事。“自分がエクエスである証を調べようとするな” 父親の言葉を考えると他にもあるという事になる。知りたい。自分の事をつきとめたい。たとえばどうなるうとかまうものか。そういう気持ちのエドワードの中にはあった。けどそう思うのは簡単で実際、どうやっていいのかわからなかった。とりあえず家にある本はあさったがそれらしい記述はない。まあ父親がああいうぐらいだ。それでもおかしくはない。じゃあどうすればいい。思い浮かぶのは近くにある図書館ぐらい。そこにあるかどうかわからないがかける事にした。

図書館には父親と一緒に何回か来た事があったが随分前の事だったしその時読んだ本は絵本や童話ばかりだった。

「まず何から読むか」

漠然としすぎている。この時点で何も思い浮かばない。…そうだ！歴代のエクエスになったものの名前から調べよう。家にはそういう本もなかったしな。だから“エクエス”と題名が書かれた本をとった。

「ん？おっ。あれが今のエクエス？」

「そのようね」

アンとジェシカが偶然図書館に来ていた。

「あちゃー。あの本ってエクエスのすべてが書かれた本だろ？」

「ええ。まずいわね。動き出すわよね？」

「だろうな。けどおれ達が口出すところじゃないだろ」

「そうね」

「それに：エクエスには悪いが動き出せばエクエスをこっち側に引き込む事も可能になるな」

「それもそうね」

ユニエルはこの時、スペードリアの隷属だった。隷属とはその意味のままだ。逆らえば報復がある。その報復も様々だが一族が滅亡したという話もあるらしい。

「隷属の事までが書かれてる」

そんな事より名前だ。

「ん？ ページが張り付いてる」

エドワードはその張り付いたページをはがした。そのページには魔法陣が書かれていた。

「何だ？ これ？」

魔法系の勉強をしていないエドワードにとっては魔法陣の解除の仕方など知っている訳がない。

「でも：図書館に置いてある本だから解除の方法は万人共通だよな」それをふまえてもう一度魔法陣を見た。よく見ると円の中に手を形どったように呪文みたいのが書かれていた。

「ここに手を置けばいいのかな」

とりあえずこの魔法陣通りに右手を置いた。すると予想通りに魔法陣が解除された。

「よし！ これで先が読める」

エドワードは先を読み始めた。

「あの本に書かれた魔法陣は確かに右手を置けば解除され先を読むことができる」

アンはコーヒーを飲む。

「だが右手を置いた時に誰の手だか認識するようになっている」

「よく知っているのね」

「だってあの本はおれの家、スペードリアが書いたもんだ。知ってて当然だろ」

「まあそれもそうだけど：あの魔法陣、認識の他にその認識した情報を書者の一族に伝達する機能もある」

「ああ。まあハートロットもクローバリアもダイヤルーツもあの魔法陣は使うからな。ただ右手か左手かってだけで」

「ええ。さあそんな話より調べ事よ」

「…ああ」

エドワードは名前の事を調べていた。

「へえ。初代もエドワードなんだ。二代目もか。ん？三代目も。…まさか!？」

エドワードは四代目、五代目と調べた。次々に調べ自分の先代にあたる九十九代目まで調べた。

「歴代エクエスの名前が全員エドワード・ユニエル。これはどういう事だ!？」

全員が同じ。これはただの偶然ですませていい事じゃない。何かしらメッセージがあるはずだ。そう思い、先を読む。するとそこにはエドワードが思いも寄らない事が記されていた。

「うそだろ。こ、こんな事って」

エドワードは静かに本を閉じた。これは誰にも言えない。いや言っではならない。エドワードはその本をもとあった場所に戻し、図書館を出た。

「おっ。エクエスが帰ったか。じゃあこっちも行きますか」

「そうね。でもエクエスをどう救う気なの？」

「レイに救わせる」

「…なるほど。まああなたじゃ意味ないものね」

「ああ」

アンとジェシカはレイの所に向かった。

「なるほど。そういう理由ですか」

「ああ。引き受けてもらえるか？」

「かまいませんがエクエスが完全にこちら側になるかどうかは賭けですよ」

「んな事はわかってるよ」

「まあ僕の方にいい考えがあるのでそれでやらせてください」

「ああ。方法はどうでもいい。ただおれ達の敵にまわさなきたい」「わかりました」

レイは部屋を出た。

エドワードがうちにつくとうちが燃えていた。

「ど、どうしてうちが…」

隣にあった父親の弟の家も燃えている。いやユニエル一族の家すべてが炎に包まれていると言った方が正しい。うちから燃えている人が二人出てきた。背格好からしてそれは父親と母親だった。

「父さん、母さん」

そう言っても返事がなかった。父親と母親はその場に倒れた。燃え尽きるとそこには人間と判断できるだけでそれが他人から見たら誰かすらもわからない物体だった。リチャードの姿が見えない。まさかリチャードも父さんと母さんみたいになってしまったのだろうか。

「兄ちゃああん」

2年前は兄さんと呼んでいたが今は兄ちゃんと呼ぶようになった。

エドワードの中で兄さんと呼ぶのが気恥ずかしくなってしまうたからである。

「エドワードオオオ!!」遠くの方でリチャードの声がした。

「兄ちゃん」

「エドワード、お前は無事だったか」

「帰ってきたらこんな事になって」

「俺もだよ。隣町まで遊びに行って帰ってきたらだ」

「一体、誰がこんな事…」

「これは君の所為だ。エクエス君」

そこには一人の男性がいた。

「誰だ？」

「私の事を知らないとはどんな教育を受けてきたんだ？君達は」

「兄ちゃんは知ってるか？」

「名前だけなら。確か…メイル・スペードリア。俺達、ユニエル一族の主人。違うか？」

「ご名答」

「でおれが何をしたってんだ？」

「ん？わからないのか？君は開けちゃいけない鍵を開けたんだ」

「開けちゃいけない鍵？」エドワードは考えた。けどその答えはすぐに出てきた。そうか。あの本か。

「どうやらわかったようだな。君は我々、スピードリアからすれば危険分子だ。そういう危険なものは排除しなければならぬ」

「エドワードの何処が危険分子だと言うんだ？」

「…存在自体がだ。思想も何もかもすべてがな」

「じゃあ何で一族すべての家を焼いた？」

「危険分子はその根から排除する事になっている。エクエスを生んだのは君達、ユニエル一族だ。だから焼いたまで」

エドワードはその言葉を聞いて激怒した。

「エクエスという存在そのものを生み出したのはお前達だろ！！」
「メイルは黙り込んだ。しかしメイルは銃をエドワードに向けた。」

「やはり、君は危険分子だ」

そういう言って発砲する。その弾丸はエドワードにあたったかと思われた。だがエドワードの前にはリチャードがいた。

「大丈夫か？エドワード」

「兄ちゃん！！」

？K・エピソード／エドワードの一日4／

それは一瞬の事だった。

「ちっ。急所をはずしたか」

リチャードはその場に倒れた。エドワードはリチャードの近くでしゃがみこみ心配そうに見つめた。

「エドワード、お前は逃げろ」

リチャードは気絶した。エドワードは剣を抜いた。

「兄ちゃんはおれが守る！！」

「ほう。君が私を倒すというのか？」

「そうだ」

「フハハハハ！！君みたいな子供が勝てる訳ないだろ！！大人を嘗めるな！！」

メイルも剣を抜いた。

「あゝあ。始まっちゃったね」

「いいの？私も一緒に」

「あなた以外、頼める人はいないですよ」

レイと一緒にいたのはリラだった。

「まあいいわ。一応、あなたと私は同じクローバーリアだものね」

「うん。エクエスをクローバーリアの隷属にする」

エドワードとメイルの交戦が続く。

「さすがはエクエスと言ったところか。だが所詮は子供。体力の限界かな？」

確かにその通りだ。やはり、本当の殺し合いと勝負は違う。ましてや向こうは大人。剣術に関しては向こうの方が断然上だ。勝っているのはスピードぐらい。最初の方は良かった。だが持久戦となった今では明らかにエドワードが不利だ。

「うるせえよ」

エドワードの体がふらつく。立っているのもやっとだ。

「これで終わりにしよう。私も忙しい身だ。たかが奴隷一匹にかまけている時間はない」

メイルが剣をふるったその時だった。

「子供相手にこれ以上はダメだと思えますよ。メイルさん」

レイがメイルの剣を剣で止めた。

「君か。レイ・スピード。ん？リラ・ハートもいるのか。クローバーリア家の二人が何故、我が家の隷属をかばう？」

「あなた方がエクエス、いやユニエル一族を捨てると言うのであれば、我がクローバーリア家が拾い、隷属にするまでと思ったからですよ」

「なるほど。君達は危険分子でも奴隷として扱うのか？」

「扱えると言うのであれば使い物にならなくなるまで使うものだと教え込まれてきたので」

「残酷な家だな。今、死んでおけば楽だと思うがな。これから必ず両方の世界を巻き込む戦争が起きる」

「：起こす、起こさないはあなた方、軍が決める事ではないですか？政府軍中將殿。それに僕とここで戦えば後に不利になるのはあなた方だと思いますが」

メイルは少し考え、剣を鞘に戻した。

「確かにそうだ。私の地位も危うい」

メイルは振り返って歩き出した。

「そこにいる危険物はお前達、クローバーリアにくれてやる」

メイルはその場から姿を消した。

「一応、応急処置はしたわ」

「ありがとうございます。リラさん」

リラはレイがメイルと話している間にリチャードを治療していた。

「さて、エクエス君。君もさっきの話は聞いていただろ？」

「ああ。おれはお前等には従わない」

「それはそれでいいけど君だって知っている筈だ。君達、異能人間一族と僕達、スート貴族の間にある法則を」

レイが言っている事はもちろん理解できた。エドワードみたいな異能人間を持つものをスート貴族が保護するという法。表向きはいいが実際は奴隷と同じような扱いである。上にどこかのスート貴族の隷属にならなければ反乱者と見なされ処刑される。

「…」

「じゃあこうしよう。君はクローバーリアに従わなくてもいい。そのかわり僕には従う。それでどうかな？」

レイの事はエドワードもそれなりに知っていた。魂の進化論に反対しながらも研究所にてスパイ活動をしている反乱者。それでもエドワードは信じられなかった。結局、エクエスという存在を生み出した側である事にはかわりなかったからだ。

「おれはお前みたいな反乱者の仲間になるつもりはない」

「それでもいいよ。君は君の思うままに行動すればいい」

「わかった。兄ちゃんを守ってくれるか？」

「いいよ。じゃあいいね？」

「ああ。まだおれは死ぬわけにはいかない。おれの果たすべき事を果たす」

「ここは？」

目が覚めると何処かの寝室にいた。

「おはよう。兄ちゃん」

「エドワード」

「ここはレイさんの家だ」

「そうか」

リチャードはエドワードの表情を見た。涙を我慢しているような顔だ。

「ごめん、兄ちゃん。おれの身勝手な行動でみんな…」

こういう時、どう言ってあげればいいのだろう。リチャードは考えた。考えた末、リチャードは口を開いた。

「まだ俺が生きてる。それにお前がすべて悪いわけじゃない。だからこれ以上泣くな」

「うん」

泣きながらエドワードは頷いた。この先、何があっても兄ちゃんだけは信じよう。エドワードはそう心の中で誓った。

それから6年経った。エドワードは18歳、リチャードは25歳。彼等は廃墟となったユニエル一族跡地にいた。

「本当に行くのか？エドワード」

「ああ。おれはやっぱりあいつのそばにいたい」

「そうか」

情報屋として仕事を6年間経っていた。リチャードからすればエドワードはものすごく成長したような気がした。

「頑張れよ」

「おう」

エドワードはリチャードと別れた。リチャードは空を仰いた。もうこんな事が起きぬようにと。

「黒沢君、頑張れ!!」

同じチームの子に応援される。ラストスパートだ本当に誰かの為に頑張る事は気持ちいい。

「ゴール!!一着、黒沢」他のチームも遅れてゴールした。

「黒沢、お前すごいな」

「ありがとう」

「まさか、リレーで赤屋が負けるとはな」

二着でゴールした赤屋が来た。

「本当だよ。あつ。ボクは赤屋光輝。よろしくね」

「よろしく」

「まあ赤屋は陸上部じゃなくてサッカー部なんだけど部活が休みの時は参加している奴なんだ」

「へえ」

ナージヤは翌日放課後、エドワードより早く帰ってきた。そして彼の部屋に忍び込んでいた。ナージヤは本棚を見ていた。一段目を見た後、二段目を見た。その時、ある一冊の本に目が止まった。タイトルは“エクエス”と書かれていた。その本はエドワードの字で書かれており、それなりに読めた。日記みたいなものでもあった。ページをめくり、あるページで止まった。そこに記された事を頭に刻み、その日記を閉じた。

「∴そういう事でしたのね。エドワード」

ナージヤはエドワードの部屋を出た。

0. プロローグ

私は少し、緊張していた。理由はこれから血のつながりもない赤の他人と姉弟になるからだ。

「ドキドキする」

私は母に話しかけた。この時、私は中学校一年生に成り立て。つまり4月の事だった。

「仲良くやるのよ。だってこれからお姉さんになるんだから」

母にそう言われた。余計に緊張する。私の方が数ヶ月早かったらしく同じ年でも私がお姉さんという事だった。急な話だとも思った。私はこれまで一人っ子だった。それがちょっとした念願、妹あるいは弟が欲しいが叶うというわけだ。まあ本音を言うのであれば嬉しいんだかそうじゃないんだか半々である。

待ち合わせ場所にこれから私の父となる人と弟となる子が来た。

「はじめまして。よろしく」

その子が話しかけてきた。この時、父となる人にはもう何回も会っていた。

「よろしく」

私とその子は握手をした。ちょっと照れくさかった。

？A・突然

「抜かりはなかったかしら？」

「何の？」

「スピードのエースの時よ」

「事後処理はよかっただろ」

「そうだけど…」

「何かあったのか？」

アンとジェシカが話し合いをしている。近くにはアンの付き人もいる。

「研究員の幹部に言われたのよ。マッドハッターが現れたという噂があるって」

「ほう。まあ：想定内っちゃあ想定内だな」

「ええ。問題は何処から流出したかしら？」

「映像があるんだろ？ならそれを見ればいいだろ」
煙草の煙りを吐く。

「それもそうね」

ジェシカはあの時撮影した映像を流した。

「ん？ちよっとここアップしてみろ」

ジェシカはアンに言われた通りに左斜め上をアップした。

「映像記憶ができる魔法陣」

「噂というよりももう流出しているわね。これじゃあ」

「ヤバいな。いくら向こうにエクエスとハンプティダンプティがい
ても捕獲しに軍が動けば捕獲は免れないな」

「アン」

ジェシカは真顔でアンを見た。

「何？」

「現に言ってくれるかしら？」

「はあ！？何でおれに頼むんだよ！！グレイヴとかジャックとかに

頼めばいいだろ」

「グレイヴは軍の強化合宿、ジャックは仕事があるでしょ」

「おれにだって仕事がある」

「いつもサボっている男が仕事を理由にして私の頼みを聞いてくれないのかしら？」

「うっ」

「それにあなた、明日から休暇らしいじゃないの。いいじゃない。一日増えるだけだし。どうせ仕事量もかわらないでしょ？」

アンの付き人に聞く。

「変わらないですね」

「なら決定ね」

「はあ。しょうがないか。じゃあ行ってくるよ」

アンは研究院を出て、現の苑に向かった。

エドワードは怠そうに授業を受けていた。今は化学の授業。

「じゃあここを赤屋、読んでみる」

「はい」

そう言われて男子生徒が立つ。あれ？あいつどこかで見た事があるような。そうか。昨日の赤屋光輝か。へえ。同じクラスだったんだ。

「よし。もういいぞ」

赤屋は席に座る。

数分後、チャイムが鳴る。

「じゃあ今日はここまで」 「起立、注目、礼」

先生が去る。するとエドワードの近くに赤屋が来た。

「同じクラスだったとは知らなかったな」

「ボクもだよ。ねえ、お昼、一緒に食べる？」

「いいけどDクラスの白石奈菜も一緒だけどいい？」

「いいよ。別に」

サッカー部じゃあナージャは見学に来ないだろうし。

お昼になり、赤屋が同じクラスのメンバーを何人かつれてきた。まあナージャ目当てというのが見え見えだ。その中には寺戸宏もいた。そして屋上に行った。屋上には白石奈菜ことナージャがいた。

「英一君」

ナージャがエドワードを見た。

「奈菜、今日はオレのクラスの奴らも一緒なんだけどいいか？」

「うん」 赤屋達は座る。ナージャは自己紹介をして欲しいと言ってきた。

「じゃあ俺から。バスケット部所属の寺戸宏だ」

ナージャが寺戸を見る。どうやら違うようだ。

「オレは東野祐だ。寺戸と同じバスケット部所属だ」

東野も違うらしい。

「おれは藤田誠司だ。サッカー部所属だ」

藤田も違う。

「ボクは赤屋光輝。誠司と同じでサッカー部に所属してるんだ。よろしくね」

赤屋の時はすごい勢いで凝視していた。ビンゴかそれとも別の何かかもしれない。

「私は白石奈菜よ。よろしく」

その後、みんなしてお弁当を食べた。

放課後。赤屋が今日も少しだけなら暇だという事を聞いて屋上に行こうと誘った。

「あれ？白石さんもいる」「こんにちは。えーつと…」

「赤屋光輝だよ」

「赤屋君」

「光輝でいいよ」

「じゃあ光輝君。話があって来てもらったんだ」

「ボクに？」

「うん」

『プルルル』

エドワードの携帯が鳴る。エドワードはそれに出た。相手は賢だった。適当に相手をする。内容はデューズスートが見つかったという事だった。一応、こっちの結果も伝えた。

『ピッ』

電話を切る。

「誰からだったの？」

赤屋に聞かれた。エドワードはただ知り合いと言った。

「光輝君には姉弟とかいるの？」

「いるよ。Aクラスに。名前は赤屋雪奈っていうんだ」

「双子なのか？」

「ううん。血のつながりはないよ」

「へえ」

「その…雪奈さんという人を呼んでももらえない？」

「いいけど」

赤屋が電話をかけた時だった。

何もないところから巨大な門が現れた。エドワードはそれを見て、誰かが楽園から現に来たと思った。案の定、その通りで門から人が来た。その人はアンさんだった。

「あれ？来る場所間違えたか？」

アンさんはまるで寝起きのような頭だった。

「何しに来たんすか？アンさん」

「おっ！エドワード！…ナージャで合ってる？」

「合ってますわよ」

「じゃあよかった」

煙草をくわえ、火を付けた。エドワード達の平然な対応に驚いていたのは赤屋だった。

「い、一体これはどういう事!？」

「ん?何が起きてるんだ?」アンさんも間が悪いと思う、エドワード。それもそのはずだった。ここにはこの世界の普通の人間、赤屋光輝がエドワード達、異世界人と一緒にいる。それだけならまだいい。そこに樂園から来たてのしかもなんの変装もしていない白衣を着た怪しげな男が、いきなりの現れたのだ。赤屋の反応は正しいと思う。

「ちょっと黒沢。説明してくれる?」

「:まあしょうがないか。見ちまったんだし。どっかの誰かさんの所為で」

「悪いな」

ナージャとエドワードは呪文を唱えた。すると二人は樂園での姿になった。

「やっぱり、こっちの方が落ち着くな」

「そうですわね」

「き、君達は一体、何者!？」

「異世界人」

まあ信じてもらえるわけがない。だからこれ以上、説明する事はないだろう。

「:さっきの人からして信じるしかないみたいだね」

赤屋は言う。エドワード達はちょっと驚いた。

「信じるのか?」

「信じるも何もさっき起きた事を科学的に説明されても信じる事はできない。けど異世界というのであれば説明されてもある程度は信じられるかなって思って:」

まあ異世界って言葉が出てきた時点で何でもありだと思っているのだろう。確かにそうならばさっき起きた事にある程度の説明なりなんなりがつく。

「:信じてもらえるのでしたら早速やりますわよ」

「頼んだ」

ナージャが赤屋に近づく。

「な、何をする気だ？白石さん」

「私はナージャ・ブラッティですわ。光輝様」

ナージャは赤屋の胸の辺りに指を二本あてる。その後、呪文を唱え始めた。一分ぐらいが経ち呪文が唱え終わる。すると赤屋の胸が光り出した。

「安心してください。人体に影響を及ぼすような事はしておりませんわ。ただあなたの魂を視覚化させただけですわ」

確かに赤屋の魂がエドワードやアンにも見えている。その魂にはスペードの2と浮き出ていた。

「ボクの魂はこうなっているんだ」

「そう。これがあなたの魂ですわ。普通の魂ならば何かが浮き出るような事はありません。ですが特殊な能力などを持つ魂の場合、何かしらのマークや字が魂から浮き出るようになっていくのです。あなたも簡単に言えばその一人という事ですわ」ナージャの説明は的確だなと感心するエドワード。自分ではここまでできない、そう思う。

「なるほどね。でボクは何者なのかな？」

その声はちよつと震えていた。

「私達と同じですわ。光輝様」

「って事は異世界人？」

「魂だけだな」

アンが説明の中に入る。「体はこの世界のものだ。ただお前の魂に異世界の力が入っているだけの話だ。今はな」

「今？」

「ここからが重要な話ですわ。あなたの魂はまだ完全な異世界人ではありません。それはアン様の説明でわかりますわよね？」

「うん」「あなた自身がこれからこのまま人間でいるかそれとも私達と同じ異世界人になるか決める権利がありますのよ」

「…お断りだけだね。だって当たり前じゃないか。そんな得体の知

れないものになる奴の気が知れないね」

当然の意見だと思う。はっきり言えばこいつは賢とは無関係な人間だろう。それ以前に名前すら知らない可能性だってある。

アンさんが煙を吐く。

「まあそりゃそうだな。だがいいのか？ 舞台が何処になるかは知らないが遠くない未来、必ず戦争が起きる」
脅し始めた。

「そんな脅しにはのらない」

「まあ…それもお前の自由だ。一つ言っておく。戦争になるならないはともかくお前の大事な人間、全員死ぬぞ」

それを聞いて赤屋は驚いていた。

「どういう意味？」

「まあ説明すれば長くなるが簡単に言うと、この世界に存在するすべての魂が新しく転生すると言えはわかるか？」

「何となく。アンさんはこう言いたいんですね。転生とは言葉の通りで前世とはまったくの別人だと」

「…その通りだ。おれはそれを止める為に動いているが、止める事は不可能だとおれは見ている」

予想はできていた。いくらアンさんとジェシカさんがレジスタンスとして動いていたとしても、敵が強大すぎて太刀打ちができるような相手ではない事は事実だった。

「その不可能はどうやれば可能になるのですか？ ボクがアンさん側につけば可能になるんですか？」 赤屋がまっすぐな目を持って聞く。

「いやならないだろうな。お前がおれ等側になろうが、敵の数を減らす事しかできないだろう。それだけ敵が強大なんだ。だがお前がおれ等側に入れば、おれともう一人の仲間が考えている最善策の為の時間稼ぎにはなると思う」

エドワードも初耳だと思う。そういう情報は二人とも流さないからな。

「それは…転生を止めるという事ですか？」

「まあ簡単に言えばだ」

詳しく説明はしないか。

「わかりました。ボクでいいのなら味方になります」

半強制的だな。こりゃ。まあ確かにアンさん側の人数は少ない。たぶんいて二十人だろう。アンさんからしてみればどんな手を使っても、味方を増やしたいって思っているんだろうな。

「それはよかった。まあ悪い用にはしねえから安心しな」

「…はい」

この人が死魂側でよかったってつくづく思う。敵だったら本当に最悪だな。この人。

「じゃあジャックを呼ぶか」

「待ってください。アン様」

ナージャが大きい声で言った。

「今回は一人では覚醒する事ができないと思われすわ」

「何で？」

アンさんが不思議そうに聞くが視覚化が解かれていなかった魂を見て、納得したような顔をした。

「確かにそうみたいだな」「光輝様に私の説明でわかるか定かではありませんが説明いたしますわ」

「うん」

「あなたの魂には完全なスペードの2の力がありません。その代わり、あなたにはダイヤの2の力が半分とまではいきませんが、あなたの魂の中に存在しています。ですからあなたが完全なスペードの2になるためには、ダイヤの2の力を持つ誰かを見つけないければならないのです」

「その魂にボクの力であるスペードの2もあるの？」

「ええ。間違いないと思いますわ」

だからあの時、何も言わなかったのか。他の奴もいたというよりメインの理由はわからなかったからか。

「でこの人が来る前に雪奈に電話しろというのは…」

「ええ。姉弟というものは似たような魂を持っている確率が高いのです。年が近ければ近いほど、その確率は高くなります。ましてやあなたの姉弟は血のつながりがないとなると何か強い力に引き合っ

てそうなった可能性は十分ありますわ」

「わかった。ちょっと待ってて」

赤屋は電話をする。

赤屋雪奈は音楽室にいた。彼女は合唱部に所属している。彼女はよく人からクールだと言われる。それを気にする事はないし、自分がクールだとも思わない。

「雪奈」

合唱部の部員が彼女を呼ぶ。

「何？」

「アルトパートの練習、始まるよ」

「わかった。すぐ行く」

彼女はきれいな黒髪を持っている。声も決して高い声ではないがきれいな声を持っている。

『プルルル』

突然、雪奈の携帯が鳴り出した。相手を確認して携帯に出る。

「何？ 光輝」

『雪奈、今すぐ屋上に来てもらえるかな？』

「すぐ終わる？」

『たぶん』

「わかった」

雪奈は電話を切る。

「私、ちょっとだけ用事ができたから抜けるね」

「わかった。やってる間に帰って来てよ！！」

「わかってる」

そう言って彼女は音楽室を出て、屋上に向かった。

一体、何の用だろう。毎日、家で会っているのだから電話するほどの用は特にないはず。なのに電話まで使って呼び出すぐらいだ。きつとそれなりの用があるに違いない。そう思いながら彼女は屋上のドアを開けた。

「光輝」

そこには現実では有り得ない事が起きていた。いつかこんな日が来るんじゃないかと思っていた。あの子に会った時から。

？2. 憧れの姫1

「雪奈」

光輝が私を呼ぶ。まるで私に救いを請うているよう。そうされたところでは私には何もできやしない。

「あなたが赤屋雪奈様？」

「ええ」

「私、ナージャと申します。以後お見知りおきを」

「オレはエドワード。赤屋光輝とは同じクラスだ。よろしく」

「おれはアン。よろしく」

アンとかいう人は煙を吐く。喫煙者か。苦手だ。

「私を呼んだのはあなた達の方でしょ？」

「ええ。あなたの魂がどんなものか見るために」

ナージャは私のところに来て胸に手をあてた。そして呪文を唱える。すると光輝と同じように胸の辺りが光り出した。

「これは…」

「予想通りでしたわ。やはりあなたがダイヤの2ですね」

「それで私にどうしろと？」

「そうですね。私達の仲間になってほしいのです」

「…いつかこんな非現実的な事が私の目の前で起こる日が来ると思っていた。あの子に会った時から」

「あの子？」

アンはエドワードとナージャの二人を呼ぶ。そして耳打ちをする。

「あの女はダイヤの2だ。もしかしたらアリスの情報を何かしら持っているかもしれない。とりあえず聞き出しておけ」

「わかりましたわ」

話が終わると二人は私の方を向く。

「その話、詳しく聞かせてくださいますか？」

「いいわ」

それは彼女、赤屋雪奈になる前の話。

雪奈が小学校三年生の時だった。彼女が通う学校では小学校三年生で初めてのクラス替えがあった。

この時、初めてのクラスメートがたくさんいたから自己紹介をしていた。

「私は蒼井雪奈です。よろしくお願いします」

雪奈は小学校時代はまだ赤屋雪奈ではなく、蒼井雪奈という旧姓だった。名字順に並んでいたためと男子からスタートしたため雪奈は2番目だった。その後の淡々と聞く。彼女の中にはじめの的にならないければそれでいいと思っていた。これぐらいの子供は些細なことといじめに発展する可能性だってある。彼女は一人になりたくないという強い思いがあった。その理由は一つだった。独りぼちは寂しいからだ。彼女の父親は女遊びばかりして彼女の母親がそれを見かねて離婚した。雪奈を引き取ったのはもちろん母親である。だから母親一人で家庭を支える事になり、遅くまで働いている事が多々ある。その所為か雪奈は夕飯も休日さえ、一人の時が多い。その時の気持ちを学校に来てまで味わいたくないと思ったからだ。

「じゃあ次、美春瑠璃」

「はい」

担任の先生が名前を呼ぶ。それに返事をして少女は席を立った。

「美春瑠璃です。よろしくお願いします」

クラスがざわつく。

「お前ら静かにしろ」

先生が言うともみんな静かになった。

どうやら美春瑠璃という子は何かしらあるみたいだった。でも雪奈は瑠璃を一目見て、懂れてしまった。ひかれてしまったのだ。

瑠璃はいつ見ても一人だった。女子と話している時もある事はあ
るがどこかぎこちない。男子とはからかわれたりしているところば

かり見る。端から見れば彼女はかわいい部類に入るし、その通りだ。性格だって純粹そうに見える。それ以外は消却的とかマイナスな部分が目につくばかりだ。そして何より彼女は変な子でもあった。変と言ってもそこまでではないが不思議な部分は結構ある。雪奈はまだ喋った事はないがよくわからない事ばかり言うらしい。雪奈達が話しかけたのならちゃんと相づちなり答えてはくれるが瑠璃から話しかけると大抵は答え難い事ばかり。確かに離れていく人が多いのは頷ける。それもあつたせいかな雪奈は話しかけなかった。菌扱いというものは怖いものだと思う。まあよく言えば鬼ごっこなわけだし先生が何をしている？と聞かれたら大半の子供が鬼ごっここと答えるだろう。それが一学期の終わり頃から雪奈のクラスでは流行っている。鬼はもちろん、瑠璃であつた。最初は男子がふざけて始めたがそれがどんどんエスカレートし、今では男女問わずやっている。それがある所為か先生以外、瑠璃に話しかける子はいなかった。雪奈は関わらないようにしていたが雪奈がたまたま瑠璃を見ると彼女は笑つたのだ。雪奈は思った。辛くないのだろうか。寂しくないのだろうか。どうしてあんな笑顔でいられるのだろうか。不思議でしようになかった。だから勇気を出して話しかけた。「ねえ、瑠璃ちゃんはあるな酷い事されても笑顔でいられるの？」

「酷い事？私はそんな風に思った事はないよ。だって本当に酷い事は大切な人に会えなくさせる事だもん」

確かにそれも酷い事の一つではある。だが会えなくさせるというのはどういう事だろう。会いたいのなら会い行けばいいと思う。

「会いたいのなら会いに行かないの？」

「…できるのならもうしてるよ。でも、きっと会っても私の事はわからないと思う」

瑠璃は諭すように言った。

「何でそう言い切れるの？」

「…あなたは前世があると信じてる？」

「私は…」

言葉につまる。そんな不確かなものほど答えられるはずがない。ましてや前世というものはあったとしても現世である雪奈達にはわかるものではない。

「私は…そういう不確かなものは信じていない」

「そう。でも私の中には確かに前世があると確信しているの」
なるほど。これは独りになるわけだ。何が言いたいのかわからない。

「…そう」

雪奈はその場から去った。これ以上関われば自分もどうなるかわからない。でも最初に感じた憧れの気持ちは消えなかった。

それから数ヶ月経っていつの間にか菌扱いはなくなっていた。子供の特徴でもある飽きっぽい性格からだろうか。

それでも雪奈は気になっていた。四年生になってもクラスは同じだった。

「クラス、一緒だね。雪奈ちゃん」

瑠璃からそう言われた。この時の雪奈はちょっとだけ嬉しかった。

「うん。そうだね」

「…雪奈ちゃんは運命って信じる？」

また難しい事を聞いてくる。

「私は信じてる」

「…じゃあ雪奈ちゃんと私が出会ったのも運命だね」

「…：…そうかもね」

「ねえ、今すぐじゃなくていいから私と友達になってくれないかな？」

雪奈には今すぐという言葉が引っかかった。何故、今じゃなくていいのだろう。今なると何かあるのだろうか。

「何で今じゃなくていいの？」

「だってまだ時が来てないもん」

「時？」

「うん。あなたの中にある本当を知り、目覚める時が。私だってそ

うなの」

「目覚める」

「うん。その時が来たら友達になろう？」

「……うん」

それまでにこの子の事をよく知ろうと思った。

? 3. 憧れの姫2

雪奈の家には最近、母の彼氏がよく来る。仕事場で出会ったと母から聞いた。

彼は赤屋博人。眼鏡をかけていて優しそうな雰囲気男性だった。母のタイプがこういう男性だという事は知っているので好きになった理由もわかる。

「こんばんは。雪奈」

既に呼び捨てにされている。別に呼び捨てに抵抗があるわけではない。ただ雪奈と会ったのはまだ一ヶ月前だったから慣れてないだけであった。

母と博人さんが付き合って雪奈が知る限りでは四年は経っている。

母から聞いたばかりでは婚約を前提にお付き合いをしているらしい。

「こんばんは。博人さん」

「冷たいな。雪奈は」

「...まだ慣れてないだけだよ」

「ならいいんだ。今日は雪奈にも言いたい事があって来たんだ」
「何？」

「実は僕にはね、雪奈と同年の息子がいるんだ」

それを聞いて驚いた。

子供がいたのか。という事はもし、母と結婚したらお兄ちゃんあるいは弟ができるのか。

「しかも雪奈、君がお姉ちゃんになるんだ」

という事は弟か。雪奈は12月生まれなのでそれ以降という事になる。

「息子は3月生まれだからね」

三ヶ月ぐらいしかはなれてないのか。

「名前は何ていうんですか？」

「光輝って名前だよ」

「会ってみたい」
「今度ね」

光輝は一人で父の帰りを待っていた。

母親は生まれた頃からいなかった。だから母親というものには憧れがあった。

「今日も遅いなあ」

一人で待つのは慣れているから寂しいとかそういうものは小さい頃よりはましになっていた。

「ただいま」

父が帰ってきた。

「お帰り」

「光輝」

父は玄関から廊下にあがりながら言う。

「何？」

「美由紀に会わないか？」

美由紀とは今、父が付き合っている女である。フルネームは蒼井美由紀。

「それはいいけど…何で急に？」

「婚約を前提に付き合っているのは知ってるだろ？」

「まあ」

「結婚するのならお前のお母さんになる人だ。今のうちから仲良くなれるのならなっておいた方がいいと思ってな」

光輝はこの結婚が自分のためだという事は知っていた。

「お父さんがそう思うのならそれでいいけど」

「よかった。まあそれ以外にも理由があるんだけどな」

「理由？」

「ああ。美由紀には娘さんがいてな。お前と同じ年で雪奈っていうんだ」

という事は姉か妹ができるのだろうか。

「まあお前の方が弟になるんだけどな」

って事は姉ができるわけだ。

……お兄ちゃんになりたかった。お兄ちゃんになれば妹にかっこいい姿を見せられる。

弟だとなんかかっこ悪い。理由はかっこいいところを兄や姉にとられ残念な立ち位置になるから。

「はあ」

「どうした？ため息なんかついて」

「別に何でもないよ」

「あっそ」

次の週の日曜日。雪奈の家に博人と光輝が来た。博人に似ていると思った。

「今日は約束通り、連れて来たよ」

「はじめまして。赤屋光輝です」

「…蒼井雪奈です」

どういう気持ちになればいいのだろう。嬉しい気持ちになるべきなのだろうか。不安がそこに入ってくる。これから仲良くできるのかな。

「とりあえず、ばば抜きでもしようか」

何でばば抜き？違うゲームでもいいと思う。テレビゲームとかボードゲームとか。

何でランプのしかもばば抜きなんだろう。どうせやるのなら大富豪がよかった。

四人分のランプが配り終わり、ジャンケンをする。順番は美由紀、光輝、博人、雪奈の順だった。最初、まずそろっているランプを出す。出し切ったところで博人がスタートと言った。

雪奈のところにばばはない。つまりこのまま行けばあがれる。

だがそう簡単にいくわけでもない。同じトランプが揃わない限り、手持ちの数は減らない。厄介といえばその通りだ。

事実、美由紀からトランプを引いたが揃わない。博人が揃ったペアを出す。雪奈の手持ちの中に同じトランプがあったようだ。

美由紀のトランプを引く。ようやく揃ったのでそのペアを出す。これあと4枚。美由紀はあと6枚。光輝は5枚。博人は3枚だ。

数分経った。ばばは今、雪奈のところにある。どうやら美由紀のもとにあったようだった。早くなくなってほしい。

光輝が博人のトランプを引く。光輝は揃ったみたいでそのペアを出す。光輝はあと一枚だ。博人が雪奈のを引く。ばばではなかった。でも博人も揃ったみたいでそのペアを出す。博人もあと一枚だ。

雪奈は美由紀のトランプを引く。手持ちに加えると揃っていた。そのペアを出し、残り二枚だ。

美由紀が光輝のを引く。光輝はあがり、喜んでいた。美由紀は光輝のトランプのおかげで揃ったらしくそのペアを出す。

博人は雪奈のトランプを引く。雪奈からばばがなくなった。雪奈は美由紀のトランプを引く。同じ奴が揃い、出す。あと一枚だ。

美由紀は博人のトランプを引く。どうやら揃わなかったみたいだ。博人が雪奈のトランプを引く。雪奈はそれであがり。

「やった！」

雪奈は光輝の近くに行く。

「誕生日はいつ？」

「3月3日」

「私は12月25日」

「クリスマスの日なんだ」

「うん。光輝君はひな祭りの日なんだね」

「ちよつとやだよ。せめて端午の節句に生まれたかった」

「どうして？」

「だってかっこ悪いじゃんか。それにぼくはお兄ちゃんになりたかった」

「：別にお兄ちゃんになれないわけじゃないと思うけどな」

「どうしてそんな事が言えるんだよ？」

「もしかしたらあの二人の間に新しい命が宿ったら：お兄ちゃんになれるんじゃないの」

「：それもそっか」

「あゝん！負けたゝ！！」

「お母さんがばばかあ」

「ちよつとバカにしてるでしょ！雪奈」

「別に。相変わらずトランプ弱いなあって思ったただけけど」博人が笑っていた。光輝もつられて笑っている。雪奈は考えた。

いつかこの人達と家族になれる日がくるのだろうか。待ち遠しい。

「楽しかったかい？雪奈、光輝」

そうか。博人は雪奈も光輝も美由紀も楽しめるゲームとしてばば抜きを選んだのか。親睦を深めるために。

「うん。楽しかったよ！博人さん」

「ぼくも楽しかったよ。お父さん」

「よかった。じゃあ次は七並べだ」

「次こそは負けないわ」

「お母さんは勝てないよ」

「そんな事ないわよ。七並べは大の得意なのよ」

雪奈は冷たい目で見ると言う。そう言うていくつ不得意があるのだろうか。本当に得意なものはなんだろうか。こういう人をきくと天然と言うんだろ。似てない事を祈ろう。

「：あっそ」

「本当、冷たい子ね。光輝君はどう思う？」

「確かに得意そうに見えますね」

「優しいわね。光輝君は雪奈とは大違い！」

「お世辞だよね？博人さん」

小声で耳打ちをする。

「だな」

「何か言った？雪奈、博人」

「何でもない」

「何でもないな。そんな事より七並べ、始めるぞ」

博人はトランプを配る。この後、神経衰弱、大富豪、ダウト、ポーカーをやったが全て美由紀は負けを決め、光輝は二勝、博人が三勝、雪奈は四勝という結果だった。

次の日。雪奈は無性に瑠璃と話がしたくなった。

「瑠璃ちゃんは妹とかいる？」

「…いるよ。二人。小学校二年生と保育園の年長さん」「そうなんだ。お姉ちゃんっていいもの？」

「微妙だよ。気に障るような事をするとか泣かれて怒られるのはいつも私なんだから」

「へえ。何か瑠璃ちゃんから聞くとあんまりいいものでもなさそう」「人それぞれだと思う。…雪奈ちゃんは私と友達になったら私を守ってくれる？」

「当たり前だよ。友達ってそういうものだから」

「…そっか。ありがとね」

瑠璃が笑った。すごくかわいいと思った。

五年生、六年生では瑠璃と同じクラスにはならなかった。五年生の時は雪奈は二組、瑠璃は四組、六年生は雪奈は一組、瑠璃は三組だった。六年生の時に美由紀は妊娠していた。

「…妹ができるのかな？弟かな？」

「どっちがいいの？」「うゝん。弟かな」

「どうして？」

「前一緒になったクラスの子がたいへんだって言ってたから」

「弟でも変わらないと思う。それに雪奈は11歳でしょ？光輝も一

緒だから大丈夫よ」

「…そうだよね」

「…お父さん」

「何だ？」

「結婚はいつするの？」

「三月にしようかと思ってる。光輝と雪奈が卒業してからだ。そうじゃないと雪奈がかわいそうだからな」

結婚してからは博人の家で暮らす事になっている。

「そっか。弟がいいな」

「名前、相談しないとな」

「そっか。それがあったね。案、あるの？」

「とりあえず、男だったら由。女だったら藍って名前にしようと思ってる」

「へえ。いいんじゃない」

自分もお兄ちゃんになれる。それが嬉しかった。

出産予定日は9月という事になっている。今は7月。あと二ヶ月だ。性別は男である。

「美由紀は名前に何か案あるか？」

「博人はどうなの？」

「由ってのはどうかな。お前の名前にある美由紀の由をとって由」

「それなら由人にしない？あなたの名前にある人をとって」

「…それがいいな。由人か」

9月23日。男の子が誕生した。

今は3月。卒業の時だった。雪奈は小学校を卒業すると博人の家がある隣町、百合並市に移り住む事になっている。つまり、中学校

は百合並市にある中学校に通うわけだから枝垂れ小学校の生徒とはお別れである。

雪奈は瑠璃のいる3組に行った。彼女に伝えたかったからだ。

「瑠璃ちゃん」

「何？」

「私、中学生になったら隣町に引っ越すの。だから瑠璃ちゃんとはお別れなんだ」

「そっか。でも大丈夫だよ。私と雪奈ちゃんはまた会える。私、そう信じてるから」

瑠璃が笑った。いつかどこかでまた会えたら憧れの気持ちを抱くのだろうか。雪奈は初めて会った時に感じた事を再確認した。いつの日か、私の目の前に非現実的な事が起こると。

中学校一年生になった時、雪奈は少し緊張していた。光輝と姉弟になる。母にあれだけの事を言われた。その期待に応えないといけない。そう思いながら光輝ともう一回、よろしくと言う。新たな始まりとして。

「ふーん」

アンは興味がなさそうに言う。

「美春瑠璃。その方があなたの言うあの子なのですわね？」

「ええ」

「私達が探しているアリスという存在であるかどうかは私が判断いたします」

「アリス？」

雪奈は不思議そうに聞く。

「：おれから言うわ」

アンが煙草を口から離して言った。

「アリスとは世界の革命家の一人だと言われている。おれ達はその存在を探しているんだ。この世界を救う為にな」

「…その存在を見つけ出すために私と光輝の力が必要って事？」

「いかにも」

「いいわ。なってあげる」

「…決まりですわね」

「じゃあジャック呼ぶか」

アンはジャックと叫ぶ。そんなもので来るのかと光輝と雪奈は思った。だがやはり来た。

「呼んだ？アンさん」

「ああ。呼んだ呼んだ。ダイヤの2とスペードの2が見つかったからあとよろしくな」

「ずいぶんと投げやりだな。ま、いつか」

ジャックは雪奈と光輝を見た。

「お前ら、まず手を繋げ」

「「は？」」

「そうしねえとダメなんだよ。大丈夫。死にはしねえから」

「わかった」

光輝と雪奈は手を繋ぐ。「じゃあ始めるぞ」

ジャックは呪文を唱え始めた。やたらと長い。それを言い終わるとランプを光輝にはスペードの2、雪奈にはダイヤの2を渡す。そこからまた呪文を唱え始めた。すると二人の魂が分割された。そして分割された半分は正しい魂の片割れと繋がる。最後にもう一度呪文を唱える。すると二人の魂は見えなくなった。

「あゝあ。疲れた〜！！」

雪奈と光輝が目を覚ました。

「…一つ、言っている？」

「おう。いいぞ」

「一回、死んだ気がしたんだけど」

「そりゃあそうだろうな。だってお前らから魂を無理やりはがした

んだもん。そりゃあ一回、死んだ気がするだろうな」

「おい！！死にはしないって言っただろ！！」

光輝がジャックに詰め寄る。

「そうしないとお前らの魂は正常にならなかったんだからしょうがないだろ。それに生きてるんだから別にいんじゃないやね」

確かにその通りでもあった。

「…まあいいか」

「いいの？雪奈はそれで」

「だって生きてるし」

「…そうだけど」

「納得は行かないかもしれないがとりあえず名前を決めてもらわないとな」

アンが言った。名前か。「何で？」

「漢字がないからだよ。だからその名前でいられたらおれ達は読めないんだ」

「わかった」

二人は考える。

「私はスノウ・フリーズ」「ボクはエレクト・サンダー」

「スノウとエレクトな。んじゃ今日は解散な」

アンにそう言われて二人はそれぞれ部活に行った。

? 4. 裏1

ナージャは一人自分の部屋にいた。あとはアリスを見つければひとまず自分の任務が終わる。それでも自分の気が晴れるものでもない。まだエスポワール・ルーチェにとっては、アリスを見つけてやっとスタートラインに立った事になるとアンが言っていた。アンは一応、ナージャ達と生活する事になった。

「…先が思いやられますわ」

アンの性格をある程度知っているナージャは、アンを半ば使えないと内心、思っていた。彼は“勝手にやれば”だの“興味ねえな”だの“あっそ”だの部下とかに対してそんな言葉しか吐かない。つまり自分では動こうとしない奴である。そして彼は自分の事を決して他人に言わない奴でもあった。その辺はエドワードと似ているなと思うナージャ。やはりエドワードもとはスピードリアの隷属。似るところもあるのだろうと感じた。

「…ハートロットの隷属である私が、スピードリアの事などわかるはずもないですわね」

ハートロットとスピードリアは決して敵対しているわけでもないが、仲がいい方ではない。その上、ナージャはスピードリアの隷属に会った事がほとんどない。エドワードに初めて会った時にはすでにクローバリアの隷属だった。

『コンコン』

ノック音が聞こえた。

「いいですわよ。入って」

入ってきたのはエドワードだった。

「あゝ。あの人と話していると疲れるな」

「…何の用で来たんですの？」

「用は特にねえよ」

「では違うところへ行ってください！ここは女性の部屋ですよ！

！

「だから？」

「……！！」

「別に何もしねえよ」

「私はあなた方のこういうところが嫌いなのです。人の心に土足では入り込んで、獲物を丸飲みにする……まるで蛇みたいですわ」

「……否定はしねえな。スピードリアは男であれ女であれ……そんな奴ばかりだ。事実、アンさんだってそうだしクローバリアの隷属になったおれでさえ、その性質は取れていない。肌にしみついてやがんのさ。お前だってそうだろう？」

「あなた方と一緒にしないでほしいですわ。私はそんな野蛮な者とは違います」

「あつそ。ハートロットは悪魔って呼ばれてる。知ってたか？」

「……知りませんわよ。そんな事」

「……お前、昔からそうだな。まるでヤマネを見てるようだ」

「ヤマネ？」

「スピードリアの隷属だよ。お前と同じで世界を知らない哀れな奴だ」

ナージャはそれに激怒し手から剣を出した。

「これ以上、私を愚弄するのならあなたとて許しませんわ！！」

「自分の望んだものを具現化する。それがハンプティダンプティの本来の能力」

「知っていたんですのね」

「そりゃあな。けどおれに剣向けるなんざあ命知らずもいいとこだな」

エドワードは姿を消した。ナージャがエドワードの姿を探しているとナージャの首もとにエドワードの剣があった。

「やっぱり遅いな。お前は本当に最近だな。ハンプティダンプティはまだ十代しか続いていない」

「…あなたは本当に何処まで知っているのです？」

「さあな。少なくともお前よりは知っている。おれにはお前が持つもう一つの能力、魂の透視はない事もな」

「それでは…まるであなたも持っていたような口ぶりではありませんか！？」

「…前世が死魂なら有り得ない話じゃねえだろ。お前はジャックの誰かが前世。そうだろ？」

「……そうですね。私にはちゃんと実験台にされた時の記憶が残っています。それはあなたも同じではないのですか！？」

「ねえな。お前にその記憶が残っている理由はお前事態の魂の転生回数が少ないからだ。ジャックの時より劣化した魂の透視能力もその影響だ。どんどん劣化していき、最後はおれやシェリルみたいになる」

「シェリルも持っていたのですか！？」

「もう何千年前だけだな。奴も死魂から今の魂になった。シェリルは一番最初の犠牲者だ」

「！……私は一番最初の犠牲者はあなたとばかり思っていましたわ」

「何でそう思ったんだ？」

「だってあなたは…」

ナージャが言おうとしたところでアンが止めに入ってきた。

「何、くだんねえ事やってんだ？お前ら」

「アン様！！私はエドワードに聞きたいのです！彼が知っている真実のすべてを」

「そりゃあお前の勝手だ。だがお前はシェリルやエドワードみたいにはなるな」

「何でそのような事をあなたは言えるのです？」

「…あいつの魂を見ればわかるだろ。エドワードやシェリルは憎悪の塊だ。エドワード、お前もそれぐらいにしとけ」

「…わかった」

エドワードは剣を鞘に入れた。そのまま彼はナージャの部屋から出た。

「ほら、お前もそんな物騒なもののはしまっとけ」

「…わかりましたわ」

ナージャは剣を消した。

「ナージャ」

「何ですか？」

「お前はこれから起こるであろう事で重要な存在になる」

「…何でそう言えるのです？」

「向こうではマッドハッター捕獲作戦があるらしい。事によっては軍が動くかもしれない」

「軍が…」

「まあおれはそれ以上が今回、動くと見ているがな。その時は力を貸してくれるか？」

「…当然ですわ。あなたに言われなくてもお貸しいたしますわ」

「そうか。それならよかった。さっきの話の中にハートロットは悪魔だって言うのがあったな」

「その話は事実なんですの？」

「ああ。優しく近寄って隙があればそいつを喰う。それが狼と呼ばれる貴族、ハートロットだ。たぶん、お前にその性質が色濃く現れないのはハートロットの隷属になったのが最近の方だからとハートロットの奴ら自体、その性質をあまり出さないからだろうな」

「…そういう事なのですね」

「おれが知る限りだけだな。それ以上はジェシカに聞け」

「わかりましたわ」

「じゃあおれも出るわ。これ以上女の部屋にいと誰かに怪しまれそうだしな」「誰に？」

「トーブにな」

アンは部屋を出た。

「やっとナー ज्याの部屋から出たみたいですね」

ジェシカの後ろにいる男がそう言った。

「トープ」

「何です？ ジェシカさん」

彼はどうやらトープと呼ばれているらしい。

「そこまで監視しなくてもいいんじゃないのかしら？」

ジェシカは煙草の煙を吐く。

「ダメですよ。あの人場合は、ちゃんと見ていないと何しでかすかわからないので」

「……………それはその通りね。弁明する気はないわ」

「そんな事より、ジェシカさんも仕事をしてください」

「わかってるわよ。……アンが仕事をさぼりたくなる理由がわかった気がする」

「何故、そう思うのですか？」

「自分には自分のペースがあるのにそこからせかされたら、やりたくもなくなるわね。アンみたいな性格じゃあなおさらね」

「だから困るのですよ。誰がその尻拭いをしていると思っているのですか」

「……………あなたもたいへんね」

『コンコン』

ノック音がした。

「誰かしら？」

「ジェシカ・ハート様とトープこと、ハワード・グラディエス様に用があつて来ました」

「何の用？」

「これから一時間後に例の作戦会議があるので出席を願います」

「急な話ね。わかったわ。仕事が終わる次第、出席すると議長にでも伝えておいてくれるかしら？」

「わかりました」

伝えに来た者は去った。「さてやろうかしらね」ジェシカはもうス
ピードで仕事をこなした。

一時間後。

ジェシカとハワードは会議室にいた。

「これより作戦会議を開始する。議長のセイシャス・スターダスト
だ」

「セイシャス・スターダスト？」

ハワードは小声でジェシカに聞く。

「あなたは初めてだから知らないと思うけど研究院の会議も一応、
議長はスターダスト家が勤める事になっているのよ。研究院で行わ
れる会議のすべてを担当するのが彼、セイシャス・スターダストよ」
「なるほど」

「ジェシカ君！」

議長が大声で呼んだ。それに動じないジェシカ。彼女はただ淡々と
議長に言った。

「何でしょう？」

「先ほどお喋りをしていたようだが？」

「アン・スペードの代理で本日、出席したハワード・グラディエス
にあなたの事を説明していたのです。彼はこの会議に出席するのが
初めてなので」

「それならよい。ジェシカ君は何か案でもあるかな？」

「私でしたら：まずターゲットであるマッドハッターを閉じ込める
事からしますね」

「ほう。閉じ込めるといふのは現という事かな？」

オセ・ダイヤルーツが言う。

「ええ。そうすればこちら側に逃げてくる事はないでしょう。マッ
ドハッターは現の人間なので」

「なるほど。その案には賛成です」

長い髪を一つに束ねた男、オルファス・ダイヤルーツが言った。

「そうなれば作戦を実行する舞台が現という事になります。あちら側に住む人間には危害を加えぬような策もとるべきだと思います」

「それならば彼等を使うべきではないでしょうか」

オルファスが言う。

「！！羽の者を使うのですか！？」

「いかにもだ。ジェシカ」

「わかっていてのですか！！確かに彼等の力を使えば私が言った策を難なくこなす事は可能でしょう。ですがこちらには何も情報を得る事ができない。情報を得られなければリスクを伴う場合もあります」

「そうだとしてもこの作戦の目的はマッドハッターの捕獲であり、現の住民を守る義務は我々にはない。それならばリスクを犯してでも彼等を使うべきだ」

「私が言おうとしている事がわからないのかしら！？彼等には世界を滅ぼせるほどの力を持っているのよ！！もし彼等がその力を解放したのであれば我々では太刀打ちする事はできません！！」

「私も同じ意見だ。オルファス殿」

ジェシカの意見に賛成したのがリーグル・クローバリアだった。

「作戦というものはリスクを最小限にし且つ事後処理も踏まえた上で遂行すべきだと私は考える」

「確かにリーグルの言う通りだ。だが彼等はその力の解放のやり方を知らない。だから私は彼等を使う事を提案したのだ。リーグル、ジェシカ」

ハワードはさすが、ダイヤルーツだと思った。ダイヤルーツ家はチーターとも呼ばれている。彼等は狙った獲物を一瞬で捕らえる獣。たとえリスクがあるとわかっていても獲物を迅速に捕らえる為にはどんな手でも使う。だからこそあのような案出るのだろう。

「スピードリアの者も何か意見があるかね？」

「あたしからは意見はないね」

ケイ・スピードリアが言う。

「こういうのにあたしがしゃしゃり出る気はないね。だけどオルファスの意見には賛成だよ」

「ケイ。あなたは何の為にこの議会に参加しているのかしら？」

「：はあ？ そんなの決まってるじゃない。幹部だからよ。あたしはこの地位にいる実力がある。だからあたしは幹部なのよ。幹部の仕事には会議の出席も入るだから出席してるだけよ。アンお兄様もいたらきつと同じ事を言うわね」

確かに言いそうだと思うハワード。アンとケイは実の兄妹。性格がよく似ている。

「ケイさん、ジェシカさん。あなた方、二人が争ったらいつまで経っても話が進まないわ」

二人の仲裁に入ったのがスキュラ・ハートだった。彼女はジェシカさんの二代あとのクイーンでもとはクローバリア家のものだ。

「：その通りね。ありがとう。スキュラ」

「いえ。礼を言われるような事ではないです」

「スキュラは意見はないのか？」

オルファスが聞く。

「ないわ。私もリーグルと同じ意見よ」

「そうか。リリーはどうだ？」

「わたしも基本は叔母様と変わりません。ですがオルファスさんの意見も一理あると思います。ですから最悪の事態が起きた場合に備えて軍を現に送るべきだと思います」

「確かにそうだね。アンの代理で来たハワード君は何かある？」
オセが聞いてきた。

「いえ。私の方からは特にはないです」

「そうか。では議長」

「うむ」

「先ほどの話から我等、研究院の作戦の総合的な意見を」

「此度の作戦には羽の者達の力を借り、確実にターゲットを仕留め、予測されるリスクには我が政府軍の者達の力をもってして退く。この作戦で行こうではないか！！作戦名はマッドハッターのMとH。羽の者達のFをとり、MHFとする。異論はあるか？」

幹部達はないと答える。ジェシカだけが歯切れが悪い答え方だった。「決まったな。軍への伝達はケイに任せる。君の弟に伝えておいてくれたまえ」

「わかりました」

「政府には私から行こう。それでは本日はこれで解散だ」
議長がそう言うのと幹部達は次々と会議室を出た。

？5. エピローグ（裏2）

「ジェシカさん。これからどうする気ですか？」

「どうするも：私じゃあ何もできない」

「反論しきれなかったのは？」

「：今回の事は私達の計画には何ら支障はないわ。リスクは確かにあるけど私の目的は向こうの世界の人を守る事ではないから」

「だからですか」

「私はこれから仕事に戻る。研究院での仕事が来たら私に伝えに来てくれるかしら？」

「わかりました」

ジェシカは自室に戻った。

「光輝」

「何？」

雪奈が光輝の部屋に来た。

「ごめん」

「：別に雪奈が言わなかった事は気にしてないよ。ボクの機嫌が悪い理由はあの人が言った言葉だよ」

「……」

「何でそんな事が異世界の人間にわかるんだよ。何が起るって言うんだ」

「……あの人だって何が起るかかわからないような言い方だった。それを知りたいのなら自分で調べるしかないわね」

「……そうだね」

雪奈は久しぶりにあの顔を見たいと思った。あの日々のままだろうか。自分の事を覚えているだろうか。

「……光輝、明日桜花に行かない？」

「一緒に？」

「うん」

「わかった。行こう」

翌日。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん」

由人が話しかけて来た。「何？」

「どこか行くの？」

「うん」

「由人も行きたい！！」

「…しようがないか」

由人はわがままで人のいう事をなかなか聞かない。それに連れて行っても問題があるわけでもない。光輝と雪奈はしっかりと由人の手をつないで向かった。

桜花市に行くには電車を使う人が多い。私鉄だから運賃が安いわけでもない。それでも利用客は多い。やはり学生がほとんどである。「うわあ！！すごい！！由人、桜花に来るの初めて！！」

「ボクも来るのは久しぶりだな」

「そうね。私も卒業以来、来てない。だからちょっと楽しみ」

光輝と由人は雪奈の顔を覗き込んだ。きれいに笑っていた。

「…あんなふうにも笑うんだ」

「え？私だって笑うよ」

光輝と由人のイメージが冷たいしかない。だからと言ってツンツンしているわけでもない。ただ冷たいだけの女。それが雪奈である。だからそんな彼女が憧れる女性とはどんな人なのか会ってみたいのだ。

『西桜花。西桜花です』アナウンスが流れる。

「着いたから下りるよ」

「うん」

「は〜い」

三人は下りた。彼女の家はここからそれほど遠くない。5分ぐらい歩けばすぐに着いてしまうところにあるのだ。

「着いた」

雪奈は恐る恐るインターホンを押した。するとドタバタと音を立てて玄関の方に来た。ドアを開けたのは女の子だった。

「こんにちは。もしかして梨々香ちゃん？」

「そうですけど…誰ですか？」

「瑠璃ちゃんの友達の赤屋雪奈です」

「瑠璃の友達か。ちょっと待っててください」

梨々香は瑠璃の妹だ。年は12才の中学校一年生である。

「瑠璃！！友達が来てるよ」

すると瑠璃が階段を下りてきた。雪奈は彼女を見て思った。変わってない。彼女の持つ雰囲気もそうだし何よりあの頃感じた憧れのままだった。

「梨々香が赤屋って言うから誰かなって思ったけど雪奈ちゃんだっただ」

「久しぶりだね。今日は弟、二人を連れてきたんだ」

「赤屋光輝です」

「由人です！！」

「とりあえず、上がって三人とも」

雪奈と光輝、由人はあがった。

「瑠璃姉」

羅奈が出てきた。羅奈は中学校三年生の女の子である。

「何？」

「彼氏？」

「違うよ。友達」

「ふーん」

羅奈は自分の部屋に入った。

瑠璃の部屋はそれなりに片づいていた。そこに座る三人。

「オレンジジュース、持ってくるね」

瑠璃は部屋を出てオレンジジュースとお菓子を持ってきた。

「本当に久しぶりだね。五年ぶりか」

「そうだね」

それから一時間ぐらい話していた。

「…なんかわかった気がする」

「何が？」

「雪奈が懂れた理由。ボクも彼女からそれと同じような気持ちを感
じた」

「そっか」

ようやく揃った。やっと私を見つけてくれる。ああ。私はこの時を
どれほど待ちわびた事だろう。

「ロスト、もうすぐ会えるよ」

0. プロローグ

そうして私は目を開けた。そこには知らない人ばかりいた。これが私の父と母なのだろうか。はじめの世界。その感覚。すべてが新鮮だった。その所為か余計に寂しく感じた。私はひとりぼっち。ロストもレイもブレイドもない。寂しいよ。私はすぐ近くにいます。

声が聞こえた気がした。儚く響く声だった。それは泣いているようだった。私はこの気持ちを知らない。でも懐かしい感じがする。自分じゃないのに自分だと思える。そうか。自分じゃない自分こそ私の前世なのか。私は前世と共に生きていたのか。私の前世の名はハーツ・ハート。

？6. 止められないもの

12月25日 クリスマス。

「あゝあ」

「どうした？賢」

「クリスマスだっていうのに何でお前なんかと一緒にいなきゃあなんねえんだよ」

「しょうがないだろ。同じ屋根の下に住んでいるのだから」

「そりゃあそうだけどさあ…。今頃、陸斗と千代はデート中だもんな。…よし！！あいつ等を尾行しよう！！」

「はあ？これからデューズスートの顔合わせがあるのにそんな事をしている暇はないだろ！！」

「待ち合わせ場所はファミレスだろ。陸斗たちだって昼飯はファミレスで食べるだろうからそこに呼べばいい。映画館はこの町に一つしかねえし。だからこれから行こう！！あいつ等のデートが気になっしょうがない」

「…父親か。あいつは」

映画館に行くと案の定陸斗たちがいた。

「なかなかうまくいってるみたいだな」

賢は双眼鏡で二人を見ていた。

「何で家からそんなもんを持ち出したんだ？」

「決まってんじゃないか。観察をするって言ったらやっぱりこれだろ」

「…ベタだな」

「うるせえ」

二人はだまり始めた。それから数分して波留が話しかけてきた。

「…賢。大地達とどこで合流する気だ？」

「あいつ等確か…父親にクリスマスプレゼントを買いうって言ったから…」

賢は考えた。映画館のすぐ近くにはちよつとしたショッピングモールがある。そこで買い物をしてそうだ。

「この場所で合流する。オレはなるべくならここから動きたくない」

「……面白がって見てるんだかマジなんだか…」

賢は大地に電話した。

「ねえ、これなんかどうかな？」

風雅が大地に聞く。彼等はネクタイを選んでいるようだ。

「いんじゃないね。たぶん、風雅が選ぶものなら何でもいいって言うと思うしな」

「じゃあこれにしようかな」

『プルルル』

「お兄ちゃんの携帯がなってるよ」

「マジか？」

携帯をとって電話に出た。

「何、賢？」

『集合場所だけどさあ映画館にしねえ？』

「別にいいけど何でだよ？」

『陸斗と千代がデートしてるからそれを見に来たんだよ』

「ん？マジか！！それは面白そうだな！！おれも見に行く。じゃあ切るぞ」

大地は携帯を切った。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「さすがに三人で他人のデートを見たら怪しまれない？」

「………確かにそうだな」

大地達は買い物すませて映画館に向かった。

「まだ話してるなあ」

「ここにいたのか。賢…って波留ちゃんも一緒だったのとおおお！」

「チー坊にフーか。意外に早かったな」

「波留ちゃん、こんにちは！」

「ああ。大地と風雅って呼んでいいのか？」

「お、おう」

「うん。あたしも波留って呼んでいい？」

「ああ」

「…四人で他人のデートの見物はよしたら？」

「…いやだ！！だって面白そうなんだもん！！」

「賢。あんたはガキ？」

「いやおれは気持ち分かるぞ！！だってあの陸斗が女子にアタックしてるんだぞ！」

「だよな。男にも女にも冷たいあの男が恋してるんだぜ？友達として気になるだろ。な？」

「ああ」

「あたし、さっぱりわかんない」

「……」

賢たちは陸斗たちのデートを観察していた。

「陸斗くん」

「何？」

「そろそろご飯、食べに行かない？」

「…そうだな」

二人は立ち上がって映画館を出た。

「あっ！陸斗たち、映画館から出やがった。行くぞ！！お前ら」

「お、おう！！」

賢たちも映画館を出た。

ファミレス。

賢たちは陸斗たちが入ったファミレスに入った。席も陸斗たちのすぐ近くにしてもらった。

「賢。ファミレスに着いたんだからエドワード達を呼んだらどうだ？」

「それもそうだな」

賢はエドワードに電話した。

「もしもし、エドワード」『おう。ファミレスだろ？どこの席に座ってるんだよ？』

「窓側の席だよ」

『わかった。じゃあすぐ行くよ』

電話を切った。

「すぐ来るってさ」

「そうか」

「ご注文は何しますか？」店員さんが来た。

「チー坊とフーは何にする？」

「おれはクリームソーダ」「あたしはオレンジジュース」

「波留は？」

「カフェオレ」

「クリームソーダ、一つ。オレンジジュース一つ。カフェオレ一つ。コーヒーのブラック一つでお願いします」

「かしこまりました」

店員さんは飲み物をとりに行った。

「つか座りきれるのか？」

「確かにそうだよな。あと二人ぐらいで精一杯だろうな」

「どうするか…。分けるしかないか」

「隣の席にでも座ってもらえばいいんじゃないの？」

「それもそっか」

「お待たせしました。クリームソーダとオレンジジュース、カフェ

「席にご希望などがありますか？」

「高校生四人組の近くで」

「できればお名前を…」

「中平って人です」

「中平様のお近くの席ですね。こちらになります。それとお客様」

店員はアンの煙草を吸う姿を見た。

「当店は全席、禁煙となっております。ご理解の事よろしく願います」

「…しょうがねえか」

アンはポータブル灰皿を出し、煙草のを消した。店員はそれを確認して席に案内してくれた。

「こちらの席となります」エドワード達が座ったのを確認する。

「それではごゆっくりどうぞ」

店員は去る。

「で賢達は…？」

「ここだよ」

賢はエドワード達の前に来た。

「久しぶりだな」

「だな」

波留が驚いていた。

「アンさん！！どうしてここに？」

「暇だったから来ただけだ」

「この人がアンさん？」

賢が不思議そうに見る。本日もボサボサでだらしない男である。

「そうだけど…こいつ誰だ？」

とぼけた感じで波留達に聞く。

「こいつがマッドハッターです」

「…へえ。こいつが…」

アンはじろじろと賢を見始めた。

「何すか？」

「いやワインにやっぱり似てるな」

「親父の事を知ってるんすか？」

「まあ元部下だったしな」

「そういえばそんな事を波留が言ってたな」

「……パンドラであってるよな？」

「ああ」

「パンドラから聞いてたんだな。まあそんな事より席を替えて話で
もしようや」

「そうっすね」

大地と風雅は雪奈と光輝の座っているテーブルに行く。アン達は波
留と賢が座っているテーブルに座った。

「じゃあ改めて研究院幹部兼エスパワー・ルーチェ副司令官アン・
スピードだ」

「中平賢っす。向こうではルーン・ホリックと名乗ってます」

「じゃあお前の質問に答えてやるよ」

「アンさんはスート貴族のどこ出身なんすか？」

「スピードリア家の出身だ。他は？」

「エスパワー・ルーチェはどうやって敵の企みを止める気なんす
か？」

「……止められないな」

「え」

「一応、おれから簡単にエスパワー・ルーチェがおかれている状
況を説明する。エスパワー・ルーチェのメンバーをお前らをいれて
も総勢三十人弱程度しかいない。それに比べて研究院のメンバーは
総勢千人、そこに軍が雑魚をいれて総勢五十万人。政府の役人が百
人。そんな途方にもねえ数をたった三十人ぐらいしかいないレンジ
スタンスが止められると思うか？」

「そんな事、やってみないとわからない事だと思うんすけど……」

「まあ確かにそうだがおれ達がその数に気をとられている隙に奴ら
は自分達の目的を果たしちまうだろうな」

「その目的って何なんすか？」

「研究院の目的は楽園の苑、現の苑の魂をすべて生魂と死魂が混じり合った新しい魂に変換する事だ」

「それってもしかして全員死ぬって事か？」

「お前らみたいにするでに変換された魂は死にはしない」

「ハーッさんみたいになるって事っすか？」

「ああ。その計画後にお前らの知り合いと同じ魂に出会ったとしても別人というわけだ」

「それを止める策はあるんすか？」

「アンは水を一杯飲む。」

「ああ。止めるというよりはその計画の事後処理みたいなものだ。ロストからパンドラになった時の事を覚えてるか？」

「覚えてるっすよ」

「それと同じ事をその計画後にする。それがエスポワール・ルーチエの策だ」

「そうすればパンドラみたいになれるって事か！？」

「ああ。だがあれはまだ実験段階だ。これから完成品を作らなきゃならないし、その実験そして量産。それが今のおれ等の当面の仕事だ。エスポワール・ルーチエのな。研究院も薬品の量産が仕事となっている。そこでお前らには時間稼ぎをしてほしいんだ」

「それはいいけど何をすればいいんすか？」

「敵を倒すだな。向こうだって時間がほしいはずだからそんなに使えない駒を利用してレジスタンスを潰す事をするだろうな。その隙に薬品を量産する計画だ。おれ達もそれにのる。それと仲間集めだな。個々の力がいくら強くていいものだとしても一気に攻められでもしたら勝ち目はない。だからそれに対応するために実力のある奴を仲間にする。この二つ主だな。あとはおれやジェシカの指令を遂行する事だな」

「今回もその中にある仲間集めなんすよね？」

「その通りだ。アリスが見つかればこの世界に散りばめた異能の魂

は最後となるな」

「あゝ」

光輝がアンに話しかけた。

「自己紹介が終わったからそろそろ席を交換したいんですけど」

「わかった」アン達と光輝達は席を立ち、交換した。

「ねえ。あの軽い男、あなたの友達？」

「そうけど…」

「友達はもっとちゃんと選んでからなった方がいいと思うけど」

…この女の子も性格破綻型の残念美人だ。

「表面的な性格だけで奴を見たらそうとらえてしまうのはしょうがない事だろうな。だがそれだけで人を判断する奴は人として未熟者だな」

パンドラが言う。

「…そういうあなたはどうかなの？」

「…オレも未熟者の一人でもあるな」

「じゃあ説得力はないわね」

この二人、相性悪いなあと思はれた。

「それより雪奈、自己紹介」

「…そうね。私は赤屋雪奈よ。ダイヤのデュースを務めているわチー坊、どんまいと賢は思った。

「ボクは赤屋光輝。雪奈とは血のつながりはない。スペードのデュースを務める事になったんだ」

「オレは中平賢。マッドハッターだ」

「オレは平理波留だ。パンドラとも呼ばれている」

「それより聞きたい事があるんだけど」

「何？」

「何でこのファミレスにしたの？」

「いやゝそれは…」

賢は経緯を話した。

「類は友を呼ぶとはこの事ね」

「：雪奈。ごめんね、二人とも。優しい面も持っているんだけど不器用だからそれが出せないだけなんだ」

「見ればわかるよ。同類が近くににいるからな」

「ふーん。でその友達もボク達みたいな異能を持った魂なの？」

「ああ。エーススートだな」

「ふーん」

千代と陸斗は話をしていた。

「ねえ、陸斗君」

「何？」

「さっきからずっと気になってたんだけど、後ろうるさいね」

「確かに。ちよつと言ってくる」

陸斗は立ち上がって後ろの席に行く。

「あのちよつとうるさいんですけど…」

陸斗は気がついた。賢達がいる。

「賢！！」

「よっ！り、陸斗」見つかった！！

「しかも大地と風間まで…」

「ん？エーススートもいんの？」

アンが千代がいる席に行く。

「へえ。タイプだな」

ブロンド女子が好きなんだなと賢は思った。

「アン・スペードだ」

アンはとりあえずこれまでの経緯を話した。

「わかりましたよ。俺等も協力しますよ」

「悪いな。じゃあ解散で」

賢達は昼食や雑談をしてから帰った。

? 7. それも運命 1

レイは仕事をしていた。そこにはジャックの姿もあった。

「…ジャック君」

「何すか？」

「ハーツはどこにいるのだろうね」

「そんな事をおれに聞かれても…」

「そうだよね。ごめん」

レイは悲しそうな顔をした。

「彼女は確かに死んだ。それでも彼女が生きているような気がしてならない。でもたとえそうだとしても彼女とは別人なんだろうね」
ジャックはそれを聞いて驚いた。だが彼の性質を考えれば気づいていてもおかしくない事だと納得できた。

「彼女はエーススートのあの二人と違って予言があったわけでもなく、魂に異能の力があつたわけでもなければ、死魂を持っていたわけでもない。いたって普通の生魂のまま死んだのだから」

そう彼の言う通りなのだ。彼女が死んだ後にアンはアリスを彼女の魂に入れたのだ。

「…レイさんは探しに行かないんですか？」

「……行けるわけないよ。僕には山のように仕事があるのだから」

「仕事の方が大事なんですか？」

「……!! そういう事を言った訳じゃない!!」

「いや、おれにはそういうふうに聞こえましたよ。何がいやなんですか？」

「いやというか怖いんだ。彼女に会う事が」

「それってただ尻尾巻いて逃げてるだけですよ。彼と違って」

レイはその言葉に激昂しジャックを張り倒した。「彼というのはロストの事か!？」

「そうですね。いや正式には彼女ですけど」

「君に何がわかるというんだ！！ハーツは確かに僕を愛してくれた。でも彼女は最後にはロストを選んだんだ！！その時の屈辱は忘れもしない！！僕は女であるロストに負けたんだ！！それが男として許せなかった！！その気持ちが君にわかるというのか！？」

「……わかりますよ。だってロストは男だったわけですし。人は見かけによりません。見かけでロストを判断してた時点であなはロストに負けていたんですよ」

まっすぐに目でレイを見る。この目に反論などできるわけがない。これがジャックなのか。これが人を何人も見送って来たものの目なのか。

「つまりあなたは自分からも逃げてるんですね。否定されたからその自分を受け入れる事が怖いんですね」

「それは……」

「それから決別しないとあんたはただの負け犬だ」

間違いではない。どこかで僕は自分の事を完璧だと思っていた。落ち度のない、人が目指す人だと思っていた。

「……遅いって事はいいのかな？」

「人間はいつだって変われるもんです。年なんてもんは関係ありません。要は気持ちですから」

「……そうだね」

レイは現に向かった。

ブレイドはジョーカーと一緒にいた。

「仕事はいいのか？」

「ああ。今日は久しぶりに休暇がとれたのでな」

「そうかよ」

「私は昔、ハーツからお前が一番の理解者だったと聞いた気がした」
「……間違いはないな」

ブレイドはため息をついた。

「たぶん、あいつはおれにしか本音は言っていないだろ」

「ブレイド」

「何？」

「私ってわがままかな？」

「…何でそう思うわけ？」

「だって…私はロストに普通の恋がしたいって言ったのにロストの事を諦めきれないでいる。…ロストを求めている」

「…まあお前の気持ちはわからなくもないが二人には言うなよ」

「わかってるよ。死んでも言わない」

「…そうしろ」

「…：そんな事があったのか」

「ああ。まあ昔の話だけどな。最近は強く感じるようになった。前は弱かったがな」

「ハーツか？」

「ああ」

ブレイドは立ち上がった。

「確かめに行く」

「仕事は？」

「他の奴にやらせる」

「そうか」

ブレイドも現へ向かった。

「おはよ」

今は12月26日。朝の七時半。

「賢ちゃん、今日は遅かったわね」

「目覚ましをかけ忘れだんだよ」

「そう。部活は？」

「八時半から」

「あと一時間じゃない！早く用意しなさい！！」

「はいはい」

賢は用意をし始める。

「パンは一枚でいい？」

「ああ。兄貴はバイトか？」

「ええ。勝一さんは部屋で読書中よ」

「親父も好きだな。バターでお願い」

「わかったわ。コーヒーにミルクいる？」

「いらね」

「はい」

あやめは朝食を置く。

「いただきます」

それをほおぼる賢。

「波留は？」

「部活に行ったわ」

「早いな」

「賢ちゃんが遅いのよ」

「あっそう」

賢は食器を流しに入れ、洗面所に行き顔を洗ったり歯磨きをした。

「じゃあオレ、行ってくる」

「ええ。いつてらっしゃい」

賢は家を出た。

体育館に着くと何人かいた。陸斗と海斗、チー坊もいる。完全に遅れたパターンだな。こりゃあ。

「賢、遅い」

「別にいいじゃん。時間事態には間に合ったんだし」

「一緒に住んでる波留ちゃんはお前より一時間早く来てたぞ」

「あいつとオレの生活リズムを一緒にするなよ」

「目覚ましでもかけ忘れたのか？」

陸斗はオレの事、わかってんな。というかいつも陸斗の方がオレより遅いんだよな。

「そうなんだよ。いつもは6時半でセットするんだけどそれを忘れたら七時半に起きたんだよ」

「まあ結局は寝坊じゃねえ？」

「まあそうだけど」

チー坊ってたまに鋭いんだよな。

「…瑠璃、遅いね。そう思わない？波留」

チア部の部員が波留に聞いてきた。波留がそんな事を知っているはずがない。近所ではないし、ましてや仲がいい訳でもない。瑠璃が話しかけてくるから話すだけだった。波留は女性が好きな方ではない。その理由はやはりロスト時代が深く関係している。だから平理波留として接しているのが居心地が悪く、賢の前とかでいる自分が一番いいとやはり感じている。

「そうだね」

チア部に入ったのも瑠璃からの誘いだった。チアというものがどういうものか知リたかったというのもあったがそれよりも瑠璃という少女の事が気になってしょうがなかった。どことなく誰かに似ている。それが誰なのか思い出さなくてこの部活に入ったのだ。

「ごめん！遅れた！」

瑠璃が走ってやってきた。あれ？何か懐かしい感じがする。この笑顔：涙が出るぐらい懐かしい。

「ん？どうしたの？波留。涙が出てるよ」

「え」

瑠璃に言われて頬を触る。確かに涙が出ていた。何でだろう。瑠璃とはもう出会って一ヶ月は経っている。毎日と言っているほど会っ

ているはずなのに久しぶりに会うような感じがする。

「ごめん。何でもない」

波留はその涙を拭った。

外は雪が降り、外を白くする。今は午後一時。

「うわあ。雪が降ってる」

子供みたいに目をキラキラさせて外を見た。

「私、ペンキ買いに行ってくる」

瑠璃は走ってホームセンターに向かった。

「ペンキ？」

「あゝあ。波留は知らないのか。冬になってこうして雪が降ると決まってペンキを買いに行くのよね。まあ楽しいけど正直、ついていけないわね」

まるで昔の自分と：ハーツみたいだ。

三十分後。瑠璃がビニール袋にたくさんペンキをつめてやってきた。「あれ？波留しかないない」

「みんな、帰っちゃったよ」

「えええ！！つまんないの。波留は遊んでくれる？」

「うん。いいよ」

二人は外に出た。あの時と同じように遊ぶ。

「楽しいね！波留」

瑠璃は笑って波留を見た。ハーツの笑顔と重なる。

「おっ！雪、降ってんじゃん」

「だからこんなに寒いのかよ」

大地はガチガチと振るえている。

「あゝあ。チー坊は寒いのが苦手だったな。じゃあ陸斗と海斗、一緒に遊ぶか」

「それはいいけど何して遊ぶ気だ？」

「雪合戦」

「三人じゃ中途半端じゃないか？」

「外出て探そうぜ。誰か遊んでる奴がいるかもしれないしねえし。もしかしたら女子も遊んでるかもな」

「マジで！？おれも行く！！」

「：現金な奴だな。大地」

四人は外に出た。出てすぐにペンキで遊んでいる瑠璃と波留を見つけた。「瑠璃と波留ちゃんじゃん！！二人とも寒いのは大丈夫なの？」

「うん！！大地とは違うもん」

大地は上を四枚、下は三枚に加えてマフラーをしていて手袋に耳当てがついてる毛糸の帽子をしている。下着を入れないでこれだけ着込んでいる大地に対して瑠璃は短パンにハイソックス、上は三枚ほどしか着ていない。

「寒くないの？」

「うん！逆に気持ちいいぐらい！！」

「波留ちゃんは？雪、好き？」

「嫌いじゃないな」

「へえ。じゃあおれも好きになろうかな」

そう言いながらも振るえている大地。まずこれを直さないと無理だと思った賢達だった。

「つか何でペンキ？」

「そんなん、決まってんじゃん！！楽しいからだよ！！」

「いや雪みたら雪合戦だろ」

「それも面白いけどこれも面白いよ。ほら！！」
賢はペンキを受け取った。

「：何事もやってみねえとわかんねえか」

そう言って賢は雪に絵を描き始めた。瑠璃は陸斗にも海斗にも大地にもペンキを渡した。

「ブレイド!!」

レイは近くにいたブレイドを呼び止めた。

「何？」

「どこに行くんだい？」

「ハーツのところだよ」

「僕も連れてってくれるかい？」

「いいけど」

「僕じゃあ彼女がどこにいるかさえもわからないんだ」

「まあおれだって確かじゃない。直感もないなもんだ」
それでもブレイドは桜花高校を指差した。

「たぶん、この高校にハーツはいる」

ブレイドとレイは学校の中に入った。

「へえ。賢、絵上手いんだね」

「まあな」

「陸斗はへたくそだね。海斗も」

「……」

「大地も上手いね」

「まあこれと料理ぐらいしか取り柄ないし」

六人が遊んでいるところにレイとブレイドが来た。

「レイさん」

「ブレイド」

「…やっと思つた。ハーツ」

ブレイドは瑠璃を見て言った。

「ブレイド!! こいつは違う!! こいつは美春瑠璃だ」

「今はだろ。そいつの魂を見ろ!! パンドラ」

波留は瑠璃の魂を見た。その魂はやはりハーツのものであった。

「ハーツ」

「：はい」

瑠璃はまっすぐな目で彼等を見た。

「久しぶりだね。みんな」

瑠璃は波留を見た。

「ロストだね？」

「：ああ」

「変わったね。私もだけど」

「ハーツ」

レイが呼ぶ。それに振り返る。

「違うよ。私は瑠璃だよ。ハーツじゃない」

「でも君は：」

「前世がハーツなだけで今は美春瑠璃だよ。あんたが知ってる女じゃない」

確かにハーツならあんたなんて言わない。

「それでも：」

「しつこいな。あんたが知ってる女は死んだの。それをわかってよ。レイ」

「それをわかってても受け入れられないんだ。君を見てしまったから」

「：瑠璃」

「何？波留」

「今はアリスだろ？」

「うん。わかってたの？」

「：ああ」

「ブレイドもわかってて来たの？」

「まあな。アンさんに言われてたし」

「何だい？その話、僕は聞いてない」

「そりゃあ言ってねえし」

煙草を吸いながらアンがやって来た。

「アンさん。お久しぶりです」

「おう。久しぶりだな。アリス」

「何で僕に言わなかったんですか!？」

「そりゃあ考えればわかるだろ。お前なら精神とかいかれると思うたから。さてじゃあわかってるよな？」

「はい」

「ちょっと待ってください!! さっきアリスと言いましたよね!？」

「何で革命家が二人もこの時代に甦っているのですか!？」

「革命家？」

「…賢達には言ってなかったな。楽園の苑にはある二人の革命家の伝説があつてその二人が楽園の苑と現の苑を分けたといわれている」

「え!! 楽園の苑と現の苑って一つの世界だったのか？」

「すんげえ昔の話だな。遙か昔に世界は邪悪な獣達であふれていた。その獣達を封じるためにその革命家達は世界を二つに分けた。

その一人がアリス。そしてマッドハッターである賢、お前だ」「オレ？」

「まあ昔のお前だけだな。エーススートとデューズスートも揃ったわけだしおれの方から説明しよう」

これはまだ世界が一つだった頃の話。

「流石にこの数は手に負えないな」

「そうですね。どうすればよろしいでしょうか？」

三人の神は話し合いをしていた。

「キング達も限界か？」

「はい」

神の他には初代キング、クイーン、ジャック、ジョーカーもいた。

「雑魚は片づけられました但那の上となる獣達までは倒せません」

「それにこれ以上、この空間で戦闘を続けたらこの空間を持つ、この星自体が滅びかねません。この星に存在していた人間の半分は死に絶えてしまったのです。こちらの兵力もない。どうしたらよろ

しいのですか!？」

中心にいる神は玉座から立ち上がり、四人に向かって言った。
「この星に存在する空間を二つにするしか方法はない」

？8. エピローグ（それも運命2）

「二つに？そんな事が可能なのですか？」

「ああ。だが我々は手を貸さない。その代わりに我々の代わりとなる二人の者を選別しよう」

それから一日経った。神は二人の人間を招いていた。

「彼等に空間を分かち力を渡そう」

神はその二人に力を渡した。

「さあ、これから二人はこの星を救う革命家となるのだ」

「「はい」」

その二人は地上に下り立った。

「お前達は獣達を一つにまとめておいてほしい」

「「「はい！！」」」

キング達も地上に下りた。

「空間を分けたあとのその世界の住民はどうするのですか？」

「魂はまだ残っている。それにキング達の兵を獣達がいる世界に行かせるしかあるまい」

「∴そうだな」

その後、選ばれた二人の革命家は空間を二つに分け、眠りについた。またこのような大災厄が来た時の力になるように彼等の眠りを解くための書物を残した。そして二人の革命家を守る存在として後に選出されたのがエーススートの四人とデューズスートの四人だった。

「といわれている。どこまで本当でどこまでが嘘なのかそれを知る者はいないとまでいわれている」

「チェシャ猫でもか？」

「あいつは楽園ができてからの知識しか持っていない。たぶんおれ

が言った事を知っていても断言できるわけじゃないだろうな」

「アリスとマッドハッターと呼ばれるようになったのは？」

「それはわからないな。どこの書物にも書かれてねえし」

「そっか」「まあ昔話はここまでにしてジャックを呼ぶか。お前なら説明をしなくともわかるよな？」

「はい」

ジャックを呼んだ。呼んですぐジャックは来た。「やっと見つけてもらったのか？」

「うん」

「覚悟は…まあできてるか」

「うん」

「じゃあこれを」

瑠璃はジャックから差し出されたトランプを受け取った。

ここは何処だろう。この目の前にいる人は誰だろう。私の手、小さい。そっか。私は転生したんだった。じゃあこの眼鏡をかけた二人は私の父と母になる人か。ハーツ・ハートである私はこの子の前世なのになんでこんなにも鮮明に自分が存在しているのだろう。いくらこの子に人格が定まっていなくてもこんな事は有り得るのだろうか。これも魂から感じる新たな力“アリス”の所為なのだろうか。

“アリス”

“何？”

アリスがハーツの前に現れた。仮面を被り、黒い服を身に纏っていた。

“私が存在しているのは何故？”

“それは簡単な話。だってあんたは私だもん”

アリスは消えた。意味はある程度、わかる。でもこれはこれで酷い仕打ちじゃない。だってブレイドもレイもハルトもロストもない。

それに耐え続けなきゃいけないなんて。私には耐えられない。耐えられないよ。

“ねえ。なんでそんなに泣いているの？”

“寂しいから”

“どうして寂しいの？”

“だっていないから”

“何がいないの？”

“私の大切な人”

アリスは沈黙してしまった。私が泣いている。私の大切な人はいるのに私が泣いている。

“私がいるよ”

“そうじゃない！！私の大切な人はあなたじゃない。私の大切な人は：ロスト達だもん。あなたじゃない。あなたじゃ：”

“だからいないんじゃないの。もうあんたはこの美春瑠璃という人格の場に設けられた世界の中でしか生きていく事ができない哀れな存在だもん”

“じゃああなたは何なのよ！？仮面まで付けてあなたの存在は何？”

“私？知っているじゃない。アリスだと”

“そんなわかりきった事を聞いているじゃない！！あなたは子供の何？”

“そんな事、聞かなくてもわかると思ったんだけど。あんたには失望するよ”

アリスはその場から去った。

“何よ！？泣いてちゃいけないとでも言うの！？”

座り込み、地面らしき所を手をグーにして叩く。何回も何回も血が出るまで叩きつけていた。

それからアリスは現れなくなった。代わりに瑠璃が来るようになった。

“ねえなんで泣いているの？”

“…会えないから”

“誰に？”

“私の大好きな人”

“誰なの？”

“笑わないで聞いてくれる？”

“うん。聞くよ”

“髪の毛は長い白髪だね。綺麗な緋色の目を持った女の子”

“友達？”

“ううん。友達以上…” ハーツの涙の量が増える。

“恋人未満かな”

“そうなんだ。でもあんたはこの魂の所有者じゃないでしょ”

“な！でも私はあなたじゃない！！”

“根本的にはそうね。でも厳密に言えばあんたはただの亡霊と同じよ”

“そんな事はわかってる！！それでも求めちゃいけないの？私のこの思いが満たされる事を！！”

“じゃあなんであんたは死をあんたが生きている間に求めたの？”

“それは…”

“答えが出てこないの？なら私が言おうか？”

“やめて！！聞きたくない！！”

“逃れたかったんでしょ？彼がいてその人を愛しているはずなのに体じゃあ心じゃあ彼女を求めている。そんな醜い自分から”

“やめて！”

“これはあんたが求めたものの答えよ”

“違う！こんなものを私は求めていたんじゃない”

“じゃあどんな答えであって欲しかったの？”

“会えて幸せになる事よ”

“なるわけないじゃん。だってあんたが好きな人は女。そしてこの魂の現所有者である美春瑠璃も女。どうやってあんたが望む幸せが手に入るというの？”

“わかってる。でもそれが私の意思なの！！”

“いい加減にして！！前世であるあんたがどうしてそれを求め続けるの？その所為で美春瑠璃の表はあんたの意思と私の意思が混同しちゃっているのに！なんでそれに気づいてくれないの！？あんたなのに…”

瑠璃も泣き始める。二人ともわかっている事ではあった。どれだけこの世界で理想を述べても実現されるわけでもなければ美春瑠璃が実行するわけでもない。不満を言い合えば美春瑠璃が普通の女の子として他人から見えてくれなくなってしまう。普通はこの世界には一人しか存在しないのに稀にこうして二人以上の人格が住む事がある。二重人格や多重人格者はこの状態なのである。器の人間はここにいる人格がそのままその人としての性格や性質として出るが二重人格や多重人格者は人格が何人もいる所為で混乱する場合があり特に子供では人格を切り替えるスイッチが上手く扱えない所為か大人より混乱しやすく、混同させやすい。この時の美春瑠璃は小学生だった為、色濃くその症状が出ていたのだ。

“…”

“ごめん。でもねハーツ、瑠璃も会いたって思っているみたい”

“…瑠璃！！”

“ここまで私に言ってるんだもん。感化されちゃうよ”

“ありがとう”

それから数年経った。美春瑠璃は高校生になった。高校二年の事だった。美春瑠璃のクラスに転入生が来た。彼女の名前は平理波留。一目見てわかった。彼女がハルトであるという事が。ハルトなら魂を見る事ができる。だからきつとすぐに私だとわかってくれる筈。

やっと待ちわびていた時が来たんだ。でも彼女は気づいてくれない。どうしてわかってくれないの。こんなに近くににいるのに。

“わかるわけがないじゃん”

“なんで？”

“だってアリスの力で普通の魂に見せているんだもん。気づくわけがない”

“どうしてそんな事を…！？”

“あんた勘違いしてない？美春瑠璃はあんたの人生をやり直すために生まれてきたんじゃない。アリス復活のために生まれた人間なの”

“私からすればあんまりだわ”

“しょうがないじゃん。だってあんたは過去の人間だもん”

何も言えなかった。間違いではなかったから。だから辛かった。

“なんで泣いているの？”

仮面をした女が現れた。あの仮面はアリスだ。

“やっと会えたからに決まってるじゃん”

“私が誰だかもうわかるよね？”

“うん”

アリスは仮面を外した。やはりそうだったかと思う。初めて仮面姿の彼女を見て直感的に瑠璃だとわかった。

“もう大丈夫？”

“うん。大丈夫だよ。ありがとう。私のわがママを聞いてくれて”

“お礼を言われるまでの事じゃないよ。だって魂^{わたし}が望んだ事だもん”

ハーツは笑ってアリスの中に吸い込まれていった。そしてアリスの瑠璃と普通の瑠璃が対面した。“私自身と会うのは初めてだよね？”

瑠璃”

“うん。魂^{わたし}の中に存在していたのは知っていたけど”

“これからよろしくね。瑠璃”

“…よろしく。アリス”

瑠璃は静かに目を開けた。彼女は自分の手を見る。手袋をした自分の手。ピンクの服を着ていて髪は濃いめの赤と云えばいいだろうか。そんなふうだった。

「名前は？」

「アリス・ティンハート」

「これで揃ったわけか」

アリスは後ろを向く。

「レイ」

「ハーツいやアリス。ありがとう」

「また会おうね」

「うん」

レイはその場から去った。

「アリス」

「何？ブレイド」

「もうあんな事、言うなよ」

「わかってるよ」

「じゃあな」

ブレイドも去った。

「：パンドラ」

「何だ？」

「：ハーツからのお願い、聞いてくれる？」

「ああ」

「私を抱いて」

「：」

パンドラはアリスを抱き締めた。きっとこれが最後になる。ロストとしてハーツを抱きしめる事。「ありがとう」

パンドラは何も言わなかった。これで彼女達の恋は終わりを告げた事を二人は理解した。パンドラもアリスもその悲しみに浸っていた。

あの後、アンはエドワード達が住む家に帰っていた。

「やっとスタートラインに立ったぜ。ハワード、ジェシカ」

“そうみたいね。フウ” ジェシカは煙草を吸っているようだ。

「おっ！お前も吸ってるのか！実はおれも吸ってる」

“今日はきつといつもよりおいしいだろうなと思ったから吸ってるだけ”

「おれもお前と同じ理由だな。確かに今日は美味しい」

“ジェシカさん！そんな事よりあの事をアンさんにも報告してください” “そうね。アン、マッドハッター捕獲作戦には羽根の者を使う事になった”

「！！そうくるか。軍は動くのか？」

“ええ。あなたの弟が指揮を執るそうよ”

「へえ。ハワード」

“会って来いと命令する気ですか？”

「ああ。おれに会うように言ってくれ」

“わかりました”

「じゃあな」

通信が途切れた。

「さあ始まるぜ」

コンコンとノック音が聞こえた。

「入れ」

「失礼します。ハワードです」

「何の用だ？」

「現に行ったら会って欲しいとあなたの兄から伝言をお預かりしました。メールさん」

「：兄上は現にいるのか」

「ええ」

「わかった。会いに行く」

メイルは部屋を出た。

「これより、我が軍は“現の苑”へ理が変わり次第、向かう。我等の目的は復活の阻止だ。被害を最小限にできるよう努力してもらいたい」

メイルが高々と宣誓をする。メイルの部下はそれに応えた。

「なんだ？オレを呼び出して」

波留はレイと一緒にいた。

「…君に謝ろうと思って」

「…別にいい」

「え」

「お前が抱いていた感情はある程度、わかる。別にそれに対してオレは何とも思っちゃいない。オレが女である事にかわりはないしな。オレがそう言ってもお前が納得しねえんなら好きにしろ」

レイは少し考えた。そして頭を下げた。

「ごめん」

波留は驚きもしなかった。ただそれを見ていた。「顔、あげろよ。」

お前にそんなのは似合わねえよ」

「ロスト」

「違よ。パンドラだ」

波留はその場から去った。

そうして私は目を閉じた。もう悲しむ必要もない。会いたい人にも会えた。新しい友達もできた。私は幸せ。だからそのお礼に私もこれからあなたのちからの一部として力を貸すね。……ごめん。あなたじゃなくて私だったね。じゃあ改めて私は美春瑠璃。そして――

清々しい。今はそう思える。だってやっと一つになれたんだもん。
そう。私は美春瑠璃。そして――

私はアリス・ティンハート。

? 8. エピローグ(それも運命2)(後書き)

みなさん、お久しぶりです。来図です。ここで始まりの章は終わりとなります。雑な部分は多々ありましたがここまで読んでいただきありがとうございます。これからまだまだ続くのでお付き合いさせていただけたら幸いです。

始まりの章の本編は終わりましたがここからは番外編を書きたいと思っています。全部で五話を予定しているので楽しみに待っていてください。そして番外編が終わり次第、次章を書きたいと思っています。ここで少しだけ予告をしたいと思います。

「これより、隷属会議を始める。今回、隷属となるのはマッドハッター……ルーン・ホリックだ」

「あたし達は知りたいのよ。あの方に架けられた封印を解く方法を……」

「何も知らないのですね。あなた方は！！！！」

「理が変わった事によって、お前は这个世界に存在する事ができなくなっただけだ」

「黙れ！！あたし達をあの方を封印したのはあんたじゃない！！エクス」

黒き羽の章のまもなくスタート。

？9．黒と白のJく出会い・グレイド編く

リムは珍しく自分の机で明日のリストを見ていた。普段はジャック、グレイドに押し付けているがそろそろお金が底を尽きそうなため仕事をやる事にした。

「年寄りばっか」

ついてない。そう思った。リストに年寄りが多いのは仕方がない事だし、それが普通なのであるがリムは若い男の子がリストにいないかと期待してしまう。加えてイケメンならそれだけでテンションがあがってしまう時だってある。変だと思う人もきつと多いだろうがそういうふうに思わないとたまにこの仕事が辛いと感じてしまう。

「文句を言うな。それと今日の分、やっというてくれねえか？」

「はあ！？なんであたしがそんな事しなきゃいけないわけ？それに今日はグレイドの当番でしょ！！」

「確かにおれの当番だ。だかなお前だってそうやっておれに押し付けてるんだ。反省の意を込めてやれよ」

それに対して何も言えなくなる。事実だからしょうがない。それにこの分の報酬は自分の所に入る。そう考えればこれ以上の反論はまったくもって無意味だとわかっていた。

「しょうがないな。やっとかよ」

「ありがとう。リム」

ジャックは外に出た。

ジャックは花を持って墓地にいた。ジャックはある墓に向かって歩いた。その墓に着き、花を置いた。その墓には“高橋涼太”と彫られていた。

「今年も来たんだ」

「ハルト」

ハルトがやって来た。

「今日だもんね。あんたが自殺した日」

ジャックがこの世界に生魂として生きていた自分の骨が埋葬されている墓。

「ここには毎年来ている」

「うん。知ってる」

「ここに来ると自分が死魂である事を再認識する事ができる」

これはまだハルトがジャックだった頃の話。

今日も昨日と同じで仕事のリストが机の上に山のように乗っている。これが自分がしなければならぬ分だと思おうと溜息が出る。それも一回どころの騒ぎではない。もう何十回も出る。ハルトは適当にリストを見始めた。今日もなければいいと思っている。何かというと死魂の回収である。首つりとかが来ると慣れてはいるがいつ見たつていいものではない。だが今日のリストには一人、死魂の回収があった。最悪だ。ロストにやらせたいぐらい。あたしは作られた魂だから死魂の本当の気持ちは理解できないし、理解する気もない。馬鹿馬鹿しいとまで思う。自分の事しか考えられないただの屑。死魂になった者はみんなそういうふうにししか見えない。だからこの仕事を始めてから少しブレイドやグレイヴさん達の見方も変わった。

今はあるアパートにいる。ボロい。自分の部屋といつも比べてしまう。ブレイドに直せとよく言われる。別に口に出す訳ではないからいいんじゃないかって思う。ここには死魂の回収で来た。名前は高橋涼太。一般的な名前だと思う。男か。どんな理由で自殺するのかは知らない。いやリストとかにはちゃんと書いてあるがあたしは興味がないから見ないだけでもある。その死体がある所に来た。首つりは本当に嫌になる。見せられているこっちの身にもなれといつ

も思う。

「はあ。で何処にいるの？高橋涼太」

「ここにいますけど」

涼太はあたしの隣にいた。

「へえ。結構、イケメンじゃん。・・・あんた、あたしが何だかわかる？」

「死神？」

「正解。さてとあんたは何で自殺したの？」

「それは今の人生に絶望して死ねばまた人生をやり直せるんじゃないかなって思ったから」

「・・・馬鹿みたい」

小声で言う。

「今、何だった？」

「馬鹿みたいって言ったの！！」

「てめえ！！」

涼太はあたしの胸倉をつかんだ。

「女だからって関係ねえ。おれのこの気持ちを侮辱するな！！」

「侮辱するな？はっ！思いあがるなよ。屑が」

ロストに代わる。

「・・・単刀直入に言ってやる。お前は这个世界で人生をやり直す事は永久に不可能だ」

「どういう事だよ！！？」

「まんまだよ。お前が自殺した所為で転生できなくなったんだよ」

「死ねば誰もが生まれ変わるんじゃないのか！？」

「自殺さえしなければ！！お前は魂の罪の中で一番犯してはいけない罪を犯した。それが自殺なんだよ。人殺しでもなくな」

「じゃあおれは・・・もう」

「ああ。完全に死んだだよ。自殺をすればそれまでこの魂が繋いできたバトンを途切れさせる事になる。だからお前はそのバトンを途切れさせてしまったんだ！！」

涼太は泣き崩れた。

「こんな筈じゃなかった。おれはこんな結果を望んだ覚えはない」

「・・・これが現実だよ。罪を少しでも償いたいと思うのなら・・・オレみたいな死神、ジャックになりな。そうすれば少しは足しになると思う。まあオレは死神であってもお前とは違うけどな」

「じゃあお前は？」

「オレはお前より虚しい存在だよ」

高橋涼太は高橋家の次男として生まれた。兄とは二歳違い。そんなに年が離れていない所為かいつも比べられていた。兄の方が利口だとか、礼儀正しいとか、しっかりしていると。そんな事ばかり聞かされていた。だから兄が嫌いだった時もあった。けど兄は涼太のいいところよく言ってくれた。それが彼にとっては嬉しかった。だがその兄は事故で死んでしまった。涼太が12才の時だった。それから母親は涼太に兄の面影を要求するようになった。父親は母親ほどではなかったが要求する事も多々あった。家族は兄を求める。涼太は必要ない。彼はそう思うようになった。自分はこの世界には必要ない。必要のある人間としてもう一度最初からやり直したい。その思いで彼は自殺の道を選んだ。彼はそれが間違った選択であることを知った。

今日は本当に疲れた。死魂の回収が少なかったのは救いだった。

あたし自身はやってないけど、ロストがやろうともいいものではないのは事実だ。今日は死魂になったものが通う学校に呼ばれている。

「めんどくさい」

「まあそう言うんじゃないよ。ジャック」

ブレイドも一緒だった。久しぶりの母校。変わった所は特にない。まあお金がないからであるが。

「あたしにはわからない」

「・・・」

「この学校に通ってる奴等の気持ちか」

「まあお前はわかんないよな。おれだって自分以外はちゃんとわかるわけじゃない」

「あんたはどう思っていたの？」「おれか？・・・馬鹿な事をしたなと思っていた。おれはこれまでこの魂が生きた者達がおれを責めているんじゃないかってそういう気持ちにもなった事がある。でもジョーカーになって・・・それが晴れた気がした。何でかはわかんねえけどな。だからおれはチェリッシュさんに感謝している」

「あたしは・・・感謝なんかしていない。ジャックになってから、あたしは悲しい感情ばかりだ。あたしは何でこんなにも悲しい？あたしにはわからない。知らないから。あたしは人を知らない」

はじめて世界が見えた時、近くにいたのはただの丸い光だった。その丸い光はロストと呼ばれていた。一方、あたしの方はというと、ハルトと呼ばれていた。体が与えられるまであたし達、二つの魂はでかいシリンドーの中にいた。水の中で最初は生きていた。魂のみだったから溺れるという心配もなかった。あたしはロストとたくさん話した。自分の魂にある人格が女である事、お互いをどう思うかとか、実験の事そして、この世界の事。本当に他愛のない話を、二人の間でしか理解できないような言葉で話していた。この世界の言葉を覚えてからは博士やその助手達にも聞えていた。言葉を教えてくれたのはアン・スペードという奴だった。彼は魂の研究の第一人者。だから彼があたし達を生み出したと言っても過言はない。その人が教えたのは言葉だけで他は教えてくれなかった。人生というもの、運命というもの、過去、現在、未来。そういった類のものは自分で知る以外にないと教えられた。あたしにはその意味がわからなかった。ロストにはわかっていたみたいで何回も教えてもらおうと聞いたが教えてはくれなかった。今でも教えてくれもしない。

あたしはよくいろんなものに疎いとブレイドとロストから言われる。自覚はないし、何でそう言われるかもいまいちわからない。そう二人に言ったら、“それだよ、それ”とか“根本的にわかってない”と言われる。ブレイドならまだしも、ロストに言われるのは何かむかつく。同じ時を一緒に過ごしてきたからかもしれないし、あたしと同等と勝手に思っているからかもしれない。

校内をぶらぶら歩くと誰かに呼ばれた気がして振り向いた。

「どうした？ ジャック」

「いや、誰かに呼ばれた気が・・・」

「おれが呼んだんだ」

そこには高橋涼太がいた。

「高橋・・・涼太だよね？」

「今はグレイドだけだな」

「へえ。そういう名前にしたんだ」

「まあこれと言った理由はないけど、強いて言うならグレイトな人間になりたいと思って」

「なるほどね」

「・・・ジャックって名前なんだよな？」

「まあ今はそうだけど」

「どうやったら兄ちゃんに会えるんだ？」

「え？」

急に思考が止まった。そんな事をあたしに聞かれたってわからないしわかるはずがない。あたしにはそういうふうに見える人なんかない。「・・・ジャックになったら会えるかもしれないぜ」

言ったのはブレイドだった。

「・・・えっと・・・」

「ジョーカーだ」

「ジョーカー、それは何で？」

「ジャックとは魂を運ぶ仕事だ。だから運が良ければ会えるかもしれないぜ。その兄ちゃんとかいう奴に」

「そっか。ありがとう。じゃあ」

高橋涼太・・・いやグレイドは去って行った。

「羨ましいな」

「ん？何が？」

「お前やグレイドがだよ」

ロストになっていた。

「・・・」

「お前達には過去・・・まあ人生とかあるけどオレにはない。だからそういう事を言えるお前や、会いたいと思える人がいるグレイドがすごくまぶしく見えて・・・とにかく、羨ましいんだ」「…別に言えるだろ」

「何でだ？」

「そんなんおれと過ごした時間とか」

「…………それもそうだったな。悪い」

「いや、気にしてねえよ」

あれ？グレイドの兄って確か…あたしと会っている気がする。

「はぁ。交通事故いやだな」

交通事故は死魂ほどでないがものによってはそれと同じぐらい嫌なものがある。事故現場になる場所に着く。

「ここか」

車のタイヤがこすれる嫌な音する。ああ。人が一人死んだ。

「ここは？」

辺りをキョロキョロと見る男の子がいた。あの子が今回の相手か。すごいイケメンだな。

「高橋秀人君？」

ハルトは話しかけた。

「そうですけど」

「あたしはジャック。あんた、どういう状況に置かれてるかわかる

？」

「…わかるよ。だってあそこにある体は俺の死体だろう？」

「そう。じゃああたしがどういう存在かもわかる？」

「死神？」

「正解。何か、伝言とかある？ 今、言っておけば伝えに行けるよ」

「…弟に伝言がある」

「高橋涼太君に？」

「ああ。またどこかで会おう。強く生きてくれって」

「わかった。伝えておくよ」

「ありがとう」

高橋秀人の魂はその場から去った。

そんな事もあったな。まだ近くにいたグレイドを呼ぶ。

「何だよ？」

「前にな、お前の兄から伝言を預かった事を今、思い出したんだ」

「何を？」

「また何処かで会おう。強く生きてくれだ」と

「…！！！」

グレイドは涙を流す。

「……ありがとう」

「あの時は本当にありがとう」

「あたしに言わないでロストに言ってよ。そんな事より会えたの？」

「ああ。昨日、魂に会ってきた」

ジャックは昨日、病院にいた。相手は桐谷和也。年は80歳である。彼は肺癌を患っており、末期の状態であった。

「綺麗な方だな」

「わしに何の用だ？」

「何の用って…お前を迎えに来たんだよ。桐谷和也」

「そうか。死んだのか。でわしはお前さんをどこかで見たような気がするのだが」

「そりゃあそうだよ。あんたの元弟なんだからよ。高橋秀人」

「…なんだ。わかってたのか」

桐谷和也は高橋秀人の姿に変わった。

「そりゃあわかるよ。おれは死神になったんだから」

「そっか。死神に」

「…兄ちゃん、おれと会うのもしかしたら最後かもしれない。だから謝っておきたいんだ。伝言、守れなくてごめんって」

「…そっか。でもお前なりに頑張ったんだな。おれはこれからお前を応援してるよ。お前の魂が消滅するその日まで」

「…じゃあな。兄ちゃん」

「じゃあな。涼太」

秀人は和也に変わって、その場を去った。

「おれはもう行くよ。またな」

「うん。またね」

ジャックは墓場から去った。

「…あたしにはこういうのは残らないのね」

捨て台詞のように吐き、ハルトもその場から去った。

？9. 黒と白のJく出会い・グレイド編く（後書き）

番外編、第一話としてハルトの過去を取り扱いました。まあグレイドとの出会いをメインにしています。これからの番外編の方針を少しだけ言うと番外編ではハルトの過去を必ず一話に取り扱おうと思っています。次の番外編は賢達の話を書く予定であります。それではまた。

？10．賢達の日々1

1．誕生日会

「えっ？陸斗と海斗君の誕生日会をやるの？」

これは千代の一件が終わったあとの話である。

「ああ。まだ二人の誕生日を祝ってなかったなあって思ったからさ。協力してくれるか？千代」

「別にいいけど、何を手伝えばいいの？」

「とりあえず、愛理さんに呼ばれているからあとで会いに行こうぜ」

「わかったよ。賢ちゃん」

賢と千代は愛理が指定した場所に向かった。

「おっ！来たね。賢に千代。それと・・・えっと誰？」

愛理は大地と瑠璃を指差した。大地と瑠璃にも話したら手伝いたいと言ってきたから来たのだ。

「おれは土井大地っていうんすよ。お姉さん」

「・・・チャラ」

愛理がぼそつと言った。

「わたしは美春瑠璃です。陸斗君とは文化祭の後夜祭でバンドを組んでました」

「そうなんだ。とりあえず、ケーキはもう頼んだから大丈夫なんだけど・・・プレゼントとかはどうしたらいいかな？何か案ある？」

「・・・案って陸斗と海斗の事はオレ等よりもあんたの方が詳しいでしょ？」

「・・・年頃の男の子は何が欲しいかなんてわかる訳ないじゃん。私、女だし。大地は何をあげる？」

「おれは・・・あれな本！！」

「・・・二人ともいらないうって言いそう」

「激しく同意」

「瑠璃は？」

「うゝん。服とか？」

「いいかも！！千代は？」

「あたしは・・・本とか？」

「それもいいわね。あれな以外ってことでしょ？」

「はい」

「いいわね。で賢は？」

「オレは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

寝ぐせ直し」

「・・・・・・・・それが一番いいかも。でも本はいい案だなく。よし！

その二つにしよう！！賢と千代は二人に好きな作家とか聞いというて

「あいよ」

「わかりました」

「それじゃあ解散」

愛理さんは帰って行った。

次の日。

「え？好きな小説」

「ああ。ちよつと教えてくれねえか？」

「今は・・・芥川龍之介の小説を読んでるかな」

「欲しい奴とかないか？」

「欲しいのなら・・・太宰治の人間失格かな」

「サンキュー。陸斗」

「ねえ。海斗君」

「何？」

「好きな小説とかある？」

「今は・・・夏目漱石の坊っちゃんを読んでるかな。次はこころを

読もうかなって思ってる」

「予習のため？」

千代達の学校ではだいたいこの時期になると高校二年生は決まって、

夏目漱石のころをやるのだ。

「まあそれもあるけど、単純に読みたいって思ったからかな」

「ふ〜ん。そうなんだ。ありがとう。海斗君」

「なあ千代、聞いたか？海斗に」

「うん。聞いたよ。夏目漱石のころだって」

「こっちは太宰治の人間失格だと」

「二人して教科書に載っている作家を読むなんて・・・もうちょっと今時な人も読んでいて欲しかったな」

「だからってあの二人が携帯小説とか読む質か？」

「・・・・それもそうだね」

放課後、二人して本屋に行って千代が太宰治の人間失格、賢が夏目漱石のころを購入した。

日曜日。賢と千代、大地、瑠璃は陸斗の家に誕生日会の飾り付けをしていた。

「みんな〜。ケーキが来たよ〜」

愛理がケーキを見せた。チョコレートケーキだった。

「ちよ〜うまそうじゃん！！」

「飾り付けも終わったね」

「チキンも用意したし、ピザも用意した。さあ、陸斗と海斗を呼ぶか♪」

賢が陸斗と海斗を呼ぶ。すると陸斗と海斗がやってきた。来た瞬間に、クラッカーの音が響き渡る。

「誕生日、おめでとう！！」

みんなに言う。二人は嬉しそうな顔をした。

「「ありがとう」」

賢と千代が二人にプレゼントを渡す。二人は包みをはがしてプレゼ

ントを見た。

「……これは……すんごく嬉しいよ」

陸斗と海斗は笑っていた。来年もこんな感じでできたらいいなあ
と賢は思った。

2. 試験

「なあ、賢」

今、賢と大地が家に向かって帰っている。

「何？」

「勉強を教えて!!」

「はあ？」

テストも近く、賢や陸斗達はテスト勉強に励んでいる。

「何でだよ？」

「んなの決まってるだろ？おれのテストの点が悪いから!!」

そんな事を言われてもと思う賢。それはそのはずだ。賢と大地の学
科が違うし、コースも違うから今、何を大地が勉強しているかわか
らないからである。

「それはそれでいいけど……とりあえず、何を教えて欲しいわけ
？」

「全部!!」

「……とりあえず、前回のテストの点数を全部、教えろ」

「えっと一番よかったのが国語の90点」

「国語が90？それって古典と現国両方とも？」

「ああ。んで英語が28点」

「急に下がったな。んで？」

「数学は37点」

「赤点じゃあないんだ。社会と理科は？」

「日本史が42点、地理が15点、化学が55点だな」

「お前、国語以外は悪いな。本当に」

「いいだろ。別に」

「とりあえず、教えるから教科書貸して」

「わかった。はい」

すると大地は賢に国語以外の教科書を渡した。

「へえ。これ使ってるのか・・・」

数学の教科書を見てしみじみ感じる賢。問題が簡単だ。賢からすればそうである。これを見て、賢は教えるのは公式とやり方だと思った。続いて英語を見る。これは・・・テストに出そうな単語を教える事にしよう。日本史や地理は範囲のところを一から教えるとして・化学も・・・一通り教えるか。

「じゃあ、明日オレんちに来い」

「おう！賢の家か。楽しみだな」

次の日、大地が賢の家に来た。あがってすぐに、大地は「エロ本は？」と聞いて来た。

「・・・オレ自体は持ってねえよ。兄貴が持ってるものをオレは借りてるんだよ」

「な、お前ってエロ本とか見る時、何処を見る？おれは・・・胸！」

「お前もかよ。普通すぎねえ？」

「確かにそうかも知れど、結構いいぞ」

「いや、オレは胸には興味ねえ」

「じゃあ何処見るんだよ？」

「足」

「・・・・・・・・・・・・・・・・お前が千代ちゃんを好きにならなかった理由が少し、わかった気がする」

「どういう意味だよ？それ」

「わかんねえんらしい。それより、何からやるんだ？」

「まずは数学からな」

賢は大地に一つ、一つ教えた。次に英語、日本史、地理、化学と。

「ふー。いやー、すんげえわかりやすかったわ。ありがとう」

「少なくとも、50点は行けよ」

「わかってるって。んじゃあまたな」

大地が賢の家を出た。

試験当日。試験はだいたい、一日に三科目ぐらいで昼前には終わってしまう。一日目は古典、情報、化学。二日目は生物？、保健体育、英語。三日目は現国、数学？と数学B、日本史B。四日目はwriting、技術、地理A。賢はまあまあ納得のいく結果だった。「テストの結果、どうだったんだよ？チー坊」

「50点越えしたぜ！！一応」

「じゃあ言ってみろ」

「んと古典が90点、現国が95点、英語が52点、数学が51点、化学が65点、日本史が62点、地理が50点」

「・・・・・・やたら50点代が多いなあ」

「うるせえよ。またテストの時は教えてくれよな！！」

「コンビニのチキン、奢ってくれたらな」

「・・・・・・賢はいつもそれだよ」

3. 夢の中

「なあ、陸斗と海斗」

「「何？」」

それは普通の日の昼休みだった。賢と陸斗と海斗は屋上でお弁当を食べていた。

「他人の夢って見たくならない？」

「なんでだよ？」

「そんなの簡単だろ。陸斗、気になるからに決まってんじゃない」

「賢らしいな」

海斗が笑いながら言った。

「……まあ理由はもうこの際いいけどよ、例えば誰の夢が見た
いんだよ？」

「陸斗と海斗の夢は見てみたいけどさ……お前等って夢を見なさ
そうだし、チー坊とフーはだいたい見当がつくし、瑠璃と千代はな
んか覗いちゃいけない気がするし」

「じゃあ誰の夢が一番、見たいんだよ？」

「波留の夢！！」

「……一番、見ちゃいけない奴の夢のような気がする」

「だから気になるんだよ！！最近、知り合ったブレイドさんとかい
う人は夢の中に連れてってくれる人なんだろう？」

「まあ簡単に言うとな」

「お願いして連れてってもらおうっと」

「パンドラの夢が見たいだあ？」

ブレイドを屋上に呼んだ。

「ああ。お願いできるかな？」

「……おれは関わらないぜ。それでもいいか？」

「ああ。いいよ。お前は波留がダメなんだもんな」

「うるせえよ。じゃあ今日の夜、お前んちに行くから」

「おう。オレ以外に誰かいるかしんねえけど」

賢が言った通り、ブレイドが賢の部屋に来ると、瑠璃がいた。

「……この二人で行くんだな？」

「ああ」

「うん」

「じゃあ始めるぞ」

ブレイドが呪文を唱える。すると扉が現れた。扉が開き、賢と瑠璃がその扉へと入った。

「ここが波留の夢か」

瑠璃は辺りを見渡した。賢も辺りを見る。二人して可愛いと思う。ピンクの空に黄色い雲、一面に広がるのは青の花畑。薄い紫色の木。その夢は色で言うのであればパステルカラーである。

「何処にいるかな？波留」

「つか・・・あのままなのかも疑わしいけどな」

「それはそうかも」

理由は夢だからと言えどそれで済んでしまいが、もう少し詳しく説明すると波留が今、どんな夢を見ているかわかっていない上に夢の中というものは人間が現実の世界では決してできないような事を唯一できるような場所である。もしかしたら幼少に戻っているかもしれないし、老人になっているかもしれない。

「ねえ、あれ波留・・・じゃない？」

瑠璃が女の子を指差す。確かに顔は波留だが身長は小学校の低学年ぐらいだし、可愛さも今より全然ある。

「とりあえず、話しかけてみるか。おーい」

「何??」

チビ波留がこっちに来た。

「あたしの事と呼んだんだよね？」

「ああ。ここで何をしているんだ？」

「探し物」

「探し物？何を探しているの？」

「あたしの大切なもの」

「・・・よし！んじゃあオレ等も手伝ってやるよ」

「本当？」

「ああ。だよな？瑠璃」

「うん」

「ありがとう。お姉ちゃん、お兄ちゃん」

この時、二人は照れ臭くなった。いつも自分の気持ちを全然出さない波留から言われたこのお礼の言葉は心に沁みるし、なんだか嬉しい気持ちになる。

三人は草むらを探し始めた。

「それってどんなものなんだ？」

「うんとねえ・・・ネックレス」

「ネックレスか・・・。箱とかに入ってるのか？」

「うん。宝箱みたいな箱に入ってるんだ。鍵があってそれで開けるんだけど失くしちゃったからもう開けられない」

チビ波留が泣きそうになる。可愛い。正直波留のこんな姿を見られるとは思っていなかった。チビ波留というのが非常に残念だと思う。

「泣かないで。大丈夫。見付かるから」

瑠璃が励ます。

「うん」

「どんな色なの？」

「赤かな。その箱に入っているネックレスは大切な人から貰ったんだ」

「大切な人？」

「うん。波留の一番大好きな人。波留の一番大好きな人は、ショートヘアで青い目を持っていて、すごく綺麗な笑顔を見せてくれる人なんだ」

「そうなんだ」

「波留、お母さんやお父さんがいないからその人が一番好きだったし、大切だった。でもその人もあたしの前からいなくなっちゃった。あたしは一人ぼっち。でも一人ぼっちでもそのネックレスがあったから一人ぼっちじゃなかったんだ。あたしの大切な人が近くにいるような気がしたから」

波留の大切な人。それは瑠璃の前世、ハーツである事はすぐに理解できた。確かに、もう彼女は死んでいるし、波留は人工的な存在だから父親も母親もない。そんな波留にとってはそのネックレスが

どれほど大事なものかという事はすぐにわかる事でもあった。

そのネックレスはハーツがロストの誕生日の時にプレゼントしたものだ。宝箱と一緒に。ハーツから貰ったものは少ない。だから余計に失くす訳にはいなかったのだ。瑠璃は黙っていた。それでも懸命に探していた。

「これ・・・じゃないかな？」

瑠璃が赤い宝箱みたいなものを出した。

「これだよ！！ありがとう！お姉ちゃん。それに・・・お兄ちゃんも」

「おう」

「じゃあね」

チビ波留は去って行った。

「・・・私があげたもの・・・まだ持っていたんだ」

「・・・そりゃああいつなら持っているだろ。あいつはそういう奴だぜ」

「知ってるよ」

「・・・お前が見つけるって思ってた」

「なんで？」

「約束のお返しだと思ったから」

「・・・そんなじゃないよ。私はただ嬉しかっただけ」

あれを持ち続けてくれたその事実がただ嬉しかっただけだった。

二人は波留の夢から出た。二人して見合って笑う。ブレイドにはそれが不自然に見えた。

次の日、屋上で波留と会った。胸にはネックレスをつけていた。

「そのネックレス、なんかいいな」

「これか？これはハーツから貰ったものなんだ。誕生日の時に」

「へえ」

「今日、夢を見て・・・このネックレスを失くした夢。その夢には何故か知らないがお前と瑠璃が出てきたんだ。それで・・・このネ

ツクレスが入った箱を見つけてくれたんだ。あとで瑠璃に言つてくれるか？」

「・・・・・・・・」

「ありがとうって」

「・・・・・・・・」

波留は屋上から去る。

「・・・・・・・・まあ追求されなかったからよかったかな」

賢は瑠璃に波留の伝言を伝えた。

？10. 賢達の日々1（後書き）

こんにちは。今回の番外編は短編集です。三話書いた訳ですがどうでしたか？次の番外編はリムとジャックの話にしようかなと考えています。ご期待ください。番外編もと三話となりました。頑張っ
て書こうと思うのでお楽しみに。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5379p/>

friends

2011年11月16日02時15分発行